

平成廿五年一月廿八日

研究資料

第十二号

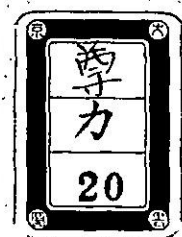
Version 1.0

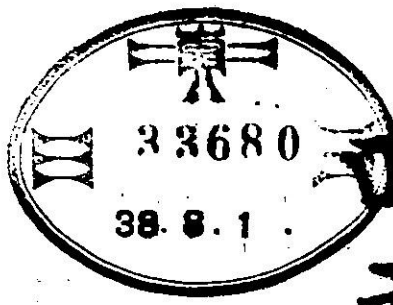
須佐御土史研究会

東京部会

田天實記

上





西天實記

上

第四百二號

共印冊
可定
廿七
長
王
終
村
大
台
實
記
之
實
地

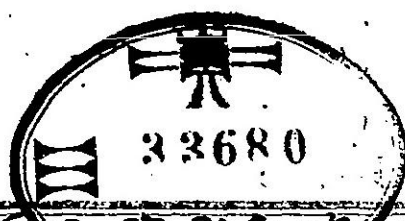
共貳冊 明治三十年七月
廿七日附 長門國阿武郡須佐郡（郡衍）村
大谷実継ヨリ尊攘堂へ寄納

回天實記

上

第四百二号

大谷実継 大谷樸助次男。須佐町助役（明治廿六年）同廿七年、須佐村長（明治廿七年）三十二年八月、須佐郵便局長（明治廿九年十月十日就任）、農業協同組合長（大正十年二月）大正十四年二月）等を歴任した。



田天實記上卷

嘉永^六癸丑安政^元甲寅間外弟文通、事起^ル、國步艱難

幕政漸衰^{フル}、當^リ藩主忠誠公、列藩諸侯、率先^{シテ}尊攘

大義ヲ唱^テ、我益田越中^{後改佐}親旋公、擢^テ輔相^ト爲^シ專^ラ

藩内ノ士氣ヲ鼓^ス、振興^{セシメラル}是ニ於^テ小國融藏、武彝田

村、青藏直道大谷權助、實德河上範藏、俊慎等親旋公ノ内

部^ヲ蒙^リ大ニ國事ニ奔走^シ、父久年癸亥、敵兵ノ冒^リ加^リ御親兵

爲^リ同年七月、我藩堺町御門ノ成^ラ奪^リシ藩主及藩士ノ入

京ヲ禁^{セラル}、以^テ親旋公、先^ッ大谷權助ヲ國ニ歸^シ。

敎旨ヲ奉^シ親^ラ三條實美卿始^メ脱走七卿ヲ供奉^{シテ}歸藩復

命^{イリ}翌元治^元甲子ニ至^リ七卿及藩主ノ冤ヲ訴^{フル}、議大ニ起^ル久

阪義助等藩内忠勇ノ志士團結^{シテ}隊ヲ爲^ス者及名藩浪士

元治元年（一八六四）六月

回天實記上卷

嘉永六^(一八五三)癸丑^(一八五四)安政元^(一八五五)甲寅^(一八五五)ノ間 外交交通ノ事起ルヤ國步^{かんなん}艱難^{そんじょう}
幕政漸ク衰^よフルニ當リ 藩主忠誠公ハ列藩諸侯^{（毛利敬親、忠正公）}ニ率^率先シテ尊攘^{そんじょう}
ノ大義ヲ唱^{とな}エラレ 我益田越中親旋^{（衛門介）} 公ヲ擢^{（めき）}テ輔^{（のり）}相ト為シ專^{（もっぱ）}ラ
藩内ノ士氣ヲ鼓舞振興セシメラル 是ニ於テ小國融藏武彝^{（のり）} 田
村音蔵直道^{（音蔵）} 大谷樸助實徳^{（樸政）} 河上範蔵俊慎等^{（俊慎）} 親旋^{（のり）}公ノ内
命ヲ蒙リ 大ニ國事ニ奔走シ 文久三^(一八六三)癸亥^(一八六三) 献兵ノ員ニ加リ 御親兵
ト為レリ 同年七月 我藩堺町御門ノ戌ヲ奪ハレ 藩主及藩士ノ入
京ヲ禁セラルヲ以テ 親旋^{（のり）}公ハ先ツ大谷樸助ヲ國ニ歸シ
勅旨ヲ奉シ^{（みずか）} 親^{（みずか）}ラ三條實美卿始メ脱走七卿供奉シテ歸藩復
命アリ 翌元治元^(一八六四)年甲子二至リ七卿及藩主ノ冤^{（えん）}ヲ訴フルノ議大ニ起ル 久
阪義助等^{（玄瑞）} 藩内忠勇ノ志士團結シテ隊ヲ為ス者 及 各藩浪士^{（および）}

嘉永六年「一八五三年七月八日（旧曆六月三日）浦賀沖に M.C.Perry が率いるアメリカ東インド艦隊四隻（蒸気船二隻、帆船二隻）が来航した。

安政元年「一八五四年二月八日（旧曆安政七年正月十一日）ペリー艦隊第一陣七隻再来。

河上範三俊慎「益田家臣。「俊慎」はトシチカ、トシノリ、トシミツのいずれか？

國事「当時の「國」は「藩」を意味する。「國事」は藩政のこと。

文久三年「一八六三年八月一日、長州藩は突如御所堺町御門の警衛の任務を奪われ藩主及び藩士の入京を禁じられた（「八・一八の政変」または「堺町御門の変」）。又、長州派の七卿は官位を剥奪され京都を追放された（七卿都落ち）

献兵「文久三年三月十八日より幕命により十萬石以上、一萬石につき一人の割合で各藩が御親兵を出した。長州藩は本藩21、長府5、徳山4、岩国6、清末1合計37名を派遣した。（防長回天史4第3編下66頁）

七卿「三条中納言実美、美、三条西中納言季知、東久世少将通禧、四条侍從隆詞、錦小路右馬頭頼徳、澤主水宣嘉、壬生修理大夫基修。

我藩寄寓スル者ヲ率テ脫藩大阪ニ走ル是時賊魁會津彦
 根藤堂戸田諸兵九門ヲ警衛シ藤堂兵伏見ニ出張ス京垣諸
 道戒嚴久改義助特ニ大谷樸助藤村幾之進ヲ撰ニテ表ヲ濟
 衆ニ先々行ヲ啓カシム二人奪然直ニ淀ニ赴キ城門ヲ叩キ呼
 藩主君候面謁シテ陳請スル取アラントス時稻葉候征虜府閤老
 將人ヲシテ二人ヲ逮捕セシメントス樸助臨リテ曰ク我等唯
 二人ノミ敢テ力ヲ以テ抗スルニ非ス縛セント欲セム則チ縛セヨ我
 等素ヨリ禁ヲ犯スヲ知ル然レモ主愛ヲ新ニ臣子情義自
 ラ已ミト能ハス今一表ヲ持シテ我儼ニテリ經
 君候ニ達セシムル身縛スベシ表奪取初ハカラスト乃衆ヲ排
 シテ進ミ之ヲ其老臣與フ候二人ヲ客舎ニ延キ厚ク待遇セシ
 ノテ其表ヲ歸ス二人曰ク候政府府政ヲ為ス今天下ノ志ヲ
 通スルヲ為サズハ何ヲ以テ其責ヲ塞カン然レ故テ請
 カルニ行テ松平肥後等ニ達センニ而シテ我輩入京ノ禁ヲ

ノ我藩二寄寓スル者ヲ率テ脱藩 大阪二走ル 是時賊魁會津 彦
 根 藤堂 戸田ノ諸兵 九門ヲ警衛シ 藤堂兵八伏見ニ出張ス 京撰諸
 道戒嚴 久阪義助特二大谷樸助 藤村幾之進ヲ撰ンテ表ヲ齎ラシ
 衆二先チ行ヲ啓カシム 二人奪然 直ニ淀ニ赴キ城門ヲ叩キ呼テ曰ク 長州脱
 藩ノ士君候二面謁シテ陳請スル所アラントス 時二稻葉候征夷府閣老タリ
 将二人ヲシテ二人ヲ逮捕セシメントス 樸助慍リテ曰ク 我等唯二人ノミ 敢テ力
 ヲ以テ抗スルニ非ス 縛セント欲セハ則チ縛セヨ 我等素ヨリ禁ヲ犯スヲ知ル然レ
 ト脱 主冤ヲ訴ルハ臣子ノ情義 自ラ已ムコト能ハス 今一表ヲ持シテ我懷ニアリ 經二
 君候二達セシメハ此ノ身縛スベシ 此表奪フヘカラスト 乃衆ヲ排シテ進ミ之ヲ
 其老臣二與フ 候二人ヲ客舎ニ延キ厚ク待遇セシメテ其表ヲ歸ス 二人曰ク
 候八政夷府ノ政ヲ為ス 今天下ノ志ヲ通スルコトヲ為サズシハ 何ヲ以テ其責ヲ塞カ
 然レトモ敢テ請ハサルノミ 行テ松平肥後守ニ達センノミ 而シテ吾輩入京ノ禁ヲ

九門〓京都御所の九ツの門。(〓)内の藩兵が固めた。中立売門(筑前)、蛤門(会津)、清和院門(加賀)、下立売門(仙台)、寺町門(肥後)、石薬師門(阿波)、今出川門(久留米)、
 乾門(薩摩)。藤堂は蛤門内側、彦根は朔平門前を警衛。戸田藩の警衛場所？

京撰〓京都と撰津(兵庫県)

藤村幾之進〓

淀城〓淀藩主は在京老中、稲葉長門守正邦。十二万二千石。譜代。

主冤〓主人の冤罪」

塞ぐ〓みたす。

元治元年(一八六四) 六月、七月

犯ス者、實藩之ヲ為サシムルモ、老臣等言屈シテ其表ヲ受ク、人
碎シ去リ、天王山到ル久改義助等已ニ殿ヲ啟目シテ叱咤セリ、實ニ六
月廿日、國司信濃福原越後親旋公、三國老相次テ國ヨリ到ル
親旋公、始テ勇山ニ帶陣シ、七月十七日ヲ以テ大舉入京議ヲ決シ、更ニ渾
ヲ天王山ニ移サシル

七月十八日、拂曉福原一軍、伏見街道ヨリ進ミ、國司一軍、嵯峨天龍
寺ヨリ出發、赤堀又兵衛、六力士隊ヲ率サテ之ニ從フ、久改義助、各ハ藩
浪士ヲ指揮シ、竹田街道ヨリ進ミ、鷹司即シル（小國）軍並ニ田村音藏（不詳）
上範三等亦我預佐兵組士遊軍半隊、町兵新核半隊ヲ合シ、増野又
十郎司令官ト為リ、久改氏ノ軍ニ從フ、親旋公ハ中軍總督トシテ、天王
山本營ニ在リ、國司一軍先ツ兵隊ヲ開キ、各軍相利アラヌ、久改氏等事
遂ニ成ラサルヲ計リ、鷹司即内入リ、屠獲ニ田村音藏其狀ヲ觀ヤ、直ニ馳

元治元年（一八六四）六月、七月

犯ス者八貴藩之ヲ為サシムルナリ云々 老臣等言屈シテ其表ヲ受ク 二人

辞シ去リ天王山ニ到レハ 久阪義助等已ニ衆ヲ督シテ屯營セリ 實ニ六

月廿六日ナリ 國司信濃 福原越後 親旋公ノ三國老相次テ國ヨリ到ル

親旋公ハ始メ男山ニ滞陳シ 七月十七日ヲ以テ大舉入京ノ議ヲ決シ 更ニ陣

ヲ天王山ニ移サル

七月十八日拂曉 福原ノ一軍ハ伏見街道ヨリ進ミ 國司ノ一軍ハ嵯峨天瀧

寺ヨリ出發 來嶋又兵衛氏 力士隊ヲ率テ之ニ從フ 久坂義助 各藩

浪士ヲ指揮シテ竹田街道ヨリ進ミ 鷹司邸ニ入ル 小国融蔵（重監）田村有蔵（不詳）
大谷樸助（斥候使番）河

十郎司令官ト為リ 久阪氏ノ軍ニ從フ 親旋公ハ中軍總督トシテ天王

山本營ニ在リ 國司ノ一軍先ツ兵端ヲ開キ 各軍相応シ 一時頗ル激戦ナリシカ

各軍相利アラス 久坂氏等事

遂ニ成ラサルヲ計リ 鷹司邸内ニ入リ屠復ス 田村音蔵其状ヲ觀ルヤ直チニ馳

天王山 淀川を挟んで男山の対岸、大山崎市にある標高270・4米の山。麓は秀吉と明智光秀が戦った古戦場として知られる。

男山 京都盆地の南、木津川、宇治川、桂川の三川合流点の南に位置する標高140米の山。石清水八幡宮がある。経済・軍事上の要地で往時、麓には多くの閑所があった。

國司信濃 萩藩寄組國司信濃親相。蛤御門の変の責任を取り徳山澄泉寺にて自刃。享年二三歳。
福原越後 萩藩永代家老宇部福原家、福原元 側。蛤御門の変の責任をとり岩國竜護寺にて自刃。享年五〇歳。徳山毛利広 鎮六男。

新撰隊

半隊 半隊・分隊は小隊規模に満たない少人数編成の部隊。2半隊 小隊。2小隊 中隊（72人）。4中隊 大隊。半隊の半分が分隊。

力士隊 角力隊。力士の一団で遊撃軍に属した。初めは勇力隊と称し宮市屯集力士隊と唱えたが慶応元年五月二十三日勇力隊と命名。頭取は力士山分勝五郎。（モリのしげり）

遊軍隊 文久三年十月十日編成。初め来島又兵衛が獵師兵八十人を率い京都に入り、堺町変後国に帰って一隊を組織したもの。これに鷹懲隊、萩野隊、正導隊、博習隊、神威隊、

金剛隊、郷勇隊、市勇隊、勇力隊、狙撃隊、鍾秀隊、地光隊、好義隊、維新団が合体して遊撃隊と称した。蛤御門の変の後各隊は分立、本体を遊撃隊と称し地光隊、精兵隊、好義

隊、維新団の四隊のみがこれに属した。慶応元年正月では総人員二百四十人。同年五月二百三十人を定員として高森屯集となった。（モリのしげり）
鷹司邸 関白鷹司輔 灑の屋敷は堺町御門を入った右（東）側にあった。彼は尊攘激派全盛時代の関白で萩藩と気脈を通じていた。御所に進撃した長州兵は此处を拠点として河原

町藩邸の兵力を合わせて御所凝華洞（御花島）に陣取っていた会津藩主松平容保を攻撃しようとしたのである。

…この部分は浄書の時に書き落としたものと思われる。

セテ其列ニ加リ屠腹ニ敗軍ノ報續々天王山本營ニ達ス益田丹下陣
ヲ撤シテ歸國ノ議ヲ奔テ親旋公ヲ促ス公遂ニ其策ニ從フ是時諸軍
ノ兵三々五々本營ニ歸セシノ踵ヲ接ス鷹司邸ノ一軍ニ主將久阪屠腹
ノ運ニ遭遇シ將士相會シテ退軍議ヲ定メ即ノ諸門ヲ閉ギテ一齊ニ
奔弛シ夷然百雷ノ耳ヲ衝キ硝煙四散暗黒ノ中ニ劒戟ヲ閃カシテ外圍
ヲ衝キタリシ敵兵死傷無算狼狽ニ其銳鋒ヲ避ケタヘラ以テ天王山ニ歸
リ得タリ此役ヤ澹川健藏正義中村惣治藤信中尾易三郎宣足
等ノ軍死ス但見地ヲ詳ニセス

以義我與ニ先ツ數日在子君ハ今有餘ノ士族ヲ從ヘ登京ノ途ニ就カシ
三田尻ヨリ衆服既ニ備後海ニ到リ天王山ノ敗報ニ接シ直ニ歸國アリ
是時ニ當リ藩内俗論黨ニ接會失スベカラスト沸騰シテ正義脈ヲ壓倒シ
西君候ヲシテ朝敵ノ罪名ヲ被ラシムルニ先々為ス所アラントスルノ説起トリ

セテ其列ニ加リ屠腹ス 敗軍ノ報續々天王山本営ニ達ス 益田丹下陣
ヲ撤シテ歸國ノ議ヲ発シテ親旋公ヲ促ス 公遂ニ其策ニ從フ 是時諸軍
ノ兵三々五々本営ニ歸ルモノ踵ヲ接ス 鷹司邸ノ一軍八主將久坂氏屠腹
ノ運ニ遭遇シ 將士相會シテ退軍ノ議ヲ定メ 邸ノ諸門ヲ開キテ一齋ニ
発砲シ 轟然百雷ノ耳ヲ衝キ 硝煙四散暗黒ノ中ニ劔戟ヲ閃カシテ外圍
ヲ衝キタリシニ 敵兵死傷無算 狼狽シ其銳鋒ヲ避ケタルヲ以テ 天王山ニ歸
ルヲ得タリ 此役ヤ澄川健蔵正義 中村惣治藤信 中尾易三郎宣足
等戦死ス 但シ其地ヲ詳ニセス

此義舉ニ先ツ数日 世子君八千有余ノ士族ヲ從ヘ登京ノ途ニ就カレ
三田尻ヨリ乗般 既ニ備後海ニ到リ 天王山ノ敗報ニ接シ 直ニ歸國アリ
是時二當リ藩内ノ俗論黨ハ機會失スベカラスト沸騰シテ正義脈ヲ壓倒シ
兩君候ヲシテ朝敵ノ罪名ヲ被ラシムルニ先チ 為ス所アラントスルノ説起レリ

益田親施が一戦も交えることなく益田丹下の進言を容れて天王山から退いた理由は、長州藩が御所に攻撃を掛ければ主家に朝敵の汚名を着せられる事を考慮したからではなからうか。
中尾易三郎宣足 益田家臣。石州三隅村庄屋寺戸謙一郎の弟。文久二年五月瀬尻組澄川米輔育となり、八月十四日澄川米輔養子となる。

故ニ三國老藩主ニ拜謁スルヲ許サス三國老各台近穢ノ地姑ク滯
在スヲ決シテ親旋公ニ大道村居住ノ家臣三好久乎宅ニ寓セラレ
八月ノ日ニ没後親旋公僅ク七知倍隨ニ歸邑アリ邑中蕭然士民服
寢食ヲ安セズ君ノ身上如何アラント大ニ其前途ヲ憂慮セリ千時幕
府徳川氏ニ長藩征討ノ号令ヲ諸藩ニトス風説アルヲ以テ藩内ノ俗議益
沸騰シ曾テ譴責ニ據リ退隱セシ毛利伊勢ノ太夫ヲ要路ニ按按シ君
命ヲ矯リテ專ラ恭順ヲ唱フ遂ニ益田福原國司ニ三國老ヲ支藩徳山ニ
幽囚スル事ヲ謀ル

同十日本藩御目附笠原隼之介初頭矢田仲人其他警衛ノ士卒
數人須佐参着アリ

御沙汰書寫

益田右衛門介

元治元年（一八六四）八月

故二三（益田右衛門介 福原越後 国司信濃） 國老ノ藩主ニ拝謁スルヲ許サス 三國老ハ各山口近隣ノ地ニ姑ク滞在スヘキニ決シテ 親旋公ハ大道村居住ノ家臣 三好久平宅ニ寓セラル

八月六日々没後 親旋公ハ（施）僅六七名ノ倍隨ニテ歸邑アリ 邑中肅然 士民一般寢食ヲ安セス 主君ノ身上如何アラント大ニ其前途ヲ憂慮セリ 于時幕府徳川氏ハ長藩征討ノ号令ヲ諸藩ニ下スノ風説アルヲ以テ 藩内ノ俗議益沸騰シ 曾テ譴責ニ據リ退隱セシ毛利伊勢ノ太夫ヲ要路ニ撰拔シ君命ヲ矯リテ専ラ恭順ヲ唱ヘ 遂ニ益田 福原 國司ノ三國老ヲ支藩徳山ニ幽囚スルノ事ヲ謀ル（はか）

同日 本藩御目附 笠原隼之介（しゅん） 物頭 矢田仲人（ちゅう） 其他警衛ノ士卒 数人須佐来着アリ

御沙汰書寫

益田右衛門介

三好久平ニ益田領飛地、大道村（切畑）在住の家臣。

大夫ニ（たいぶ） 周代の官名。卿の下、士の上に位する。 秦漢時代の第五位の爵位。 広く官位の有る者をいう。 大名の家老の称。 （だう）

最高級のゆ遊女。

笠原隼之介ニ萩藩大組（楯柱組）一八〇石。（萩藩給禄帳より）

矢田仲人ニ「仲人」は「仲衛」の誤り。萩藩大組（繁澤組）二五四石（萩藩給禄帳より）。

右思召ニ不相叶趣有之毛利淡路守様、被成御預
在改段可申聞旨事

同十一月御奔與栗山公輔安富九郎兵衛款野成左工門松原
仁藏、川尻藏中村藤馬御馬屋組破吉等供奉マ
同十二月徳山有客館着泊アリ

同十五日攝壽院禁銅セラ家臣一名外同院ニ伺候スルヲ許サズ安富九
郎兵衛其候マ当リ他各徳山市街ニ散居潜伏セリ是ニ於テ邑中人心
洵々口耳相接シ主君速援ノ策ヲ議ス

同十七日大塚浪江宅ニ於テ御手廻大會議シテ崩キ一封、異見書ヲ邑政
堂ニ出ス其要領ヲ我益田家ニ出門要衝、地ヲ領シ方今外弟掃攘ノ
令ヲ奉戴シ尤忠勤ヲ抽ニスギノ秋ナリ就テ主人親旋公ヲ其采邑須佐ニ
謹慎塾居シ末家諸子ノ監督ヲ受ケレソ方非常事アラハ邑中ノ士

右思召二不相叶趣有之おぼしめし あいかなわざる これあり
毛利淡路守様へ被成御預元 蕃、徳山毛利 おあずけになられ
候 此段可申聞旨候事もつしきかせるべく

(八月) 同十一日 御発輿 栗山翁(忠職 上士 当役) 輔 安富九郎兵衛(中士、御手廻組) 萩野咸工門萩 松原(中士)
御手廻組 仁蔵 石川完蔵 中村藤馬 御馬屋組磯吉等供奉ス

(八月) 同十三日 徳山府客館二着泊アリ

(八月) 同十五日 操寿院二禁銅セラレ惣持院 家臣一名ノ外同院二伺候スルヲ許サス 安富九郎兵衛(その) 其撰二当リ 他八各(おののお) 徳山市街二散居潜伏セリ 是二於テ(須佐) 邑中人心きようきよう 洵々 口耳相接シ 主君速援ノ策ヲ議ス(益田親施) 救

(八月) 同十七日 大塚浪江宅ニ於テ 御手廻大會議ヲ開キ一封ノ異見書ヲ邑政(中士、御手廻組) 堂二出ス 其要領ハ 我益田家八北門要衝ノ地ヲ領シ 方今外夷掃攘ノ(その) 令ヲ奉載シ 尤忠勤ヲ抽ンスヘキ秋ナリ 就テ八主人親旋公ヲ其采邑須佐二(ぬき) 謹慎蟄居シ 末家諸子ノ監督ヲ受ケシメ 万一非常ノ事アラハ 邑中ノ士(須佐)

毛利淡路守様〓徳山毛利家。当時の当主は第九代毛利元(もとみつ) 蕃

惣持院〓益田親施切腹の地。国司信濃が切腹した澄泉寺とともに明治初年に解崩し畑地となった。現在、周南市徳山毛利三丁目毛利マンション角にある「益田右衛門介賜剣の地」の石碑から東へ一丁の所にあつた。

洵々 々々 騒ぎどよめくさま。おそれ騒ぐ声。

御手廻組〓本藩では藩主に近侍し、その側近の職務に服する者を以て構成し、これを御手廻組と総称した。世襲の階級ではなく、在職中に適宜各階級からこれに編入して組織されたので、構成員も広汎な階級にわたっていた。在職中は高い家格を与えられた。益田家の制度もこれに倣つたものと思われる。

元治元年（一八六四） 八月

氏ヲシテ其指揮ヲ仰カシメテ度旨本藩歟願セラレタシトノ竟ナリ大組四
組等亦相次テ大同小異ノ建言ヲ為スト雖邑政堂姑息因循其
說ヲ容レト壯烈ノ士漸ク迫ニ及テ家臣一般署名歟願書トシテ
差スラ許セリ

此度京師變動ニ付而者右衛門介殿被蒙

御不興徳々御預ケニ舟柄禁錮被仰付誠以恐入矣御儀
御座矣御謹責之義者御大典ヲ以被仰付矣勅モ可有之
疾ニ共私共身下ノ身分ミテ眼前歟難不堪見聞不得止
歟願申出之趣者主人壯年ヨリ御奉公一途被竭心力相模國
御備傷出張以來地方職勤ヨリ引續キ江府用度之御備
直様京師御滯留御周旋籍御手傳被申上尚又昨年上
京八月十八日之變動何モ不容易御時節ニ疾得共報國之忠

元治元年（一八六四）八月

民ヲシテ其指揮ヲ仰カシメラレ度旨本藩へ歎願セラレタシノ意ナリ大組四
組等亦相次テ大同小異ノ建言ヲ為スト雖トモ邑政堂ハ姑息因循其
説ヲ容レス壯烈ノ士漸ク迫ルニ及テ家臣一般署名ノ歎願書トシテ
差出脱スヲ許セリ

此度京師變動ニ付而者右衛門介殿被蒙
御不興徳山へ御預ケノ身柄禁錮被仰付誠以恐入候御儀ニ
御座候御譴責之義者御大典ヲ以被仰付候筋モ可有之
候へ共私共臣下ノ身分ニテハ眼前ノ歎難不堪見聞不得止
歎願申出之趣者主人壯年ヨリ御奉公一途被竭心力相模國
御備場出張以來地方所勤ヨリ引續キ江府再度之御備
直様京師御滞留御周旋筋御手傳被申上尚又昨年上
京八月十八日之變動何レモ不容易御時節二候得共報國之忠

大組「萩藩では八組、馬廻り組ともいい、藩士中核の階層。軍陣にのぞみ主将の馬廻りに従う者で八組は最初の頃一門八家若しくは寄組の士に配して組を編成し、輪番にして六組は藩地にとどめ、二組は藩主の参勤に随従警固して江戸に駐在させた事に始まる。益田家でもこれに倣った制度を採用したものと考えられる。

四組「益田家の軍制は益田元弼公の時「八組」（大蔵、立野、市丸、宇谷、友信、下小川、境、千足）であった。それを元和年中（一六一五〜二三）に「四組」（宇谷、須佐地、瀬尻、市丸）に改組された。

京師變動「元治元年の蛤御門の変（禁門の変）のこと。

相模国御備場「ペリー来航以来外寇防御が強化され、幕府は嘉永六年十一月十四日萩藩に三浦半島一帯の沿岸防備を命じた。本藩は十二月十四日、益田親施を浦賀表御手当御用惣奉行に任じたので、親施は一月十日萩を出発し江戸經由三月二十六日駐屯地の相模国上宮田村陣屋に着任、安政二年三月十七日まで滞在した。

江府再度ノ御備（供）「親施は安政五年六月当役に就任五年間在職した。その間藩主と行動を共にして二度江戸に滞在した。

節一途_ニ被相勵千辛萬苦被遂其節量祖右衛門介藤

憲殿以來

御當家重大之被蒙

御鴻恩代々被致無

二之覺悟

後者深重之神誓

御當家吉川家對_ニ御取

替_ニ儀恐多_ク

仰德神君御照覽之前末代無相_違

粉骨之御

奉公祖先對_ニ儀

然_ニ儀被相心得況_ヤ主人弱冠_{ヨリ}

御憐撫_ヲ以_テ仕途被召出是迄別而厚

御憐撫_ヲ以_テ仕途被召出是迄別而厚

御寵遇之義懷

食之_間不被致忘却何幸

御恩沢之萬一_ニ被報度取

分被致_力近_年一途_ニ公事_ハ一身_ヲ被委自家之者義

何_モ被捨置_伏而者家產_モ連_年空乏_之旅用軍費_モ尽_果矣

得共只上下霜露露宿艱難_ヲ極_シ自他之御役筋米_ニ被遂

其節無_テ於内輪被申_諭在義_ニ近_々當

守候身余

リ候御仁恩遠_々祖先歷代難有被召置在_家名之瑕瑾

守候身余

リ候御仁恩遠_々祖先歷代難有被召置在_家名之瑕瑾

守候身余

リ候御仁恩遠_々祖先歷代難有被召置在_家名之瑕瑾

守候身余

守候身余

リ候御仁恩遠_々祖先歷代難有被召置在_家名之瑕瑾

守候身余

守候身余

リ候御仁恩遠_々祖先歷代難有被召置在_家名之瑕瑾

守候身余

節一途二被相勵(あいはげまれ) 千辛萬苦被遂とげられ 其節曩祖右衛門介藤佐 益田
 兼殿以来 御當家重大之被蒙(代) 御鴻恩 代々被致無
 二之覺悟候段者 深重之神誓 御當家吉川家へ對シ 御取おとり
 替シノ儀 恐多毛仰徳神君御照覽之前 末代無相違あいたがいなく 粉骨之御益田親施
 奉公ハ 祖先へ對シ候テモ當然ノ儀ト被相心得 況ヤ主人弱冠ヨリ
 御憐撫ヲ以テ仕途被召出 是迄別而厚 御寵遇之義 寝
 食之間モ不被致忘却 何卒 御恩沢之萬一ヲ被報度 取とり
 分被致力 近年一途二公事へ一身ヲ被委 自家之義者 候つきはてそつら
 何モ被捨置 伏而者 家産モ追年空乏 旅用軍費モ尽果候(せん) とげられ
 得共 只上下霜寝露宿 艱難ヲ極メ 自他之御役筋尖二被遂
 其節 兼而於内輪被申諭候義ハ 近クハ當 尊候身二余
 リ候御仁恩 遠クハ祖先歴代 難有被召置候 家名ノ瑕瑾かきん

曩祖〓先祖。

藤兼殿〓益田家十九代益田藤兼（享禄二年一五二九）慶長元年一五九六。幼名次郎、治部少輔、右衛門佐、越中入道、或いは全鼎入道、縦四位下、侍従。法名大濫全鼎。弘治元年（一五五五）陶晴賢滅亡後、益田氏は陶氏の残党として岩見に孤立した。藤兼は尼子氏と組んだりしたが、毛利氏に敵わないと知ると吉川元春を頼って降伏を申し入れ、永禄二年（一五五九）以降、益田氏は毛利氏に服従することになった。爾来、藤兼は元就の命を奉じて毛利氏の出雲・岩見攻略委忠勤を励むことになる

仰徳神君〓萩築城以前からあった土地神であつたが、宝暦十二年第七代藩主重就によつて指月山要害道山番所の東側に社殿が建立され、毛利氏の始祖天穗日命と元就の霊を合祀し、後にまた隆元、輝元、秀就を併祀した。明和七年に仰徳大明神の社号を、文政年間に正一位を賜った。（萩市史第一巻183頁 仰徳神社の項）

當尊公〓益田親施のこと。「尊侯」は「尊公」か

元治元年（一八六四） 八月

竭家身後而不知時節忠勤不申上疾而者報國之一端不相
立被存以於微臣私心其意守奉羅居其處今般京都
變動之趣付不固御敵謹之身被相成誠以残念至極
奉存疾尤於上國其節政府之御建議御成美如何而御座
疾哉難量微臣惟見而賊黨奸計巧正路寒却而叛
召以討代救乞請天龍寺天王山之諸製討手差左向疾手急危
急且夕相迫退教願之義差置進誅賊之場相差掛實
以義心激烈不堪憤懣眼前之賊徒為國家誅滅之議論
而為有之哉縮處一舉御國御大事之御場合立行
疾段奉忍入疾作去前申上疾主人年未之素志只忠勤
一違其時穿鑿不被行屆終賊計隨矣義者口惜次
弟是申何卒奉國之丹心被相果度被存入却而輕舉相

元治元年（一八六四）八月

竭家尽身候而毛（けつか） 此時節忠勤不申上候而者（この） 報國之一端不相（あいた）
 立ト被存込（たす） 於微臣私式毛其意毛尊奉罷居候處（おの） 今般京都（あいな）
 變動之趣二付（の） 不図御敵譴之身ト被相成（はからずも） 誠以残念至極（まことにもって）
 奉存候（ぞんじ） 尤於上國其節 政府之御建議御成算ハ 如何二而御座（もつとも）
 候哉（や） 難量（はかりがたく） 微臣ノ管見二而ハ 賊黨奸計ヲ 巧キ正路ヲ塞キ 却而叛（かえって）
 名ヲ以討代ノ勅ヲ乞請 天龍寺 天王山之諸勢ヘ討手差向候手筈 危（きこ）
 急旦夕二相迫リ 退テ歎願之義ハ差置 進テ誅賊之場相二差掛リ 実（じつに）
 以テ義心激烈 不堪憤懣 眼前之賊徒 為國家誅滅之議論二（こころのため）
 而為有之哉（て） 縮ル處 右一舉ヨリ御國御大事之御場相二立行（つま）
 候段ハ奉恐入候 乍去前件申上候主人年来ノ素志ニテハ 只忠勤（おそれいりたてまつりそうさつ）
 一途ニテ 其時ノ穿鑿不被行届 終二賊計ニ随リ候義者 口惜キ次（いちず）
 第 是ト申モ何卒奉國之丹心 被相果度被存入 却而輕拳二相（これ）

（けつか） 竭 家「家が滅びる事。」「竭」は尽きる・無くなる・滅びる。

上国「京都に近い国。上方。

管見「管の穴から見ること。見識がせまいことをいう。

旦（たんせき） 夕「朝と晩。朝も晩も。常々。時期が切迫している事。

誅賊「会津藩主、京都守護職、松平容保を討つの意。

御國御大事之御場相二立行「萩藩存亡の大問題となり

奉（報）国「萩藩の為に働くこと。

丹心「忠誠で偽りのないこと。赤心。

成疾節於身段者今更墜騰之恩殘悔無限得共畢竟主人
於慮者真心之一微被踏踐在泥而毫之不忠節被差搆
疾筋無之者青天白日盟上有忠志而無私心段作不及微臣
尋常常附添見聞在儀於 官爵是追之御奉公振御
手當可有之儀奉存就了罪狀赤心忠不忠之處其
濫觴 御憐察被成下偏參掛御斟分以遂之
御寬典被處接樣御所置被成下疾於臣下其上之
御洪恩蒼海尚淺可奉感淚在下唯今主人之盛因其科以
御國之御名在御被正其儀是又無御餘儀次為於主人者謹慎
被罷括猶更報國之一端相當得共其應今般之義者時
所以被誤疾一途而為國家毫厘之私曲無之段或 御并別
以結局之御捌偏功罪相償之御憐恕以御寬宥之行

元治元年（一八六四）八月

成候節存脱於此段者このだんにおいては今更噬臍之思ぜいせい無限候得共かぎりなくそうらえども畢竟主人益田親施
 於は慮者これなきは真心之一徹ヨリ被踏込候ふみこまれ誤ちが二而一毫之不忠節被差構さしかまえられ
 候筋無之者青天白日ト盟ヒ有忠志而無私心段ちゅうしありて乍不及およはずながら微臣
 等常附添見聞候儀かんぶにおいて於は官府モ是迄之御奉公振御
 手當リモ可有之儀二奉存候ぞんじたまつりそうごう就テ八罪狀ひとえ赤心忠不忠ノ處もつて其
 濫觴らんしやう御憐察被成下なりくだされ偏二参リ掛リ御斟分ヲ以遂々（追力）
 御寛典二被處候様しよせられ御所置被成下八、於（さりながら）臣下モ此上之益田親施
 御洪恩長州藩蒼海尚浅たてまつるべく可奉感涙候（泣力）乍去唯今主人之幽囚そのとが其科ヲ以テ
 御國之御名分ヲ被正候儀ただされ是又無御餘儀次第（さりながら）於主人者謹慎は
 被罷居まかりおられ猶更報國之一端二相當リ候得共なおよさら幾應モ今般之義者は時
 所ヲ被誤候一途二而あやまれ為國家毫厘ノ私典無之段八長州藩克々御弁別よくよく
 ヲ以テ結局之御捌キひひえ偏二功罪相償之御憐恕ヲ以テ御寛宥二立行

ぜいせい
臍^{へい} 臍^{へい} 二 ほぞをかむ。後悔しても及ばない意。

鰯さんしょう＝物事の源またハ、じまり。長江もその源は僅かに杯を浮かべるほどの少量の水であることの意。「濫」は浮かぶこと。「鰯」は盃。

蒼海尚浅（そうかいなおあさく） Ⅱ 蒼海尚深ではないか。

私曲^ニよこしまなこと。

疾樣御執計之程奉軟願天至人出因中差當リ心身疲弊之
憂天旦夕御座天間是又御規則相立天心身取凌相成天之
御緩之御詮議被仰付被下天謹而後日之公裁天相待之外更
異議無御座天余天段天御同察奉仰天疾天程御邪典
被相立天疾御裁許之央天微臣之身分軟願之義者恐多奉存天
得共幾重天臣下之情實主人御奉公向一途被致勉勵疾忠
志却而身之不幸天相成疾段天疾應殘悔無限奉存天付不得已
平生之志願見聞之所天以御軟願天疾間偏天公日大之御勤并
以天廣大之御所置被相行疾樣伏而奉軟願天疾余天段且敷樣
御建議之程奉祈謹白

益田右衛門介

家来中

元治元年（一八六四）八月

候様 御執計之程奉^{たりはからい たんがんでまつり}歎願^{もつとも益田親施}候 尤主人^{あいたち}幽囚中 差當^{とりしのぎ}り心身疲弊之
憂^{うれ}毛旦夕二御座候間 是又御規則相立候^{これまた おおせつけられくだされ}ハ、心身取^{あいな}凌^{なり} 相成候^{あいまつ}丈ケニ
御緩^{ゆる}メ之御詮議 被仰付被下候^{おおせつけられくだされ}ハ、謹^{つつしんで}而後日ノ公裁ヲ相待^{あいまつ}之外 更^{さら}
異議無御座候条 此段トモ 御洞察奉^{あおぎたてまつり} 仰候^{いま}ケ程 御邦典^{おそれおおくそんじたてまつりそつら}
被相立候 御裁許之央^{（なかば）} 微臣之身分歎願^{益田親施}ノ義者^{いぢず} 恐^{おそれ}多奉^{おそれ} 存候^{いたされ}
得共^{えども} 幾重毛臣下ノ情實^{益田親施} 主人御奉公向キ一途二被致^{いぢず} 勉勵候^{いたされ}忠^{やむをえず}
志^{かえつて} 却^{あいな}テ身之不幸ト相成候^{もつて}段 幾應毛残悔無限奉^{かぎりなくぞんじたてまつり} 存候^{ひとえ}二付 不得^{やむをえず}已^{やむをえず}
平生之志願 見聞之所ヲ以^{もつて} 御歎願^{あいおこなわれ}仕候^{ふしてたんがんでまつり}間 偏^{ひとえ}二公明正大之 御勘弁
ヲ以テ 寛大之御所置^{いのりたてまつり} 被相行候様 伏而奉^{あいおこなわれ} 歎願^{ふしてたんがんでまつり}候条 此段宜敷様
御建議之程奉^{いのりたてまつり} 祈候^{いのりたてまつり} 謹白

益田右衛門介

家来中

心身疲弊〓当時親施の健康状態について、「月番日記」に「…然処、右衛門介殿近来病身ニテ胸痛間々差起リ被致難儀事ニ候工八只今ノ通リにて八身
命取凌の儀も如何可有之哉」との記述がある。また、「随行日記」元治元年八月廿五日の欄に「松原泰蔵徳山医師林良益方へ被差越候事」との記述が
あり、幽囚中の主人の治療相談に行つたのではないだろうか。

邦典〓国家（萩藩）の典例・法則。

九月下旬ニ至リ本藩俗論黨氣焰最熾シテ正義ノ士ハ蛇蝎視ニ各地
於テ蜂暴ノ舉動アリ其談曰山々新城郭ヲ毀テ國防一國ヲ剽與シテ肉
罪便ニ謝スヘト麻田公輔國論變動ヲ察シ山々於テ屠腹セリ
十月三日藩主公藩城ハ御移轉岩國并長府清水諸公亦入款アリ
兎戸備前清水清太郎正義派ヲ敗作シテ西職毛利伊勢并原主計位
其他熊谷武部始シ俗論黨ヲ登庸セリ賊魁財満新三郎嶋尾五郎
右衛門等六百名清水寺ニ會シテ結黨ス所謂撥鋒隊ナリ
御沙汰書

益田右衛門介

親類中

并家老共

右先達而當役中申聞置疾通嫡子精次郎致輔佐用

九月下旬二至り 本藩俗論黨ノ気焰 最(もつとも) 熾ニシテ正義ノ士ヲ蛇蝎視シ各地ニ
於テ疎暴ノ舉動アリ 其説二曰ク 山口ノ新城郭ヲ毀チ 周防一國ヲ割與シテ問
罪使二謝スヘシト 麻田公輔ハ國論ノ変動ヲ察シ山口ニ於テ屠腹セリ(九月廿六日)

十月三日 藩主公ハ藩城ヘ御移轉 岩國并長府 清末ノ諸公 亦入萩アリ(毛利敬親、萩城力、吉川経幹、毛利元周、毛利元純、また)
宍戸備前 清水清太郎 ノ正義派ヲ敗斥シテ 両職ハ毛利伊勢 井原主計二任(加判役、等脱力、親戚、阿川毛利、加判役、政事方、かすえ、加判役、民政并米銀方)
シ 其他 熊谷式部ヲ始メ俗論黨ヲ登庸セラル 賊魁財満新三郎 嶋尾五郎
右衛門等六百名 清光寺ニ會シテ結黨ス 所謂撰鋒隊ナリ

御沙汰書

益田右衛門介

親類中

并家老共

右先達而 當役中申聞置候通 嫡子精次郎致補佐 用二

蛇蝎ヘビとサソリと。転じて恐れ嫌われる事のたとえ。

麻田公輔周布政之助。当時俗論派に逐われ、吉富簡一の家に在り、罪を身に負い国難に代わらんとして数日食を断ち、一通の文を残して九月二
六日自刃。四二歳。

撰鋒隊嘉永六年二月十五日編成。外警ノ事アルヤ藩士馬廻士以上ノ気概アリテ拔芸ニ精キモノヲ選テ海陸二軍ニ充ツ。名付テ「先鋒隊」ト言ウ。
文久三年二至リ「先」ノ字ヲ改メ「撰」ト為ス。慶応元年正月内訌戦ニ諸隊ト戦ヒ大敗シ幾何モナク解散ヲ命セラル。(もりのしげり 347頁)
清光寺浄土真宗の寺。月輪山清光寺・本願寺萩別院として現存。萩市西田町。寛永八年(一六三一)輝元夫人清光院の菩提寺となる。開山は准尊。

元治元年(一八六四) 九ノ十月

相立候様申合積々可令心遣尤右衛門介身上付如何様
申付共家来末々至迄下心得之義於無之者家名無相
違可立遣付此度令鎮靜候様可申聞候事

幕府其様ニ果シテ征長ノ舉ヲ果サント欲シ尾張前大納言徳川慶
勝命シテ一藩ノ後督ヲラシメ右佐渡守ヲ向罪使トシ安藝國廣島ニ至ラシメ
我藩主ニ公官位及松平様ヲ剽奪スル是於テ本藩諸隊ニ分散シ命シ三
國老ノ首級ヲ渡シ山口新城ヲ破却ス議決ス初メ小國融藏山口徳山
間ニ潜伏シ在邑大言撲助等ト内々相恚シテ共ニ計ル所アリシカ本藩政府
爾後ト俗論黨ノ運動ヲ採自スルニ三國老ニ身上頗切迫ナリ故ニ諸隊
恒同義兵ヲ興ケ三國老ヲ救ヒテ須佐ニ據リ國內賊ヲ一掃スルノ計畫アリ
福原亦之ニ恚スラ以テ日夜無行邑ニ歸リ育英館日進堂有志會
ヲ開ケリ實ニ十一月朔ナリ此會議論ニ達別ハ一日先ツ山口御在七郷

元治元年（一八六四） 九ノ十月

相立候様申合 もうしあわせ 精々可令心遣 「こころづかいせしめるべく」 尤右衛門介身上二付 もつとも 益田親施 如何様
 申付候共 なくたつかわすべく 家来末々二至迄 きつと ちんせいせしめ 不心得之義於無之者 これなきにおいては 家名無相 あいたがい
 違可立遣二付 きつと ちんせいせしめ 屹度令鎮静候様 もうしきかすべく 可申聞候事

幕府八其機二乗シテ征長ノ舉ヲ果サント欲シ 長州征伐 尾張前大納言 徳川慶 （よし）

勝二命シテ

廿一藩ノ

総督タラシメ石川佐渡守ヲ問罪使トシテ安藝國廣嶋ニ至ラシメ

尾州老臣、石河佐渡守

あきのくに

我藩主二公ノ官位及松平ノ称ヲ剥奪セリ 毛利敬親・元徳 是二於テ本藩八諸隊二分散ヲ命シ 益田右衛門介

福原越後、国司信濃

國 老ノ首級ヲ渡シ

山口新城ヲ破却スルノ議ヲ決ス （益田家臣、育英館学頭、重監）

初メ小 國 融 蔵八山口徳山

間二潜伏シ 在 邑 大谷樸助等ト内外相應シテ共ニ計ル所アリシカ 本藩政府ノ

處断ト俗論黨ノ運動ヲ探偵スルニ 三國老ノ身上頗ル切迫ナリ 故ニ諸隊

協同義兵ヲ舉ケ 三國老ヲ救ヒテ須佐ニ據リ （須佐） 國內ノ賊ヲ一掃スルノ計畫アリ

福原亦之ニ應スルヲ以テ 日夜兼行 邑ニ歸リ （須佐） 育英館日進堂ニ有志會

ヲ開ケリ 實二十一月朔ナリ 此會ヤ議論ニ途ニ別ル 一二曰ク先ツ山口御在七卿

廿一藩 阿波、美作、出雲、播磨、因幡、備前、播磨、石見、讃岐、備中、備後、播磨、豊前、薩摩、豊前、安芸、肥後、土佐、筑後、伊予、石見の諸藩。

「初メ小国融蔵八山口徳山間二潜伏シ」 融蔵は山口に在つて岡彦太郎宅に隠れて藩府の動静を探ろうとした。（「益田氏と須佐」 192頁）

三國老ヲ救ヒテ須佐ニ據リ 國內ノ賊ヲ一掃スルノ計畫 幕軍の侵入を目前にして、十月十一日奇兵隊鷹懸隊は徳地に転営し要害に拠り雌雄を決しようとした。藩は二十一日諸隊解散の令を下したが、「山口来集の諸隊首領及び野村靖之助等相議して以為らく 諸隊は宜しく相連結して以て後事を図るべし 須佐は故益田大夫の采地にして同氣必らず相応ぜん 宜しく五卿を茲に奉じ諸隊共に其地に拠るべしと 乃ち檄を各地所在の諸隊に飛ばし 又五卿に稟告し翌月四日を以て移転の期とし 五卿は名を遠乗に假る 時に山県少輔徳地に在り 因て福田恭侠平を遣り此意を通ぜしむ 山県之れを非とし以為らく 須佐は偏僻にして退て守るに便なるも進で事を為すに足らず 若かず直ちに進で山口に集り至誠以て素志を達するの手段を講ぜんにはと 福田大に之れを賛し歸て之れを同志に説く 会々須佐の地俗論紛出の報亦至る 是に於て乎議論に變じ山口に集屯するに決す」（「防長回天史」 六 第四編下 28 頁）「初め諸隊は徳地に居りまして、一時は益田大夫の采邑須佐に拠ると云ふ論も起りましたが、山県狂介などの論では、アンな辺鄙に籠つては足も手も出せぬ、遂には俗論党の為に攻められて、百姓屋で空しく腹を切ると云うような窮境に陥るかも知れぬ、それより山口に出て精神を籠めて歎願したが宜かろうと云うことで、諸隊相率いて、続々山口に出て参りまして……」（「中正公勤王事績」 467頁）

国内の賊 棕梨藤太ら萩藩俗論派政府幹部のこと。

七卿 P5 参照。

携^ラ德地^ヲ經^テ德山^ニ出^テ義旗^ヲ翻^シ操^シ壽院^ニ闖^入シ主君^ノ禁錮^ヲ解^キ
 放^シ諸隊^ノ應援^ヲ待^テ以^テ二州^ノ正氣^ヲ恢復^セト^ニ曰^ク德山御禁錮^ノ
 狀^ヲ聞^ク聲^ヲ衝^シ殿^ノ肅^シ若^シ一朝^ノ事^ヲ奔^ラ主君^ノ身^ヲ及^ブ必然^ノ勢^ヲ
 主君^ノ實^ニ牘^中空^ニ玉^{ナリ}其^ノ牘^ヲ破^碎シ^テ玉^ニ一^點ノ瑕^カラ^レハ^シ至^ス
 雖^モ謂^フ故^ニ本藩^ノ政府^ノ勅^ノ願^シ只^ニ管^ノ寬^大ノ處^ニ置^テ仰^ク如^クスト^ニ歟^ノ說^ヲ
 多數^{ナル}以^テ之^ヲ邑^ノ政堂^ニ建^シ議^ス臣^民俗^ノ吏^等本藩^ノ直^ニ接^シ出^テ頭^スラ^ハ
 憚^リ躊躇^シ決^セ其^ノ說^ニ曰^ク曾^テ省^テ國^ノ吉^川殿^ノ御^ホ家^ノ益^日伊^豆殿^ノ所^ノ扱^ス
 事^モシ^ハ彼^ノ二^家ノ萬^ノ依^レ賴^ス臣^民恭^順余^ヲ送^リ守^スモ^リト云^フベ^シト
 同^日安^當九^郎兵^衛定^ニ會^シ議^ス松^原仁^藏ヲ^シテ德^府ノ事^情探^訪
 爲^ノ多^ク急^ニ行^セシト同^夜更^ニ胡^英館^日進^堂會^場轉^シテ徹^夜相^議ス
 茲^ニ邑^ノ政堂^ニ專^ラ本藩^ノ恭^順主^義ヲ守^ルニ館^中有^志會^説勸^モス^ハ
 激烈^ニ涉^ル憚^リ各^ノ級^ノ合^同會^議ヲ殿^禁セ^リ仍^テ羽^玉三^日ヨリ開^散更^ニ

ヲ携^{たずさ}へ 徳地ヲ経テ徳山ニ出^いテ 義旗ヲ翻^{ひるがえ}シテ操^持寿院ニ闖入シ 主君ノ禁錮ヲ解^(益田親施)
 放シテ諸隊ノ應援ヲ待チ 以テ^{もつ}二州ノ正氣ヲ恢復セント 一二日ク 徳山御禁錮ノ
 状ヲ聞クニ警衛ノ嚴肅ナルト 若一朝事^(おこ)発ラバ 災^(わざわい)先ツ主君身ニ及フハ必然ノ勢ナリ
 主君ハ實ニ牘中ノ寶玉ナリ 妄^{みだり}ニ其牘ヲ破碎シテ 玉ニ一點ノ瑕^{きず}ナカラシムルハ至
 難ト謂^いフベシ 故ニ本藩政府ヘ歎願シ只管寛大ノ處置ヲ仰クニ如スト 此説^{願力}
 多數ナルヲ以テ 之ヲ邑政堂ニ建議スト雖トモ 俗吏等本藩ニ直接出頭スルヲ
 憚^{はばか}リ 躊躇決セス 其説ニ曰ク 曾^(か)テ岩國吉川殿御末家 益田伊豆殿御扱
 ノ事モアレバ 彼^(かの)ニ家ヘ萬^(よろず)依頼スルコソ恭順ノ命ヲ遵守スルモノト云フベケレト

(十一月) 同 二日 安當^(富)九郎兵衛宅ニ會議ス 松原^(益田家臣、中士、御手廻組)仁蔵ヲシテ徳府ノ事情探訪
 ノ為メ急行セシム 同 夜 更ニ育英館日進堂ニ會場ヲ轉^{てん}シテ徹夜相議ス^(あいぎ)
 茲^(こゝ)ニ邑政堂ハ專^(せん)ラ本藩ノ恭順主義ヲ守レルニ 館中有志會説^(しん) 動モスレバ
 激烈ニ渉ルヲ憚^{はばか}リ 各級ノ合同會議ヲ嚴禁セリ 仍^(よ)テ翌三日ヨリ開散^(かいさん) 更ニ

徳地〓中国自動車道「徳地IC」付近。佐波郡徳地町。

(とく) 牘〓 楽器の名。文書、かきもの、公文書、手紙、半切。

「岩國吉川殿御末家 益田伊豆殿御扱ノ事」〓

大組御手廻組士等全級限リ集會所開設セリ

同四月安富九郎兵衛宅ニ於テ御手廻集會ノ際大谷權助膝ヲ進メテ

曰ク主君御切迫今日ニ於テ臣等者豈歸食ヲ安ニスバケンヤ邑政堂ニ素ヨリ

姑息因循俗論主矣ナリ其令ヲ背カントスレバ到底不忠ノ罪ニ陷ラン假令徳

有ヨリ救ヒ出シ奉ル事能ハルモ吾輩有志ニ率先御警衛ト称シ強テ彼地ニ

至リ萬一厄運ニ遭遇セバ列座割腹シテ以テ冥途ニ供奉スルコソ臣下タル者ノ

本分ナリ君辱則臣死矣諸君以テ如何トナスト奮然其説ヲ賛シテ同盟結

約スル者僅ニ拾五名

安富九郎兵衛 市山淳藏 宇野魁介

品川小五郎 山科好捷 津田公輔

大橋三樹三 黒谷豫四郎 岡部東三

原开直助 柴田筆吉 大谷要太郎

元治元年（一八六四）十一月

大組 御手廻組士等各一級限りノ集會所ヲ開設セリ

(十一月) 同日 安富九郎兵衛宅ニ於テ 御手廻集會ノ際 大谷樸助 膝ヲ進メテ

曰ク主君御切迫ノ今日ニ於テ臣タル者豈寢食ヲ安スベケンヤ 邑政堂ハ素ヨリ

姑息因循 俗論ノ主点ナレハ其令ヲ背力サラントスレハ到底不忠ノ罪ニ陥ラン

府ヨリ救ヒ出シ奉ル事能ハサルモ 吾輩有志ハ率先御警衛ト称シ 強テ彼地ニ

至リ 萬一厄運ニ遭遇セハ 列座割腹シテ以テ冥途ノ供奉スルコソ臣下タル者ノ

本分ナレ 君辱則臣死矣 諸君以テ如何トナスト 奮然其説ヲ賛シテ同盟結

約スル者僅力ニ拾五名

(中士、御手廻組) 安富九郎兵衛

(中士、御手廻組) 市山淳藏

(中士、御手廻組) 宇野魁介

品川小五郎

山科好槌

(中士、御手廻組) 津田公輔

大橋三樹三

(中士、御手廻組) 黒谷豫四郎

(中士、御手廻組) 岡部東三

原井直助

柴田筆吉

大谷要太郎

「君辱則臣死」＝「君辱臣死」(シユはずかしめらるればシンシス)(史記・韓長孺傳)

安園五郎

山下少輔

山下範三郎

北より同

より

山下少輔

是に於て主君警衛爲徳山出張旨は政堂上申に依懷已

整將に遂上ラントセシ當時本藩より御目附村尾治兵衛御末家

益田寛殿も小笠原次郎太郎等滞須專ら鎮撫從事スルは

政邑堂唯々諾々其指揮ヲ仰キタタリシト其上申ヲ得ルヤ固章狼

狽に依御用人松本良光衛門ヲ本藩政府へ歎願ノ爲メ發途セシ

曰ク主君ノ御身上安全ナルコトハ其筋ヨリ確報アリシヲ以テ此度保証ス

ハレ安舉事ヲ誤レ勿レト然シテ乃一脱走セテ宇田村に於テ之ヲ逮捕ス

ノ準備ヲ爲シタリ十二士ハ其筋ヨリ確報アリト云ふニ欺カレテ發途ヲ猶ヒ益同

志ヲ誘同

より
佐吏カ其筋ヨリ確報アリト云ふニ依吏等亦
本藩政府ノ猛撫策ニ欺レタリモノナリシナリ

同九日邑政堂より岩國候へ主人解放ノ御祈ヲ請願ノ爲メ命シテ出

安岡五郎

(中士、御手廻組)
山下少輔

山下範三郎

折るゝとも同しみをや雪の竹

山下少輔

(これ) 是ニ於テ主君警衛ノ為メノ徳山出張ノ旨ヲ邑政堂ニ上申シ 旅装已(すて)

二整ヒ 將ニ途ニ上ラントセシニ 當時本藩ヨリ御目附 村尾治兵衛 御末家

益田石見殿 并なみだり 小笠原次郎太郎等滞須(須佐) 専ラ鎮撫ニ従事スレハ 邑

政堂ハ唯々諾々 其指揮ヲ仰キタリシヲ以テ 其上申ヲ得ルヤ 周章狼

狽シテ 俄ニ御用人 松本良左衛門ヲ本藩政府ヘ歎願ノ為メ發途セシメ

曰ク 主君ノ御身上安全ナルコトハ其筋ヨリ確報アリシヲ以テ屹度保証ス

ベシ 妄學事ヲ過ル勿レト 然シテ万一脱走セハ宇田村ニ於テ之ヲ逮捕スル

ノ準備ヲ為シタリ 十二士ハ其筋ヨリ確報アリト云ヘルニ欺カレテ發途ヲ猶シ 益同(ますます)

志ヲ誘同セリ(導)

(十一月) 同 九日 邑政堂ヨリ岩國侯ヘ主人解放ノ御扱ヲ請願ノ為メニ 益田 命シテ出

益田石見「寄組益田家(小郡陶、前大津三隅津黄一〇六七石。始祖は益田玄蕃頭元祥五男就景)益田棟村のこと。名は親孚、通称主水、石見、源兵衛。梅村と号す。文化十年十一月一日生まれ。明倫館に学ぶ。字を山県太華に受け、又東遊、贅を大槻盤溪に執る。文久元年八組頭。当職方など歴任。後寄組被仰付。明治三年毛利家令たりしが翌年罷め家居徒に授く。明治二四年石見鹿足郡畑迫に移る。笹谷鉱山支配。明治三二年三月三十一日卒。八七才。妻は益田元宣二女勝子。よつて益田親施の義兄に当たる。『出典』『石見諸家系図録』114頁、『増補近世防長人名辞典』222頁、山本勉弥編『萩碑文鐘銘集』21頁)

宇田村「須佐の西南約8^キ。阿武郡阿武町宇田。下りJR山陰本線で須佐駅の次が宇田郷駅。

十二士「十六士の誤り(P33の十五名と大谷樸助)。松永本は「十六士」。

この頁は「松永本」と大きく異なる個所多し。8行目以下「...發途セシム。御目附村尾氏等其ノ情勢ノ穩カナラザルヲ察シ邑政堂ニ報ジテ曰ク 親施公ノ御身上安全ナルコトハ確報ニ接シタリト 邑政堂大谷樸助ニ諭スニ 主君ノ御身上ニ於テハ決シテ懸念スベカラザル旨其筋ヨリ信スベキ報知アツタレバ邑政堂其ノ安全ヲ保証スベシ 輕拳事ヲ過ルコト勿レト 明言シ而シテ万一壮士輩脱走アラバ途ニシテ之ヲ逮捕セシメント其ノ準備ヲナシタリ 拾六士ハ其筋ヨリ信スベキ報知アリト云エルニ欺カレテ發途ヲ猶予シ益々同志ヲ誘導ス」

元治元年(一八六四) 十一月

殺せしむ

同日秋田川其より報あり曰三太夫御看腹事決や有志者非常
激昂頗る不穩状況ナリ又報曰前報知小笠原弥左衛門無
根志言ヲ流布せしメテ人心ヲ惑ハセタルモノナリト改報、達スル及ヒテ稍鎮靜
ニ歸シタリシモ翌十一日ヨリ十二日ニ至リ松原茂一郎秋野感五衛門中村藤馬
仁川完藏三好久平等續々徳有ヨリ歸邑シ主君、御身上益切迫事
ヲ探知セシ由ヲ報スルト雖氏佐吏ニ老説信スルニ是ラストシテ曰ク主君御大事
ニ決セハ本藩ヨリ其令アルヤ必セリ且富地出張益田戸見殿小笠原次
郎太郎氏等モ亦々聞知セサル由テハ驚クハラスト小國融藏ニニ同志相
圍リ士卒一般へ通知シテ有志大會議ヲ紹孝寺ニ開ケリ融藏曰昨日
ヨリ今日ニ至リ徳府、變報續々相達セリ是政堂、浮説流言信スルニ足
スト為スト雖氏本藩、恭順主義幕府へ謝罪、策ニ三國老ヲ啟

元治元年（一八六四）十一月

發セシム

（十一月）
同 十日 萩品川某ヨリ飛報アリ 日三太^{（大）} 御屠腹ノ事決セリト 有志者非常

ノ激昂^{（すこぶ）} 頗ル不穩^{（ふおん）}ノ状況ナリシニ 又報シテ曰ク 前報知ハ小笠原弥左衛門^{（や）} 無

根ノ忘言^{（わす）}ヲ流布セシメテ人心ヲ惑ハシメタルモノナリト 此報ノ達スルニ及ヒテ稍鎮静^{（や）}

二帰シタリシモ 翌十一日ヨリ十二日ニ至リ 松原茂一郎^{（上士、大組）} 荻野感左衛門^{（威）} 中村藤馬

石川完蔵^{（中士、御手廻組）} 三好久平等^{（大道村切畑居住の家臣）} 續々徳府ヨリ歸邑^{（須佐）}シ 主君ノ御身上益切迫ノ事^{（益田親施）}

ヲ探知セシ由ヲ報スルト雖トモ 俗吏八巷説信スルニ足ラストシテ曰ク 主君御大事^{（益田親施）}

ニ決セハ 本藩ヨリ其令アルヤ必セリ 且當地出張^{（須佐）} 益田石見殿^{（育英館學頭、重監）} 小笠原次

郎太郎氏等モ未タ聞知セサル由ナレハ 驚クヘカラスト 小國融蔵^{（小國）}八二一ノ同志ト相

圖リ 士卒一般へ通知シテ有志大會議ヲ紹孝寺二開ケリ 融蔵曰ク 昨日^{（十一月九日）}

ヨリ今 日ニ至ル徳府ノ變報^{（徳山）} 續々相達セリ 邑政堂ハ浮説流言信スルニ足

ラスト為スト雖トモ 本藩ノ恭順主義 幕府へ謝罪ノ策ハ三 國 老ヲ嚴

萩品川某 品川藤三郎。『津田常名翁の伝記』80頁「三決死」より）

二二ノ同志 小國、大谷、河上、田村の4名のこと。

紹孝寺 須佐町河原丁。曹洞宗。金峯山。建仁年間（一一〇一〜一〇三）創建、延命寺と号した天台宗の道場であった。明応元年（一四九二）万福山延明寺と改号したが、天正年間（一五七三〜一五九二）更に寺号を改めて瑞雲山長福寺と号し禅宗の道場となった。慶長一六年（一六一一）益田元祥の時算山宗円寺と改めたが、承応三年（一六五四）年曹洞宗に改宗、元禄年間（一六八八〜一七〇三）益田就恒の時現在の寺号となり大寧全寺（長門市深川）の末寺となつて益田家より寺領二〇石を賜った。昭和六年山門を残して全焼し、昭和一〇年に再建された。

罰^ニ以^テ第一着^トキ^ニ枉^リ故^ニ事^ヲ茲^ニ至^ル必然^ノ勢^{ナリ}嗚呼主君幽
因後五旬有京ノ日數^ヲ議論^ニ浪費^{セシム}必竟^ニ是^レ政堂^ノ俗吏^ニ欺^{カレ}
一舉^手一投^足每^ニ成^ル多^ク束縛^ヲ受^ケタル^ニ職^由セサル^ニ無^シ諸^子今^ニシ^テ臍^ヲ
壁^ニモ何^ゾ及^{バン}諸^子ヨ^ク然^ニ決^意今^{ヨリ}相^與^ニ凝^視シ^テ德^府起^キセ^サテ^主
君^ノ御^最期^ヲ送^リ奉^ラシ^ト其^言未^タ竟^ラサル^ニ昨^{十日}三^國大^御割^腹
命^{アリ}ト衆^相見^テ蹄^墨ス^ルモ^ナリ^リ或^俗吏^ヲ罵^リ或^已
拙^策ヲ^耻ケ^満場^狂如^シ融^藏慰^諭シ^テ白^ク事^是至^ル千^悔万^悟
何^ノ及^{バン}速^ニ散^會シ^テ主^君御^遺骸^ヲ奉^仰シ^テ葬^儀了^リ後^除謀^ハ
ハ^處ア^ラシ^ト保^其旨^ニ從^ヒ各^歸定^シ奉^仰爲^出奔^ス
大組ヨリ出陣セシハ
宅野太郎一名ニ
其會ニ列スル有志者
其手廻組士ノ内ニシテ

同十三日拂曉德山ヨリ取^報アリ一晴^昨十日德山操壽院^ニ於^テ主君御
屠^腹御^逝去^{アラ}セラ^レタリ^ト始^メテ^俗吏^ノ昏^睡ヲ攪^破セ^リ中^村藤^馬

罰スルヲ以テ第一着トナスニ在リ 故二事(二つ)茲(いま)二至ルハ必然ノ勢ナリ 呼鳴主君幽(あゝ益田親施)

囚(五十日)後五旬有余ノ日数ヲ議論ニ浪費セシム 必竟(畢竟)邑政堂ノ俗吏ニ欺カレ

一舉手一投足毎ニ幾多ノ束縛ヲ受ケタルニ職由セザルハ無シ 諸子今ニシテ臍(ほぞ)

ヲ噬ムモ 何ソ及バン 諸了(子)ヨ 断然決意 今ヨリ相與(とも)ニ脱シテ德府(徳山)ニ起(赴)キ セメテ主(益田)

君ノ御最期(さいご)ヲ送り奉ラント 其言未タ竟ラサルニ 昨十一日 三(益田右衛門介、福原越後、国司信濃) 老御割腹(おのれ)

ノ命アリト 衆相見テ號哭スルモノアリ扼腕スルモノアリ 或ハ俗吏ヲ罵リ 或ハ己ノ

拙策ヲ耻チ 満場狂ノ如シ 融藏慰諭シテ曰ク 事是ニ至ル 千悔万悟

何ソ及バン 速ニ散會シテ主君ノ御遺骸ヲ奉仰(迎)シ 葬儀了リテ後 徐ニ謀

ル處アラント 衆其旨ニ従ヒ 各 帰宅シ奉仰(迎)ノ為出發(此會ニ列スル有志者八御手廻組土ノ内ニシテ)ス

大組ヨリ出席セシハ
宅野太郎一名ノミ

同 十三日拂曉 徳山ヨリ飛報アリ 一昨十一日 徳山操寿院(持)ニ於(益田親施)テ主君御

屠腹 御逝去アラセラレタリト 始メテ俗吏ノ昏睡ヲ攪破セリ 中村藤馬(益田家臣)

必竟〓畢竟。とどのつまり。要するに。所詮。

職由〓物事の由つて来たところ。

本頁6行目以下、松永本の記述は以下の通り。『…ノ命アリト確報アリ 衆相見テ失色号哭スルモノアリ 扼腕スルモノアリ 或ハ俗吏ノ苟安ヲ罵リ 或ハ自己ノ不断ヲ悔ヒ 満場恰モ狂エル如シ』

松永本ノ注記『此會ニ列スル者 御手廻 及 四組ノ中ニシテ大組ヨリ出席セシモノ八宅野太郎一人ノミ』

元治元年（一八六四）十一月

御馬屋組忠之丞命テ御遺骸奉仰爲出殯せしム

御罪狀

益田右衛門介

右在役中突更ニ共徒黨結ビ古來之御法改革ニ説シ私
意以テ御國體ヲ破リ刻ニ

天朝幕府ヲ恣シ自身之譴責相迫テ至而者軍粧
ヲ以テ京師ヲ擁シ恐ヲクモ奉テ驚

宸襟疾次第更ニ被仰分_ニ之御手段モ無之終ニ

御國難ニ至リ被段不忠不義之者_ニリ不謂事ヲ依之割腹

被仰付事

十一日夜九ツ時御割腹介錯益田與一郎氏ナリ當時檻外伺候

松原仁藏有田新左衛門二名ニシテ仁藏等御最期陰益田

元治元年（一八六四）十一月

御馬屋組忠之丞二命シテ御遺骸奉^迎仰ノ為出發セシム

御罪状

益田^{（益田親施）}右衛門介

右在役中 姦吏ト共ニ徒黨ヲ結ビ

古^{（託）}来之御法改革ニ詫シ私

意ヲ以テ御國體ヲ破リ^{あまつさえ} 刺^へ

天朝幕府ヲ蔑シ 自身ノ譴責相迫候ニ至而者 軍粧

ヲ以テ京師ヲ擁シ^{よう} 恐多クモ奉驚

宸^{しん}禁^{きん}

おおせわれ

宸禁候次第

更ニ被仰分之御手段モ無之^{これなく}

終ニ^{つい}

御國難^藩ニ至リ候段

不忠不義之至リ

不謂事候^{いわれざるごと}

依之割腹^{これによって}

被仰付候事^{おおせつけられ}

（十一月）（午前零時）
十一日夜九ツ

御割腹

介錯八益田與一郎氏ナリ

當時檻外伺候

八松原仁蔵^{（中土、御手廻組）}

有田新左衛門二名ニシテ

仁蔵等^{（松原）}

御最期ノ際

益田

京師〓天子の都。京は大、師は衆で大衆の住んでいるところ。京都。

宸^{しん}禁^{きん}〓宸襟。天子のみところ。

古^{（託）}来之御法改革ニ詫シ〓

軍粧〓

不謂事〓いわれざること。理由のないこと。

益田與一郎〓萩藩士（分家筋不明）

與二郎就^テ拜謁^ヲ見^テ下雖^モ許^サレ

仙相院君^ハ御遺書

京師變動^ハ一付^ニ付而

御國朝敵相成^テ矣由就^テ而者

私割腹被^レ仰^付矣^ト御事則割腹仕^テ死後^ハ侍^リ精次

郎成立^ニ御役^ニ相立^ニ矣樣是^レ祈^ヒ也

御辭在歌二首

ト^リ河^ノの急^ナきは水^ノ流^ルる^ハか^ハら^ハず^ヤ

か^ハら^ハず^ヤ君^ノと^ハさ^ハけ^テ却^リる^ハ身^ハ

消^レゆ^ハけ^ハは^ハる^ハ葉^ノの^ハ斗^ハは^ハる^ハふ^ハる^ハ

き^ハけ^ハの^ハ侍^リ玉^ノけ^ハは^ハる^ハ以^テあ^リる^ハ

松原^ニ藏^有田^新左^衛門^伊藤^與平^等御^遺體^ヲ飲^シ奉^リ

リ^テ供^奉湯^須須^ス

與一郎二就テ拝謁ヲ乞フト雖モ許サレス

(親施生母、益田元宣室)
仙相院君へ御遺書
蛤御門の変についで
京師変動一件二付而ハ御國朝敵ト相成リ候由就而者
私割腹被仰付候トノ御事則割腹仕候
おあせつけれ
なりたち
御役二相立候様是祈候也
死後ノ件ハ精次

御辞世歌二首

よしあしの名をはいかてかいとはまし
かねそ君にさゝけつる身ハ
消ゆけは草葉のかけに思ふへし
きみのみ国のはてはいかにと

(中土、御手廻組)
松原仁蔵
(くぶ)
有田新左衛門
(須佐)
伊藤與平等
御遺體ヲ斂メ奉
リテ供奉歸須ス

仙相院〓益田元宣公室。親施公の母。法名「仙相院貞室妙寿」。明治二六年四月四日卒。行年八二歳。

益田親施公辞世としては『今更になにあやしむ空蟬のよきもあしきも名のかはる世に』が知られている。(出典〓「萩の維新関係碑文拓本集」)

元治元年(一八六四)十一月

同十四日夜四時弥富全柳寺御着駕

同十四日昼四時御着駕同七時大湊寺御着駕然ル御首級
岩國於テ幕吏ノ實檢供セシ由臣子情實切齒至リ堪エサルナ
リ又御罪狀ヲ見セシテ邑政堂ニ乞フト雖モ御罪狀未タ到着セスト
答エサリ是時御罪狀未タ既ニ御求家ヲ徑テ洛握セシモ俗吏等
或ハ御罪狀未タ由トナランコト忌ミ邑寄益田三郎左衛門察ミ之ヲ慥ニセ
シ事後日差露セリ

同十五日夜暴風雨軸ヲ流シ御葬送式執行アリ高正院殿大義全明
居士ト謚シ御埋葬畢ル雖モ御首級御歸邑無キ以テ有志者ハ勿論
俗吏モ亦東西奔走シテ相與百方尽力セリ

大石樸助其師小國融藏等ト親旋シ股肱トナリテ國事ニ奔走シ
大ニ寵遇ヲ受ケタル以テ哀悼情一層切ナリ終ニ追腹殉死意ヲ決

元治元年（一八六四）十一月

（十一月）
同 十三日 夜四ツ時^{（午後十時）} 弥富全柳寺御着駕

（十一月）
同 十四日 昼四ツ時^{（午前十時）}御発駕 同 七ツ時^{（午後四時）}大蘊寺御着駕 然ルニ御首級

八岩國ニ於テ 幕吏ノ實檢ニ供セシ由 臣子ノ情實 切齒ノ至リニ堪エザルナ

リ又御罪状ヲ一見センコトヲ邑政堂ニ乞フト雖トモ 御罪状ハ未夕到着セスト

答エサリ 是時御罪状ハ既ニ御末家ヲ經テ落握セシモ 俗吏等

或ハ沸騰ノ原由トナランコトヲ忌ミ邑宰益田三郎左衛門 密ニ之ヲ懷ニセ

シ事後日發露セリ

十一月
同十五日夜 暴風雨軸ヲ流ス 御葬送式執行アリ 高正院殿大義全明

居士ト謚ス 御埋葬畢ルト雖トモ 御首級ノ御歸邑 無キヲ以テ 有志者ハ勿論

俗吏モ亦東西奔走シテ 相與二百方尽力セリ

大谷樸助ハ其師小國融藏等ト 親旋公ノ股肱トナリテ國事ニ奔走シ

（おおい）
大ニ寵遇ヲ受ケタルヲ以テ 哀悼ノ情一層切ナリ 終ニ迫腹殉死ノ意ヲ決

全柳寺〓須佐町弥富下蒲原。春林山。禅宗。はじめ弥富の大田にあつて伽藍の跡を塔の浴と云う。永享年間（一四二九～一四四〇）津和野城主吉見氏が創建し弥高山興禅寺と号したが、慶長年間（一五九六～一六一四）大蘊寺として須佐に移された後、寛永年間（一六二四～一六四三）再建された。寛文二年（一六七二）益田就宣の三男七兵衛が早世し法名を春林院殿晴空全柳居士と号したので、その冥福を祈り開基として寺号を春林山全柳寺と改めた。大蘊寺〓須佐町山根丁東。金瀧山。曹洞宗。永享年間（一四二九～一四四〇）弥富村に創建され、弥高山興禅寺と号した。天正一九年（一五九二）、深川（長門市）大寧寺一五代関翁和尚を招き興禅山妙悟寺と改めたが、二代傑叟和尚の時鐘楼のみを残して全焼した。慶長年間（一五九六～一六一四）益田元祥が須佐に移るに及んで須佐の現在地に移建し、現寺号に改めて益田家の位牌所とし、寺領二〇石を賜った。鐘は須佐町の文化財に指定されている。幕吏の実檢〓三家老の首実檢は十一月十六日廣島國泰寺にて尾張総督、稲葉美濃守、永井主水正尚志、戸川絆三郎などによって行われた。

御末家〓益田家の末家（問田益田家）。

邑宰〓国家老。

決言邑政堂ニ出願セリ

殉死願書

私後一昨午以來殊

且那樣御志ヲ奉シテ不及全力周旋仕居處

且那樣御事以度徳山ニ於テ御最期ノ段承之不堪號

哭悲泣之至附テ有私義年未尽力之所詮モ無御座尚

御側役ノ端ニ被召加居候御厚恩奉々奉對於御指前殉

死仕度奉存候間此段被遜御許容可被下々様御教

御取成奉願候以上

十一月十四日

大谷 樸助

邑政堂之ニテ答サテ樸助曰ク公然追腹ヲ辱フ能ハレ別ニ國ル處ア

北ニテ即チ断髪シテ親旋公御揮毫ノ軸ヲ正席ノ床ニ掲ケ朝夕香

決^(衍字)シテ邑政堂ニ出願セリ

殉死願書

私儀一昨年以来殊ニ

旦^(益田親施)那樣ノ御志ヲ奉シ

乍不及尽力周旋仕居候處

旦^(益田親施)那樣御事

此度徳山ニ於テ御最期ノ段承之不堪號

哭悲泣之至

附テ者私義年来尽力ノ所詮モ無御座尚

御側役ノ端へ被召加居候御厚恩

拳々ニ奉對於御棺前

殉

死仕度奉存候間

此段被遂御許容被下候様宜敷

御取成奉願候以上

十一月十四日

大谷 樸助

邑政堂之^こレヲ容^(ゆる)サス 樸助曰ク 公然^{おひばら}迫腹ヲ為ス能ハサレハ別ニ圖^{はか}ル處アルヘシト 則チ断^{だんけい}髻シテ 親旋公御揮毫ノ一軸ヲ正寝ノ床ニ掲^{かか}ケ 朝夕香

拳々〃 つつしむさま つとめるさま ささげもつさま 愛するさま

断髻〃もとどりを切ること。「髻」はもとどり、たぶさ。

正寝ノ床〃「正寝」は表御殿、正殿。ここでは母屋の床の間の意。

元治元年（一八六四）十一月

花_ヲ洪_シ毎日御墳墓ニ參詣_シカハ俗吏等權助、斷髻異樣墓參_ヲ嫉
ミ早素小國融藏、主唱_トリ士民_ヲ鼓舞_シ勵_シ動_モスル邑政堂_ヲ確
執_ル處_ノ恭順主義_ヲ背_ク運動_ヲ序_セル怖_シラ同時_ニ函氏、謹慎_ヲ命_シテ
外出_及他人_ノ面會_ヲ禁_シタリ

權助詩アリ因ニ茲ニ記ス

踏天踏地一周星、駢賊禁門終見血

一片冰身万死身、舊知唯有故山月

朔風吹髮折忠肝、衣上淚痕曾不乾

風向東方拂天闕、陰雲驟雨日光寒

同廿八日御首級_ヲ供奉_シテ歸_ヒシ御墳墓ニ藏_ル奉_ル

萩藤田篤輔_ヲ其_ノ死_ニ小國融藏_ニ書_テ寄_セテ殉死_ノ事_ヲ討_テ融藏

曰_ク時振可待今日事死_シテ冥途_ニ從_ニヨリ生_テ亡_ル君_ノ御遺志_ヲ續_ク勝

元治元年（一八六四）十一月

花ヲ洪^供シ 毎日御墳墓ニ参詣セシカハ 俗吏等樸助ノ断髻^{だんけい}異様ノ墓参ヲ嫉^{にく}
ミ且^{（か）} 平素小國融蔵^{ト正義} ノ主唱トナリ 士民ヲ鼓舞奨勵^{（たう）}シ 動モスレハ邑政堂力確^{（かた）}ク
執^{（と）}ル處ノ恭順主義ニ背ク運動ヲ為セルヲ怖レテ 同時二両^{（小國融蔵、大谷樸助）} 氏ノ謹慎ヲ命シテ
外出及他人ノ面會ヲ禁シタリ

樸助詩アリ 因^{（ちなみに）} 二茲^{（ここに）} 二記ス

跼^{きよくてん}天^{せき}躋^ち地一周星 驅賊禁門終見血 跼天躋地一個の星 賊を驅る禁門終に血を見る
一片氷身万死身 舊知唯有故山月 一片の氷心身は万死 舊知唯有り故山の月
朔風吹髪折忠肝 衣上淚痕曾不乾 朔風吹髪折志の肝 衣上淚の痕曾て乾かず
風向東方拜天闕 陰雲釀雨日光寒 夙に東方に向い天闕を拜す 陰雲雨を醸し日光寒し

同^{（十一月）} 廿八日 御首級ヲ供奉^{ぐぶ}シテ歸邑^{（須佐）}シ 御墳墓ニ蔵メ奉ル
萩^{（その）}藤田篤輔^{（育英館学頭、軍監）}ヨリ 其師小國融蔵^{（小國）}ニ書ヲ寄セテ殉死ノ事ヲ計ル 融蔵^{（小國）}
曰^{いわ}ク 時機^{（まつへし）}可待 今日ノ事死シテ冥途^{めいど}ニ從ハンヨリハ生テ亡君ノ御遺志ヲ續^つクノ勝

ト正義
ノ主唱トナリ「文書館本は「小國融蔵ト正義ノ主唱トナリ」と記している。

樸助詩「 文書館本では『跼天躋地一周星 驅賊禁門終見血 一片氷心万死身 舊知唯有故山月 朔風吹髪折忠肝 衣上淚痕曾不乾 風向東方拜天闕 陰雲釀雨日光寒』 与吉本では『跼天躋地一周星 驅賊禁門終見血 一片氷心万死身 舊知唯有故山月 朔風吹髪折忠肝 衣上淚痕曾不乾 風向東方拜天闕 陰雲釀雨日光寒』 松永本では『跼天躋地一周星 驅賊禁門終見血 一片氷心万死身 舊知唯有故山月 朔風吹髪折忠肝 衣上淚痕曾不乾 風向東方拜天闕 陰雲釀雨日光寒』 松尾本では『跼天躋地一周星 驅賊禁門終見血 一片氷心万死身 舊知唯有故山月 朔風吹髪折忠肝 衣上淚痕曾不乾 風向東方拜天闕 陰雲釀雨日光寒』 温故本では『跼天躋地一周星 驅賊禁門終見血 一片氷心万死身 舊知唯有故山月 朔風吹髪折忠肝 衣上淚痕曾不乾 風向東方拜天闕 陰雲釀雨日光寒』

萩 藤田篤輔「

ヒルヲ以テ喻ミテ之ヲ止ム

如斯テ本藩奸賊要路ニ當リニ先首級ヲ幕吏ノ實檢ニ拱ミ參謀、
完戸佐馬之助中村九郎内正兵衛佐久間佐兵衛等ヲ始シテ正義、
徒ラ斬首シ西境ノ関門ヲ毀ケテ諸隊ハ散ラ命ス氏諸隊ハ之ニ應セサル
ヲ以テ清光寺心集接鉢隊ニ屢々使者ニ迫テ諸隊ヲ追討シ六卿七卿正觀所
嚴シ遠流シ高田君候ヲ連穩セシメ三ノ方ノ封削セテ一ノ石ヲ殘スモ
毛利ノ象名ヲ斬絶セサレハ可ナリト畏縮偷安ノ念ヲ抱キ因循苟且、
倉西置ラ專一トセシ依リ諸隊ハ六卿ヲ保護シテ長府ニ逃ニ六卿ハ筑
後久留米ハ御海ニ諸隊ニ長府清末馬関ヲ固守ス

御沙汰書

敬親

殿様御實名右之通り被復奉事

レルヲ以テ諭シテ之ヲ止ム

(益田右衛門介、福原越後、国司信濃)

如斯テ本藩ハ奸賊要路ニ當リ

三

老ノ首級ヲ幕吏ノ實檢ニ拱シ 参謀ノ

完戸佐馬

之介

中村九郎

竹内正兵衛

佐久間佐兵衛等ヲ始メ正義ノ

徒ヲ斬首シ

四境ノ関門ヲ毀チテ諸隊ノ分散ヲ命スレトモ

諸隊ハ之ニ應セサル

ヲ以テ 清光寺屯集ノ撰鋒隊ハ屢々俗吏ニ迫テ諸隊ヲ追討シ

六卿

ヲ遠流シ 尚両

君候ヲ退隱セシメテ

三十六万

ノ封ハ削ラレテ一万石ヲ残スモ

毛利ノ家名ヲ断絶セサレハ可ナリト

畏縮偷安ノ念ヲ抱キ

因循苟且ノ

所置ヲ專一トセシニ依リ

諸隊ハ六卿ヲ保護シテ長府ニ逃レ

六卿ハ筑

後久留米へ御

海ニテ諸隊ハ長府

清末

馬関ヲ固守ス

御沙汰書

敬親

毛利敬親

殿様御實名右之通り被復候事

ふくせられ

四境の関門＝防長両国と岩見、安藝との国境（小瀬川口、亀尾川口、石州口）と馬関（下関）を云う。この内石州口とは仏坂（北浦街道）、土床（県道14号線）、野坂（国道9号線）の3つの峠を指す。その外に大島郡を加える事がある。益田家は関ヶ原の敗戦により須佐に移住して以来、萩藩の軍備では石州口、就中仏坂の防衛を担当してきた。

清光寺＝P27参照。

六卿＝五卿が正しい。七卿のうち錦小路右馬頭頼徳（病死）、澤主水宣嘉（生野に拳兵）を除く五名。正親町三条実愛は七卿に含まれず。

畏縮偷安＝畏縮 おそれちじまる。大いに恐れること。偷安 一時の安楽をむさばること。一時逃れ。

因循苟旦＝因循 古い習慣により従って改めない事。ぐずぐずしていること 苟旦 且 かりそめ。その場逃れの処置。

元治元年（一八六四） 十一月

廣封

若殿樣同斷

子十月

先般京都變動就_レ追_レ被仰聞矣通被厚對

朝廷公邊御恭順之御誠意致貫徹_ニ樣_ニ夜白被遊

御若慮_ニ處於_ニ予下不心得之者_ニ月之御趣意_ヲ取遠_ニ野_ニ

御恭順御手障_リ相成矣樣_ニ後致出未_ニ矣而_ニ不相濟_ニ事_ニ

寸萬_ニ石樣_ニ族於有之者_ニ連_ニ被_ニ遂_ニ御議_ニ此度可被_ニ及_ニ御沙

汰_ニ矣_ニ段_ニ無_ニ而_ニ內意_ニ被_ニ仰_ニ寸_ニ矣_ニ事_ニ

子十月

益田右衛門介

親類中

所蒙先共

印字
下
右清沙汰
書附云々

元治元年（一八六四）十一月

廣封^(ひろあて)
毛利元徳
若殿様
同断

子十一月

先般京都變動二就テハ追々仰聞候通^{蛤御門の変 おおせきき} 被為對^{たいしなされ}
朝廷公邊 御恭順之御誠意^{あそはされ} 致貫徹候様二ト夜白被遊^{かんてついたし よるひるごくりよ}
御苦慮候處 於于下不心得之者有之^{(しもにおいて) これあり} 御趣意ヲ取違へ^{しゅつたいしたしごころづて} 聊毛^{いささかも}
御恭順ノ御手障リト相成候様ノ儀^{あいなり これありにおいては すみやか} 致出来候而ハ^{しゅつたいしたしごころづて} 不相濟事二^{あいすまぬ}
付 萬一右様ノ族^{やから} 於有之者^{これありにおいては} 速二被遂御詮議^{すみやか ごせんぎとげられ} 屹度可被及御沙^{きつとごさたにおよばる}
汰候^{べく} 此段兼而内意被仰付候事^{かねて おおせつけられ}
子十一月

益田右衛門介^(益田親施)

親類中^(并)
併 家老共

廣^(ひろあて) 封^封 毛利父子は官位を褫奪され松平の称号と將軍の偏諱を停止されたので慶親は敬親、定廣は広封と改名した。
夜白 夜も昼も。日夜。

右女内被成 御意無通嫡子精次郎致補佐用相立安
様申合精々可合心掛付即家未共末々至迄不心得無之
於家々無相違可被之違安様吉川様被仰之頃之様
付合鑑靜安様可申安事

十月至リ遂ニ諸隊追討、令ニ發布ス

元治二年乙丑正月諸隊討代、軍兵出發後、諸隊高松普作、指揮
以テ馬場會議所ヲ襲テ義兵ヲ擧ケ秋田ニ逼リ分テ進撃ス

少度慎靜方為御見届尾張前大納言様ヨリ仁川佐渡守殿
其他被差下矣所御恭順節被成御行届安由ニテ四境ノ諸
家出張、御人數ヲ取ニ相成在付即、尚更以御恭順致
貫徹安様能々可申庸安方一不心得之者御詮義之上重キ
御咎被仰付安事

右 此内被成 御意候通 精次郎致補佐 用二相立候
様申合 精々可令心掛 付而八家来共末々二至迄 不心得無之二
於テ八 家名無相違可被立遣候様 吉川様ヨリ被仰立モ有之候二
付 令鎮静候様可 申 候事

十二月二至リ 遂二諸隊追討ノ令ヲ發布ス

元治二年乙丑正月 諸隊討代ノ軍兵出發ス 諸隊八高杉晋作ノ指揮ヲ
以テ 馬関會議所ヲ襲ヒ 義兵ヲ擧ケ 萩 山口ノ二道二分レテ進撃ス

此度慎静方為御見届 尾張前大納言様ヨリ石川佐渡守殿
其他被差下候所 御恭順筋被成御行届候由ニテ 四境へ諸
家出張ノ御人数モ引取ニ二相成候二付而八 尚更以御恭順 致
貫徹候様 能々可申聞候 万一不心得之者 御詮義之上 重キ
御咎被仰付候事

精次郎「益田親施長男（妾腹）。精祥。文久二年（一八六二）正月九日生であるから、元治元年（一八六四）では未だ満二歳であつた。幼少のため親祥代役 明治六年同人に家を譲り、更に嫡子となる。慶応元年三月一四日家督。同年閏五月九日御神本へ復姓。明治元年十月二日再び益田へ復姓。大正六年八月二五日卒。

「諸隊追討ノ令」は十月二十一日に出された（50頁参照）。ここで云つ「諸隊追討の令」は十二月十六日の諸隊鎮静の為の禁令の事。

「馬関會議所を襲い」「奇兵隊は先ず一六日の午後四時頃、下関にある萩藩の新天地会所を襲い、金と食糧を奪つた。奉行の根来上総は抵抗せず会所を明け渡すと約束した。そこで晋作は一八人を選んで三田尻へ行き藩の軍監三隻を分捕つて下関に帰つた。そして今度は会所を占拠した。分捕つた金と食糧は意外に少なかったので伊藤俊輔が使いに立つて下関の商人入江和作から二千両を調達し軍資金とした。これで萩に向かつて進発する準備が出来たのである。（出典「長州奇兵隊」古川薫著109頁）

「義兵を挙げ」「功山寺拳兵の事である。当時、長府功山寺には七卿のうち五卿がこもっていた。諸隊はこの警備のために長府に集まっていた。晋作は真つ先に奇兵隊の蜂起を呼びかけたが総管の赤根武人や山県小輔が反対した。俗論等を討つとは云え、これを攻めることは藩主に弓を引くことになり、臣下の道が立たないからだ。諸隊の総督も時期尚早で蜂起に反対した。結局、高杉の意見に賛成したのは遊撃隊総督石川小五郎（河瀬真孝）、参謀高橋熊太郎、所部太郎、力士隊総督伊藤俊輔、馬関総奉行補佐を解任されたばかりの佐世八十郎（前原一成）だけだった。十五日朝晋作は遊撃、力士両隊を功山寺に集め三条実美に挨拶した。勝手に兵を挙げては私闘になるから、朝廷につながる五卿を擁立する形を取つたのである。そして下関会所を襲つたのである。（出典「長州奇兵隊」古川薫著108頁）

松永本は「義兵ヲ挙げ 馬関會議所ヲ襲ヒ」と日付の順に記述している

元治元年（一八六四） 十二月

丑正月

同月六日ヨリ七日ニ至リ美祢郡繪堂ニ於テ激戦追討賊兵敗走ス

諸隊共乱暴之次第片時モ難時差置付御本家様方御門先
中ノ面々者諸所出張被

仰下悉

殿様御名代トシテ

若殿様急速

御巡見被

遊疾就而者諸士中妻女不及申御國トシテ御時ヲ以テ御奉公
御手傳可仕段勿論之事付諸隊ハ内通致疾者惣テ不
腐侍者見當リ次第召捕糾上斬捨被仰付疾尤甚而其
趣支配々々ト届出左様被仰付疾受

右之通り組支配守ヘテ可被相觸疾事

丑ノ正月

同十日大田川登大木津等諸所ニ轉戦十四日ニ至リ諸隊ニ長登屯營

元治二年（一八六五）一月

丑正月

元治二年一月

同月六日ヨリ七日ニ至リ

美祢郡繪堂ニ於テ激戦

（藩政府軍ニ撰鋒隊）
追討ノ賊兵敗走ス

御沙汰書（松永本）

諸隊ノ者共乱暴之次第 片時モ難差置ニ付 御末家様方御一門老

中ノ面々者 諸所出張被

仰付脱おそれながら乍恐 殿様御名代トシテ 若殿様急速御巡見被

遊候 就而者諸士中ノ妻女ハ不及申 御國トシテハ御時ヲ以テ御奉公

御手傳可 仕段勿論之事ニ付 諸隊ヘ内通致候者 惣テ不

審体ノ者ハ 見当リ次第召捕糾明ノ上 斬捨被仰付候 左候而其

趣 支配々々へ届出候様被仰付候吏

右之通り組支配中ヘモ可被相觸候事

丑ノ正月

（一月）
同十日

大田 川登

大木津等諸所ニ轉戦シ

（一月）
十四日ニ至リ諸隊ハ長登屯営ノ

美祢郡繪堂ニ国道四九〇号線と二八号線が交わる地点。美東町繪堂。萩から南下してきた北軍の先鋒隊と伊佐方面から中道筋を北上し大田の光明寺を本営とした（後、大田天神社に移る）南軍の奇兵隊、南園隊、鷹懲隊がここで激突した。（「防長回天史」第五編上七 31頁地図参照）

御末家様方御一門老中之面々者 諸所出張被仰ニ北軍は諸隊鎮静のため、（繪堂）栗屋帯刀、（明木）毛利宣次郎、親民、厚狭毛利、諸隊鎮静總奉行、（三隅）児玉若狭、（玉江口）穴戸備前（大谷口）毛利将監、親詮、大野毛利（山口）浦滋之助ノ益田孫槌ノ毛利筑前元統、右田毛利、加判役（松本口）福原相模（大津）梶杜駿河（湯本）児玉若狭などに布陣した。

若殿様急速御巡見ニ世子は毛利伊勢を伴い、一月一三日まず明木に出張した。そして井原主計に命じて繪堂、奥阿武郡を巡行した。

大田ニ国道四九〇号線、美祢町大田交差点付近。奇兵、南園、鷹懲、八幡、御楯の諸隊が一四日大田の呑水峠で先鋒隊と激突した。これに遊撃隊が加わり互角の戦闘となつたが一六日夜、高杉晋作は奇兵、御楯を夫々左右の道に分けて進ませ赤村に居た先鋒隊を挟撃して敗走させた。

川登ニ川上（河上）の誤り。

大木津ニ繪堂の南西ニ。

長登ニ繪堂南西ニ。シダレザクラが有名。

賊ヲ襲撃ス賊大狼狽兵敗走ハ少報分ニ撲助等ノ身ヲ亦ミ

觸ルヤ慷慨悲憤已マスト雖モ如何セシ俗吏常ニ其舉動ヲ傾ミ

非常準備至リテ可ケル一身ノ自由ナラフ以テ高モ運動ヲ試ム由

ナレ津田公輔曾テ撲助ノ節義ニ感シ共ニ盟フ所アルヲ以テ百方策

ヲ畫シテ小國融藏ト陰ニ氣脈ヲ通セシム

周防ノ名士大樂源太郎曾テ撲助ヲ友ニ善シ故ニ親旋公ノ逝去依

リ撲助ヲ弔シ且ツ邑中近況ヲ詳ニセント欲シテ来須ヤリ然ルニ先モ撲

助ノ謹愼中ナレハ大ニ落膽セシト虽モ空ク歸ルニ思ヒス辛クシテ密切ニ面接

シテ其鬱陶ヲ慰シ互ニ将来ノ方針ヲ約シテ了リテ別ラ告ケ

須佐通中作

西山大樂源太郎

國歩艱難歳又終

男兒豈敢哭途窮

古人家在萬山北

三日独行風雪中

賊ヲ襲撃ス 賊大ニ狼狽 兵ヲ曳テ走ル 此報ノ 夙 二樸助等ノ耳朶ニ
触ル、ヤ 慷慨悲憤已マスト雖トモ如何セン 俗吏八常ニ其舉動ヲ偵ハシメ
非常ノ準備至ラサル所ナケレハ 一身ノ自由ナラサルヲ以テ毫モ運動ヲ試ムルニ由
ナシ 津田公輔 曾テ樸助ノ節義ニ感シ 共ニ盟ウ所アルヲ以テ 百方策
ヲ畫シテ小國融藏ト陰ニ氣脈ヲ通セシム
周防ノ名士 大樂源太郎 曾テ樸助ト友トシテ善シ 故ニ親旋公ノ逝去ニ依
リ樸助ヲ吊シ 且ツ 邑中ノ近状ヲ 詳ニセント欲シテ来須セリ 然ルニ 宛モ樸
助ノ謹慎中ナレハ 大ニ落膽セシト雖トモ 空ク歸ルニ忍ヒス 辛フシテ 窃ニ面接
シテ 其ノ鬱陶ヲ慰シ 互ニ将来ノ方針ヲ約シ了リテ 別ヲ告ク

須佐道中作 西山 大樂源太郎

國歩艱難歳又終 男兒豈敢哭途窮
古人家在萬山北 三日独行風雪中

國歩艱難、歳又終る 男兒豈敢て途窮るを哭せん
古人の家萬山の北に在り 三日独り行く風雪中

耳朶＝耳たぶ

大樂源太郎＝名は與、年字は弘毅。号西山。寄組兒玉若狭家中。本生山県。主命により大樂氏を冒す。頼三樹三郎に学ぶ。蛤御門の変では山崎陣営に在り、淀藩との交渉に当たる。その後退いて周防大道村に西山塾を開き子弟を教育。山口脱隊の変の主導者となり九州に逃れたが、明治四年筑後河畔にて暗殺さる。

鬱(うつとつ) 陶＝心がむすばれふさぐさま。
應(えん) 應す＝許す。心に可とする。

大樂源太郎の漢詩『大谷家所蔵古文書読解』に収められている大樂の詩は左の通り

『國歩艱難歳又終 男兒豈敢哭途窮 故人家在萬山北 連日独行風雪中』

元治二年（一八六五）一月

本藩諸隊追討出共令アリ

御沙汰書

益田右衛門介

跡

右家名之遺在段先達而申聞置安處鎮靜方行届
疾可先知之義我子孫以テ無相違可立遣在余具旨
能々相心得暴動為追討早々人数可差出矣事

益田右衛門介

跡

家来中

右賊徒討伐被仰付疾付益田右見差國ラ請安様
被仰付安夏

元治二年（一八六五）一月

本藩ヨリ諸隊追討出兵ノ令アリ

御沙汰書

益田（益田親施）右衛門介

跡

右家名立遣候段

先達（せんだ）而申聞置候處

鎮静方行届（ゆきとき）

候二付

先知之義毛彌（いよいよ）

以テ無相違可立遣候条

其旨（その）

能々相心得

暴動為追討

早々人数可差出候事

益田（益田親施）右衛門介

跡

家来中

右賊徒討伐被仰付候二付

益田石見差圖ヲ請候様（うけ）

被仰付候事

諸隊追討の令は萩藩俗論派棕梨政權は十月二十一日諸隊に解散令を出した。しかしその後三家老切腹、参謀四名の処刑が行われ、肅正は家老清水清太郎の切腹、野山獄にいた正義派の武士七人を斬り、其他の主要人物を次々に追放するに及び、諸隊は益々沸騰した。武器弾薬を抱え、反体制集団と化した諸隊は民衆の支持の中で蜂起の機会を伺っていた。十二月十五日高杉が功山寺に兵を挙げたとの報に接し、且つ、長府在陣諸隊が伊佐方面へ移動するのを見た萩政府は諸隊鎮静の為追討の兵を発し、十二月二十八日前軍として栗屋帯刀の軍を繪堂に、毛（親民、厚狭毛利、諸隊鎮静總奉行）利宣次郎の軍を明木（あきらぎ）に、後軍として児玉若狭の軍を三隅に向かわせた。（「防長回天史」第五編上七 19頁）

益田石見差圖を請候様は繪堂で内訌戦の最も激しい戦闘が行われた時、萩藩俗論派政府は「甘言を益田、福原、国司三大夫の家に下して南軍追討の兵を出さしめ」た。（「防長回天史」第五編上七 38頁）益田家は篠目口（しのめ）から山口に向かうように指示された。

益田石見

石益田石見衛門付家来令引辭條目通り石へ打入毛利
筑前探し合財可令討代其他鹽採取仍有安否

石發今後本藩ヨリ是政府ニ向テ速ニ其命ニ應スヘシト督責厳ナリト
益田邑政府士卒大半是モ之ニ応スル勢無之ニナラス却テ激勵ノ媒ナラ
ンヲ恐テ天王山敗軍陰古今所藏兵器モ悉皆散乱遺失シテ
俄ニ出兵ヲ為スヘカラスト答テ茲ヨリ日月ヲ經過セリ此時諸隊ヨリモ三國
老ノ冤罪ヲ雪ムル義舉ニ勢援セリテ請ヒタリ其書福宗家ヨリ轉致
セシカ石見邑中正義派ノ師勝ヲ得リテ之ヲ邑政堂迄ニ藏匿シテ奈
表ス大石様助河上範三津田公輔等ト共ニ石見邑吏魁首某ヲ斬死シテ
石見脱走シ諸隊ニ加盟スル策ヲ決シ九名同志ヲ集令セリ

元治二年乙丑正月四日夜九名同志大石様助宛相会セラルニ三ノ

益田石見

右益田右見衛門介家来令引卒（いんそつせしめ）
加判役しめしあい
筑前探シ合（たけちのたんさしあひ） 賊可令討代（とらばつせしめるべく）

篠目通り山口へ打入り（しのめ）
元統、右田毛利、
毛利
其他臨機ノ取扱可有候吏（ほかのりんぎのとりあつかひあるべく）

右發令後 本藩ヨリ邑政府ニ向テ速ニ其命ニ應スヘシト督責嚴ナリト（すみやか）（その）

雖トモ 邑政府ハ士卒大半豪モ之ニ応スルノ勢無之ノミナラス（これなき） 却テ激動ノ媒タラ

ンコトヲ恐レテ 天王山敗軍ノ際 古今所蔵ノ兵器モ悉皆散乱遺失シテ（にわか）

俄ニ出兵ヲ為スヘカラスト答エテ 荏苒日月ヲ經過セリ 此時諸隊ヨリモ三（えんざい）（きよ）
老ノ冤罪ヲ雪ムルノ義舉ニ勢援センコトヲ請ヒタリ 其書ハ福原家ヨリ轉致（きよ）（きよ）

セシカ 俗吏八邑中正義派ノ沸騰ヲ憚リテ 之ヲ邑政堂ノ筐底ニ蔵（はばか） 慝シテ発（きよ）（きよ）

表セス 大谷撲助ハ河上範三 津田公輔等ト共ニ俗吏ノ魁首某ヲ斬奸シテ（そとく）

山口ニ脱走シ諸隊ニ加盟スルノ策ヲ決シ 九名ノ同志ヲ鳩合セリ（きよ）（きよ）

元治二年乙丑正月四日夜 九名ノ同志八大谷撲助宅ニ相会セルニ二三ノ（一八六五）（廿脱）

篠目＝山口から国道九号線で益田方面に向かう時、道は木戸山トンネルの手前で萩に向かう二六二号線と津和野、益田方面に向かう九号線に分かれる。

この木戸山トンネルを出て約四キロ津和野寄りの地点が篠目。須佐からは国道三一五線で徳佐二出て、九号線で山口に向かうルートのこと。

毛利筑前＝右田毛利家毛利元統。文政元年四月廿六日生、明治廿年三月卒（七十歳）

督責＝うながし責める事。ただし責める事。

悉皆＝みな。残らず。

荏苒＝（じんぜん） 歳月が長引くこと。 物事が早く進まない。

転致＝転送する。「致」は送る。とどける。

筐底＝箱の底

俗吏ノ魁首＝益田三郎左衛門（職役）、栗山翁輔（忠聡）（当役）多根順左衛門（御用人）、波田与一（御用人）等を指す。就中、三郎左衛門か。

鳩合＝集め合わせる事。集まり合う事。

「正月四日夜」＝次の届け書の日付から「正月廿四日」が正しい。（文書館本、松永本は何れも「廿四日」と記す）

元治二年（一八六五） 一月

異議者アリテ斬行事ヲ果ス能ハス鶏鳴装ヲ整ヘテ出奔ス

届書 笠松印門
ニ貼有ス

御届申上置矣

臣等 伏度脱走仕在哉

幼君^ハ對^シ矣而者其罪ノ輕重^ハ申迫モ無御座矣然^レ處

亡^ニ御劇復之義^ハ付而^ハ其已^ハ前^ニ臣等 死^ラ尽^シテ御保護申

上度種々献言仕矣得共專^ラ遮^之終^ニ御無念^ノ御最期^ニ

被^レ至^ニ矣陵^ノ不堪^ニ號^ス哭^ニ悲^シ泣^ス之^ニ至^ニ矣就^テ而^テ者速^ニ御劇腹^ニ御

罪明白^ニ相^シ實^ニ御書置^テ御趣意^ヲ身^ニ

幼君^ヲ奉^シ御主意^ヲ晉^キ

亡^ニ君^ノ之^ニ御遺恨^ハ霽^シ益田家之威德^ハ萬古^ニ相^シ輝^キ矣様有^ニ之

度^ニ日夜^ニ苦^シ慮^ス仕^テ得^テ共^ニ菅^ノ御鎮靜^ノ之^ニ折^テ柄^ノ時^ノ節^ヲ相^シ待^テ

元治二年（一八六五）一月

異議者アリテ斬奸ノ事ヲ果ス能ハス 鶏鳴 装ヲ整ヘテ出発ス

届書 笠松邸門
二貼府ス

御届申上置候事

臣等此度脱走仕候儀

益田精次郎 幼君ヘ對シ候而者 其罪ノ輕重ハ申迄モ無御座候 然ル處

益田親施 亡君御割復之義ニ付而ハ其已前臣等死ヲ尽シテ御保護申

上度 種々献言仕候得共 專ラ遮之 終ニ御無念ノ御最期ニ

被為至候段 不堪號哭悲泣之至候 就而者速ニ御割腹ノ御

罪 明白ニ相質シ 御書置ノ御趣意ヲ守リ

幼君ヲ奉シ御主意ヲ貫キ

亡君之御遺恨霽シ 益田家之威徳 萬古ニ相輝候様有之

度 日夜苦慮仕候得共 只管御鎮静之折柄 時節ヲ相待

鶏鳴 夜明け。

笠松邸 現、益田館。町指定文化財。慶長七年（一六〇二）地頭御檢地帳によると、益田元祥の御土居（屋敷）は間口八〇間（一四五坪）、反別七〇六畝歩。慶長八年益田市三宅の御土居にあつた別館を解体して中島港から船で笠松山下の現益田邸に移したが、現在の館は明治七年（一八七四）に改築したもので、その時お船倉など数多くの土蔵も解体され、更に大正七年の水害により本門も解体のやむなきに至つた。現館は昭和五年六月七日、三六代益田兼旋死去、遺言によつて益田館及び屋敷とその一帯の土地を須佐町に寄付された。現在の屋敷は藩政期の半分ほどに縮小され、従つて建物も当時存在したと伝えられる表門やその附属屋は失われているが、中門とその西方に山を背にした主屋が残っている。（「須佐町史」668頁以下）

居憂處神月加護之月之孫武忍諸隊義兵之與之疾付
臣等幸_ニ平常之存念相果_シ變疾而已_ニ而脫走仕疾
間何卒暫時御暇賜_リ慶伏_テ奉願_ス疾安段御届甲上疾
誠恐頓首

正月廿五日

梅津熊之進
河上_ノ範三
原_ノ直助
山下_ノ範三郎
安園_ノ五郎
黑岩_ノ豫四郎
津田_ノ公輔

居候處 神明ノ加護王有之候哉 これありや
臣等 幸ニ平生之存念相果シ度候而 へいぜいの あいはた
間 何卒暫時ノ御暇賜り度 伏テ奉 なにとぞ おいとま
誠恐頓首 元治二年（慶応元年）
正月廿四日

梅津 熊之進
河上 範三
原井 直助
山下 範三郎
安岡 五郎 中土、御手廻組
黒谷 豫四郎 中土、御手廻組
津田 公輔 中土、御手廻組

「存念相果シ度候而 已ニ而脱走仕候」の部分は左の二通りの解釈あり
存念相果シ度候而已（のみ）ニ而（にて） 脱走仕候
存念相果シ度候而（そつろつて） 已ニシ而（すでにして） 脱走仕候

元治二年（一八六五） 一月

大橋三樹三
大谷樸助

親旋公御境墓前上書

臣等今照這奸吏之暴威ヲ憚リ因循ニ打過矣段留員
御靈前、罷出候モ怨多奉存矣然ニ處此度諸隊義
兵ヲ擧候付臣等幸ニ隊中ハ一人身命之有ニ限リ年
未之御趣意晉徹致々様誓言尽力可仕矣段御前
届可被下矣様奉願上矣泣血再拜

元治三丑正月

河上範三御墓前室ヤシ和歌アリ

うつも水走君カ真心ひきなけり
雲井リ長く仰きやうつらむ俊慎

元治二年（一八六五）一月

大橋 三樹三

大谷 樸助

親旋公御墳墓前上書^(施)

臣等 今日ニ至ル迄 奸吏之暴威ヲ憚リ 因循ニ打過候段 實ニ
御靈前へ罷出候モ恐ヲ奉 存候 然ル處此度諸隊義
兵ヲ擧候ニ付 臣等 幸ニ隊中へ入り 身命之有ン限リ八年
来之御趣意貫徹致候様 誓而尽力可仕候 此段御聞
届可被下候様奉願 上候 泣血再拜
元治二丑正月

河上範三 御墓前ニ呈セシ和歌アリ

うつもれし君か直心^{眞力愿力}ひきあけて
雲井に長く仰きまつらむ 俊慎

和歌の中の「直心」は「真心」の誤りであろう（松永本）。或いは「恵」（とく、異体字は徳）か。
雲井＝雲のあるところ。空。宮中。雲の上。

各組士族遺書

私共義別紙之趣付而國之大禁ヲ犯疾事素ヨリ
欲ス^ル轉^ニテ有無御座矣得共御家浮沈之境ニ至リ
御鎮靜而己^ノ守疾而有忠節^モ下仕心疾故無餘儀脫
走仕^トヨリ尽力可仕疾間於御内輪一入御尽力之程奉
冀疾^{以上}

正月廿四日

連名

大組

御手廻

四組

各中様

届書等相添

各組士族へ遺書

私共義別紙之趣の二付ついで而八國之大禁藩ヲ犯候事おかし 素ヨリもと

欲スル所ニテ者無御座候得共益田家 御家浮沈之境ニ立至リの

御鎮静而巳のヲ守候而者まもりそつるうては 忠節モ不任心候故こころにまかせず 無餘儀脱よぎなく

走仕つかまつり 外ヨリ尽力可 仕候間 於御内輪一入御尽力之程 奉

冀候こいねがい

以上

元治二年（慶応元年）
正月廿四日

九名脱

連名

大組

御手廻

四組

各中様

右之通脱

届書寫相添あいそえ

『御家浮沈之境ニ立至リ 御鎮静而巳ヲ守候而者 忠節モ不任心候故』とは俗論党主導の本藩政府が所領が一萬石に削られても毛利家の家名存続のためには致し方なしと云うような考え方であるならば、「御鎮静」とか「恭順」を守っていても益田家の将来は無いではないか。それでは主君へ忠節を尽す事はできないと云う意味。（50頁参照）

元治二年（一八六五） 一月

小國翁ノ遺書

門扇ニ
貼付ス

松共寸忠、度付脱走仕矣前以先生、御咄不申
段御遺憾可有之族狀上、御内輪ニ、御所置真
御願仕矣以上

正月廿四日

大谷 樸助

大橋 三樹三

黒谷 豫四郎

安園 五郎

津田 公輔

山下 乾三郎

原 升直助

河上 範三

元治二年（一八六五）一月

小國翁へ遺書

門扉二貼付ス

私（私）共

寸忠ヲ尽度ニ付脱走仕

候

前以

先生へ御咄不申

はなしもうさず

段

御遺憾可有之候

此上

八御内輪ニテノ御所置宜

よろしく

御願仕

候以上

正月廿四日

元治二年（慶応元年）

大谷

樸助

大橋

三樹三

黒谷

豫四郎

安岡

五郎

津田

公輔

山下

範三郎

原井

直助

河上

範三

「門扉二貼付ス」〓小国先生は我々の脱走には拘わっていないという事を世間に示す目的で貼付したものと考えられる。

梅津熊之進

小國融藏當時謹慎中ニ付直ニ金子新藏ヲ以テ前頭ニ邑政ニ肩
ヲリ融藏素ヨリ模助等ト陰ニ氣脈ヲ通セシ故脱走ノ舉キヲ預言盡セシ
ト雖九名ノ志士途中ニ於テ縛セラレ宿望ヲ達ス能ハス難計ヲ以テ萬
一失敗セハ善後ノ策ヲ盡スベキノ約シテ留マリタリ然ニ正義派ノ脱走ニ依
リ自然嫌疑ヲ受ケ層層待セラレニ至ラハ丹外ノ不幸焉ヨリ見シキ
無シト云フノ議ニ據リテ封ノ書ヲ遺スノ計ヲ決セリ

津田公輔

君々ためりふ思ひたつ旅の歌
そいふはやけき有月

茲ニ脱走志士ノ家族各其帰宅ヲ待テハ鶏鳴猶歸ラサルヲ以テ其
跡踪ヲ尋メルニ前夜大谷模助宅ニ相會シテ脱走ヤル事實實ニ判

梅津 熊之進

小國融藏八當時謹憤中二付キ 直二金子新藏ヲ以テ前頭ヲ邑政^堂 二届ケ
タリ 融藏素ヨリ樸助等ト陰ニ氣脈ヲ通セシ故 脱走ノ舉ヲ賛畫セシ
ト雖トモ九名ノ志士途中ニ於テ縛セラレ 宿望ヲ達スル能ハサルモ難計ヲ以テ 萬
一失敗セハ 善後ノ策ヲ畫スベキノ約シテ留マリタリ 然ルニ正義派ノ脱走ニ依
リ自然嫌疑ヲ受ケ 一層虐待セラル、ニ至ラハ 内外ノ不幸焉^{これ} ヨリ甚シキ
ハ無シト云フノ議ニ據リテ 一封ノ書ヲ遺スノ計ヲ決セリ

津田 公輔

君がためけふ思ひたつ旅ころも
そてにさやけき有明の月

茲二脱走志士ノ家族ハ 各 其帰宅ヲ待テトモ鶏鳴猶歸ラサルヲ以テ其
跡綜ヲ尋タルニ 前夜 大谷樸助宅ニ相會シテ脱走セシ事實ノ判

賛画ニ補佐してはかり定めること。

焉ニ（疑問・反語の助詞）どうして…か。なんぞ。（場所を問う疑問詞）いずくにか。

謹慎中の小国融藏は脱走には拘わっていないことを示すために門扉に一文を残したという意味。

鶏鳴ニ夜明け

跡綜ニ綜（そつせき）跡（足跡）の誤記。

元治二年（一八六五）一月

然タハ各族親ヨリ邑政堂脱走届ヲ出セリ俗吏等曰ク彼等未ク數里
以内ニ潜伏スル事モアシ可成其取在ラ探索ニテ捕ハデト大谷樸助
跡ニ家名斷絶ノ令アリ

脱走ノ九名福田村ニ至ハ東方既ニ白キヲ以テ昼伏夜行ノ策ヲ決シ中
野屋某ヲ頼マントテ應接ノ爲河上範三津田公輔先奔ヤシ積雪
數寸進ヲ失ヒ躊躇時ヲ失セリ其間大谷樸助外ニ名ハ既ニ中野屋ニ
至リテ潜伏ス範三公輔等終ニ中野屋ニ達ス能ハサルヲ以テ樸助等
ニ報シテ更ニ國所アラストシテ返ハク樸助等已ニ去リ仍テ直ニ片俣村
至リ人跡稀ナル山間ノ農道推路ヲ迂回シテ昼七ツ時御堂原ノ農家
ニ投シ疲勞頗ル甚シキ時賊兵拾糸名銃器ヲ携ヒテ巡回ノ途次範
三公輔等潜伏ヲ偵知シ同家ニ入リニハ危懼ノ事アリヨシセム日朝出
發篠貝村ニ至ハ諸隊先鋒奇兵隊參謀時直八司令官トナリテ

元治二年（一八六五）一月

然タレハ 各親族ヨリ邑政堂ニ脱走届ヲ出セリ 俗吏等曰ク 彼等未タ数里
以内ニ潜伏スル事モア^{ラ脱}ン 可成其所在ヲ探索シテ捕ヘ帰ルベシト 大谷樸助
跡八家名断絶ノ令アリ

脱走^{（P66, 69）}ノ九名 福田村ニ至レハ 東方既ニ白キヲ以テ 昼伏夜行ノ策ヲ決シ 中
野屋某ヲ頼マン^トテ 應接ノ為 河上範三 津田公輔先発セシニ 積雪
数寸 途ヲ失ヒ^{（みち）} 躊躇^{（ためら）}時ヲ失セリ 其間^{（その）} 大谷樸助外六名ハ 既ニ中野屋ニ
至リテ潜伏ス 範三^{（河上）} 公輔^{（津田）} 等終ニ中野屋ニ達スル能ハサルヲ以テ 樸助^{（大谷）}等
ニ報シテ更ニ圖^{（はか）}ル所アラントシテ返レハ 樸助^{（大谷）}等己ニ去レリ 仍テ直二片^{（かたまた）} 俣村ニ
至リ 人跡稀ナル山間ノ農逕^{（のうけいしょうろ）}樵路ヲ迂回^{（まが）}シテ 昼七ツ時^{（午後四時）} 御堂原ノ農家
ニ投^{（な）}ス 疲労頗ル甚シ 于時^{（ときに）}賊兵拾余名^{（しゅうじく）} 銃器ヲ携ヘテ巡回^{（くわんぎ）}ノ途次^{（みちぎわ）} 範^{（河上）}
三^{（津田）} 公輔^{（しのみ）}等ノ潜伏ヲ偵知シ 同家ニ入ル 二^{（河上、津田、二士力）} 氏危険^{（けん）}ノ事アリ 翌^{（あした）}廿六日朝出
發^{（はつ）} 篠目村ニ至レハ 諸隊ノ先鋒奇兵隊參謀 時山直八司令官トナリテ

福田村＝須佐より南方9キロの村。（阿武町福田上・下）

片俣村＝須佐より約15キロ、国道315沿いの村。

農逕樵路＝農夫やきこりが通う小道。

御堂原＝JR山口線長門峡駅付近。

篠目村＝63頁参照。

時山直八＝名は養直。白水山人、海月坊、梅南等の号あり。萩城外山田の人。松下村塾に学び松蔭の教授を受く。後江戸
に出で、藤森弘庵安井息軒に師事す。その後久坂玄瑞と国事に奔走、文久二年諸藩応接掛となる。元治元年奇兵隊の参謀
となり馬関攘夷戦に加わる。明治元年隊兵を率いて北越に出征し、五月十一日越後朝日山の戦に死す。年三十一。明治二
年合祀。同三十一年七月贈正四位。（「近世防長人名辞典」より）

出張砲台ヲ建築シテ警戒最嚴ニテ應接事異リテ大峠ヲ越エ
山口望小路并関屋ニ着スル大谷樸助等已ニ投宿セリ樸助外ニ名
廿五日在福田村分程生野村通リ篠目村至リ路ヲ仁保市ニ狂ケテ
舊徳代總監赤川教三兵ヲ率ヒ滯陣セルニ遇ヒ應接敷刻ニシテ台
至ルナリ如斯テ山口本營ニ駐在ス諸隊長官概子大谷樸助等ノ同
盟知友ナレハ屢謀議シテ大ニ賛助ヲ得タリ是ヨリ先賢藏寺ニ屯シテ
諸隊ト援鋒隊ト調和ヲ圖リ止戦ノ策ヲ講スル一團體アリ遂日其人
員ヲ増加スルニ依リ東光寺ニ轉シテ千城隊ト稱ス同隊ヨリ存リニ止戦
ノ事ヲ建議加之御末藩清水公周旋アリテ正月廿九日遂ニ止戦ノ
發令アリ

二月朔日子城隊福原龜太郎佐藤孫右衛門両名来須同隊ノ歎願
書係ニ援鋒隊同隊調和ノ策ニ應セサルヨリ大衝突ヲ起シテ生野云

出張 砲台ヲ**建築**シテ警戒**最**厳ナリ 應接事**異**リテ大峠ヲ越工

山口(たてこし)豎小路井関屋二着スレハ 大谷樸助等已ニ投宿セリ 樸助外六名

八廿五日(一月)夜 福田村発程 生雲村現阿東町通り篠目村二至リ 路ヲ仁保市二狂ケテ

鷹懲隊總監 赤川敬三 兵ヲ率ヒテ滞陣セル二遇ヒ 應接数刻ニシテ山口

二至ルナリ 如斯かくテ山口本営二駐在セル諸隊ノ長官ハ 概おおむね子大谷樸助等ノ同

盟知友ナレハ 屢しばしば謀議シテ大ニ賛助ヲ得タリ 是ヨリ先 寶藏寺二屯シテ

諸隊ト撰鋒隊ト調和ヲ圖リ 止戦ノ策ヲ講スル一團體アリ 遂日其人

員ヲ増加スルニ依リ 東光寺二轉シテ干城隊ト称ス 同隊ヨリ荐しきリ二止戦

ノ事ヲ建議シ 加しかのみならず之御末藩清水公ノ周旋アリテ正月廿九日遂ニ止戦ノ

發令アリ

二月朔日 干城隊 福原龜太郎 佐藤弥右衛門 両名来須 同隊ノ歎願

書併ニ撰鋒隊ノ同隊調和ノ策ニ應セサルヨリ 大衝突ヲ起シテ生雲

大峠（おおだお）＝国道9号線木戸山トンネルの山口側にある宮野大峠のこと。国道262号線はここで9号線から分岐して萩に向かう。

井関屋＝六兵衛。両替商。

山口豎小路＝県道204号線と同62号線が交差する付近。山口市の中心部。

生雲村＝阿東町生雲。

仁保市＝JR山口線仁保駅付近。国道9号線仁保入口交差点から国道376号線を経て約3km東方、徳地寄りの地点。

鷹懲隊＝文久三年七月赤川敬三等により創立。一旦解散するが来島又兵衛が同志を募る際、旧隊士を集め第一奇兵隊と称し、更に鷹懲隊と改める。後遊撃軍から独立する（「長州諸隊

一覽」山口県史資料編幕末維新6 別冊より）

赤川敬三＝名は忠郷。藩医赤川玄悦の子で医籍を脱し平士となる。文久三年五月攘夷の拳に高杉晋作の有志組に入り、次いで一隊を作り浜崎万福寺に屯す。一時解隊の後此の年秋また旧隊士を集めて第二奇兵隊と称し、更に鷹懲隊と改名して遊撃隊に属す。元治元年その司令に任ず。のちまた遊撃隊より独立してその総督となり爾後各地に出戦して功あり。明治元年十二月建武隊成りてその副総督たり。維新の後、秋田、愛媛諸県に出仕し、のち広田神社、長田神社などに奉仕し大正十年一月二十日神戸に没す。年七十九才。

宝蔵寺＝不明。「弘法寺」のことか。（「防長回天史」第五編上七の4頁3行目及び4頁2行目参照）

干城隊＝元治元年二月二十四日福原又市を惣督とする隊を干城隊と称す。慶応元年一月内訌戦の際、諸士有志が集まり、撰鋒隊と諸隊との間にあつて国内鎮静に当たる。鎮静会議員と自称。三月干城隊の名を再興し隊形を編制。

福原龜太郎＝ 佐藤孫右衛門＝

元治二年（一八六五） 一月～二月

村轉營同村於土人領布告諭書寫携帶是政堂
至邑中、有志者入隊セシメニテ促カス

教諭書

此度諸隊追討被仰付處不容易 御國難立至、只今之形

勢、三々討伐不被仰付而者差止難、次第御座其元來

彼等彼等據之御正義、薰陶一途、存誥農町兵、説得、專

人心彼服、疾勢、兵威、以難制却、沸騰甚、敷彼勢、煽

動仕、様相成、疾故公明正大、條理判然、處、以屈服仕、其

外策有之間敷、在畢竟追討、被仰付終、敵手、在追、教、度、

戰爭中、御内人民死亡夥敷、器械彈藥兵糧等、至、追諸費、量

大之儀加之御國民之困苦、戰場高更、兵燹之災害、不堪、シテ

蜂起百姓必然、莫、奉存、自然是等、御政道不被、為、屈、次第

元治二年（一八六五）二月

村二轉營シ 同村二於テ土人二領布シタル告諭書寫ヲ携帯シテ邑政堂二至リ 邑中ノ有志者ヲ入隊セシメンコトヲ促カス

歎願書

此度諸隊追討被仰付候處 不容易 御國難ニ立至リ 只今之形 勢ニテハ 尽ク討伐不被仰付 而者 差止難キ次第ニ御座候共 元來 彼等彼尊攘之御正義ヲ薰陶シ 一途ニ存詰 農町兵ヲ説得シ 專ラ人心彼二服シ候勢ニ付 兵威ヲ以テ難制 却テ沸騰甚敷 彼勢ヲ煽動仕 候様相成候故 公明正大ニ條理判然タル處 ヲ以テ屈服仕ラセ候 外 策有之間敷候 畢竟追討ニ被仰付 終撃尽候迄ニハ数度ノ 戦争中御内 人民死亡夥敷 器械彈藥兵糧等ニ至ル迄 諸費莫大之儀 加之御國民之困苦 戰場尚更兵燹之災害ニ不堪シテ 百姓蜂起必然ノ更ニ奉存候 自然是等八御政道不被為届次第

歎願書「この嘆願書は、『防長回天史』第五編上七の48頁に掲出されているが若干の相違あり。

「防長回天史」第五編七上45頁によれば、絵堂の戦いのあと、『杉梅太郎 笠原半九郎、山県某等直ちに之を大谷口の同志（寺内暢三、檜崎八十槌、河北一山、山県蔵、横山十五郎等）に通じ乃ち共に大谷口総奉行毛利将監の旅館に至り 其説を陳し且諸士を率いて城に上り公に謁せんことを請う。将監之を諾し衆を率いて直ちに発す。凡四十人玉江口松本口等の有志之を聞き途よりして漸く来たり加はる。其城に上る頃約七十餘人杉徳輔亦在り。将監衆と共に公に謁し先ず其旨を述べ、諸士尋て各其志の在る所を陳す。就中、杉徳輔が諸隊を征討し内乱を生ずるときは毛利氏の正義立ち難き所以を論じ杉梅太郎が速に兵を戦むるに非ざれば人民の疲弊国家の衰頹測る可らざる所以を論ぜしが如き頗る君聴を動かしたりと云う）公之を聞き集る者二百余人自ら称して鎮静會議員と謂う。蓋し諸隊と雷同の嫌を避け、故さらに隊名を用ひざるなり。』…『是に於て公急に清未侯及び執政老臣を召し諮問する所あり。侯奮て自ら鎮静の任に当たらんことを請い、翌日萩を発して明木に至る。杉孫七郎等随つ。…』

存詰「思い詰め。

器械「鉄砲のこと。

兵燹「戦乱によって起こる火災。燹は野火。

自然「万が一

印子豐八皮子

御先祖、御寄靈、被爲

對不相濟。於上之御。耻辱。膺_ヲ嚙_下。不投。後_ハ込_ク人民。塗炭_ノ苦_下。

兄弟鬩爭之知_辛作恐不被為堪
御憂慮御事付安段

被遊御點房第一諸有司御點陽正被爲行房二連討代

勢^ラ被^レ爲^リ倉^ニ安堵^ス其業^ニ付^シ人心^一和^ニ之基^ラ待^テ并^ニ被^レ特

隨_テ御國是凜然相_ニ立_ニ可申_ニ矣_一
御英斷待急務

金以私步諸隊ヲ荷擔仕者ニ而有レ臣子之至情不相忍燃胸

焦心耐無所座間下顧恐瞿奉獻言矣
願之斯然被

臣等無任感荷之至
謹書

全
俗
人
チ
ヤ
サ
ヲ
リ
テ
ス
ル
言
ハ
シ
ト

此度進討被仰付在靈元未諸隊者亡命無賴徒有之在

毛相成 萬一此往 このさき
 天幕ヨリ御譴責ヲ被為受候而者 朝廷と幕府
 對 不相濟 あいすまず 此上之御耻辱臍ヲ嚙トモ不及候 おそれながらたえさせられず 近クハ人民塗炭ノ苦ト
 兄弟鬪争之如キハ 乍恐不被為堪 御憂慮御事二付 此段 おそれながらたえさせられず
 被遊御熟考 第一 諸有司御黜陟正敷被為行 第二 速二討代ノ あそばされ
 勢ヲ被為引 蒼生安堵 其業二付シメ 人心一和之基ヲ御開被遊 あそばされ
 候ハ、隨テ御國是凜然相立可申候間 御英断御急務二 したがつ
 奉 存候 全以私共諸隊ヲ荷擔仕者二而者 ぞんじてまつり
 臣子之至情不相忍 燃胸 あいのびず
 焦心所耐無御座候間 不顧恐懼 奉献言候 仰願クハ断然被 あそばされ
 遊 御決心候而 御採用奉懇願候 誠恐誠惶謹言 たえるところござなく

此度追討被仰付候處 こたひ 元來諸隊ノ者八亡命無頼ノ徒モ有之候 おおせつけられ

譴責〓とがめ責めること。

塗炭ノ苦〓泥にまみれ炭火の中で焼かれるような苦しみ。

有司〓つかさびと。役人。

黜陟〓有功者をあげ無功者を退けること。

蒼生〓草木が青々と茂るところ。人民をいう。

凜然〓威厳を備えているさま。心が引き締まるさま。

欠落部分について〓松永本は何を根拠に文章を挿入したのか。松永氏の創作とは考えられず、尊攘堂本、文書館本以外に

第三の底本が存在したのかも知れない。

最後の二行以下次頁の嘆願書は「防長回天史」第五編上七の46、47頁の「上疏文」と酷似している。

元治二年（一八六五）二月

得畢竟正義之所集付兵威ヲ以テ壓安而看却而沸騰甚敷相
相成矣詔御座安故義理ヲ以テ諭ミ矣外手段無之段前段申上矣通
御座安就而看今日廟堂諸役人賢明ヲ有之矣得共久敷御咎被
仰付天下形勢一円不承知之者故諸妄天標度被差返安得ハ
萬事都合宜ト存諾矣ト今日之人民天保護之人民相違矣
莫ミ尺童子モ存安位ニ決シテ人服不仕安不恐 御西殿様多
年之 御誠意天下共ニ所和矣處却而御組累様相成
御正義煙滅御國論變動至申安右ニ付諸隊之有共敷度建
白仕安處 康モ御採用無之而已ナラス 御直書ヲ以テ被仰聞
矣御趣意御實行相違仕安ヨリ御誠説得ト旨モ不奉終夜
暴動及安次第ト存安全追討被仰付安付進退相迫矣ヨリ起
安段ニ而看魚之安而斷然確乎不動御美術ヲ以テ右等役人

元治二年（一八六五）二月

得八 畢竟正義之所集二付 兵威ヲ以テ壓候而者 却而沸騰甚敷
 相成候訳二御座候故 義理ヲ以テ諭シ候外手段無之段八 前段申上候通二
 御座候 就而者今日廟堂ノ諸役人賢明ニテ有之候得共 久敷御咎 被
 仰付 天下ノ形勢一円不承知之者故 諸吏天保度ニ被差返候得八
 萬事都合宜ト存詰候ヘトモ 今日之人民天保度之人民ト相違候
 吏八三尺童子モ存候位ニテ 決シテ人服八不仕候 乍恐 御両殿様多
 年之 御誠意八 天下共ニ所知ニ候處 却而御粗暴ノ様ニ相成
 御正義煙滅 御國論變動ニ至申候 右ニ付諸隊之者共数度建
 白仕候處 一廉モ御採用無之而已ナラス 御直書ヲ以テ被仰聞
 候御趣意 御實行相違仕候ヨリ 御説得ノ旨モ不奉 終ニ及
 暴動ニ候次第ト存候 全追討被仰付候ニ付 進退相迫候ヨリ起
 候段ニ而者無之候間 断然確乎不動ノ御英断ヲ以テ 右等ノ役人

廟堂＝朝廷または政府の意。ここでは本藩政府。

天保度ニ被差返＝萩藩が村田清風を起用して行つたk藩政改革（天保の改革）のこと。財政改革のみならず富国強兵策など改革は藩政全般に及んだ。

しかも中級家臣団に至るまで意見を聞き、破格の人材登用、藩財政の公開などを行つた。しかし、余りにも強引なやり方に藩士や商人の反発を買い失脚した。村田清風失脚後政權を担つた坪井九右衛門は引き締め策を緩和するが忽ち失敗する。その後萩藩では村田の政策を受け継いだ周布政之助（改革派、正義派）と坪井の後継者棕梨藤太（保守派、俗論党）が政争を繰り返すことになる。これが元治元年の内訌事件に尾を引くことになった。

人服＝心服か。

煙滅＝煙のように消え失せること。

御国論變動＝安政五年井伊直弼が大老となり条約問題、將軍継嗣問題などを巡つて政局がクライマックスに達した時、萩藩は通商条約調印の可否をめぐつて態度を迫られた。その時萩藩は「朝廷へは忠節、幕府へは信義、祖先には孝道」の藩是三大綱を打ち出した。井伊が倒れ久世・安藤政權の頃になり公武合体策が登場して萩藩は長井雅楽の航海延暦策を推進した。しかし老中安藤が坂下門の変で襲われると、文久二年七月萩藩の藩論は「破約攘夷」へ一変する。そして、蛤御門の変の後、長州征伐になるや藩内では「謝罪恭順」と「武備恭順」とが対立するが慶応元年二月藩論は「武備恭順」に統一された。

街擴ケ正義ニ日時勢ニ通達人御用被檢テ得テ不動ノ弋シテ
鑑靜仕士民モ安堵可仕テ實御正義ニ滅御國論ニ變動ニ
テ御家為ノ神ノ列古来御國ニ侍ラ損シ疾ニ疾得ハ
何卒御所置之程ニ私共編シ血奉懇願ヲ以上

檄文

先達已未討伐為軍勢ニ數多差向ラ未ク改メ至ラサルニテフ
却而諸隊勢ニ日日盛相成然ニ處戰死牛負打死ノ痛シキハ
申迄モ無シ之農家所家共荷送リ其外夫役多肝要之農作
家作ニ危ニ打槍大概壯年者夫役被遣妻子ニ日々取渡リ中ニモ
老父ニ病者ニ重持不申者ニ雇替致差出テ餘分ノ賃錢ヲ取
テ諸色次第ニ之數金銀融通不致テ得テ家財衣類等モ質
入リ最早饑寒ニ迫リ疾有様見ハ忍ヒテ付其款ヲ細々申

御擯^{しりぞ}ケ 正義ニシテ且^(かつ)時勢ニ通達ノ人 御用被遊候得ハ 不動干戈シテ
鎮静^{つかまつり}仕 士民モ安堵可^{つかまつるべく} 仕候 実ニ御正義湮滅 御國論變動ニ^藩
テハ 御家ノ為ノミナラス 神州古来ノ御國体ヲ損シ候訳ニ候得ハ^{そつらえ}
何卒御所置之程 私共一編泣血奉懇願候 以上

檄文

先達已来討伐ノ為 軍勢数多差向ラレ 未タ攻亡スニ至ラサルノミナラス
却而諸隊ノ勢 日日盛ニ相成 然ル處ニ戦死^土ノ手負打死ノ痛シキハ
申迄モ無之 農家町家共ニ荷送り其外ノ夫役多^{おおく} 肝要之農作
家作モ丸ニ打捨 大概壯年ノ者ハ夫役ニ被遣 妻子ハ日々ノ取渡リニ込^困 中ニモ
老人又ハ病者ニテ重 持不申者ハ 雇替致差出候ヘハ 餘分之賃錢ヲ取
ラレ 諸色ハ次第ニ乏敷 金銀ハ融通不致候得ハ 家財衣類等モ質
入トナシ 最早饑寒ニ迫リ候有様 見ルニ忍ヒス 右ニ付其訳ヲ細々申

御国論變動ニテハ 御家ノ為ノミナラス 神州古来ノ御國体ヲ損シ候訳ニ 俗論派が唱える「謝罪恭順」は毛利家の為にな
らないばかりか、幕府に媚びて朝廷を軽んじることになる…という意味。

私共一編 〓 私共一統の誤りか。

檄文 〓 「防長回天史」第五編上七の65頁の論告文と同じ。誤字等の修正はこの文章を参照した。
先達 〓 先達而。

重 〓 持不申者ハ 〓 重荷得持不申者の誤りか。

諸色 〓 いろいろの物（諸式と同じ）。

饑寒 〓 餓え凍えること（饑凍と同じ）

元治二年（一八六五） 二月

上軍御ヤノナハ様過ハ公日同意面々同

街城ハ羅立

御面殿様ハ街道ニ申上候處無勿辨モ思召ナリ直様御鎮ノ方清
末ハ御仕ヤ相成矣古付歎願筋日モ早ク御運ニ相成矣様一
統誠心ヲ尽シ御先祖様之御灵前ニテ御祈願ヲ籠リ伺卒シテ
御國家安全之基ヲ相建難義救度所存而御所置奉侍在矣
處更ニ御目途無之而已ナラス色々差支ヨリテ歎願ヲ助モ急ニ届不
申由ニ各共之心中ヲ察不申却而何ソモ之企様引更者有之
矣得ニ萬一御取通御手支リ共相成矣候而最初歎願申
上矣趣ニモ有之候詔付カ一 街上御安神ヲ付度積ニテ一先當
地ハ之退キ様次方ニ在右ニ付趣能々令熟考下ニ於テモ共ニ力ヲ合セ御
國難ニ萬一ヲ救奉リ候様矣々有之候得ニ各共當所ハ之退キ様
義格別変ス正候詔ニ而モ無之矣間地下厚安堵前断申聞

元治二年（一八六五）二月

上軍御ヤメナサル様二 過ル十六日同意ノ面々一同二 御城へ罷出
毛利敬親・元徳
 御兩殿様へ御直ニ申上候處 無勿躰モ思召ニ叶ヒ 直様御鎮メ方清
元純
 末へ御任セニ相成候 右ニ付歎願筋一日モ早ク御運ヒ相成候様一
あいなり
 統誠ノ心ヲ尽シ 御先祖様之御霊前ニテ御祈願ヲ籠メ 何卒シテ
長州藩
 御國家安全之基ヲ相建 難義救度所存ニ而 御所置奉待居候
あいたて
 處 更ニ御目途無之而已ナラス 色々ノ差支ヨリシテ歎願筋モ急二届不
これなきのみ
 申由ニテ 各共之心中ヲ察不申 却而何ソ叟ヲ企候様引受者有之
もつゝぬよし
 候得ハ 萬一御政道ノ御手支リ共ニ相成候而ハ 最初歎願申
あいな
 上候趣ニモ有之候訳ニ付 第一御上へ御安神ヲ付度積ニテ 一先當
これあり
 地へ立退キ候次第二候 右ニ付趣能々令熟考 下ニ於テモ共ニ力ヲ合セ御
よくよくじゅうこうせしめ
 國難ノ萬一ヲモ救ヒ奉リ候様 呉々モ有之候得ハ 各共當所へ立退キ候
これあり
 義 格別叟ヲ企候訳ニ而モ無之候間 地下 為安堵前断申聞
くわだて
 地下 為安堵前断申聞
じげ 中脱さんどさせ

上候趣ニモ有之候訳ニ付 第一御上へ御安神ヲ付度積ニテ 一先當
これあり
 地へ立退キ候次第二候 右ニ付趣能々令熟考 下ニ於テモ共ニ力ヲ合セ 御
よくよくじゅうこうせしめ
 國難ノ萬一ヲモ救ヒ奉リ候様 呉々モ有之候得ハ 各共當所へ立退キ候
これあり
 義 格別叟ヲ企候訳ニ而モ無之候間 地下 為安堵前断申聞
くわだて
 地下 為安堵前断申聞
じげ 中あんどさせ

ひとまず
 一 先當地へ立退キ候次第二候 生雲へ兵を引き揚げた事を云う。「防長回天史」第五編上七の63頁によれば「此夜鎮静會議員は東光寺を去りて阿武郡吉部（きべ）村に移る」とあり、この檄文は移転に当り村民に発した諭告文であることが述べられている。所が「忠正公勤王事績」506〜7頁では「鎮静會議員の方では、此の際城下に居ては、殿様御父子に対抗する形になるから、謹慎の態度を執つて、君命を待つが宜いと云うので、吉部と云う所に転じました。吉部という所は私は能く存じませぬが、生雲の近所である相です。先達て杉子爵に聞きますと、吉部ではない、生雲へ行つたのであると云われましたが、書類には吉部と書いてあります」と述べられている。

地下 平民。身分の低い人。地下人。朝廷に仕える人がそれ以外の人を指して云つた称。昇殿を許されない五位以下の官人。「防長回天史」第五編上七の66頁では「地下中」と書かれている。

置族モノナリ

干城隊

邑政堂各級士族要見ヲト問セシ大谷樸助等九名脱走後正義派ノ
勢力稍張ラントス時様之際シタル以テ各級其子城隊旨趣ヲ智員同スル
由テ面陳セシカバ俗吏モ福原等カ入隊請求ヲ拒ミト雖モ僅々金子新藏
ヲ根重一松原仁藏秋山春三四名入隊ヲ命スル雖モ終ニ果リス
同月四日干城隊靜間彦太郎邑中ノ實況ヲ視察シ大谷樸助等カ
歸邑運動計畫ヲ成サシメントシテ赤須セリ先邑政堂ニ就テ談判ヲ開キ
シ俗吏等因循姑息俱ニ議ハニ是ヲサハラ憤リニ歸營ス

大谷樸助外八名脱走者誘導ヲ須佐邑ニ歸リテ邑中ノ正義ヲ回復シ飽迄七
君ノ御遺志ヲ継グキノ力針既ニ定ムラシテ南御領大通切畑迄貫野ノ有志
者誘導ノ爲メ河上三郎三原丹直助兩名ヲ派出セリ其資力ニ應スルモノ三好

置候モノナリ

干城隊

邑政堂八各級士族二異見ヲ下問セシニ 大谷樸助等九名ノ脱走後 正義派ノ
勢力稍張ラントスル時機ニ際シタルヲ以テ 各級共干城隊 旨趣ヲ賛同スル
由ヲ囿陳セシカハ 俗吏モ福原等力入隊ノ請求ヲ拒ムコト能ワス 僅二金子新蔵
益田家臣、上士、大組、劍豪 (龜太郎79頁)
多根卯一 松原仁蔵 秋山春三ノ四名ニ入隊ヲ命スルト雖トモ終ニ果サス (益田家臣、上士、大組)

(二月)
同月四日 干城隊静間彦太郎 邑中ノ實況を視察シ大谷樸助等力
(須佐) 帰邑運動ノ計畫ヲ成サシメントシテ来須セリ 先邑政堂ニ就テ談判ヲ開キ
シニ 俗吏等因循姑息俱ニ議ルニ足ラサルヲ憤リテ帰營ス (とも)

大谷樸助外八名ノ脱走者誘導ノ 須佐邑ニ歸リテ 邑中ノ正義ヲ回復シ 飽迄亡
(親施) 君ノ御遺志ヲ継クヘキノ方針既ニ定マルヲ以テ 南御領 大道 切畑 壹貫野ヘ有志
者誘導ノ為メ 河上範三 原井直助両名ヲ派出セリ 其募ニ應スルモノ三好
(その) (大道村切畑)

静間彦太郎

「脱走者誘導ノ 須佐邑ニ歸リテ」 文書館本では「脱走者八須佐ニ歸リテ」となっている。

南御領 益田領の飛び地。大道、切畑は現防府市大道、切畑。国道2号線と県道21号線の交差点が大道、切畑はその北方。一貫野は現山口市の県道197号沿いにある。

元治二年（一八六五）二月

久平外士農公拾之石ナリ率テ山口歸

同日晚走志起九名及三好久平等式拾七名總員三拾六名大谷權助ヲ推テ總督トナシ田公輔大橋三樹三介候ニテ田天ノ大宇ヲ書シタル旗ヲ翻シ千城隊猶崎ノ下越笠原幸九郎等五名公命據リ之ヲ保護シテ歸邑直ニ心光寺ニ凡シ田天軍ヲ設立セリ

田天軍趣意書

田天軍凡集義者第一為 七君為御國家奉正義田復之實行相舉、矣、操有之度、日夜苦心、矣、處今日ニ至リ、疾而者邑中之人心一旦興起、疾ト雖、是通、階級依リ、御軍勢之御定相成、疾而有水藩援鋒隊、如、般、並不遠決、シテ、實地之戰、無、觀、覺、必、後、外、房、勿、論、四、境、憂、必、然、之、義、三、村、石、洲、境、之、義、素、ヨリ、益、田、家、之、任、可、預、之、疾、得、者、若、又、天、王、ノ、覆、瀝、ヲ、踏、疾、而、者、御、家、之、義、不、及、申、

元治二年（一八六五）二月

久平外土農式拾六名ナリ 居住の益田家臣）ほか 率^{ひきい}テ山口ニ帰ル

同六日 ^{（二月）}脱走ノ志士九名 66頁72頁 及三好久平等式拾七名 總員三拾六名八大谷樸助

ヲ推シテ總督トナシ ^{（ひるがえ）}津田公輔 大橋三樹三斥候ニテ 回天ノ二大字ヲ書シタル旗ヲ

翻^{（須佐）}シ 干城隊 猶^猶崎八十槌 笠原半九郎等五名 公命ニ據^よリ之ヲ保護シテ

歸^{（須佐）}邑 直^{ただち}ニ心光寺ニ屯^{（たむろ）}シ回天軍ヲ設立セリ

回天軍趣意書

回天軍屯集ノ義者^は 第一為 亡君為御國家 正義回復之^の
實行相^{あいあが}拳^こり候様有之度 日夜苦心候處 今日ニ至^{（須佐）}り候而者^{ては} 邑中之^{（ひるがえ）}
人心一旦興起候ト雖トモ 是迄^{これ}ノ通り階級ニ依^{いんかん}り 御軍勢之御定相成^{あいな}り
候而者^{ては} 本藩撰鋒隊ノ如ク 殷監不遠 決シテ實地之戦ハ無覺束 此後^{このこ}
外夷ハ勿論 四境ノ憂ハ必然之義ニ付キ 石州境之義ハ素ヨリ 益田家之^の
任ニ可有之候得者^{これあるべくそうらえ} 若又天王山ノ覆徹ヲ踏候而者^{もし} 御家之義ハ不及申^{もつすにあやはず}

是迄ノ通り階級ニ依^{いんかん}り 御軍勢之御定相成^{あいな}り 益田家の祖法である「四組」（宇谷、須佐地、瀬尻、市丸）の軍制のこと。（17頁参照）なお、文書館本ではこの部分は「御軍制之相定候而者^と」と書かれている。

殷鑑不^と遠^{あからず} 遠^と 殷人の鑑戒とすべきは、近く前代夏の世の滅亡が良い手本だ、との意。転じて、自分の戒めとするものはすぐ近くにあるということ。（殷鑑不遠）

四境 50頁参照。第二次長州征伐では須佐兵は石州口防衛を担当し幕軍を打ち破った。

天王山ノ覆徹^{ふくてつ} 徹^{ふくてつ} 蛤御門の変に際し天王山に後詰めとして布陣した益田右衛門介の本隊は長州軍の敗報に接するや、一戦も交えず、兵員や兵器を打ち

捨てて撤収した事を指す。覆徹^{ふくてつ} 徹は車が覆った跡。前人の失敗のたとえ。

御兩國之存亡ニ相係リ可申後南御軍制之内ヨリ別ニ隊ヲ以テ別ニ
士農工商ノ差別ナク人物ヲ援テ實戰、訓練相勵ミ必竟天下之奸賊
ヲモ援除シ 亡君之神靈ヲ奉慰度段長余苟守操、志有之
輩ニ身分掲グラス其人ノ心ニ任セ入隊可有之者也

丑二月

回天軍

邑政堂非常ニ蒼皇殊ト爲ス所ヲ知ラズ俄ニ九名脱走、罪ヲ赦免シ大
谷撲助謹慎ヲ解放シテ食禄元ノ如クシテ由ラ達シ且ツ令シテ曰ク如斯實
大、御處置スル各解散帰宅スベト回天軍ヨリ立隊、目的ヲ陳述シテ
曰ク今ヤ四境難日日ニ迫リ益田家ニ於テ軍制、改革スベキ之ヲ改革
ニ並方要衝ノ地ヲ受テ燒眉急テ防禦スル決心ナカバカラス是即
先君ノ御遺志ヲ奉体シ臣子ノ分ヲ尽ス所以ナリ吾輩回天軍ヲ以テ
其基礎ト爲サントスル及西復辯論シテ分散ノ命ニ僉ニ應ゼズ俗吏等

長門周防の衍字
御兩國之ノ存亡ニモ相係リ可申候間 御軍制之内ヨリ別ニ一隊ヲ以テ別ニ
士農工商ノ差別ナク人物ヲ撰ヒ 實戦ノ訓練相勵ミ 必 竟八天下ノ奸賊
ヲモ掃除シ 亡君ノ神靈ヲ奉 慰 度段候条 苟 尊攘ノ志有之
輩ハ 身分ニ掲ハラス其人ノ心ニ任せ入隊可有之者也
丑二月 回天軍

邑政堂ハ非常ニ蒼皇殊ト為ス所ヲ知ラス 俄ニ九名脱走ノ罪ヲ赦免シ 大
谷樸助ノ謹慎ヲ解放シテ 食禄元ノ如クナル由ヲ達シ 且ツ令シテ曰ク 如斯寛
大ノ御處置アル上ハ 各 解散帰宅スベシト 回天軍ヨリ立隊ノ目的ヲ陳述シテ
曰ク 今ヤ四境ノ難日日ニ迫レリ 益田家ニ於テハ軍制ノ改革スヘキハ之ヲ改革
シ北方要衝ノ地ヲ引受ケ 焼眉ノ急ヲ防禦スルノ決心ナカルベカラズ 是即チ
先君ノ御遺志ヲ奉体シ 臣子ノ分ヲ尽ス所以ナリ 吾輩回天軍ヲ以テ
其基礎ト為サントスト 反覆辨論シテ分散ノ命ニ應セス 俗吏等

御軍制＝益田家の祖法、四組の軍制のこと。（17頁参照）

蒼惶＝あわてる様。（蒼皇）

食禄元ノ如クナル由＝元治二年一月二四日、大谷樸助以下九名脱走の際、大谷樸助跡は家名断絶を命じられた。（77頁参照）

四境ノ難＝第2次長州征伐のこと。四境は51頁参照。幕府軍が長州藩の四境に攻め寄せてくる可能性が日に日に高まりつつある事を言う。

北方要衝ノ地＝石州口（佛坂峠のみならず須佐全体）を指す。

元治二年（一八六五） 二月

其軍執所主義到底壓折スヘカラシムヲ察スルニナラス外諸隊意

援アルヲ恐怖シテ軍備擴張命ヲ發ス

同七日色政堂ヨリ士卒各組ハ軍事緩督ハ公援人々アリ

同八日親族公等靈ヲ高正大明神ニ謚シ奉リ御短刀ヲ以テ其神体ト定メ

産土松崎神社ニ於テ大祭典ヲ執行シ家臣一般參拜式ヲ行ハ大塩寺ニ於テ

各級大會議ヲ開議ス其主件ハ藩ニ建言シテ先君御正義ヲ貫徹セシム

ハキ直石刑口防衛ニ益田家ニ於テ擔任スベキ事等ニテ互ニ誓約シテ散

會セリ

誓約書

其度會議スルテ一定被仰付候旨趣光般

高正院様御嚴科一系編

御兩殿様御思召不被為在奸吏所置相聞尤様御覺

元治二年（一八六五） 二月

圓天軍ノ執ル所ノ主義ハ 到底壓抑スヘカラサルヲ察スルノミナラス 外ニハ諸隊ノ應援アルヲ恐怖シテ 軍備擴張ノ命ヲ発ス

同七日 邑政堂ヨリ士卒各組へ軍事総督公撰ノ令アリ

同八日 親旋（二月）公ノ尊靈ヲ高正大明神ト謚（おくりな）シ奉シ 御短刀ヲ以テ其神体ト定メ

産土松崎神社ニ於テ大祭典ヲ執行シ 家臣一般参拜シ 式（大蓋寺）アリ大蓋寺ニ於テ各級大会議ヲ開設ス 其主件ハ 本藩ニ建言シテ先君（担任）御正義ヲ貫徹セシム

へキ吏 石州口ノ防禦ハ益田家ニ於テ擔任スベキ事等ニテ 互ニ誓約シテ散會セリ

誓約書

此度會議ヲ以テ一定被仰付候旨趣ハ 先般

高正院様御厳科ノ一条 編二 御兩殿様御思召ニ不被為在 奸 吏ノ所置ト相聞 左様へハ御冤

「到底壓抑スヘカラサルヲ察スルノミナラス」 文書館本では「到底壓抑スベカラザルノミナラス」と記されている。
「軍事総督公撰ノ令アリ」 主君在のため公撰で任命しようとしたのであろうか。

産土松崎神社 産土神 はある土地を鎮守する神。鎮守の神。産神。「松崎神社」 松崎八幡宮。須佐町須佐本町上。祭神は応神天皇、神宮皇后、姫大神。由緒によれば、大化六年（六五〇）宇佐八幡宮から勧請して、松ヶ崎に社殿が建てられたので社名になった。康保三年（九六六）社殿が拡張されたが、応永二年（一四一八）、天文三年（一五三四）、文禄元年（一五九二）に炎上して古記録や神宝の多くが焼失した。慶長八年（一六〇三）、須佐領主益田元祥が山根丁東田中山の麓に移し、寛永一六年（一六三九）益田元堯の時に現在の地に移された。鳥居は元禄二年（一六八九）益田就恒が建立した。また神像と神刀と社前に並ぶ石燈籠は益田家が江戸参勤の都度奉献したもので、須佐町文化財に指定されている。（「地下上申」参照）

高正院様 益田親施のこと。法名「高正院殿大義全明居士」。（45頁参照）

罪_ニ奉_レ隨_テ次_ニ弟_ニ孫_ニ以_テ殘_レ憾_ニ之_ニ至於_ニ御_ニ家_ニ未_レ中_ニ悲_レ憤_ニ何_ニ以_テ加_ニ之_ニ
武_ニ就_ニ而_テ看_ニ奉_ニ報_ニ

尊_ニ靈_ニ寸_ニ忠_ニ之_ニ議_ニ今_ニ日_ニ御_ニ前_ニ御_ニ深_ニ慮_ニヲ_ニ斟_ニ

傳_ニ靈_ニモ_ニ御_ニ神_ニ祭_ニ奉_ニ傳_ニ崇_ニ於_ニ

御_ニ神_ニ前_ニ御_ニ家_ニ未_レ中_ニ丹_ニ心_ニ和_ニ誓_ニ約_ニヲ_ニス_ニテ

御_ニ而_ニ殿_ニ様_ニ御_ニ正_ニ義_ニ思_ニ召_ニ被_ニ成_ニ御_ニ躰_ニ認_ニ御_ニ忠_ニ節_ニ被_ニ辱_ニ終_ニ

御_ニ身_ニ被_ニ果_ニ侯_ニ

御_ニ遺_ニ念_ニモ_ニ臣_ニ下_ニ之_ニ銘_ニ心_ニ肝_ニ徹_ニ底_ニ仕_ニ作_ニ不_ニ及_ニ丹_ニ心_ニ之_ニ届_ニ所_ニ

御_ニ國_ニ是_ニ定_ニ御_ニ正_ニ義_ニ貫_ニ徹_ニ之_ニ義_ニモ

公_ニ儀_ニ歎_ニ願_ニ仕_ニ壯_ニ上_ニ縱_ニ外_ニ患_ニ能_ニ未_ニ之_ニ節_ニモ_ニ御_ニ領_ニ境_ニ石_ニ方_ニ治_ニ防_ニ禦_ニ之_ニ

義_ニ一_ニ途_ニ御_ニ請_ニ相_ニ申_ニ出_ニ志_ニ操_ニヲ_ニ不_ニ愛_ニ身_ニ命_ニヲ_ニ尽_ニシ

御_ニ身_ニ後_ニ寸_ニ忠_ニ義_ニ正_ニ凜_ニ然_ニ相_ニ立_ニ侯_ニ様_ニ作_ニ恐_ニ

罪二奉^{ざい おとしれたてまつり} 墮^お候次第^{うけ たいし} 弥^{いよいよ}以^{もつて}残憾^の之^{いた}至^{たり} 於^{こけらいちゆうにおいては}御家来中^{ごけらいちゆう}悲憤^{かなをもちてこれにくわえん}何以^{いかに}加之^{くわえん}

尊^{そん}靈^{れい} 寸^{すん}忠^{すう}之一^{いつ}議^ぎ八^は 今日^{こんにち}御^ご 前^{ぜん}ノ御深慮^{ごしんる}ヲ斟^くミ

御^ご神前^{しんぜん} 御家来中^{ごけらいちゆう}丹心^{たんしん}一^{いつ}和^わ之^の誓約^{せいやく}ヲ以^{もつて}テ 御^ご兩^{りやう}殿^{でん}様^{さま}御^ご正^{せい}義^ぎ思^し召^{めし}ヲ被^{おほしめし}成^な御^ご躰^{たい}認^{にん} 御^ご忠^{ちゆう}節^{せつ}ヲ被^{つくされ}尽^{つい} 終^{つい}二

御^ご遺^い念^{ねん}モ臣^{しん}下^げ之^の銘^{めい}々^々心^{しん}肝^{かん}二^に徹^{てつ}底^{てい} 仕^{つかまつり} 乍^{およばすながら}不^ふ及^及丹心^{たんしん}之^の届^{とどく}所^{ところ}

御^ご國^{こく}是一^{いつ}定^{てい} 御^ご正^{せい}義^ぎ貫^{くわん}徹^{てつ}之^の義^ぎモ 公^{こう}儀^ぎへ歎^{たん}願^{がん} 仕^{つかまつり} 然^{しかる}上^{うえ} 八^は 縱^{たとい} 外^{がい}患^{えん}襲^{しゆう}来^{らい}之^の節^{せつ}モ 御^ご領^{りやう}境^{けい}石^{しつ}臼^う口^く防^{ぼう}禦^ご之^の

義^ぎ八^は一^{いつ}途^と二^に御^ご請^{しん}相^{さう}申^{しん}出^で 志^し操^{そう}ヲ不^{かえす}変^{へん}身^{しん}命^{めい}ヲ尽^{つい}シ 御^ご身^{しん}後^ごノ寸^{すん}忠^{ちゆう} 正^{せい}義^ぎ凜^{りん}然^{ぜん}相^{さう}立^た候^{こう}様^{さま} 乍^{おそれながら}恐^{おそ}

「御^ご 前^{ぜん}ノ御深慮^{ごしんる}ヲ斟^くミ」 文書館本では「生前ノ深慮ヲ斟ミ」と記されている。

丹心 忠誠でいつわりのないこと。まごころ。

躰認 よく心に吞み込むこと。しかと認めること。

御國 一定 謝罪恭順 ではなく「武備恭順」に藩論を統一することを意味する。

公儀 本藩政府のこと。幕府のことは「大公儀」と云って区別した。

縦 縦令（たとい）

石州口防禦 四境の関門の項（51頁）参照。

身後 我が身の死んだ後。死後。

元治二年（一八六五） 二月

神靈御照覽前以テ決議仕奉事

歎願書

乍恐微臣私共不顧恐惶歎願申極在旨趣旧冬已来多人數之
斬戮并諸隊追討且外之御所置熟考仕疾得先被右衛門
之殿殿科之節一条天

御西殿様御恩召ニ被為在偏政府之御所置ニ罪科被
行在儀モ可有之哉ト於家来中モ殘憾何以加之就而有主人終
服之素志

御西殿様御正義之御恩召ヲ被致財認心身ヲ被謁被相果矣
義ヲ御座疾得共臣下之銘々其遺念心奸ニ徹底仕作不及丹
心、屈所難願申上矣而何卒
御國是御一定御正義御貫
微之程奉仰願疾左疾ニ主人生前之丹心相届於私共モ本懷

元治二年（一八六五）二月

神靈御照覽ノ前ヲ以テ決議仕候事

歎願書

乍恐微臣私共不顧恐惶歎願申上候旨趣ハ旧冬已来人数之

斬戮并諸隊追討其外之御所置熟考仕候得共先般右衛門

之介殿蔵科之節一条モ

御兩殿様御思召ニ不被為在偏二政府之御所置ニテ罪科相被

行候儀モ可有之哉ト於家来中モ残憾何以加之就而者主人終

身之素志

御兩殿様御正義之御思召ヲ被致体認心身ヲ被謁被相果候

義二御座候得共臣下之銘々其遺念心奸二徹底仕乍不及丹

心ノ届所歎願申上候而何卒御國是御一定御正義御貫

徹之程奉仰願候左候ハ、主人生前之丹心相届於私共モ本懷

神靈御照覽之前ヲ以テ親施公の神靈が見守つて居られる前で決議しましたの意。

恐惶おそれつつしむこと。

斬戮「戮」は死罪にすること。切腹、斬首などの刑罰。俗論党の本藩政府が三家老を切腹させ、四參謀を斬り（51頁参照）恭順の証とした事を指す。

「御兩殿様御思召ニ不被為在偏二政府之御所置ニテ」君臨すれども統治せず。君主が実際の政務を臣下に任せていた事を言う。第1次長州征伐に於て、三家老切腹は西郷隆盛が強く主張したとされる。

過分に至り奉存然上縱令外患未襲之節モ領分境石別
口防禦之義一途身命ヲ尽し手立可申候間茲重々前件御政
蹟正義御徹底之御巧置下恐敷願申上矣誠恐誠惶謹白

益田右衛門介跡

家来中

同夜士族各級ヨリ家来僧野與次ヲ發智ニ推載スベシト是政堂

ニ上申ス

同九日僧野與次總督タルギノ命アリ小國融藏謹願放免ミ直ニ參謀
タルギノ命アリ回天軍發智大谷樸助本隊ヲ率テ一番先衛隊番頭タルバ
キノ命アリ是於テ軍制精詣諸者就テ初回天軍心先導ニ任スル機ヲ察シテ
兵員ヲ募集セシ富豪富猷金ヲ爲メ氣慨アル者ハ入隊セハ因リ勢力日々ニ
加ルヲ以テ俗論派モ其銳鋒ヲ憚リ本藩諸隊止戦後款地ニ入リ屢々

過分之至リニ奉存候 然上八縦令外患来襲之節モ 領分境 石州
口防禦之義ハ 一途身命ヲ尽シ手立可申候間 幾重モ前件御政
蹟正義御徹底之御所置 乍恐歎願申上候 誠恐誠惶謹白

益田右衛門介跡

家来中

同夜 (二月八日夜) 士族各級ヨリ家老増野與次ヲ總督ニ推載スベシト邑政堂
二上申ス

同九日 増野與次ニ總督タルベキノ命アリ 小国融蔵謹慎放免ニテ 直ニ參謀
タルヘキノ命アリ 回天軍總督 大谷樸助ハ本隊ヲ率テ一番先衛隊番頭タルベ
キノ命アリ 是ニ於テ軍制稍緒ニ就ケリ 初 回天軍ノ心光寺ニ屯スルヤ 檄ヲ発シテ
兵員ヲ募集セシニ 豪富ハ献金ヲ為シ 氣慨アル者ハ入隊セルニ因リ 勢力日々ニ
加ハルヲ以テ 俗論派モ其銳鋒ヲ僻タリ 本藩諸隊ハ止戦ノ後 萩地ニ入り 屢々

増野與次「與次」(おきつぐ)か「與次」か、何れが正しいか。毛筆の字は「與」(よ)。増野又十郎の事か。

外患来襲之節「第二次長州征伐で幕府軍が攻めて来た場合には…」の意味。

軍制稍緒ニ就ケリ「四組の軍制が崩れ、回天軍の主張が通り、どうにか組織として認められた事をいう。」「稍」というのは小国融蔵が参謀で大谷樸助が
隊の番頭という命令に不満があったことを意味する。

豪富「誰のことか。浦庄屋の久原家などか。」

元治二年(一八六五) 二月

上言正所_レ以_テ正義恢復_ル端相_レ開_ル格_ニ際_{シタレハ}益田家_ニ於_テモ兩
君候御守衛_ト稱_シ秋近傍地_ニ出兵_シ諸隊_ト氣脈_ヲ通_{シテ}如君_ノ衛家
督_ヲ促_{スベシト}小國駐藏_ヲ初_ニ田天軍_ノ建議_ヲ據_リ宇田村_ニ出張_ノ事
ヲ許_{セリ}

同十四日中軍大盛寺_ニ先鋒淨蓮寺_ニ凡_レ田天軍法隆寺_ニ轉營_リ
翌十五日田天軍一隊及大谷岩尾組頭_ニ宇谷組須佐也組合併一小隊
宇田村_ニ出張_シ邑政堂_{ヨリ}當後松本良左衛門御末家益田_ノ見殿
本政稱_レ山右衛門等_ハ出兵_シ付内談_ヲ爲_シ出張_{セリ}

茲_ニ本藩逃走_シ好吏棕梨藤太同伊太郎現玉久吉郎中村久米太郎水
村棟之進同駒太郎平川清作小倉半右衛門神代秀之進小森市郎右衛
門南新三郎小川八十捷等十三名海路_ニ別_ニ飯_ノ浦_ニ着_リ船上陸_{セシ}由_レ取
報依_リ田天軍員梅津熊之進田島村歸省中_ニ中村_ニ一_ニ外三名同行

元治二年（一八六五）二月

上言スル所アルヲ以テ （もつ） 正義恢復ノ端 相開ケルノ機ニ際シタレハ 益田家ニ於テモ両
（元徳） 君候御守衛ト称シ 萩近傍ノ地ニ出兵シ 諸隊ト氣脈ヲ通シテ 幼君ノ御家
（うなが） 督ヲ促スベシト （育英館字頭、軍監） 小國融蔵ヲ初メ 田軍ノ建議ニ據リ 宇田村マテ出張ノ事
ヲ許セリ

（二月） 同十四日 中軍八大蕨寺ニ 先鋒八淨蓮寺ニ屯シ 田軍八法隆寺ニ轉營セリ

（二月） 翌十五日 田軍一隊及大谷岩尾 組頭ニテ宇谷組 須佐地組合併一小隊

宇田村ニ出張シ 邑政堂ヨリ八當役 （益田家臣、上士、大組） 松本良左衛門 御末家益田石見殿

本 政府 （藩） 山田右衛門等へ出兵ノ件ニ付 内談ノ為メ出萩セリ

（三） 茲ニ本藩逃走ノ奸吏 棕梨藤太 （大納戸役） 同伊太郎 （甲） 児玉久吉郎 中村久米太郎 木

村松之進 （甲太郎） 同駒太郎 平川清作 小倉半右衛門 （左） 神代秀乃進 （助） 小森市郎右衛

門 南新三郎 小川八十槌 等十式名 海路石州飯之浦へ着船上陸セシ由飛

報ニ依リ 田軍員 梅津熊之進八田萬村ニ帰省中ニテ 中村泰一

三名同行

「宇谷組 須佐地組合併一小隊」は文書館本では「宇谷組 須佐地組併一小隊」と記されている。

宇田村「何故宇田村まで出兵したのか。そこに何があったのか。宇田村は萩藩繁沢家の知行地であった。

十二名について「尚姓名源本ト相前後セリ」と欄外に注記されている。尊攘堂本には原本（草稿）があった事になる。

棕梨藤太（二月一七日付で御用所右筆役、国事御用掛を罷免され、大納戸役になった）の一行は諸隊が萩に迫りつつある中、岩国に赴き吉川氏に就いて謀るところあらんと十四日小畑孤島から船を雇い江崎に上陸し岩国へ行こうとしたが風潮悪く、飯之浦へ着船した。しかし情報を得た政府は岩国に彼等を逮捕するよう依頼した。

児玉久吉郎、小倉半右衛門、南新三郎、小川八十槌、木村松之進らは二月十二日明木権現原において山口に使いをした鎮静会議員香川半介、桜井三木三、冷泉五郎、江木清次郎の四人を襲い江木以外の三人を刺殺した撰鋒隊士。（「防長回天史」第五編上七七四頁、一七六頁 明木の凶変）

中村久米太郎 木村駒太郎 平川清作 神代秀乃進 小森市郎右衛門 棕梨伊太郎

飯之浦「上りJR山陰本線で須佐から2つ目の駅（江崎の次）が飯之浦。

田萬村「須佐の東隣の村。現在は田万川町。須佐と並ぶ良港江崎港がある。

梅津熊之進「益田家臣。奇兵隊に入り慶応二年七月二十七日小倉赤坂にて戦死。

中村泰一「益田家臣

敵浦主須佐ヨリ中軍及二番先鋒隊ヲ下田萬村出張セシメシ奸吏石州
青原通岩國ニ至セント報知リ又先手小隊ヲ福田村出張セシメリ是二
月十二日ヤリ此際奇兵隊福田義平西崎喜平身田陣營ニ来リ恨
力ニテ奸吏ヲ逮捕セリ約シ石州青原通街通地理ヲ細聞シテ歸リ大
谷樸助岡部東三福田村派出セリ岡部東三德地宿懲隊報シ
岩國ロ整戒ヲ嚴メセシム下田萬村出張先衛隊ヨリ數名ヲ援救シテ
奸吏逮捕手配ヲシ青原津和野藩領内ナルヲ以小國融藏直
津和野藩邸ニ至リ脱藩奸吏逮捕爲メ青原出張セシ旨ヲ接獲セリ青
原ニテ先鋒隊出張員岩國ノ道路ヲ遮斷シ堅固ニ相囲ミ既ニ逮捕ニ及バト
ス此津和野藩渡辺儀右衛門數多之士卒ヲ率テ出張シ敵衆藩ヨリ逮
捕ノ上貴藩捕房スリテ渡セント談判ニ依リ二番先衛隊津和野藩ニ安
控シテ田萬村歸營ニ是時大谷樸助福田村於テ津和野藩ニ安控ノ

飯之浦二至リ 須佐ヨリハ中軍及二番先銳隊ヲ下田萬村ニ出張セシメシニ奸（梶梨藤太以下十二名） 吏八石州
 青原通り岩國ニ至ルベシトノ報知アリ 又先手小隊ヲ福田村ニ出張セシメタリ 是（これ）ニ
 月十六日ナリ 此際 奇兵隊福田義平 西嶋喜平等宇田村陣営ニ来リ 協
 カシテ奸（梶梨藤太以下十二名） 吏ヲ逮捕ス キヲ約シ 石州青原通り街道ノ地理ヲ細聞シテ帰レリ 大
 谷樸助 岡部東三八福田村ニ派出セシカ 岡部東三八徳地鷹懲隊ニ報シテ
 岩國口ノ警戒ヲ嚴ニセシム 下田萬村出張ノ先衛隊ヨリハ数名ヲ撰拔シテ（育英館学頭、重監）
 奸（梶梨藤太以下十二名） 吏逮捕ノ手配ヲナシ 青原八津和野藩ノ領内ナルヲ以テ 小國融蔵八直ニ
 津和野藩邸ニ至リ 脱藩奸（梶梨藤太以下十二名） 吏逮捕ノ為メ青原ニ出張セシ旨ヲ應接セリ 青
 原ニテハ先銳隊ノ出張員 岩國ノ通路ヲ遮断シ 堅固ニ相囲ミ 既ニ逮捕ニ及ハント
 スルトキ津和野藩渡辺儀右衛門 数多あまたの之士卒ヲ引率シテ出張シ 弊藩ヨリ逮
 捕ノ上貴藩ニ引渡スベシトノ談判ニ依リ 二番先衛隊八津和野藩ニ委
 託シテ田萬村ニ帰營セリ 是時大谷樸助八福田村ニ於テ津和野藩ヘ委託ノ（このとき）

青原 〓 島根県鹿足郡日原町青原。 JR 山口線青原駅付近。 国道 9 号線沿いの村。 ここから日原を経て国道 187 号線で岩国に至る。

福田義平 〓 奇兵隊士。 元上関裁判庄屋支配、 当時来栖源兵衛組。 （「山口県史」 資料編幕末維新 6 1066 頁）

西嶋喜平 〓 奇兵隊士。 本陣付。 （「山口県史」 資料編幕末維新 6 994 頁） なお、 西嶋喜兵衛として元前大津依山民籍当時山下新兵衛組とあり（同 1

053 頁） 同一人物か。

徳地 〓 山口県佐波郡徳地町。 中国自動車道徳地 IC 付近。

渡辺儀右衛門 〓

十二奸吏逮捕の為に動員された須佐兵の名簿は巻末「補注 1」 参照。

事ヲ聞キ速ニ往ケル田萬村中張中軍及二番先號隊主リ不俟戰天鑿

タル十二好吏ヲ踪跡シ彼ヨシ金中ノ魚タリシヲ直ニ復讐言ノ事ヲ果サスニ

他藩人ニ其功ヲ傳ルノ旨牒スルヲ痛論シ歸須セリ

同十九日御末家周布治部殿宇田陣中ニ未駕兵隊ヲ揚公命ヲ傳フルニ

據リ田天軍ニ須佐邑法隆寺等ニ此所ニ退軍シ十二好吏受取ノ準備ヲ為セ

シ本藩ヨリ直接受取事ヲ津和野藩ニ變取アリテ御使者由軍作番頭

藤井竹太郎今田辰三郎等式組及下城隊等原半九郎山縣初三郎長榮

治郎等江崎村出張滞在セリ茲ニ田重作性質臆病ニシテ脱藩奸吏暴

動ヲ畏縮シ奸吏等親接未着ヲ候ニテ款シ佛奴関門ニ於テ津和野藩ノ数度

應接ニ受取準備半途ナラシテ猶豫ヲ請ヒ遂ニ廿三日ノ應接主リテノ道

ノ為スベキナキヲ以テ中間頭人候ニ病ニ罹リ由リ得猶延期セリトセリヨリ津和

野藩ヨリ今日迄徒ニ數日ヲ經過セシ猶未ク受取事ニ難域ニ會西守藩

元治二年（一八六五）二月

事ヲ聞キ（みち）途（みち）ヲ狂（ま）ケテ田萬村出張ノ中軍及二番先銳隊（衛）ニ至リ 不俱載（ふぐ）天ノ讐（かたき）
タル十二奸吏（椋梨藤太以下）ヲ綜跡シテ 彼ハ已ニ釜（ふちゆ）中ノ魚タリシヲ 直チ二復讐ノ事ヲ果サスシテ
他藩人二其功（その）ヲ奪ハル、ノ卑怯タルヲ痛論シテ帰須（須佐）セリ

（二月）同十九日 御末家周布治郎殿 宇田陣中ニ来駕 兵隊引揚ノ公命ヲ傳フルニ

據リ 天軍モ須佐邑法隆寺屯所ニ退軍シ （椋梨藤太以下）十二奸吏受取ノ準備ヲ為セ
シニ 本藩ヨリハ直接受取ノ事ヲ津和野藩ニ照会アリテ 御使番 山田重作 番頭

藤井竹太郎 今田辰三郎等式組及干城隊 笠原半九郎 山縣初三郎 長栄

治郎等江崎村ニ出張滞在セリ 茲ニ山田重作ハ性質臆病ニシテ 脱藩奸吏ノ暴

動ヲ畏縮シ 奸吏等ノ親族来着ヲ候（いしゆく）ント欲シ 佛坂関門ニ於テ津和野藩ト数度ノ

應接ニ受取ノ準備半途ナルヲ以テ猶豫ヲ請ヒ 遂ニ廿三日ノ應接ニ至リテハ 遁辞（とんじ）

ノ為スベキナキヲ以テ 中間頭式人 俄ニ病ニ罹レル由ヲ偽リ 猶延期セントセリヨリ 津和

野藩ヨリハ 今日迄 徒ニ数日ヲ経過セルヲ猶未タ受取ノ事ニ難成ハ尊藩

不俱戴天ノ 讐 〓「謝罪恭順」を唱え、益田親施ら三家老の首級を幕府に提出した俗論党を指す。

御末家周布治郎殿

法隆寺〓須佐町浦中。松雲山。真宗。浄蓮寺の末寺。浄蓮寺四世、教西のとき、益田家から松原に五畝の地を賜り、元禄五年（一六九二）創建。

山田重作

藤井竹太郎

今田辰三郎

笠原半九郎〓干城隊士。（なお「山口県史」資料編幕末維新6 986頁遠近附に笠原由九郎とあるのは同一人物か）

山縣初三郎〓干城隊士。遠近附。（「山口県史」資料編幕末維新6 986頁）

長栄治郎〓「温故」では長栄栄二郎。

仏坂関門〓北浦街道（国道191号線）の山口県と島根県の県境、仏峠（標高1000メートル）にあった関所。四境の一つ。

寺院ヲ拝借シ寺内警衛敵黨ヲ於テ擔當スベケレハ尊皇ノ藩一手シテ
四周ヲ圍テ受ケラレシト照会セリ藤井田内各山田臆セハ憤ナリ吾等
二名更取ヘシト決意シ小國融藏津和野藩ニ談判シ須佐一手ニ引渡スト
前約ヲ履マシ事ヲ通シ是ニ於テ時議論置ケタリシモ奸吏等ノ親族モ未着
シ終ニ下田萬村西込寺ニ於テ未着ノ藩吏員直接受取事ニ決ス
同當日津和野藩物頭布施田沢右衛門御目附牧官ニ應接人渡辺
後右衛門波田多橋其ト士卒十五人足輕八十人餘前後ヲ警衛シテ
未着ヲ引渡ノ手續ヲ為ス寺境外須佐一手ノ教言固ヨリ奸吏ノ腕刀親族
預ト爲シ詰馬ヲ籠マシ山口ヘテ護送セリ須佐一手モ歸邑解隊ス當度奸吏逮捕
梅津熊之進中村泰一等
石別ニ往復數回臨ハタセリ

同日田天軍モ亦邑政堂ヨリ分散ノ命アリト云ヒ其命ニ應答シ同夜心光寺
轉宮ニテ中村藤馬邑政堂ニ出頭シ解隊スベカラサル理由ヲ陳辯シテ經

ノ寺院ヲ拝借シ 寺内ノ警衛ハ弊藩ニ於テ擔当スベケレハ 尊藩ノ一手ヲ以テ
四周ノ外圍ヲ引受ケラルヘシト照会セリ 藤井 竹田兩名八山田ノ臆セルヲ憤(いきて)ホリ 吾等
二名受取ベシト決意シ 小國融藏(育英館學頭、重監)八津和野藩ニ談判シテ 須佐一手ニ引渡ストノ
前約ヲ履(ふ)マン事ヲ迫ル(せま) 是ニ於テ一時ハ議論囂々(うごご)タリシモ 奸(くせ) 吏等ノ親族モ来着
シ 終ニ下田萬村西法寺ニ於テ 来着ノ本藩吏員直接受取ノ事ニ決ス

同廿四日(二月) 津和野藩物頭 布施田沢右衛門 御目附 牧官三 應接人 渡辺
儀右衛門 波田多橋(羽) 其外士卒十五人 足輕八十人餘 前後ヲ警衛シテ
来着 引渡ノ手續ヲ為ス 寺ノ境外ハ須佐一手ノ警固ナリ(須佐) 奸(くせ) 吏ハ脱刀親族
預ト為シ 詰駕籠ニテ山口ヘ護送セリ 須佐一手モ歸邑解隊ス

同日 田天軍モ亦(また) 邑政堂ヨリ分散ノ命アリト雖トモ 命ニ應セス 同 夜心光寺
二轉營シテ 中村藤馬邑政堂ニ出頭シ 解隊スベカラサル理由ヲ陳辨シテ繼

西法寺「現田万川町大字下田万郷。浄土真宗本願寺派。開基は順意。慶長五年（一六〇〇）三月創建。四代目玄了の寛文五年（一六六五）九月、本願寺より西法寺の寺号を免許さる。

物頭「文書館本では「惣頭」と記されている。

布施田沢右衛門「津和野藩士。物頭は弓組、鉄砲組などを率いる役職。物頭衆。

牧 官三「津和野藩士。御目付は非違を檢察し主君に報告する監察官。御目付衆。

渡辺儀右衛門「津和野藩士。応接人は涉外の担当官。

波（羽）田多橋「津和野藩士。応接人。

元治二年（一八六五） 二月

續ノ許諾ヲ得ントスルニ俗吏爲其請ヲ容レサルニナラス大ニ激怒シテ其命ニ
抗スル無情ヲ咎ナルニ因リ且歸堂長官會議ノ上更ニ邑政堂ニ至リテ
哀訴歎願スモ採用セラレザリシ爲其歸堂ノ遲々タルヲ以テ大谷樸助津田
公輔村岡彦十郎等亦邑政堂ニ出頭シテ激論數刻深更ニ至リ終ニ俗吏ノ
屈服スルヲ以テ歸堂セリ然レバ俗吏言論上屈服セシ止ミテ中心益之ヲ嫉
ハ機ニ乘シ大組其他凡ラ田大軍ヲ怨惡スル俗論黨ニ俗吏ト密約ヒテ羽立廿
五日朔英館ニ屯シ詭客ヲ出シテ街頭内ヲ巡回セシメ十二奸吏餘黨亂入セ
計リ難クシ其不虞ニ供ヒ且境敵兵防衛スル爲一團結ヲナシテ練兵スベキ
ヲ口實トシ組士并ニ三組卒族其他農兵ヲモ集メテ此強團ト稱ス邑
政堂ヨリ御用ニ字ヲ濫用シテ館中ニ入ラシムルモノ亦多シ邑政堂俗吏ニ
天軍ノ勢力ヲ殺カントスルノ念熾ニミテ自方其策ヲ講セシカ遂ニ古来四組各
頭佐地頼
尾市丸
ナル者ニ其戸數ヲ定限アリテ大組ノ内ヨリ各組々頭ヲ奉職シ非

元治二年（一八六五）二月

續ノ許諾ヲ得ントスルニ俗吏等其請ヲ容レサルノミナラス 大二激怒シテ其命ニ
 抗スルノ無情ヲ咎ムルニ因リ 一旦帰営 長官會議ノ上更ニ邑政堂ニ至リテ
 哀訴歎願スルモ採用セラレサリシ為 其帰営ノ遅々タルヲ以テ 大谷樸助 津田

公輔 村岡彦十郎等亦邑政堂ニ出頭シテ 激論数刻深更ニ至リ 終ニ俗吏ノ

屈服スルヲ以テ帰営セリ 然レトモ俗吏ハ言論上屈服セシ迄ニシテ 中心益之ヲ嫉ム

ノ機ニ乗シ 大組其他凡テ回天軍ヲ怨悪スル 俗論黨ハ俗吏ト密約シテ翌廿

五日育英館ニ屯シ 説客ヲ出シテ御領内ヲ巡回セシメ 十二奸吏ノ餘黨乱入モ

計リ難ケレハ 其不虞ニ供ヘ 且四境ノ敵兵防禦ノ為メ一團結ヲナシテ練兵スベキ

ヲ口實トシ 組士并二三組卒族其他農兵ヲモ集メテ北強團ト称ス 邑

政堂ヨリ御用ノ二字ヲ濫用シテ館中ニ入ラシムルモノ亦多シ 邑政堂俗吏八回

天軍ノ勢力ヲ殺カントスルノ念熾ンニシテ 百方其策ヲ講セシカ 遂ニ古来四組 谷宇

ナル者ハ其戸数ノ定限アリテ 大組ノ内ヨリ各組々頭ヲ奉職シ 非

須佐地
民須佐地
西史

無情＝文書館本では「無状」と記されている。

（えんお）
怨悪＝うらみいかること。

四境の敵兵＝四境は51頁参照。益田家は関ヶ原の敗戦で須佐移住以来、萩藩に於て石州口のうち仏坂関門の防衛を担当してきた。ここでは須佐全体を意味する。

北強團＝慶応元年二月六日編成。須佐益田家の士卒農兵の集団にして回天軍の勢いを殺ぐの目的に成る。栗山翁輔が頭取たり。（「もりのしげり」35
 8頁）「回天実記」では二月五日編成となっている。

常時臨ミテ組頭指揮從ヒテ進退スキハ制ナリ然ルニ田天軍入
隊組士十二名アルヲ御祖先牛庵公以來御牛組ヲ破解スモノナリト公
言ニ田天軍向ヒテ組士陳隊今ヲ殺ス田天軍之抗辨シテ曰ク田天軍
立隊要旨ハ倭上言セシ如ク今日殺テ必ス之ヲサレバカウサルノ要アリテ三
ツルモノナリ然レテ軍勢古今ノ沿革ニ從ヒ其時制ニ適スル治法ニアラスニ
決シテ實戰ノ用ニ立ツカラス故ニ徒ラ先規旧格ニ拘ヒ宇治極大事論ヲ
待タズ後令牛庵公御手組ナリト雖モ慶長時代ノ軍勢ヲ益田家ノアラン
限リ幾百ヶ年ニテモ依然之用ヒントスルハ兵家ノ強笑ニ供スル見戲ニ即
牛庵公罪人タルヲ奈何セシ加之創立月淺クシテ本ヲ微々タル田天軍中ヨリ俄然
之ニシテ疎ク至ラハ其基礎忽チ頽レテ之隊ノ目的ヲ達スル事能ハサルハ當然ノ
事情ナリト論難辨窮屬一偏輒輒勢ヲ加ヘテ強固ニ其極愈失スル
ラスト存リシ流言ヲ放テ曰ク本田天軍邑政堂放火後負テ暗殺スル陰謀

常ノ時二臨ミテ八組(くみがしら)頭ノ指揮二從ヒテ進退ススヘキキヘノ制ナリ 然ルニ回天軍入
 隊ノ組士十二名アルヲ以テ御祖先牛庵公(益田元祥)以来ノ御手組ヲ破解スルモノナリト公
 言シ 回天軍二向ヒテ組士除隊ノ令ヲ發ス 回天軍八之ニ抗辨シテ曰ク 回天軍
 立隊ノ要旨ハ屢上言セシ如ク 今日ニ於テ必ス立テサルベカラサルノ要アリテ立
 ツルモノナリ 然シテ軍勢制ハ古今ノ沿革二從ヒ其時勢二適スルノ活法ニアラスン
 八決シテ實戰ノ用ニ立ツヘカラス 故ニ徒ラニ先規旧格二拘ムハ宇活(迂闊)ノ極ナル事論ヲ
 待タス 仮令牛庵公(たし)ノ御手組ナリト雖モ 慶長時代ノ軍勢制ヲ益田家ノアラン
 限り幾百千年ニテモ依然之ヲ用ヒントスルハ 兵家ノ嗤笑ニ供スルノ兎戯ノミ 即
 牛庵公益田元祥ノ罪人タルヲ奈何セン 加(しかのみならず)之創立日浅クシテ未タ微々タル回天軍中ヨリ 俄然
 十二氏ヲ除クニ至ラハ 其基礎忽チ頽レテ立隊ノ目的ヲ達スルコト能ハサルハ當然ノ
 事情ナリト論難辨駁 層一層軋轢ノ勢ヲ加ヘタリ 北強團ハ此機愈失フベカ
 ラスト 荐(しき)リニ流言ヲ放チ曰ク 回天軍八邑政堂ニ放火シ役員ヲ暗殺スルノ陰謀

牛庵公益田元祥（寛永一十七年九月二日没 八三歳）、次郎、右衛門佐、玄蕃頭、從五位下、又兵衛イ、牛庵入道。法名「桃林院前鴻眈全牛紹力大居士」

軍制16頁「四組」参照。「御祖先牛庵公以来ノ御手組ヲ破解スルモノ」というのは四組以外に「回天軍」を勝手に立隊したこと、及びその兵力として農兵なども加えたことを指す。宇谷組では士卒の多くが回天軍に入隊した為に、慶応元年二月十五日須佐地組と合併して四組の軍制はやむなく三組に再編成しなければならなかった。（104頁参照）以後、「三組」は宇谷、市丸、瀬尻を指す。なお、回天軍は立隊したものの財政的裏付けは無かった。誰がスポンサーとなっていたのであろうか。

元治二年（一八六五） 二月

アリ曰大石撲助等數名知君ニ忠ナラス益田家ニ叛ル竟恩アリ曰
云云ト無實ノ冤罪ヲ以テ其私怨ヲ報セント欲シ甚シキ已ノ妻見ラシテ仙相院
君ニ河謏詭証セシムに至リ

同日三好久平等南御領士卒ヲ率ヒ田天軍ヲ辞シテ帰郷セリ田天軍ハ笠松邸内
景況及反對黨ノ舉動ヲ探伺シテ仙相院君モ邑政堂俗吏ニ欺カレテ俗論
黨ヲ寵遇シ殊ニ其妻見ノ謏証ヲ信用セシム運ニ属スルヲ知切齒扼腕
堪メ同仙相院君ヲ謁シテ先君御逝去ノ顛末ヨリ立隊上日趣ヲ縷々上
言スルニ如カト一決シ夜將三更笠松邸式臺前ニ出ツルト俗吏等之ヲ
遮リ其防衛頗ル嚴重ナルヲ以テ帰營セリ

同廿六日田天軍ヲ津田公輔外二名邑政堂ニ出頭シテ邑宰益田三郎左
衛門面会シ親旋公御逝去後知君ヲ蒙リシ政權ヲ恣ニシテ大ニ正義派ヲ
擁作スノ舉動ヲ摘指シテ言論激烈ナリしか三郎三左衛門答辨語塞リ

元治二年（一八六五）二月

アリ 曰ク 大谷樸助等数名八幼（益田精次郎） 君二忠ナラス 益田家二叛逆ノ竟思意アリ 曰ク
云云ト 無實（えんざい）ノ冤罪（その）ヲ以テ其私怨ヲ報セント欲シ 甚シキハ己（おのれ）ノ妻児ヲシテ仙相院（益田元宣室）
君二阿謏あゆ譏誣さんぶ証セシムルニ至レリ

同 日（二月廿五日） 大道村切畑居住の益田家臣（廿七名） 三好久平等南御領士卒ヲ率ヒ回天軍ヲ辞シテ帰郷セリ 回天軍八笠松邸内
ノ景況及反對黨ノ舉動ヲ探偵シテ 仙相院君モ邑政堂俗吏二欺（あざむ）カレテ俗論
黨ヲ寵遇シ 殊ニ其妻児ノ譏誣（さんぶ）ヲ信用セラル、ノ運ニ属スルヲ知り切齒扼腕ニ
堪ヘス 一同仙相院君二拝謁シテ 先君御逝去ノ顛末（益田親施）ヨリ立隊ノ旨趣ヲ縷々上
言スルニ如カスト一決シ 夜将二三更笠松邸ノ式臺前ニ出ツルト 俗吏等（零時）之ヲ
遮リ 其防衛頗ル嚴重ナルヲ以テ帰營セリ

同 廿六日（二月） 回天軍ヨリ津田公輔外二名邑政堂ニ出頭シテ 邑宰益田三郎左（清水益田、老臣、家老）
衛門二面会シ 親旋公御逝去後 幼君ヲ蔑ニシ 政権ヲ恣ニシテ大二正義派ヲ
擯斥スルノ挙動ヲ摘指シテ 言論激烈ナリシカ 三郎三左衛門（益田精次郎） 答辨語塞リ

阿謏譏誣 阿謏 媚びへつらう。「謏」は「諛」の誤字。 譏誣 事実を曲げて誇る事。

「三好久平等南御領士卒ヲ率ヒ回天軍ヲ辞シテ帰郷セリ」この部分を松永本は「三好久平等八事態漸ク迫ルヲ察シ南御領士卒二十七名除隊ヲ請ヒテ
帰郷シ 回天軍笠松邸ノ状況及ヒ反對黨ノ挙動ヲ探偵シテ」と記述している。

笠松邸 65頁参照。

三更 五更の一つ。一夜を五分した真ん中。零時前後。半夜。丙夜。

南御領 91頁脚註参照。

益田三郎左衛門 益田家老臣。家老。清水益田家当主。

嘿々流涕スルニ公輔等共ニ争フニ足ラストシテ退出セリ

北強團邑政堂許諾ヲ得テ邑血境ヲ鎖シテ正義派、出入ヲ戒マレハ心光

寺前ニ武庫ヲ守衛シ武小具足ヲ着シ兵器ヲ携フヘテ奔走シ城巖

ヲ示シ回天軍ヲ壓セントシ世間ニ流布シテ曰ク回天軍暴奔近キアルヤシ吾輩

其非常ヲ戒シト回天軍孤城落月楚歌ノ念ヲ懷クモノアリ加之外ヨリ父

兄ノ疾病ヲ虚報シ其心ヲ動サシムルモノ亦勤カラサレハ土谷仙三郎大賀

惣助脱營往ク所ヲ知ラズ岩本平太岩本貫一郎亦夜ニ乗リテ脱營直ニ

北強團ニ至リテ加盟ス

同廿七日御末家周知治部殿、邑政堂ノ招請ニヨリテ来須セシカ仙相院

君命ヲ傳ス由ヲ以テ回天軍ニ来營シ総督大谷權助ヲ始メ河上龍三津田

公輔其他数名、後員ヲ列席セシメテ組士十二名ヲ除隊シ北強團ト混和シ

事ヲ勸告セリ權助岩エテ曰ク組士ヲ除隊スハカラサレ理由ニ屢々邑政堂上陳セシ

嘿々流^(もくもく)涕スルノミ 公輔^{津田}等共ニ争フニ足ラストシテ退出セリ
 北強團八邑政堂ノ許諾ヲ得テ^(須佐)邑ノ四境ヲ鎖シテ正義派ノ出入ヲ戒マシメ 心光
 寺前ナル武庫ヲ守衛シ 或ハ小具足ヲ着シ 兵器ヲ携ヘテ奔走シ 威敵
 フ示シテ^(その)回天軍ヲ壓セントシ 世間ニ流布シテ曰ク 回天軍ノ暴発近キニアルベシ 吾輩
 其非常ヲ戒シムト 回天軍ハ孤城落日 楚歌ノ念ヲ懷クモノアリ 加^(しかのみならず)之外ヨリハ父
 兄ノ疾病ヲ虚報シテ 其心ヲ動カサシムルモノ亦^{またすくな}渺カラサレハ 益田家臣^{益田家臣}土谷仙三郎^{つちたに} 大賀^{益田}
 惣助脱営 往^ゆク所ヲ知ラス 岩本平太^{益田家臣} 岩本貫一郎^{益田家臣}亦夜ニ乗シテ脱営 直^{ただち}ニ
 北強團ニ至リテ加盟ス

^(二月)同廿七日 御末家周布治部殿八邑政堂ノ招請ニヨリテ来須セシカ 仙相院^(須佐)
 君ノ命ヲ傳フル由ヲ以テ 回天軍ニ来営シ 総督大谷樸助ヲ始め 河上範三 津田
 公輔其他数名ノ役員ヲ列席セシメテ 組士十二名ヲ除隊シ 北強團ト混和ノ
 事ヲ勧告セリ 樸助答テ曰ク 組士ノ除隊スヘカラサル理由ハ屢々邑政堂ニ上陳セシ

嘿々＝黙々と同じ。だまる

流涕＝涙を流す。

邑ノ四境＝「須佐市中細見図」(天保十二年)などを見ても当時須佐に開門(木戸)が四個所あったとは思われない。「四方八方」という意味であろう。
 因みに須佐市中細見図」には本町通りの松崎八幡宮前及び荒人社前の二個所に木戸が記されているが、それ以外に開門らしきものは見当たらない。

「威敵ヲ示シテ回天軍ヲ壓セントシ」＝文書館本では「威敵」を「威権」と記述している。

「孤城落日 楚歌ノ念ヲ懷クモノアリ」＝この部分を文書館本では「孤城落日 四面楚歌ノ聲ト為リ事情大ニ切迫スルヲ以テ漸次反覆ノ念ヲ懷ク者アリ」と記述している。楚歌＝四面楚歌。周囲を敵に囲まれ、孤立無援になること。楚の項羽が漢の高祖のために垓下で包囲されたとき、四方の漢軍が故郷の楚の歌を歌うのを聞いて、楚の人民も既に漢軍に降伏したと思い、最早どうすることも出来ないと思しんだ故事による。
 岩本平太＝岩本貫一郎の兄。

元治二年(一八六五) 二月

如シ永油素ヨリ混スモノニテ正俗ノ面立スル数、避ケカキテ所ナリ、及令仙相院
君ノ御竟ナリト雖、益田家前途ノ不利ト認ム事ヲハ成固モ諫メ奉ルコ
ソ臣子ノ分セ言若シ聴セサレハ一死ハミト尚國周布殿ノ佐吏ニ左祖シテ宗
家ノ名譽ヲ傷クル無情ヲ論責セシカ、周布殿赫然トシテ怒リ、席ヲ蹴テ
起スレリ

同日、回天軍一旦、新富村金柳寺ニ輔官シテ、除ハシテ計ハシテ決議セリ、初ノ小
國融藏大言、權助ト内外相應シテ正氣ヲ恢復セシ事ヲ約シ、權助ト公然運動シ
タシテ、居常ニ沈着ラズ、トシ敢テ佐吏ノ意ニ悖ル事、魚カワシカハ回天軍ニ隊
軍、備擴強ク、除其強凶ヲ解キ、舉テ悉謀仕ニ當ラシメ、且邑政堂ニ入り、議政
班ニ連ラシムルニ至リ、故ニ融藏ハ正俗ノ軌轢漸ク甚シキニ至テ、彼是伴来ニシ
具々回天軍ヲ保護スル志トナレリ、是ニ於テ大言權助ハ新富村轉官策
ヲ密ニ融藏ニ計ハシ、融藏ハ大ニ不賛成ヲ唱テ曰ク、回天軍ヨリ是動ラ弁サレ、

元治二年（一八六五）二月

如シ 水油素ヨリ混スルモノニアラス正俗ノ両立スルハ数ノ避クヘカラサル所ナリ 飯令仙相院（たとい）（益田元宣室）
 君ノ御竟ナリト雖トモ 益田家前途ノ不利ト認ムル事アラハ 幾囀モ諫メ奉ルコ（いさ）（さたん）（毛利家）
 ソ臣子ノ分ナレ 言若シ聴レサレハ一死アルノミト 尚周布殿ノ俗吏ニ左袒シテ 宗（けつ）
 家ノ名誉ヲ傷クルノ無情ヲ論責セシカハ 周布殿赫然トシテ怒リ席ヲ蹶テ
 起チ去レリ

（二月廿七日） 同日 囀天軍ハ一旦弥富村全柳寺ニ輔營シテ徐口ニ計ル所アラント決議セリ 初メ小
（育英館学頭、軍監） 國融 蔵ハ大谷樸助ト内外相應シテ 正氣ヲ恢復セン事ヲ約シ 樸助ト公然運動ヲ
（きよ） 共ニセス 居常ニ沈着ヲ專トシ 敢テ俗吏ノ意ニ悖ル事無カリシカハ 囀天軍立隊
（あけ） 軍備擴張ノ際 其幽囚ヲ解キ 擧テ參謀ノ任ニ當ラシメ 且邑政堂ニ入り 議政ノ
（あつれき）（ようや）（はなはだ）（いたり） 班ニ連ラシムルニ至レリ 故ニ融蔵ハ正俗ノ軋漸ク甚シキニ至テハ 彼是往来シテ
（めいめい）（ひそか）（小国） 冥々囀天軍ヲ保護スルノ恣トナレリ 是ニ於テ大谷樸助ハ弥富村轉營ノ策
（小国） ヲ密ニ融蔵ニ計ル 融蔵ハ大ニ不賛成ヲ唱テ曰ク 囀天軍ヨリ暴動ヲ発サル、

「数ノ避クヘカラサル所」ニ避けることが出来ない運命。「数」は運命。松永本では「正俗ノ両立スルハ今日ニ於テ避クヘカラサル勢ナリ」と記述している。

左袒〓 左の片肌を脱ぐこと 加勢すること。味方すること。同意すること。漢の周勃が呂氏一族の乱を平定しようとして呂氏に味方する者は右袒せよ、漢王に味方する者は左袒せよと云ったとき、全員左袒した故事

赫然トシテ〓 かつと怒るさま。

軋（あつれき） 〓 人と人との間の不和。車のきしること。またすれあうこと。

冥々〓 人に知られないこと。 暗いさま。 深遠なさま。

以上邑政堂ヨリ俄ニ手ヲ下シテ所斷スル勢無之依リ今暫ク時祓ヲ
伺ヒテ止ムヘカナルニ至リ轉管スルモ晚キニアラカレトト權助其說ニ從ヒテ轉
管ニ決行セズ且融藏ノ意見モアリテ邑政堂ノ覺書ヲ出ス

覺

此其正集之義ヲ義ニ付テ一君命ニ違ヒ難ク盟約ヲモ破
難ク實以テ進退相迫居依之暫ク心光寺ニ蟄居仕女上本藩
政府系諸隊等ノ公然タル御決議相願度奉存者其間其段
被仰合可被下矣已上

回天軍

邑政堂

連名宛

小國融藏就職以來佐吏ト相列シテ政事ニ参與セハラス万正義派

以上八 邑政堂ヨリ 俄^(にわか) 二手ヲ下シテ所断スルノ勢ハ無^(これなき)之二依リ 今暫^(しば)ク時機ヲ
伺ヒテ万止ムヘカラサルニ至リ轉營スルモ 晚^(おそ)キニアラサルベシト 樸助^(大谷)其説ニ從ヒテ轉
營ノ策ヲ決行セス 且^(かつ)融蔵^(小国)ノ意見モアリテ邑政堂ヘ覺書ヲ出ス

覺

私共屯集^(の)之義ニ付テハ 親施公^(の) 君命ニハ違ヒ難ク 盟約ヲモ破^(やぶ)
難ク 實^(じつ)以テ進退相迫^(あいせまり)居候 依^(これによつて)之暫ク心光寺ヘ蟄居^(ちつきよつかまつり)仕^(この)
政府^(ならび)并ニ諸隊等ノ公然タル御決議相願度奉 存候間 此段^(このうえ)
被仰^(おおせ)合可被下候 已上^(いじよう)

回天軍

邑政堂

連名宛

育英館學頭、軍監 小國融蔵^(参謀)ハ就職以來 俗吏ト相列シテ政事ニ參與セルヲ以テ 万一正義派ノ

「君命ニハ違ヒ難ク」は92頁の回天軍立隊趣意書を併せ読むと、京都周旋の時、回天軍幹部は親施公のお側に仕えて公の尊皇思想について直接話を聞く機会が有ったのではないか。それに対して邑政堂役員は国元にあつて親施公から直接話を聞く機会が少なかったのではないか。この違いが正俗対立の原因に発展したのではないかという疑問に行き着く。

元治二年（一八六五） 二月

滅七日夕ニ迫ルニ急アラハ腕迄其危難ヲ脱セシムノ運動ヲ為サント大谷權助
等約ニテ其轉營策ヲ止メタリニ宣國ニヤ佐吏ハ堂議ノ外秘密ノ謀アリト
雖ニ融藏ヲシテ之ヲ知ラレサリシナリ異日融藏ノ遺憾想フヘシ

同夜北強團ニ田天軍ヲ轉營ヲ慮リ數十人ノ番兵ヲ出シテ密心光寺、
前後ヲ整置ス村岡藤四郎田天軍營ヨリ逃走ス

同月廿八日俗論黨面天軍自魁ヲ捕縛スヘキノ策ヲ決シ其策若シ行ヘサル時
之ヲ討伐スヘト已ニ其用意ヲ為タリ邑政堂ヨリ御領内士卒ニ命ニテ胡英

館ニ整セシム即チ北強團ノ指揮ヲ受ケシムナリ是ニ於テ大谷權助河上龍三津田公輔大橋三樹

三村國彦十郎、五名ヲ望公即御殿ニ召喚ノ令アリ權助龍三公輔三名各親族ニ名義御便者從ヒテ来リ

權助等登殿式臺ニ座シ仙相院君ノ御直命アリ御前ニ出ラレシトノ令ニ應

シテ大廣間ニ出ツ邑政堂佐吏等下ニ列坐シ周布治部殿右ニ着席アリ

既ニ仙相院君恭然トシテ御出座アリ仙相院君曰ク權助龍三公輔等

元治二年（一八六五）二月

滅亡旦（たんせき）タニ迫（せま）ルノ急アラハ 飽迄あくまでその其危難ヲ脱セシムルノ運動ヲ為サント 大谷樸助
 等二約シテ其轉營（その）策ヲ止メタリシニ 豈（あに）圖ランヤ俗吏八堂議ノ外 秘密ノ 謀（はかりごと）アリト
 雖トモ融蔵（小国）ヲシテ之ヲ知ラシメサリシナリ 異日融蔵ノ遺憾（いじ）想フヘシ

（二月廿七日）
 同 夜 北強團八田軍ノ轉營を 慮（おもはんばか）リ 数十人ノ番兵ヲ出シテ 窃（ひそか）ニ心光寺ノ
 前後ヲ警戒ス 村岡藤四郎 八田軍営ヨリ逃走ス

（二月）
 同月廿八日 俗論黨八田軍ノ首魁ヲ捕縛スヘキノ策ヲ決シ其策若シ行レサルトキハ
 之ヲ討（討）伐（伐）スヘシト 已（その）ニ其用意ヲ為タリ 邑政堂ヨリ八御領内士卒ニ命シテ育英
 館ニ入塾セシム 是ニ於テ 大谷樸助 河上範三 津田公輔 大橋三樹
 三 村岡彦十郎ノ五名ヲ笠松邸御殿ニ召喚（しやうかん）ノ令アリ 樸助 範三 公輔等
 樸助等登殿 式臺二座レハ 仙相院君の御直命アリ御前ニ出ツヘシトノ令ニ應
 シテ大廣間ニ出ツ 邑政堂俗吏等左ニ列坐シ 周布治部殿右ニ着席アリ
 既ニシテ仙相院君泰然トシテ御出座アリ 仙相院君曰ク 樸助 範三 公輔等

旦タ〓 朝と晩。朝夕。 朝も晩も。絶えず。つねづね。 時期が切迫していること。又、きわめて短い時間。

異日〓 他の日。前日にも後日にもいう。異時。

笠松邸〓 65頁参照。

この頁最後の3行は「松永本」（温故）と大いに相違あり。

松永本では以下の如く記述している。『…只今出邸スベシト 樸助等八昨日以来不穩ノ形

勢アルニ 今此ノ命ニ接ス 必ズヤ吾等ヲ欺キテ軍門ヲ出シ 以テ羽翼ヲ殺グノ策ナルコト疑ウベカラズ 弥富村転營ノ事ヲ果サザリシハ実ニ噬臍ノ悔
 ナリトス 之ニ於テ散ル時ハ散ルモ吉野ノ山桜 花ニ類ヘシ武士ノ身ハノ歌ヲ各相和シ朗吟シツツ親族二伴ハレテ出ズレバ 隊員之ヲ當門ニ送ル 此ノ
 日巷間流言シテ曰ク 回天軍北強團ト戦争將二起ラントスト 戸ヲ閉ジル者多シ笠松邸ニ至レバ 邸内闌トシテ人無キガ如シ 式台ヨリ導カレテ広間ニ
 出ス 右ニ俗吏ノ列座ニ 左ニ周布殿ノ陪席セラルルヲ見ル…』 この相違点は何によるものか。

恣益田家、御手組ヲ破リ吾等ノ命令ニ背ケリ吾輩、故右衛門介、
母ナリ吾ニ背ク、即故右衛門介ニ背クナリ不忠ノ罪怒スヘカラス並ニ親
族ニ預クルヲ以テ三名親族宜敷嚴ニ護衛スヘシト言畢リテ退席アリ
トモ撲助曰ク臣等ノ旨趣未タ貫徹セサルヲ以テ女ニ至リ恃憾無量今聊
上言ニキ事アリ請フ暫ク待タルベシ周布殿怒色満面曰ク如撲助言フ勿シ仙相
院君速ニ入レシト仙相院君慨然起テ座ニ入レル是ニ於テ右退座スル式臺ニ
組士數十名敷刀置テ列坐ヤリ三名式臺ヲ降リ親族等ニ名及組士三
名組中間四名宛前後左右ヲ圍繞シ撲助跪ニ自定ニ公輔當時親族
松原ニ藏方宅ニ寄遇セシヲ以テ同家ニ歸就シモ手ニ加鎖ヲ受ケテ一室ニ
幽セラハ其次室ニ之旦夜七名ノ看守相結テ玄關ニ延ル益田家、高張提枕
ヲ掲ケタリ如斯ク大橋三樹三村岡房十郎兩名益田松原ヨリ魚重帰營ヲ許
其權力等三名ト共ニ召喚アリシ三名逮捕、實況ヲ田天軍營ニ細報セシ隊

(ほしいまま) 恣 二益田家ノ御手組ヲ破リ 吾等ノ命令ニ背ケリ 吾輩八故右衛門介ノ
母ナリ 吾二背クハ即故右衛門介ニ背クナリ 不忠ノ罪恕スヘカラス 並ニ親
族ニ預クルヲ以テ 三名ノ親族宜敷敵ニ護衛スヘシト 言畢リテ退席アラン
トス 樸助曰ク 臣等ノ旨趣未タ貫徹セサルヲ以テ此ニ至ル 残憾無量 今聊
上言スヘキ事アリ 請フ暫ク待タルベシ 周布殿怒色満面曰ク 樸助言ウ勿レ 仙相
院君速ニ入ラルヘシト 仙相院君厥然起チテ室ニ入ラル 是ニ於テ 各退出スレバ式臺二八
組士数十名敷刀ニテ列坐セリ 三名式臺ヲ降レハ 親族等二名及組士三
名 組中間四名宛前後左右ヲ圍繞シ 樸助 範三八自宅ニ 公輔八當時親族
松原仁藏方宅ニ寄遇セシヲ以テ同家ニ歸リ 孰レモ手ニ加鎖ヲ受ケテ一室ニ
幽セラル 其次室二八昼夜七名ノ看守相詰メ 玄関ニ笹丸ノ高張提灯
ヲ掲ケタリ 如斯テ大橋三樹三 村岡彦十郎 両名ハ笠松邸ヨリ無事帰営ヲ許セリ
其樸助等三名ト共ニ召喚アリシハ 三名逮捕ノ實況ヲ回天軍営ニ細報セシメ隊

吾輩 文書館本では「吾」。女性が「吾輩」と言つてあろうか。

厥然 蹶然。跳ね起きるさま。

枷鎖 手錠と鎖。

笹丸 益田家表紋



益田家表紋 丸之内九枚笹



益田家裏紋 上り藤久文字

元治二年（一八六五）二月

員英氣ヲ挫カシムル策ニハ事ニ因テ明カリ夫ヨリ也強團ハ公然心光
寺ヲ圍ミテ隊員ハト出ラ禁シ夜五時各組証人後軍營ニ入リ入隊組士ハ
説諭上當時組氏集所即ケ也強團文部ヲ紹存寺ハ伴ヒテ警衛ニ翌日
各親族預ケトナリ自宅ニ歸リ御手廻リ其他直ニ親族預ケトナリテ歸宅セリ
同月廿九日也強團緩人數笠松即御殿ハ召喚アリテ却主係ニ山相院君
御意アリテ酒肴ヲ賜ヒ

御意書

當今時勢就テハ不形被遂

御若慮安慮然甚古人數中夜白令尽力臣子情實全々

相達候段

御祝着被

思召候依之被成

御意御酒被仰付候事

元治二年（一八六五）二月

員ノ英氣ヲ挫^{くじ}カシムルノ策ナル事ハ問ハスシテ明^{あきら}カタリ 夫^{それ}ヨリ北強團ハ公然心光
寺ヲ圍ミテ隊員ノ外出ヲ禁シ 夜^{（夜八時）}五時各組ノ証^{脚注参照}人役ハ軍營ニ入り 入隊ノ組士ヘ
説諭^{（せつゆ）}ノ上 当時四組ノ屯集所 即チ北強團ノ支部タル紹孝寺へ伴ヒテ警衛シ 翌^{（二月廿九日）}日
各親族預ケトナリテ自宅ヘ帰り 御手廻^{（おのおの）}リ其他ハ直チニ親族預ケトナリテ帰宅セリ

同月廿九日 北強團総人数 笠松邸御殿へ召喚アリテ 幼主^{（益田精次郎）}併^并二仙相院君^{（益田元宣室）}ノ
御意アリテ酒肴ヲ賜ハル

御意書

當今時勢二就テハ 不一^{ひとかたならず}形 被^{とげられ}遂^{よるひる}

御苦慮候処 稽古人数中夜白 令^{しんりよくせしめ}尽力 臣子ノ情實全々

相達^{あいたし}候段

御祝^{しゅうちやく}着^{おぼしめされ}二被^{これによつて} 思召^{なられ}候 依^{おおせつけられ}之 被^{なられ}成

御意 御酒被仰付候事

証人〓証人役。（本藩では）手廻組、大組、船手組、物頭組、寺社組、徒士、三田尻船頭、膳夫などの各階級におかれ、夫々に各組所属の士の中から組頭の推薦により当職が任命した。各組の証人は諸士の給禄および馳走出米などに關する収支の清算を行つて禄高及び馳走出米・公借の控除、現収入高等についての帳簿を作成し、諸役の任命あるいは罷免に際してその辞令を代聞し、また他国出行、家督相続などの申請書の進達などの事務を行つた。（益田家でも）各組毎に同じ制度を採用したものと考えられる。

「松永本」では3行目以下の部分に次の文言が挿入されている

『邑政堂ノ嚴命ヲ伝工 尚正義派ノ首領タル三名ノ縛二就キタル上ハ 回天軍既ニタオレタル旨ヲ諭シテ』

稽古人数〓稽古は勉強、学習の事。人数は人員、多数の人。稽古人数は訓練を受けている家臣の事。

更ニ仙相院君御膝下へ小京勘左衛門秋組御仲升半四郎大組並強團魁
秋山春三御手廻倉三郎兵衛御手廻尾木七郎左衛門四組並強中村
榮一同等ヲ召シテ曰ク昨日機助三公輔三名ヲ幽囚セリト雖婦人ノ身
ニシテ其此置ニ困却セリ此上家臣中於テ適當ノ方案ヲ定メテ建議
セヨトノ命アリ此御直命ニ從ヒ胡英館内ニ大會議ヲ開キ大谷機助等ノ罪条
五條ヲ造リテ並強團ニ御委屬事請ヒ願意採用セラレ機助等ノ首
足跡ヲ要ニシテ鬱憤ヲ散スヘト決断セリ

罪状

- 一 高正院様御自分被立置候御手組相破候事
- 一 仙相院様御趣意ニ相背候事
- 一 慎中脱走之事
- 一 御家来中ラ隊中へ俗論ニ申落候事

更二仙相院君御膝下へ小原勘左衛門 仲井半四郎
秋山春三 戸倉三郎兵衛 尾木七郎左衛門 中村
泰一同等ヲ召シテ曰ク 昨日樸助 範三 公輔ノ三名ヲ幽囚セリト雖トモ 婦人ノ身
ニシテ 其所置ニ困却セリ 此上家臣中ニ於テ適當ノ方案ヲ定メテ建議
セヨトノ命アリ 此御直 命ニ従ヒ 育英館内ニ大會議ヲ開キ 大谷樸助等ノ罪条
五ヶ條ヲ造リテ北強團ニ御委囑ノ事ヲ請ヒ 願意採用セラレハ樸助等ノ首
足所ヲ異ニシテ鬱憤ヲ散スヘシト決断セリ

- ―― 罪状
―― 高正院様御自分被立置候御手組 相破候事
―― 仙相院様御趣意ニ相背候事
―― 諱脱 慎中脱走之事
―― 御家来中ヲ隊中へ俗論ニ申落候事

首足所ヲ異ニシテ＝首足異處。腰切りにされること。（十八史略、春秋、魯）

一御法相背キ商家大金ヲカタリ出候事

リ

右評曰第一条田天軍組士入隊許シテ四組ノ牛組破レリト事ナレ

氏四組ノ制ニ半奄^{ハミ}公^{ミヤ}牛組^{ウシグミ}ミテ古今時同^{イカガハカニ}改メサルモナリ決シテ

親施^{シナシ}時代^{キョウジ}定^{サダ}シタル牛組^{ウシグミ}ミテラヌ第二条山相院君^{ヤマサウインキミ}御趣意^{ミツイ}俗吏

等^{ナニ}毒舌^{ドクゼツ}言^{コト}イセシシ出テタリ第三条嶺中^{リウチュウ}脱走^{ダツソウ}大谷^{オオヤ}樸^{ハク}一名^{ナニ}係^{ケイ}ニ

事^{コト}ナカ^カ必^{カナラ}罪科^{ズイカ}因^ユテ樸^{ハク}助^{タケ}脱走^{ダツソウ}一旦^{イツタン}家名^{ケナ}断絶^{ダンゼツ}沙汰^{サタ}アリシモノ

日^ヒ謹慎^{キンシ}放免^{ハツメン}家祿^{ケル}復舊^{フクキョウ}命^{ミコト}アリテ前罪^{ゼンズイ}消滅^{シヤウメツ}シタリ第四条故親

施^シ公^{ミヤ}御幽囚^{ミヤウイ}後常^{ノチニ}正義^{セイギ}派^ハ運動^{ユウドウ}ヲ束縛^{スツバク}シ終^{ノチ}ニ小国^{コクニ}融藏^{ユウサウ}大谷

樸^{ハク}助^{タケ}等^{ナニ}禁錮^{キンコ}ニ至^{イリ}ル之^ノ俗論^{ソクロン}ト言^{コト}サレテ俗論^{ソクロン}ヲ俗論^{ソクロン}ト稱^{ナヅケ}スル

事實^{ジヤクジ}ヲ証明^{シヤウメイ}スル止^{トモ}ムハナリテナリ第五^ゴ条田天軍^{テンテングン}正義^{セイギ}ニ感^{カン}シテ

富豪^{フコウ}献^{ケン}金^{キン}ヲシタル有^{アル}ダレモ富豪^{フコウ}ヲ歎^{タタ}キテ中金^{チュウキン}セシ事^{コト}決^{ケツ}シテ無^{ナシ}

元治二年（一八六五）二月

一 御法二相背キ 商家ノ大金ヲカタリ出候事

以上

右評二曰ク 第一条八回天軍二組士ノ入隊ヲ許シテ四組ノ手組ヲ破レリトノ事ナレ
 トモ四組ノ制ハ牛牛庵、益田元祥奄公以来ノ手組ニシテ 古今時（ときおな）同シカラサレハ改メサルベカラサルモノナリ 決シテ
 親施公ノ時代ニ定メラレタル手組ニアラス 第二条仙相（益田親施）院君ノ御趣意ハ俗吏
 等ノ毒舌ヲ信セラレシニ出テタリ 第三条 慎中ノ脱走ハ大谷樸助一名二係（か）ハル
 事ナルカ 此罪科（この）ニ因リテ樸助脱走ノ日一旦家名断絶ノ沙汰アリシモ二月
 六日謹慎放免 家禄復舊ノ命アリテ前罪 二消滅（已脱）シタリ 第四条 故親
 施公（益田）ノ御幽囚後 常二正義派ノ運動ヲ束縛シ 終二小國融蔵（有英館學頭、重監） 大谷
 樸助等ヲ禁錮スルニ至ル 之ヲ俗論ト言ハサルヲ得ス 俗論ヲ俗論ト称スルハ
 事實ヲ証明スルニ於テ止ムヘカラサルモノナリ 第五条 回天軍ノ正義ニ感シテ
 富豪ノ献金ヲナシタル者ハアレトモ 富豪ヲ欺（あざむ）キテ出金セシ事決シテ無シ

この頁と「松永本」との食い違い次の如し。

（第一条）古今時同シカラズ 今ニシテ之ヲ改メザレバ實用ニ適セザルヲ如何セン 然ルヲ親施公ノ立チ置カレタル御手組ヲ被レリトハ誣モ又

甚シカラズヤ

（第二条）…毒説ヲ誤信セラレシニ出ズルモノニシテ 之ニ盲従スルハ却テ不忠ノ罪通ルベカラズ

（第三条）樸助脱走ノ翌日其ノ罪科ニヨリテ家名断絶ノ所分ヲ受ケタリシモ 他方六日ニ至リ謹慎放免 家禄復旧ノ命アリテ 再ビ責罰ヲ蒙ル
 ベキ理無シ

本書では第5行目以下で初めて「親施公」と正しく書かれている。

其証人トテ田天軍ノ為ニ金錢ヲ騙セシタリト言フ有無キヲ以テ

知ルル此五ヶ条ノ實ニ虚構ノ冤罪ナリ

此強團本部胡英龍ヨリ控重ヲ以テ前々決議ノ賛否ヲ其支部ニ紹
序寺此所ノ問ヒニ組工大ニ其否ヲ論シ遂ニ中村秀一西尾壯助外二名
本部ニ至テ敬勝齋樓上ニ於テ多村知一仲井半四郎等ニ面會シテ權助
等亦藩諸隊ニ關係アル人物ナレハ果シテ仙相院君ノ御趣意ニ戾リ教条
罪科アリトセハ連ニ諸隊ニ報シテ諸隊ノ公然タル決議ニ任スヘシト利害得
失ヲ陳辯セシト雖ハ卯一等ノ恐謁甚タレキヲ以テ否ルニ辭テ結極其為ス

處ニハセリ

同日邑政堂ヨリ大石權助ノ親族栗栖鬼助松井平平ヲ召喚シテ曰ク權
助ヲ懲メテ自殺セシメ、家名斷絶ノ憂ナレハハ汝等大石家ノ為ニ之ヲ圖
ラサルヤト親族二名諾セシテ退定セリ是ニ於テ俗吏等權助等三名ノ所分

其証タル 一人トシテ**田**天軍ノ為ニ金錢ヲ**騙**セラレタリト言フ者無キヲ以テ
知ルヘシ 此五ヶ条八實ニ虚構ノ冤罪ナリ

北強團本部育英館ヨリ**椋重**ニヲ以テ前件決議ノ賛否ヲ其支部タル紹
孝寺屯所ヘ問ヒシニ組士八**大**ニ其否ヲ論シ遂ニ中村泰一 西尾壮助 外二名
本部ニ至リ 敬勝齋楼上ニ於テ**尋** 祢 卯 一 仲井半四郎等ニ面會シテ 樸助
等八本藩諸隊ニ關係アル人物ナレハ 果シテ仙相**院**君ノ御趣意ニ戾リ 数条
ノ罪科**アリトセハ** **速**ニ諸隊ニ報シテ諸隊ノ公然タル決議ニ任スヘシト利害得
失ヲ陳辨セシト雖トモ 卯一等ノ恐謁 甚タシキヲ以テ 否ムニ辞ナク 結極其為ス
處ニ任セリ

同日 邑政堂ヨリ大谷樸助ノ親族**栗栖鬼助** **松井平助**ヲ召喚シテ曰ク 樸
助ヲ懲メテ自殺セシメハ 家名断絶ノ憂ナカルヘシ 汝等大谷家ノ為メニ之ヲ
ラサルヤト 親族二名諾セスシテ退出セリ 是ニ於テ俗吏等樸助等三名ノ所分

敬勝齋II育英館の建物。巻末「補注2」参照。

議シ並屠腹セシムヘシトノ説アリシ波田與市等横助範三屠腹於テ同
意セリト雖モ津田公輔未タ弱齡ナルニ横助範三失ニ独力事ヲナスノ膽
力恐クハ無ヘシ之ヲ授カバルモ豈後日ノ害アラシヤト異議ヲ唱ヘシ依リ一旦
入獄事決セリ

同晦日早朝大谷横助河上範三各割腹津田公輔入牢命アリ

御沙汰書

大谷横助

右御趣意筋相背下ニ形罪科ニ付テ大組中御手廻内四組
中身柄願フ儀申出臣下之情實無餘儀筋付早速被逐
御免拜得共存分ノ所置ニ難被仰出
御詮義筋フテ割腹上家名没収被仰付拜受

丑二月

元治二年（一八六五）二月

ヲ議シ 並（なみ）ニ屠腹セシムヘシトノ説アリシニ 波（はた）田（益田家臣、御用人）興（大谷）市等 樸助 範三（河上）ノ屠腹ニ於テ八同意セリト雖モ 津田公輔ハ未タ弱齡（十九歳）ナレハ 樸助 範三ヲ失ハゞ独力事ヲ成スノ膽カハ恐クハ無ルヘシ 之ヲ殺サヅルモ 豈（あに）後日ノ害アラシヤト異議ヲ唱ヘシニ依リ 一旦入獄（獄）ノ事ニ決セリ

同晦日（二月） 早朝 大谷樸助 河上範三 二名は割腹 津田公輔等八入牢ノ命アリ

御沙汰書

大谷 樸助

右御趣意筋相背不一形（あいそむきひとかたならず） 罪科二付テハ 大組中 御手廻（よぎなき）ノ内四組中 身柄願下ケノ儀申出 臣下之情實無余儀筋二付 早速被遂（とけられ）御免（おゆるし） 候得共 存分ノ所置ハ難被仰付（おおせつけられ） 御詮義筋ヲ以テ 割腹ノ上家名没収被仰付候 吏

慶応元年二月
丑二月

（なみ） 並ニ屠腹セシムヘシ 三人とも皆一様に切腹せしめるべきの意。

河上治五作

同文

右同姓範三

割腹被仰付疾受

丑二月

津田公輔

同文

右

入牢被仰付疾受

丑二月

大谷權助、割腹、御沙汰書ヲ讀ミテ曰ク嗚呼余ハ奸賊ノ爲メニ殺
殺サル武臣奸賊ノ爲メニ殺サルハ非ス君命ヲ以テ先君地下ニ殉ジタルナリ
從來本藩獄上獄下獄ニ獄アリテ士族ノ犯罪者之ヲ上獄ニ繫キ卒族
ヲ以テ監守タラシメ農工商中ノ犯罪者之ヲ下獄ニ繫キ屠兎ラシテ監守セシム

右同姓 範三

割腹被仰付候吏

慶応元年二月
丑二月

(益田家臣、下土)
河上治五作

同文

津田公輔

同文

右

入牢被仰付候吏

慶応元年二月
丑二月

大谷樸助八割腹ノ御沙汰書ヲ一讀シテ曰ク(い)嗚呼余(あ)ハ奸賊ノ為メニ
殺サル、哉や 否 奸賊ノ為メニ殺サル、ニ非スあら 君命ヲ以テ先(益田親施)君ニ地下ニ殉したがハシムルナリ
従来本藩ノ獄ハ上獄下獄ノ二獄アリテ 士族ノ犯罪者ハ之ヲ上獄ニ繋つなキ 卒族
ヲシテ監守タラシメ 農工商中ノ犯罪者ハ之ヲ下獄ニ繋つなキ 屠兎ヲシテ監守セシム

屠兎＝屠人、屠子、屠卒と同じ。牛、羊、豚などを解体する人。

本藩の上獄とは「野山獄」、下獄とは「岩倉獄」の事である。

元治二年（一八六五） 二月

ル制ナリ益田家拵テ獄ニ庶別無ク屠鬼看守ノ獄アルニナルヲ以テ
一面其獄接スモハ夜令放免セラルモ他人之ト齒スルヲ耻スルノ風アリ故公輔ハ
獄撃シテ生ヨリ寧ロ屠腹シテ死スニ如スト決心セリト雖氏親族等其天母榘子
情抗テ自ク屠腹ヲ請フ事必ス之ヲ容ルサルヲ豫想シ躊躇事ヲ移セシ
カ如斯止ムキアラハレト身事情ヲ老母ニ談ス老母涙ヲ揮テ曰ク公輔勿ニテ
父ヲ失ヒ独リ母アルニ吾男ガ子アリナリ大折セリ所謂親一人子一人ナリ
士其君ニ事ス義重シ命輕シ其入獄ニテ屠鬼ノ身ニ食セシヨリ漂然
屠腹ヲ請フシトハ又母祖先ヲ辱ノヤルモノト言フニ諸子能ク之ヲ計レト親
族其果斷ヲ敬慕シテ直ニ屠腹ヲ請願書ヲ調ヘ松原ニ藏布山厚
藏ニ召達署以テ邑政堂ニ出セリ大谷權助ハ公輔カ屠腹ヲ請願セント
スルヲ聞キ陰ニ宇野魁助ヲ遣シ言シテ曰ク夜令入獄ノ耻ヲ受クルモ生キテ
吾輩ノ宿志ヲ果シ先君ノ御遺念ヲ達スニハ吾輩明日死ス賴ニ郷

元治二年（一八六五）二月

ルノ制ナリ 益田家ニ於テハ獄ニ士庶ノ別無ク 屠兇看守ノ一獄アルノミナルヲ以テ
 一団其獄ニ投スルモノハ仮令放免セラル、モ 他人ノ之ト齒スルヲ耻スルノ風アリ 故ニ公輔ハ
 獄ニ撃レテ生ンヨリハ寧口屠腹シテ死スルニ如スト決心セリト雖トモ 親族等其老母
 ノ情ニ於テ自カラ屠腹ヲ請フノ事ハ必ス之ヲ容ルサ、ルヲ豫想シ 躊躇事ヲ移セシ
 カ 如 斯止ムヘキニアラサレハ 其事情ヲ老母ニ談ス 老母ハ涙ヲ揮テ曰ク 公輔幼ニシテ
 父ヲ失ヒ 独リ母アルノミ 吾男女二子アリ 女了夭折セリ 所謂親一人子一人ナリ
 士其君ニ事フル 義ハ重シ 命ハ輕シ 其入獄シテ屠兇ノ手ニ食センヨリハ 潔然
 屠腹ヲ請ハントスルハ 父母祖先ヲ辱メサルモノト言フベシ 諸子能ク之ヲ計レト 親
 族其果断ヲ驚歎シテ直チニ屠腹請願書ヲ調ヘ 松原仁蔵 市山淳
 蔵ノ二名連署ヲ以テ邑政堂ニ出セリ 大谷樸助ハ 公輔力屠腹ヲ請願セント
 スルヲ聞キ 陰ニ宇野魁 助ヲ遣シ言ハシメテ曰ク 仮令入獄ノ耻ヲ受クルモ 生キテ
 吾輩ノ宿志ヲ果シ 先君ノ御遺念ヲ達スヘシ 吾輩明日死ス 頼二郷

齒スル＝ならぶ、つらなる。

夭折＝早死に。

潔（けつぜん） 然＝いさぎよく。

郷＝（きょう）卿の誤り。卿は君、他人の敬称。

在^ル有^リ然^ルニ^モ郷亦^モ肩復^ラヒ^テ決^ス心^{ナリト}必^ズ斷^ス念^{セヨト}之^ヲ禁^ル事^ハ願^ハん

懇^ニ切^{ナリ}

邑政堂^ニ公輔^ノ肩腹^ヲ請願^{スル}其事情^ヲ親族^ニ尋問^{シテ}所謂^ハ鬼淚^ノ感^ラ發^シ肩腹^ヲ請願^ス御許^ニ答^{アル}バ^{カラズ}別^ニ一獄^ヲ新設^シ卒族^ヲ以^テ看^守ニ充^ツベ^{シト}指^合アリ

正午喫飯^{スル}大石^ノ撲助^ハ河上^ノ範^ニ各時刻^ノ迫^ルテ^ハ白衣^ヲ着^テ白^ク跨^リ穿^テ撲助^ニ京師^ヲ潛^ニ逃^グ中^ニ作^リ詩^一章^ヲ書^シ及^テ詩稿^一卷^ヲ婦人^{大石}氏^ノ號^ニ達^シ見^テ子^{太郎}成^長後^之與^ハニ^テ提^シ且^ニ食^ハ碌^ニ已^ニ沒^收セ^ラレ^タル^ハ後^ノ經濟^法ヲ^定メ^ル親戚^ニ依^リ嘱^シ別^ニ告^ケテ^ハ策^馬途^中簾^ヲ卷^キ微^吟シ^テ淨蓮^寺ニ^至ル^ニ範^ニ親^ニ先^ス不^存ヲ^謝シ^テ弟^妹孝^友ノ倫^理ヲ^遺訓^シテ^ハ別^ニ告^ケテ^ハ法隆^寺ニ^至ル^ニ

淨蓮寺

在ル有リ 然ルニ郷（郷）亦屠腹（とぶく）ヲ乞フ（こ）ノ決心ナリト 必ス断念セヨト之ヲ（これ）禁ムル事（こと）頗ル（すこぶ）懇切ナリ

邑政堂八公輔（津田）ノ屠腹請願アルヤ 其事情ヲ親族ニ尋問シテ所（い）謂鬼涙ノ感ヲ發シ 屠腹請願書ハ御許容アルベカラス 別ニ二獄ヲ新設シ 卒族ヲ以テ看守ニ充ツ（あ）ヘシト指令アリ

正午喫飯（三月一日）了ルヤ大谷樸助 河上範三八各時刻ノ迫ルヲ以テ 白衣ヲ着 白跨（袴）ヲ穿（う）チ 樸助ハ京師潜匿中作ノ詩一章ヲ書シ 及詩稿一卷ヲ婦人 大谷氏虎二遺シ（こ）児午太郎成長ノ後 之ヲ與ヘンコトヲ（託の調子）拵シ 且食禄（か）已（禄已すて）ニ没収セラレタレハ 今後ノ經濟法ヲ定メテ縷々（る）親戚ニ依嘱シ 別ヲ告ケテ乗駕シ 途中簾ヲ卷キ 微吟（微）シテ浄蓮寺ニ至ル 範三八二親ニ先スル（河上）ノ不孝ヲ謝シ 弟妹ニ孝友ノ倫理ヲ遺訓シテ別（わかれ）ヲ告ケ 法隆寺ニ至ル

浄蓮寺

頼二郷（郷） 在ル有リニ頼むのは君だ。

（つが）
穿チニ着る。

京師潜（せん） 匿中作ノ詩一章「辞世の詩」 満城雲霧太陽微 東去西奔事総違 孰惑君冤直兼曲 不知天道是耶非 敢尋死処何無処 欲得時機復失機

曲首海涯家更遠 三年風月在京畿 大谷実徳

詩稿一卷ヲ婦人 大谷氏子二遺シニ 満城雲霧太陽微 東去西奔事総違 孰惑君冤直兼曲 不知天道是耶非 心何以震皇威 敢尋死処何無処

欲得時機復失機 曲首慷慨海涯家 更遠三年風月在 夢為正義鬼 千秋万古護京畿 實徳

浄蓮寺ニ次頁参照

法隆寺ニ須佐町浦中。松雲山。真宗。浄蓮寺末寺。浄蓮寺四世教西の時、益田家から松原に五畝の地を賜り、元禄五年（一六九二）に創建されたが明治五年現在地に移った。従って須佐内訌事件当時は現在地ではなく、松原にあった事になる。

元治二年（一八六五） 三月

檢使 金子新藏

今 松原宗兵衛

陸目附 品川平助

打廻 瀬尻組 彌助

介錯 大塚浪江

法隆寺

檢使 仁保嘉内

今 松原茂一郎

陸目附 石川與惣兵衛

打廻 須藤組 徳右衛門

介錯 柴田筆吉

以英雄誓古人教、兩寺へ參觀、不平、内命有り也、強團員大半

元治二年（一八六五）三月

検使

金子新蔵

全^{かち}陸目附

松原宗兵衛
品川平助

打廻り

瀬尻組 彌助

介錯

大塚浪江

法隆寺

検使

仁保嘉内

全

松原茂一郎

陸目^{かち}附

石川與惣兵衛

打廻り

須佐地組 徳右衛門

介錯

柴田筆吉

育英館稽古人数八両寺へ參觀スヘキノ内命アリ 北強團員大半

陸目附（かちめつけ）＝

打廻り＝各役職に追従した従者にして、探聞、報告、聴訴、警戒などをする人。（「もりのしげり」287頁、294頁）

浄蓮寺＝須佐町松原。高照山。真宗。応安五年（一三七二）工藤左近太郎信元が本願寺善如上人に帰依して念旨と号し、田万崎村（現田万川町）に創建したが、後、須佐上三原吉ヶ浴に移り、五世教順の時、本願寺に請うて高照山浄蓮寺と号した。毛利・尼子両氏の争いでは毛利氏の将、小早川隆景が数度宿泊して寺領四石を受け、また関ヶ原の戦後の混乱期には、益田氏須佐移転に際して、その子女が一時身を寄せた。寛永十三年（一六三六）益田氏によって現在地に移されたが、寛文三年（一六六三）炎上した。現在の本堂は弘化三年（一八四六）に改築されたものである。（出典＝「須佐町誌」6

94頁）

来場セリ夕七時孰モ従容自若トテ肩腹ニ大谷樸助ニ享年三
有八河川範三ニ享年三十五

辞世

大谷樸助

寒北身を忍ミ侍レ久ク来ラハ汝モ

後ト多人ヲ思ヒ知ルウメ

全十國融藏
第ニ贈ハ

河川範三

阿ヤオチナヒ志アリ山阿リトモクモアヒ

教アリ心身ト有ル一ノオモサレ

又大谷樸助津田
公輔ニ贈ハ

幾度ウシ水カネリイコウスル此

サニ流サ一モヤモヤツカサレ

今ヤミカレノ盃丁監ミテ曰キ跨ル程也

来場セリ（午後四時） 夕七ツ時 孰いづレモ從容（しやうようじやく）自若トシテ屠腹ス 大谷樸助八享年二十
有八 河川上範三八享年二十有五

辞世

大谷樸助

露の身を君にさゝくるまこゝろは
後こそ人の思ひ知るらめ

仝小園融蔵
翁二贈ル

河上範三

あやまちはひしりもありときくものを
数ならぬ身をゆるしたまはれ

又

大谷樸助 津田
公輔二贈ル

幾度が生れかはりてわが君の

みこゝろさしをとみにいかはや

今やわかれの盃に臨みて 白き袴の（よそあい）粧を

（しやうようじやく）
從容 自若 從容はゆつたりと落ち着いたさま。 自若は物事に臨んで精神状態が少しも変わらないこと。 心が落ち着いて動じないこと。

あかめい

勇中一也生まじき老ゆ之犯本や山

資俊

まふたのむ花は法かりを

俊懐

河上範三父治五作

資雅名ヲ曰文ト云ヒテ

曾テ誦句ニ知アリ

元治二年（一八六五）三月

なかめて

勇ましや生きて春ゆく死出の山

資俊（河上治五作）

ともにたのしむ花のさかりを

俊慎（河上範三）

河上（益田家臣 下士）範三ノ父治五（河上治五作）作資俊ハ雅名ヲ白交ト云ヒテ

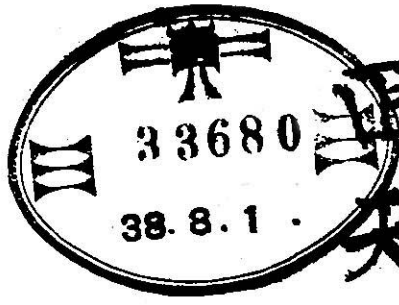
曾テ誹句二名アリ

回天實記

下



共此舟車



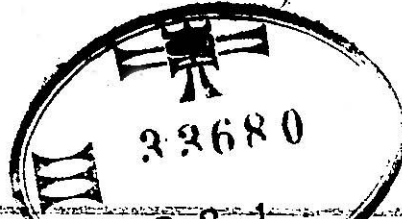
實記

下

共貳冊 明治三十年八月一日送達

回天實記

下



田天實記下卷

津田公輔カ屠腹ノ請願邑政堂ニ於テ採用セシ別ニ新獄舎ヲ構築ス
 決シ公輔ノ宅中ニ於テ室ヲ借上ケ周ス方四寸柱ヲ密植シテ之ニ禁錮
 スル旨ヲ其親族ニ令シ直ニ工事掛員ヲ出張セシメ實地取調ノ事
 其同月二日ナリ然ルニ日夕ニ至リ千城隊國負直人佐久間勇能佐
 久間祿右衛門ハ岩藤五藏ヨシカズ等未須セリ初田天軍ノ隊命ニ
 依リ三浦政衛内山茂樹等其田萬村ニ派出歸途ニ赴キ右論堂ノ
 警戒頗ハ厳シテ遂ニ心光寺本堂ニ入ル能ク且大谷樸助河上範
 三津田公輔等就縛ノ舌評屢々耳染ニ觸ルヲ以テ知斯事情切迫
 ナニ至リテ怒ニ帰營策ヲ講シ徒ラニ其圍中ニ陷ルニ復虫燈火ニ狂奔
 セル一般ノ令ヨリ萩千城隊ニ至リテ外ヨリ勢援事ヲ圖ラニ若クモ遠
 轉シテ福田村ニ出テ紫福ヲ經テ救城ニ着スルハ恰モ好シ村岡孝一郎

元治二年（一八六五）三月

回天實記 下巻

津田公輔（益田家臣、侍御）力屠腹とぶくノ請願八邑政堂ニ於テ採用セス 別ニ新嶽（こくしゃ）舎ヲ構造スルニ
 決シ公輔（津田）ノ宅中ニ於テ一室ヲ借上ケ 周（めく）ラスニ方四寸の柱ヲ密植シテ之これニ禁錮
 スルノ旨ヲ其親族ニ令シ 直ニ工事掛員ヲ出張セシメテ實地取調ノ事アリ
 是（これ）同月二日ナリ 然ルニ日夕ニ至リ干城隊 國貞直人（萩藩士、干城隊頭取） 佐久間勇熊（干城隊員、遠近組） 佐
 久間禄右衛門（干城隊員、御徒組） 八谷藤吾（干城隊員） 湯川丑兵衛等来須セリ 初メ回天軍ノ隊命ニ
 依リ三浦政衛（益田家臣、回天軍） 内山茂樹等（益田家臣、回天軍） 其田萬村ニ派出 其歸途ニ赴クヤ俗論黨ノ
 警戒頗ル厳ニシテ 遂ニ心光寺本営ニ入ル能ハス 且ツ大谷樸助（益田家臣、中士、御手廻組） 河上範
 三（側役） 津田公輔等就縛（しゅうばく）ノ世評 屢々耳朶ニ觸ル、ヲ以テ 如斯事情ノ切迫
 ナルニ至リテハ 愁なまじニ帰營ノ策ヲ講シ 徒ラニ其圍中ニ陥ルハ夏虫ノ燈火ニ狂奔
 スルト一般ナリ 今ヨリ萩干城隊ニ至リテ外ヨリ勢援ノ事ヲ圖はかランニハ若スト途ヲ
 轉シテ福田村ニ出テ 紫（しづき、現阿武郡福米村） 福を経テ萩城ニ着スレハ 怡（あたか）モ好シ村岡彦十郎

佐久間勇熊〃「佐藤」の誤りか。次頁終わりから3行目参照。或いは次頁の「佐藤」は「佐久間」の誤りか。

紫福（しづき）〃現阿武郡福栄村福紫。県道一〇号線（山口福栄須佐線）沿いの村、萩より10*。標高二百メートル。往古「志布岐」と訓す。久しく津和野三本松城主吉見氏の所領。関ヶ原後、萩本藩領となる。主産業は農業、林業で裕福村。

歸宅セリ相與ニ千城隊本陣堀内ニ至リ田天軍實況ヲ具陳セリ茲ニ
於テ千城隊ノ國貞直人ト四名ノ須佐急行ノ事ヲ命ス故ニ一行ノ須佐
邑ニ入リ先ツ竹内酒肆ニ息ヒ正俗ニ派近況ヲ尋問セリ然レニ大谷樸助
河上範三昨朝日既ニ死セリ津田公輔ニ三月中ニ入獄スヤシ其外親族
須ケトモ由ラ答エタリ國貞直人尋長大息シテ曰ク嗚呼吾輩隊ニ
後ニ二名エラ失ヘリ吾輩昨日未須セ山宣大谷河上ヲ死セシメヤト相見テ
嗟然タリシカ辭去リテ本所須山平助迄ニ投宿シ八右湯川ノ二名事情報
道多ノ山名向テ彙程シ國貞氏ニ邑政堂ニ未須ノ事ヲ通報津田公
輔ノ函内ヲ解キ旅寓ニ至シシタ事ヲ其親族告グ是ニ於テ公輔ノ本
所須山ニ至リ國貞佐藤等ニ面接シ其身問ニ應ヒ辭鮮ニ田天軍ノ
實況ヲ速陳セリ國貞尋大谷樸助河上範三ノ冤罪ニ死セリヲ憾ミ
切齒振腕スルモ詮無テ曰ク卿ノ幸ニ危運ヲ免ヒタリ予等邑政堂ニ

歸宅セリ 相與(あいとも)二干城隊本陣堀内二至リ回天軍ノ實況ヲ具陳(ぐちん)セリ 茲二
 於テ干城隊八國貞直人外四名二須佐急行ノ事ヲ命ス 故二此(この)一行ノ須佐
 邑二入ルヤ 先ツ竹内酒肆二息ヒ 正俗二派ノ近況ヲ尋問セリ 然ル二大谷 樸助
 河上範三ハ昨朔(さくじつ)日既二死セリ 津田公輔ハ二三日中二入獄スベシ 其他ハ親族
 預ケトナル由ヲ答エタリ 國貞直人等長大息シテ曰ク 嗚呼吾輩機二
 後レテ二名士ヲ失ヘリ 吾輩昨日來須セハ豈大谷 河上ヲ死セシメンヤト 相見テ
 愀然タリシカ 辞去リテ本町須山平助宅二投宿シ 八谷 湯川ノ二名ハ事情報
 道ノ為メ山口ニ向テ發程シ 國貞氏ハ邑政堂ニ來須ノ事ヲ通知シ 津田公
 輔ノ幽囚ヲ解キ旅寓二至ラシムル事ヲ其親族二告ク 是二於テ公輔ハ本
 町須山ニ至リ 國貞 佐藤等二面接シ 其ノ尋問ニ應シテ 詳ニ回天軍ノ
 實況ヲ陳述セリ 國貞等大谷 樸助 河上範三ノ冤罪ニ死セルヲ憾ミ
 切齒振腕スルモ詮無ナシ 曰ク郷八幸二危運ヲ免レタリ 予等邑政堂ニ

相與（あいとも）ニ＝一緒に連れ立って。「與」＝仲間になる、ともにする、つれだつ。

具陳＝つぶさに述べる

酒肆（しゆし）＝酒屋、酒店。『武江年表』（ちくま学芸文庫版）では「さかや」とルビを打っている。

愀然＝愁然。愁々。うれえるさま。

國貞以下が須佐に来るまでに、須佐から本藩へ報告しなかった理由は如何に。

佐藤＝佐久間の誤りか？

元治二年（一八六五） 三月

迫り卿^カ一身^ヲ千城隊^ニ預^{リテ}歸款ス^ニ歸宅^{シテ}其淮^ノ端^ヲナス^ニレト

夜九^ツ時^ニ至^リ松原^ニ藏宅^ニ歸^ル

同四^日幼主^ヲ精次^郎君^ニ仙相^院君^ニ山口^ニ政布^ノ御家^ヲ督^ル歟^ノ願^フ爲^リ

發^{セラル}益田^{三郎}尤衛^門栗山^公翁^ヲ輔^ル增野^又十郎^等隨行^{セリ}蓋^シ國

負^テ爲^ル未^レ須^ニ會^シ從來^ノ暴政^ヲ痛^ク與^テ其^ノ答^ヲ辨^シ要^{セラル}ノ事^{ナリ}

アラン^ノ慮^リ一時^ノ難^ヲ逃^レ傍^ニ仙相^院君^ノ威光^ヲ借^リ本^ノ藩^ノ政^ヲ督^ル員^ニ

接^{シテ}正俗^ノ分界^ヲ混^乱セ^{ントスル}ノ計^ヲ略^{アリテ}俄^ニ御發^駕ヲ促^シタリ

モノナリ同五^日山口^ニ御着^駕アリテ暨^ニ小路^中野新^目方^ヲ御施^座館^ト

定^メソラル

同七^日國^ノ負^ル邑^ニ宰^シ其他^ノ重役^ノ者^ノ不在^{ナル}ヲ以^テ軍務^ヲ總^ル督^ス

增野^與次^照會^{アリテ}津田^公輔^ヲ携^リ魚船^ヲ雇^{ヒテ}四^ツ時^ニ出帆^シ歸款^ス

ヤリ然^ルニ此^日天候^ニ變^{シテ}逆風^トナリ船行^ハカラサレ^ニ奈古^村ニ止陸^シ伊

藤酒肆に投宿セシ夕七時半ナリ晚酌ノ際主人ノ話中ニ本日于城隍
ヨリ騎馬ニ三四名乗着アリ中村某ニ泊リテ明朝須佐行ノ申ナリト云リ
國貞等急ニ饌ヲ撤セシ中村ニ至テ猶崎八十捷植井次郎外石
ヲ其何故ニ来レリト問フ郷等歸營ノ邊ニタルヲ以テ甚タ掛念セリ且
世子君ノ御内命セアリテ須佐行ニ決セリト答フ國貞ハ須佐思ノ實
況ヲ細語シ席上津田公輔ヲ指シテ曰ク此壯士殊々奸賊等ノ虐ノミ殺カ
入獄ノ期且タメニ在リ僕等携リテ歸リ相與ニ佐吏ノ專横ヲ憤リ
誣數刻ニ涉ル于時圓天軍惣員亦藩同上ナラズ所置スル事能ハサル
事ヲ約シタルニ毫モ掛念無ナシ猶崎等ノ須佐行ニ徒易ナレバカノ
説アリシモ結極須佐行上圓天軍惣員ヲモ願リ歸ルハヒト事ニ決シ
國貞等伊藤藤族属ニ歸リ夜已ニ五更ナリ
同八月國貞一行ニ奈古出發九ツ時萩御城内于城隍本陣ニ

藤酒肆^(しゅし)ニ投宿セシハタ七ツ半時^(午後五時)ナリ 晩酌ノ際主人ノ話中ニ 本日干城隊^(よし)

ヨリ騎馬ニテ三四名来着アリ 中村某ニ泊シテ明朝須佐行ノ由ナリト云ヘリ

國貞等^(せん)急ニ饌^(せん)ヲ撤セシメ 中村ニ至レバ 榑崎八十槌^(榑崎八十槌) 榑^(榑) 埜次郎^(埜次郎)外二名

ナリ 其何故^(その)ニ来レルヲ問ヘハ 郷等^(郷)歸營ノ遅々タルヲ以テ甚^(はなは)タ掛念セリ 且ツ

世子君^(毛利元徳)ノ御内命モアリテ須佐行ニ決セリト答フ 國貞氏須佐邑ノ實

況ヲ細話シ 席上津田公輔^(益田家臣、侍御)ヲ指シテ曰ク 此^(この)一壮士^(い)殆^(ほとんど) 奸賊等^(い)ノ為ニ殺サル

入獄ノ期旦^(たんせき)タニ在リ 僕等^(たすき)携^(たすき)ヘテ歸ヘリト相與^(あいとも)ニ俗吏ノ專横ヲ憤^(いきどお)リ

談数刻ニ渉^(わたる)ル 于時^(とき)囧天軍^(いささか)惣員^(総)八本藩伺ノ上ナラデハ所置^(お)スル事能^(あた)ハサル

事ヲ約シタレハ 毫^(いささか)モ掛念無ナシ 榑崎等^(榑崎等)ノ須佐行ハ徒勞ナルベキカノ

説アリシモ 結局須佐行ノ上囧天軍^(総)惣員ヲモ預リ歸ルヘシトノ事ニ決シ

國貞等^(す)八伊藤旅寓ニ歸レリ 夜已ニ二五更ナリ

同八日^(三月) 國貞一行八奈古^(現阿武町)出發^(正午) 九ツ時萩御城内于城隊本陣^(干)ニ

酒肆 155頁脚注参照。

饌 酒食。飯食。

于時 時に。于是「…」に於て「に」「を」「より」。又「ここに」の訓、「此」と同じ。

五更 明け方。117頁脚註「三更」参照。

元治二年（一八六五） 三月

着し津田公輔モ同所、滞在ス

猶崎一行須佐本町須山平助宅に着し直に政堂談判し、當時
親族預ケト為リタル田天軍惣員ヲ伴ヒテ歸蘇スベキ決シ之ヲ惣員

ニ通告ス

同九日田天軍惣員ハ親族預ケヲ解放セラレ就シモ須佐ニ来会セリ

同十日朝出嚴ヤ小國融藏曾テ大谷權助等ト氣脈ヲ通シ是

政堂ニ在リテ内應ヲスベキ約アリシカニ就縛後果ニテ俗論堂ニ疑

大播介セラレ依リ其結果恐レベキト猶崎氏ハ内意モアリテ回天軍

惣員ヲ脱走、事ヲ勸告シテ同伴シ日ヲ暮著古教法福壽寺、帶

在、津田公輔モ不城隊評口得テ法福壽寺来会シ今後運動

ノ目的ヲ相議ス、小國融藏津田公輔等意見相投合シ與生

賛成セルヲ以テ且山王寺ヲ往テ方針ヲ定メ大ニ厚ス所ニテ決斷

元治二年（一八六五）三月

二着シ（衍） 津田公輔（益田家臣、侍御）モ同所ニ滞在ス

榑崎一行ハ須佐本町須山平助宅ニ着シ（ただち） 直二邑政堂ニ談判シテ 当時
親族預ケト（な）為リタル囧天軍惣員（総）ヲ伴ヒテ帰萩スベキニ決シ 之ヲ（これ）惣員
ヘ通告ス

同九日（三月） 囧天軍惣員（総）ハ親族預ケヲ解放セラレ 孰（いず）レモ須佐ニ来会セリ

同十日 朝出發セリ（育英館学頭、軍監） 小國融蔵（益田家臣、中士、御手廻組）ハ曾テ大谷樸助等ト氣脈ヲ通ジ 邑

政堂ニ在リテ内應ヲナスベキノ約アリシカ 三（大谷樸助、河上範三、津田公輔） 士就縛（しゅうばく）ノ後ハ果シテ俗論堂（黨）ニ疑レ

大ニ擯斥セラルニ依リ（ひんせき） 其結果恐ルベキベケレバ 榑崎氏ノ内意モアリテ 囧天軍

惣員（総）ヨリ脱走ノ事ヲ勧告シテ同伴シ 日夕萩着 古萩法福寺（三月十日）ニ滞

在ス 津田公輔（益田家臣、侍御）モ干城隊ノ許可ヲ得テ法福寺ニ来会シ 今後運動

ノ目的ヲ相議スルニ 小國融蔵（育英館学頭、軍監） 津田公輔等意見相投（あい）合シ 舉坐（あ）

賛成セルヲ以テ一旦山口ニ至リ 徐々方針ヲ定メテ 大ニ為ス所アルベシト決断セリ

擯斥（ひんせき）＝しりぞけてのけものにする。

法福寺＝北古萩「保福寺」の誤り。曹洞宗。開山は海潮寺十三世白巖。元和ごろの創建。明治七年海潮寺に合併。地藏堂が残る。（「萩市史」第一巻3

32頁）

舉坐＝拳座。居合わせた者こそって。

初ノ村岡彦十郎三浦政衛内山茂樹等ノ千城隊ニ展張ノ事ヲ意
ルヤ同隊ニ計リテ更ニ山口ニ至リ運動ヤ然ルニ幼君御旅館ニ疾ク之ヲ探知
スル者アリテ隨行ノ内中村泰一外一名ヲ三士ノ旅寓ニ遣シ去リソノ曰ク備
度幼主仙相院君当地ニ御来駕アリシニ就テ回天軍ノ御所置寛
大ニセラルノ思召ナレハ郷等御旅館ニ未寓アルベシ然レハ御帰邑ノ日ハ
供奉ヲモ命セラルベシト事ナリ郷等以此恩命ニ背カズハ今日同行
スヘシト彦十郎等曰リ不肖彦十郎等一身ヲ千城隊ニ抱セリ故ニ自
申ノ舉動ヲ成ス能ハレハ其命ニ應シ難シト泰一等辭シテ去ル
其後村岡彦十郎等湯田ノ轉寓潜伏セシニ御旅館ニ又中村泰一
尾木七郎左衛門西尾壯助等ニ命シ湯田在寓于城隊寺内暢三
氏ヲ訪問シ村岡彦十郎等ノ所在ヲ尋ネシニ寺内ノ不知ヲ以テ答ケリ
泰一等曰ク幼主人当地ニ未駕ニテ回天軍既往ノ罪科ニ不問計セリ

初メ村岡彦十郎（益田家臣、回天軍） 三浦政衛（益田家臣、回天軍） 内山茂樹等ノ干城隊ニ飛報ノ事ヲ竟（おわ）
ルヤ同隊ニ計リテ更ニ山口ニ至リ運動セリ 然ルニ幼主君御旅館ニハ疾ク之ヲ探知（と）（これ）
スル者アリテ 随行ノ内中 村 泰 一 外一名ヲ三 士ノ旅寓ニ遣シ云ハシメテ曰ク 當
度幼主 仙相院君当地ニ御来駕アリシニ就テハ 回天軍ノ御所置ハ寛
大ニセラル、ノ思 召ナレハ 郷等御旅館へ来寓アルベシ 然レハ御帰邑ノ日ハ
供奉ヲモ命セラルベシトノ事ナリ 郷等此恩命ニ背カズンハ 今日同行
スヘシト 彦十郎等曰ク 不肖彦十郎等一身ヲ干城隊ニ托セリ 故ニ自
由ノ舉動ヲ成ス能ハサレハ 其命ニ應シ難シト 泰一等辞シテ去ル
其後 村岡彦十郎等湯田へ轉寓（湯田、山口市） 御旅館ニハ又 中村 泰 一
尾木七郎左衛門 西尾 莊助等二命シ 湯田在寓于城隊 寺 内 暢 三
氏ヲ訪問シ 村岡彦十郎等ノ所在ヲ尋ネシニ 寺内ハ不知ヲ以テ答タリ
泰一等曰ク 幼主人当地へ来駕ニテ 回天軍既往ノ罪科ハ不問ニ附セラル、

不（ふしよ） 肖（しやう） 親に似ないで愚かなこと。自分の謙称。

湯田＝山口市内、湯田温泉。

不知（いせ）＝さあ、どうであらうか。

同十三日圓天軍惣旨^口至^リ讀^ル并^ニ町某宅^ニ寄寓^ス小國融藏^ノ関三

同古三國志跡孰モ家督相續食録復旧弁令アリ我益田家

幼主君代理ヲ完道備中殿ニ依頼せしむ毛利得監殿ヨリ命ヲ傳フナレ

尚支族益田石見周布治部ニ以テ後見タラシムノ事ヲ達セラル

津田公輔号一遊擊軍敷島治郎善次郎鴻城軍上四郎本名平川

equal assistance please to be made every effort to
周布沼部殿ニ迫テ

國天軍用興、周施ヲ諾セシム

同六日幼主君仙相院君宮御飛駕生雲村御一泊十九日孫富村御一

元治二年（一八六五）三月

事二決セリ（村岡）等カ彦十郎ノ身上ニ係リ（いささか）豪モ関心ノ事アルベカラズ（中村）泰一等保証スベシ
 此旨趣御承知ノ上（も）若シ御面会アラハ懇々御説諭相成リテ返サレンコトヲ
 請フト委嘱シ去レリ（いしよ）

同十三日（三月） 田軍惣員山口ニ至リ（総） 讃井町某宅ニ寄寓シ（さないまち） 小國融蔵八岡三（育英館学頭、軍監）
 橋二僭匿ス（潜）

同十四日（三月） 三（益田親施、福原越後、国司信濃） 老ノ跡孰レモ家督相續 食録復旧ノ発令アリ 我益田家ハ（わが）
 幼主君ノ代理ヲ完道備中殿ニ依頼セラル 毛利将監殿ヨリ命ヲ傳ヘラレ（益田精次郎）
 尚支族益田石見周布治部二氏ヲ以テ後見タラシムルノ事ヲ達セラル（益田親施の義兄）

津田公輔等ハ遊撃軍敷嶋治郎（益田家臣、侍御） 鴻城軍河上四郎（敷嶋、河上） 等ノ援助ヲ請ヒシニ 二土相奮テ奔走尽力セリ 遂ニ周布治部殿ニ迫テ
 田軍再興ノ周施ヲ諾セシム（旋）

同十八日（三月） 幼主君（益田精次郎） 仙相院君山口御発駕（益田元宣室） 生雲村御一泊（現阿東町） 十九日（三月） 弥富村御一（現須佐町）

岡三橋「小国の学友岡竹城のこと。（松本二郎著「津田常名翁の伝記」80頁、「三決死」の項参照）学友というのは次の事から松下村塾での交友関係と思われる。即ち 岡守節、通称彦太郎、山口御堀の医、岡明甫の一子なり。書を善くし初め竹城と号し、のち三橋と改む。土屋蕭海と親しく因つて屢々松下村塾を訪い松蔭の教えを受く。維新の後太政官に出仕し累進、内閣書記官に至る。明治二十七年一月十五日没す。年六十二。（『増補近世防長人名辞典』72頁）

益田石見「寄組益田家（小郡陶、前大津三隅津黄一〇六七石。始祖は益田玄蕃頭元祥五男就景）益田樸村のこと。名は親孚、通称主水、石見、源兵衛。梅村と号す。文化十年生まれ。明倫館に学ぶ。学を山県太華に受け、又東遊覽を大槻磐溪に執る。文久元年八組頭、後寄組被仰付。明治の初め毛利家令たりしが翌年罷め家居徒に授く。明治二十四年石見鹿足郡畑迫に移る。笹谷鉱山支配。明治三年三月三十一日卒。八七才。妻は益田元宣二女勝子。よつて益田親施の義兄に当たる。（『石見諸家系図b録』114頁、「増補近世防長人名辞典」222頁）

周布治部

泊ヲ須佐御着ナリ

同廿日周布治部殿ハ覺書目ヲ出セリ

覺

一大谷實經河上範三ヲ忠死ニ被仰付度矣事

一田天軍ニ集場儀ニ田萬村ニ仰付度矣事

一田天軍ニ關係諸隊之者五六人同伴ニテ直様ニ集場ハ

着可到矣事

一組士入隊被差許度矣事

一田天軍總人數御賄相成度矣事

三月廿日

茲ニ千城隊ノ勢援敷嶋河平等ノ奔走アリ周布治部殿モ亦周施、
弟ヲ執ラント約セシ據リ一旦帰邑ニテ田天軍復興ノ事決セシモ幼主君仙

泊ニテ 二十日 須佐御着ナリ おつき

同廿日 (三月) 周布治部殿へ覺書ヲ出セリ

大谷實繼 徳 河上範三ヲ忠死ニ被仰付度候事 (おおせつけられたく)

回天軍屯集場ノ儀八下田萬村ニ (現田万川町) 仰付度候事 被

回天軍ニ關係諸隊之者五六人同伴ニテ直様屯集場へ (すぐさま)

着可到候事 致

組士入隊被差許度候事 (さしゆるされたく)

回天軍惣人数御 賄 相成度候事 (まかない) (あいなり)

三月廿日

茲 (こゝ) 二千城隊ノ勢援 敷嶋 河上等ノ奔走アリ 周布治部殿モ亦周施 (また) 幼主君 (益田精次郎) 仙

勞ヲ執 と ラント約セルニ據 (よ) リ 一旦歸邑 (須佐) シテ回天軍復興ノ事ニ決セシモ

二十日 須佐御着ナリ 〃 の部分は文書館本には「二十日」と記述されている。

大谷實繼 〃 大谷実徳 (模助) の誤り。實繼は模助の嫡男である (文書館本は「大谷模助」と記述している)。この誤記は「尊攘堂本」と「文書館本」が津田常名の自筆ではない決定的証拠である。且つ外に「親施」「親旋」「生雲」「出雲」など須佐の人なら犯さない誤記がある事を併せ考えると他藩の麗筆家に浄書させたものと考えられる。

元治二年 (一八六五) 三月

相院君、山口滞在中隨行、俗吏等常ニ本藩政府員ニ接シテ烏鷺
辨ラ逞シ正俗ノ痕跡ヲ錯雜セシメタリシヲ以テ歸邑ノ後容易ニ正氣恢
腹、實効ヲ奏スヘカラサルノ遠慮アルニ依リテ村岡彦十郎始メ六名ノ
奇兵隊ニ入隊シテ隊カラ借リタヨリ應援ヲ為スベキ、策決シ當時
山口在陣ノ奇兵五番銃隊ニ率リ入營セリ

村岡彦十郎事

五番銃隊

英次郎本真

今上

山下範三郎安邦

墨谷稼四郎事

今上

玉川小文吾記政

藤田篤助事

三番銃隊

櫻山隼人其方懷

元治二年（一八六五）三月

相院君（益田元重室）ノ山口滞在中随行ノ俗吏等 常二本藩政府員ニ接シテ 烏鷺（うるろ）
ノ辨ヲ 逞（たくましく）シ 正俗ノ痕跡ヲ錯雑（ごんせき）（さくざつ）セシメタリシヲ以テ 帰邑（きよ）ノ後 容易ニ正氣恢
腹（はら）ノ實郊（そく）ヲ奏スヘカラルサルノ遠慮アルニ依リテ 村岡彦十郎（益田家臣、回天軍）始メ六名ハ
奇兵隊ニ入隊シテ隊力ヲ借り 外ヨリ應援ヲ為スヘキノ策ニ決シ 當時
山口在陣ノ奇兵五番銃隊ニ至リ入營セリ

村岡彦十郎事（益田家臣、回天軍）

五番銃隊

英次郎本眞（益田家臣）

全上

山下範三郎安邦（益田家臣）

黒谷豫四郎事（益田家臣、中士、御手廻組、回天軍）

全上

玉川小文吾記政

藤田篤助事（益田家臣、回天軍）

三番銃隊

櫻山隼人芳懷

烏鷺（うるろ）ニからすとさぎ。黒と白。

五番銃隊

岡部東三定一

今上

金山義十郎忠真

同廿二日周布治部殿敷嶋次郎河上四郎等同伴同志五人
口出發生雲通ッ上小川村ニ至リ同所ヨリ圓天旗ヲ翻シテ上田島村
歸リ玉林寺ニ定マ

同廿六日周布治部殿敷嶋河上等惣員ヲ率ニ出須シテ圓天軍由
立認許ラ邑政堂ニ追ヒ邑政堂ニ士族各級ニ向テ意見ヲ上申セシム
ナリ頗ル混雜セリ

周布治部殿口演書

一 大石權助河上乾三初奔正義之廉ヲ以テ格別之御詮
義被仰付跡式被差立在様奉願在交

一 圓天軍一應分散被仰付在處以度改而右之隊被差

五番鈍隊
全上

岡部東三定一
金山義十郎忠真

(三月)
同廿二日 周布治部殿 敷嶋次郎 河上四郎等同伴 同志十四人 山
口出發 生雲通り上小川村二至り 同所ヨリ回天ノ旗ヲ翻シテ上田萬村
二歸リ玉林寺二屯ス

(三月)
同廿六日 周布治部殿 敷嶋 河上等惣員ヲ率ヒ 出須シテ回天軍再
立ノ認許ヲ邑政堂二迫ル 邑政堂八士族各級二向テ意見ヲ上申セシムル
ナト頗ル混雜セリ

周布治部殿口演書
一 大谷樸助 河上範三 初発正義之廉ヲ以テ 格別之御詮
(益田家臣、中士、御手廻組) (益田家臣、側役) (議)(おせつけられ) (あとしき) (さしたてられ) (ねがいたてまつり) (おせつけられ) (あおせつけられ) (こたび) (あらためて) (さしたて)
義被仰付 跡式被差立侯様奉 願候事
一 回天軍一應分散被仰付候處 此度改 而右之隊被差

玉林寺 現田万川町大字上田万八幡。浄土真宗本願寺派。開基は広因。永正一四年(一五一七)に上田万村中山(上組山下家付近)に一寺を創建した。
二代目宗円の時、慶長四年(一五九九)中山より現在地の八幡へ移転した。四代目林西(林斎ととも)の代の宝永三年(一七〇六)西本願寺より玉林寺の
寺号を免許さる。明治三一(一八九八)四月十九日、上田万の大火で本堂、庫裏の一切を焼失。明治三十三年十月に本堂再建、今日に至る。須佐町浄蓮
寺の末寺。(田万川町史)

回天軍一應分散被仰付候處 回天軍分散の命は慶応元年二月二十四日(111頁参照)。

元治二年(一八六五) 三月

ニ着シ津田公輔モ同所ニ滞在ス

猶崎一行ニ須佐本町須山平助宅ニ着シ直ニ是政堂ニ談判シテ當時
親族預ケト爲リタル田天軍惣員ヲ伴ヒテ歸嶽スベキ決シテラ惣員

ニ通告ス

同九日田天軍惣員ニ親族預ケラ解放セラレ就レモ須佐ニ来会セリ

同十日朝出嶽ヤリ小國融藏ニ曾テ大谷樗助等ト気脈ヲ通シ是

政堂ニ在リテ内應ヲスベキ約アリレカニ就縛後果ニテ俗諺堂ニ疑

大橋下ヤリ依リ身結果恐ニベキベキニ猶崎氏ノ内意モアリテ回天軍

惣員ヲ脱走ノ事ヲ勸告シテ同伴レ日リ執着古教法福寺ニ滞

在ス津田公輔モ不城隊評可ラ得テ法福寺ニ来会シ今後運動

目的ヲ相議スル小國融藏津田公輔等意見相投合シ與テ生

賛成セルヲ以テ且山ニ至リ後々方針ヲ定メテ大ニ度ス所ニベシト決斷

元治二年（一八六五）三月

立候様奉^{（ねがいたてまつり）} 願候^{（もつとも）} 尤^{（もつとも）} 再隊之義^{（義）} 二付^{（義）} 何隊ト改替仕度^{（あらためがえつかまつりたくば）} 八其^{（その）}
節^{（いたり）} 二至^{（さしゆるされ）} 被差免候様奉^{（ねがいたてまつり）} 願候事^{（義）}
屯集場ノ義^{（ありがた）} 八如何被仰付候哉^{（いかが）} 願^{（ねがわ）} 下田萬村^{（現田万川町）} 二被仰付候^{（おおせつけられ）} 八、
奉難有^{（ありがた）} かり候事^{（ママ）}
組士拾式人^{（これまで）} 八是^{（ゆきなり）} 迄ノ行成トシテ入隊被差免候様^{（さしゆるされ）} 御詮義^{（議）}
可被下候^{（もつとも）} 尤^{（もつとも）} 入隊中ニテ組役當番之節^{（まかりかえりたく）} 八出勤被仰付^{（おおせつけられ）} 非番
之節^{（いそぎ）} 八 右隊へ罷^{（まかりかえりたく）} 歸度^{（いそぎ）} 又^{（いそぎ）} 八急^{（いそぎ）} 出張之節^{（いそぎ）} 八組士拾式人丈^{（いそぎ）} 八
隊中ヨリ出張被仰付候様奉^{（おおせつけられ）} 願候事^{（ねがいたてまつり）}
屯集人御^{（おんまかない）} 賄^{（おおせつけられ）} 二被仰付候様奉^{（おおせつけられ）} 願候^{（ねがいたてまつり）} 無左而^{（さなくて）} 八 往々^{（ゆくゆく）} 取續成^{（くるしく）} 苦^{（くるしく）}
敷義御座候事^{（なる）}
回天軍願^{（ねがいのとあり）} 之通被相立候上^{（あいたてられ）} 八 山口諸隊之内^{（の）} ヨリ入隊之者^{（の）}
為引立^{（ひきたてとして）} 折節^{（ありふし）} 罷越候故^{（ありふし）} 是^{（これまた）} 又其節御^{（その）} 賄可被下候事^{（おんまかない）}

願 〃文書館本は「願クハ」と記述している。

奉難有かり候事〃「奉存難有候事」ではないだろうか。文書館本も尊攘堂本と同じように記述しているので、「ママ」とした。

丑、三月

周布治部

右口漢書、周布殿ノ手ニ成ルニ勿論、其後ニ讀ミテ第一條ヲ四
條、願意頗ハ曖昧ナリ故ニ釐言キ満足ス感シタリ

同廿八日、田天軍角立ノ許可アリ、次ニ總督、後ニ素リ當時門閥中適當ノ
人物ニ及シク稍方識アルモノ、概シテ佐論黨ノ有謀タルヲ以テ方識取ルヘカ
サ、佐論黨ニ關係浅カリシ増野又十郎ヲ推シテ其任ニ當ラシメ下田萬
村、正太谷六郎、左門、定ヲ本陣トシ、西渡寺ヲ以テ兵營ニ充ツルノ令アリ
同廿九日、田天軍惣員、下田萬村、比所ニテ故親施公、大祭典ヲ舉行ス

田天軍後員

總督

増野又十郎

軍監

栗山轍三

參謀兼書記

津田公輔

(慶応元年)
丑ノ三月

周布治部

右口演書八周布殿ノ手ニ成^なレルハ勿論ナルカ 後ニ讀シテ第一条第四
条ノ願意 頗^(すこぶ)ル暖昧^(あいまい)ナルニ警^驚キ

不脱力
満足ヲ感シタリ

(三月) 同廿八日 回天軍再立ノ許可アリ 次^(ついで)テ総督ノ撰ニ当リ當時門閥中適當ノ

人物ニ乏^{とほ}シク 稍^(やや)才識^(さいしき)アルモノハ 概^(おおむ)ネ子俗論黨ノ首謀タルヲ以^(もつ)テ 才識^(さいしき)取ルヘカラ

サルモ 俗論黨ニ関係浅カリシ増野又十郎ヲ推シテ 其任ニ当ラシメ 下田^(現田万川町)萬

村里正 大谷六郎左工門宅ヲ本陣トシ 西法寺ヲ以^(もつ)テ兵營ニ充ツルノ令アリ

(三月) 同廿九日 回天軍惣員^(総) 下田^(現田万川町)萬村屯所ニ入り 故親施公ノ大祭典ヲ舉行ス

回天軍役員

總督 増野又十郎^(益田家臣、老臣、後に職役)

軍監 栗山轍三^(益田家臣、侍御)

参謀兼書記 津田公輔^(益田家臣、侍御)

不脱力
満足ヲ感シタリ」文書館本も松永本も「満足ヲ感シタリ」と記述しているが文意が首尾一貫しない。我々は「不」を書き落としたものと解釈した。

特に第一条は189〜192頁の記述がこれに該当するものと考える。(191頁の御沙汰書の文意曖昧というのは罪科と言つ文言が不満なのだ。回天軍は正義と主張したのであるとと解釈した)

里正」村の長。庄屋。

下田万村里正 大谷六郎左衛門」現田万川町下田万本郷、江崎駅前の大谷家は近世初期から終期まで下田万村の庄屋役を務めた家柄である。庄屋は藩政の末端組織である村里の行政に直接間接に関わり合う重要な役である。給領主である益田家や勘場との往来文書や農民への伝達文書など、世事全般に関わる文書が多数保存されている(中略)昭和五十九年から三年掛で山口県教育委員会が調査・報告書としてまとめた「下田万村庄屋大谷家歴史資料目録」がそれである。(「田万川町史」四六五頁)

西法寺」111頁参照。

元治二年(一八六五) 三月

小隊司令

大橋 三木 三

大砲掛

岩本 藤太

斥候

中村 泰一

會計

中村 藤馬

周布治部殿敷堤河上三氏並山口歸

茲邑政堂事情迫リて圓天軍再興ヲ許シタルモ其實甚不快

故陰謀其隊敵ヲ挫カント欲シ自方好計ヲ廻ラシ遂ニ四月上旬ヲ以テ所務代

命シ左ノ各地方ヲ察シテ入隊者ヲ防カシタリ

今般相英鑑御家来之者入廷者古被仰付付而者地方農兵

其外而天心掛次第入駐御免被仰付候全定法入廷不士而モ目

程宛滞在ニテモ然有古相調候而モ宜敷勿論帶留中御養ニ

被仰付候ト義撰存右様承知候而其沙汰可有之矣

慶応元年（一八六五）四月

小隊司令

大砲掛

斥候

會計

大橋三木三（樹）

岩本藤太（益田家臣）

中村泰一（益田家臣）

中村藤馬（益田家臣）

周布治部殿

敷嶋（遊撃軍）

河上（鴻城軍）

河上ノ二氏並ニ山口ニ歸ル

茲（ここ）ニ邑政堂ハ事情ニ迫（せま）ラレテ囧（あやま）天軍ノ再興ヲ許シタルモ 其實（その）ハ甚（はなはだ）不快ナル
故ニ陰（その）ニ其隊勢ヲ挫（くじ）カント欲シテ百方奸計ヲ廻（めぐ）ラシ 遂ニ四月上旬ヲ以テ所務代ニ
命シ 左ノ令ヲ各地方ニ發シテ入隊者ヲ防カシメタリ

今般育英館ヘ御家来ノ者入込（いれこみ） 稽古被仰付候（おおせつけられ） 付而者地方農兵（つかた）
其外（その）ニ而モ 心掛次第入塾御免被仰付候（こころがけ） 全定法入込不仕而モ十日
程宛滞在ニテモ 稽古相調候而モ宜敷（あいとこのい） 勿論滞留中御養ヒニ（おんやしな）
被仰付候トノ儀ニ候条 右様承知候而 其沙汰可有之候（その）

周布治部殿 敷嶋 河上ノ二氏並ニ山口ニ歸ル「並ニ」の文言は「周布治部殿」の後に入れるべき言葉か。或いは「つれだつて」という意味か。
所務代「代官役。所務は物成と同じで年貢の意。本藩の諸郡の代官役を所務代官又は所務代と称するのはこの職掌に租税の徴収が専ら重きを為すに
よる。

地方（じかた）「町奉行支配地を「町方」と呼ぶのに対して、郡奉行管轄地を「地方」と呼ぶ。又地方の中でも浦を浦方として分けた場合は漁村以外
の農村地帯を地方と呼ぶ。又民政を行う機構全体を地方支配と云う場合もあり、この時は町方も地方に含まれて使用される。従つて広義の地方は被支配
者を意味し、狭義のの地方は農村部を意味する。88頁「地下」参照。

一 此度田苗ニテ回天軍之者隊被差立付而右隊ハ入以度
者之義者願出御許相成候上テラニ不相調トノ義ニ候条
決段共沙汰可有之度以上

丑四月

松井九郎右衛門

各庄屋宛

從來胡英館ニ士族執首古場ニテ町農人熟堅禁シタルモノナニモ拘
ハラセテ町農ヲシテ入鑿セシメ其食料ヲ給スル優待ヲ厚シ若シ其招ニ
應ゼスニテ回天軍入隊ノ事ヲ出願スル種々故障ヲ設ケテ其志ヲ遂ゲシ
サレシモノリ回天軍ヨリ右沙汰書傳ヲ以テ邑政堂ニ尋問セシメ所務代松井
某ノ命令ノ意味ヲ誤リタルモノナリ答辯ヤリ高市治部殿滞須際俗吏等
契約ノ条々一々履行セサルヲ以テ尤ノ覺書ヲ出ス

覺

一 此度田萬ニテ回天軍之者 隊被差立候 付而八右隊へ入込度

者之義者願出御許可有之候上ナラデハ不相調トノ義二候条
此段共沙汰可有之候 以上

丑 四月

(慶応元年)

各庄屋宛

松井九郎右衛門

左カ

從來育英館八士族ノ稽古場ニシテ 町農ノ入塾八堅ク禁シタルモノナルニモ拘
ハラス 俄ニ町農ヲシテ入塾セシメ 其食料ヲ給スルノ優待ヲ為シ 若シ其招ニ
應セスシテ回天軍入隊ノ事ヲ出願スレハ 種々ノ故障ヲ設ケテ其志望ヲ遂ケシメ
サルニ至レリ 回天軍ヨリハ右沙汰書寫ヲ以テ邑政堂ニ尋問セシニ 所務代 松井
某力命令ノ意味ヲ誤リタルモノナリト答辨セリ 周布治部殿滞須ノ際 俗吏等
契約ノ条々一モ履行セサルヲ以テ左ノ覺書ヲ出ス

覺

松井九郎右衛門「松井九郎左衛門信誨(益田家臣、下士、一四石)。「須佐町の碑石と碑文」23頁に紹介されている信誨の碑文に依ると、文化十一年二月十九日生れ。九郎左衛門と称し、白鵝亭と号した。幼少から才気秀れ、若くして益田氏に仕え、筆者、所務代を歴任、奉職四十年。傍ら家塾を設けて子弟を教育すること二五年、農工商各般にわたって業なるもの百七十余人に及んだ。明治二年没。享年五十八才。碑は師恩を慕う門人達によって、明治三十六年建てられたものである」(碑は浄蓮寺境内にある)

所務代「178頁参照。

元治二年四月八日改元。慶応元年となる。

慶応元年(一八六五)四月

一 大谷樸助跡式之義先達_テ周布様御歎願之通_リ

御免被仰付_テ候_ニ處_ニ今_ニ家督之御沙汰無_ニ之由早速御沙汰被仰付_テ候_ニ處_ニ之_ニ更

一 圓天軍入隊人之義_ニ付_テ地方へ御沙汰達_ニ之由御沙汰替被

仰付_テ候_ニ處_ニ之_ニ更

一 御家来中二三男入隊之件是又早速御沙汰被仰付_テ候

武之_ニ更

一 ^{ゲベル}拾六掟_ニ夕ス相添玉藥_ニ克掟_ニ付_テ百奔家

大砲拾貳掟_ニ武掟

玉藥同上

煙硝克_ニ貫五百目

但小銃_ニ替_ニ古打之分

右御渡被仰付_テ候_ニ處_ニ之_ニ更

慶応元年（一八六五） 四月

大谷樸助跡式之義（儀） 先達テ周布様御歎願之通リ

御免被仰付候處（事） 今二家督之御沙汰無之由 早速御沙

汰被仰付候哉之吏

田天軍入隊人之義二付テハ 地方へ御沙汰違之由 御沙汰替 被

仰付候哉之吏

御家来中 二三男入隊ノ件 是又早速御沙汰被仰付候

哉之吏

ゲベエル六拾六挺 **タス相添** 玉薬八匁挺二付百発宛

大砲拾式拇拾貳力 式挺 玉薬同上

煙硝壹貫五百目

但大小銃稽古打之分

右御渡被仰付候哉之吏

（あとしき） 跡 式 家督。 また遺産。 跡目とも。

地方（じかた） 178頁脚注参照。

ゲベエル = Gewehr。 前装滑腔式の洋銃。 1670年にフランス軍隊で採用されたものに基づき、オランダ軍隊が1777年に制式としたもの。 口径は17.5ミリ。 全長1.498メートル。 重量26.8グラムの球形鉛弾を用い8グラム強の発射薬で点火は雷管式。 有効射程約二百メートル。（幕府歩兵隊「野口武彦著」『山口県史』史料編幕末維新6 1092頁参照）慶応元年、桂小五郎はグラバーの斡旋によって薩摩藩を通じて英国から軍艦と小銃を調達した。 ユニオン号という蒸気船にミネー銃四千三百挺、ゲベール銃三千挺、計七千三百挺を密かに積み込み、下関に陸揚げしたのである。 この装備が慶応二年の対幕戦、さらに明治元年から始まった戊辰戦争に威力を発揮した。（幕末長州藩の攘夷戦争「古川薫著」なお、ミネー Mine 銃は螺旋銃でミニエー弾を発射する。 弾丸に回転が与えられ弾速、射程距離（三百メートル以上、最大八百メートル）命中度が飛躍的に向上した。ゲベエル六拾六挺 回天軍は三十六人だから「三拾六挺」ではなからうか。 草稿本は「三拾六挺」と記述している。

タス 玉入れの袋（要再調査）

大砲拾式拇 式挺 式挺は文書館本の通り「拾式挺」ではないか。

拇（ドイム） = duim オランダの長さの単位の旧称。 当時は約1cm。（『山口県史』史料編幕末維新6 1098頁参照）

提

一 具足六拾六願

幕燈

右御貸渡被仰付候事

其他数条今略之

丑四月廿五日

田天軍

爾後愈是政堂及軍軍總督曾野與水等追テ前約履行後
雖氏佐更等事々曖昧ニ寄テ社南日月ヲ經過スルテ到底事成スベ
カル計ニ軍議一決シテ下田萬處所ヲ引拂ヒ山口ニ至ル

届書

御届申上候事

回天軍復興之義法部様御歎願之通り被仰出隊中一統
感激奉命罷矣處今旨ニテ諸事相運要立隊々々也ニ往

一 具足六拾六領

幕提灯

右御貸渡被仰付候哉事

其他数条今略之

丑 四月廿五日

回天軍

爾後 愈邑政堂及軍事總督増野與次等二迫リテ前約履行ヲ促スト
雖トモ 俗吏等事ヲ曖昧ニ寄テ在苐日月ヲ經過スルヲ以テ 到底事ノ成スベカラ
ザルヲ計リ 軍議一決シテ下田萬當所ヲ引拂ヒ山口ニ至ル

届書

御届申上候吏

回天軍復興之義 治部様御歎願ノ通り被仰出 隊中一統
感激奉命罷 候處 今日ニ至リ諸事相運兼 立隊八名而已ニテ 往

具足六拾六領ニ三拾六領か。(全頁脚注「ゲベエル六拾六挺」と同じ)

在苐ニ63頁脚注参照。

奉命ニ命令を承る。

慶応元年(一八六五) 四月

々之目途モ無御生有_ニ時無餘義本藩政布_ニ罷出_ニ公道之御
決議相待在申_ニ此段御届申上_ニ以上

四月廿七日

回天軍

四月廿七日夜篠目村久野某方_ニ泊望_ニ廿八日_ニ古熊永福寺_ニ
借_ニ變_ニ投宿_ニ敷_ニ場_ニ河上_ニ等_ニ相合_ニ周布殿_ニ就談_ニ周布殿_ニ須
佐邑政堂_ニ食言_ニ罪_ニ責_ニ尚_ニ實行_ニ舉_ニ於_ニ爲_ニ處_ニマ_ニ下_ニし_ニ
決斷_ニ時_ニ周布殿_ニ其_ニ願_ニ也_ニし_ニ

同晦日全軍出_ニ發_ニ敷_ニ場_ニ次郎同伴_ニ美根郡_ニ浸木村_ニ至_ニ然_ニ
周布殿_ニ款_ニ通_ニ出_ニ行_ニ不_ニ須_ニ由_ニ以_ニ同村_ニ屯泊_ニ翌日_ニ辰_ニ衆_ニ程_ニ

日山_ニ歸_ニ

五月三日隊員_ニ各_ニ周_ニ殿_ニ旅_ニ寓_ニ監_ニ小路_ニ水津屋_ニ至_ニ須_ニ佐_ニ邑_ニ政_ニ堂_ニ
正_ニ處_ニ分_ニ指_ニ揮_ニ其_ニ罪_ニ鳴_ニラ_ニシ_ニ詰_ニ責_ニセ_ニラ_ニシ_ニ請_ニヒ_ニ周_ニ布_ニ殿_ニ確

摘

慶応元年（一八六五） 四月

々之^{ゆくの}目途^{めと}モ無^む御^ご坐^ざ候^{こう}二^に付^つ 無^む余^よ義^ぎ本^{ほん}藩^{はん}政^{せい}布^ふへ罷^{まかり}出^{いで} 公道^{こうど}之^の御^ご
決^{けつ}議^ぎ相^{あい}待^{まち}居^り申^{もうし}候^{こう} 此^{この}段^{だん}御^お届^{とど}申^{もうし}上^あ候^{こう} 以上

四月廿七日

回天軍

四月廿七日夜、篠^{しの}目^め村^{むら}久^く野^の某^{めい}方^{ほう}二^に泊^{ぱく} 翌^{（四月）}廿^に八^{はち}日^{にち}山^{やま}口^{ぐち}二^に着^{ちやく}シ 古^{（山口市）}熊^{くま}永^{えい}福^{ふく}寺^じヲ
借^か受^うケテ投^な宿^{しゆく} 直^{（次郎）}二^に敷^{しき}嶋^{じま} 河^{（四郎）}上^{かみ}等^らト相^{あい}会^{かい}シ 周^{しゅう}布^ふ殿^{でん}二^に熟^{じく}談^{だん}シテ周^{しゅう}布^ふ殿^{でん}ヨリ須^す
佐^さ邑^い政^{せい}堂^{だう}二^に向^{むか}テ 食^{しよく}言^{げん}ノ罪^せヲ責^せメシメ 尚^{なほ}實^{じつ}行^{ぎやう}ノ擧^{あが}ラサルニ於^おテハ 為^なス處^{ところ}アルベシト
決^{けつ}断^{だん}セリ 時^{とき}二^に周^{しゅう}布^ふ殿^{でん}ハ其^{その}領^{りやう}地^ちニア^リ

（四月）みそか

同^{どう}晦^み日^{にち} 全^{ぜん}軍^{ぐん}山^{やま}口^{ぐち}出^で發^{はつ}

敷^{（遊撃軍）}嶋^{じま}次^し郎^{らう}同^{どう}伴^{ばん}ニテ美^み根^{こん}郡^{ぐん}渋^{しゅう}木^{もく}村^{むら}ニ至^{いた}ル 然^{しか}ルニ

周^{しゅう}布^ふ殿^{でん}萩^{はぎ}通^とり山^{やま}口^{ぐち}行^{ぎやう}ノ不^ふ在^{ざい}ナル由^{よし}ヲ以^{もつ}テ 同^{どう}村^{むら}ニ屯^{とん}泊^{ぱく}シ 翌^{（そうしん）}早^{そう}晨^{しん}発^{はつ}程^{てい} 二^に
日^{にち}山^{やま}口^{ぐち}二^に歸^{かへ}ル

五月三日 隊^{たい}員^{いん}五^ご名^{めい}周^{しゅう}布^ふ殿^{でん}旅^{りょ}寓^{いう} 豎^{たて}小^{せう}路^ろ木^{もく}津^{しん}屋^やニ至^{いた}リ 須^す佐^さ邑^い政^{せい}堂^{だう}
ノ不^ふ正^{せい}處^{ところ}分^{ぶん}ヲ指^{さし}摘^{てき}シ 其^{その}罪^{つみ}ヲ鳴^{なり}ラシテ詰^{じつ}責^せセラレンコトヲ請^こヒシニ 周^{しゅう}布^ふ殿^{でん}ノ確^{かく}

往々＝ おりおり。ときどき。また、時として あちこち。ここでは「ゆくゆく」か。

公道＝ 正しい道。人が守るべき公正な道。 公共の道路。 公平な。

篠目村＝ 63頁脚注参照。

古熊永福寺＝ 曹洞宗。元山口市古熊にあり、明治四年久保町に移した。天文十一年（一五四二）大内義隆は慶香省賀を小鯖の關雲寺から迎えて永福寺主とした。古熊は現JR山口駅東側一帯。

食言＝ 言ったことに背くこと。前言を履行しないこと。

其領地＝ 美^{（みね）} 祢^{（ね）}郡^{ぐん}渋^{しゅう}木^{もく}村。

美祢郡渋木村＝ 長門市深川町渋木村。美祢から長門に向かう県道267号線沿いの村。JR美祢線渋木駅周辺。美祢郡ではなく大津郡。
早^{（そうしん）} 晨^{しん}＝ 早朝。

答無キニヨリ先ツ正俗別明ニヤザレハ是中ノ士氣ヲ振作シ故親施公ノ

御遺志ヲ繼グ能ハル理ヲ喋々辯解シテ歸堂セリ

同六日隊員ノ各周布殿ヲ訪問セシ其説曖昧ニシテ斷見ナキヲ以テ激烈ニ

之ヲ詰ツルト雖モ終ニ其結ヲ結ビテ歸堂セリ

同日津田公輔栗山徹三中村肇一ヲ周布殿同伴政事堂ニ出テ

波田野金吾氏ニ面會シ泰一且テ此強團支部ニヤリテ佐論黨ノ事

情ヲ詳カニスルヲ以テ巨細辯解シ速ニ正俗判然也政改革ノ處分ヲ請フ

波田野曰ク圓天軍一件表ニ周布治部殿ハ御委仕アリテ同氏ノ意見

通リ相調ヒレヨシ復命セリ然モ其實行ノ今日ニ至ルモ猶興ラサルニ於テ周布

殿ヨリ更ニ其處置ヲサガレバカウサル理ナレハ毛利筑前殿益田石見殿

等ニモ熟議トシ今一應周布殿ノ御處置ヲ待テ結果ノ如何ヲ届出

ベシ然ラサレバ本藩ニ於テ直接ニ裁断ヲ爲スベカラスト云々辯了リ公輔等

答無キニヨリ 先ツ正俗ノ別ヲ明ニセザレハ邑中ノ士氣ヲ振作シ 故親施公ノ御遺志ヲ繼ク能ハサルノ理ヲ喋々辨解シテ歸營セリ

(五月) 同六日 隊員十名周布殿ヲ訪問セシニ 其說曖昧ニシテ断見ナキヲ以テ 激烈ニ之ヲ詰ツルト雖トモ 終ニ其結ヲ結ハスシテ歸營セリ

(五月六日) 同日 津田公輔 栗山徹三 中村泰一等 周布殿同伴 政事堂ニ出テ 波田野金吾氏ニ面会ス 泰一八且テ北強團支部ニアリテ 俗論黨ノ事情ヲ詳カニスルヲ以テ巨細辨解シ 速ニ正俗判然 邑政改革ノ處分ヲ請フ 波田野曰ク 田天軍一件八晨ニ周布治部殿へ御委任アリテ 同氏ノ意見 通り相調ヒシヨシ復命セリ 然ルモ其實行ノ今日ニ至ルモ猶擧ラサルニ於テハ 周布殿ヨリ更ニ其處置ヲナサザルベカラサル理ナレハ毛利筑前殿 益田石見殿 等ニモ熟議ノ上 今一應周布殿ノ御處置ヲ待チ 結果ノ如何ヲ届出 然ラサレバ本藩ニ於テ直接ノ裁断ヲ為スベカラストノ答辨アリ 公輔等

故親施公ノ御遺志

喋々＝言葉の多いさま。

断見＝ 因果の理を否定し、人は一度死ねばそれで終わりとする考え。 人の言を聞き是非を分別する意見。

詰ツル＝せめる／問う／なじる／ただす／しらべる／いましめる／つつしむ／とめる

栗山徹三＝「轍三」が正しい。 176頁参照。

巨細＝委細。細かく詳しいこと。 大きいことと細かいこと。

益田石見＝166頁脚注参照。

C

慶応元年（一八六五） 五月

諾^{シテ}退出^シ周布殿同伴更^ニ毛利筑前殿^ノ旅館^ヲ訪^フ毛利殿^ニ面
會^フ謝^{セリ}絶^{セリ}

同七日須佐^{ヨリ}大谷樸助跡^ニ式^ノ沙汰書文意曉^ル由報^知為^レ成^一喜^一
郎田根重藏^出山^{セル}ヲ以^テ周布殿^ノ旅館^ニ持^テ參^ル周布殿^之ヲ見^テ怪^ム
色無^ク且^ツ日^ヲ過^ス益田勘兵衛^出山^ハ相院君^御面談^相成^リキ
休^リ至^ル急^ニ御来^テ須^ラ請^フト^ノ事^ヲ以^テ明^ニ七日^ニ并^ニ程^ニ須^ラ佐^行
決^セ益田石見殿^亦同伴^ト政^布ノ母^命モ有^ル之^ニ同^ニ地^着上^ニ兩^名
相^計正^義恢復^ノ實^行ヲ舉^ゲレ^バケ^レハ天^軍一^同歸^須然^ル
ト然^ル此^ノ時^ニ敷^嶋次郎^等周^旋ス^ル處^{アリ}テ生^雲村^ニ常^ノ南^遠隊^モ
須^佐内^江ノ鎮^撫ヲ計^畫ス^ル機^ニ際^シテハ周^布殿^ノ意^見ニ隨^フ歸^ル
須^スハ萬^一周^布殿^ニ於^テ正^義ノ辨^別判^然ル^ニ裁^斷無^ク之^ニ於^テ直^ニ其^ノ
事^實ヲ本^藩政^府ニ上^申テ運^動自^的ヲ達^スレ^ト決^{セリ}

慶応元年（一八六五） 五月

諾シテ退出シ 周布殿同伴 更ニ毛利筑前殿ノ旅館ヲ訪フ 毛利殿八面
會ヲ謝絶セリ

（五月） 同七日 須佐ヨリ大谷樸助跡式ノ沙汰書文意曖昧ノ由報知ノ為 城一喜一

郎 田根重蔵出山セルヲ以テ 周布殿ノ旅館ニ持参ス 周布殿之ヲ見テ怪ム

色無ク 且ツ曰ク 過日 益田勸兵衛出山 仙相院君御面談相成リタキ

件アルニ依リ 至急御来須ヲ請フトノ事ナルヲ以テ 明七日発程須佐行ニ

決セリ 益田石見殿亦同伴ナレハ 政布ノ内命モ有之 同地着ノ上八両名

相計リテ正義恢復ノ實行ヲ擧ケシムベケレハ 田天軍一同歸須然ルベシ

ト 然ルニ此時 敷嶋次郎等ノ周旋スル處アリテ 生雲村屯営ノ南遠隊

モ須佐内証ノ鎮撫ヲ計畫スルノ機ニ際シタレハ 周布殿ノ意見ニ随ヒ歸

須スベシ 萬一周布殿ニ於テ正俗ノ辨別判然タル裁断無之ニ於テハ 直ニ其

事實ヲ本藩政府ニ上申シテ運動ノ目的ヲ達スベシト決セリ

大谷樸助跡式ノ沙汰書文意曖昧 176頁、192頁、194頁参照。「父樸助罪科ヲ以テ家名断絶被仰付候處」の項は樸助は罪人ではなく罪科はない。

正義の士であり冤罪である。にも拘わらず跡式回復の理由が「公儀非常大赦之御沙汰筋モ有之旁々二付 不被掲前例後格 厚忠召之旨ヲ以テ」では納得できない。罪状の不正を隠蔽しているではないかという意味である。

益田勸兵衛 海蔵庵益田家か？ 要再調査

南園隊 57頁脚注参照。佐々木男也、岡澤為之進等が元治元年八月九日創設、萩南園邸を屯集所とした。当初八重垣隊又は南園組と称したが八月廿八日総管を佐々木男也とし、南園隊と改称。十月龍蔵寺移屯、慶応元年正月廿八日改百二十人あり、同年五月二百人の定員とし萩屯集とす。慶応三年二月三日義昌隊と合して振武隊と称す。

内証 うちわの争い。内紛。証はうちわもめ。

大谷權助跡へ御沙汰書

大谷牛太郎

右又權助罪科^ラ以テ家々断絶被仰付^テ處今般

御家督御自尾能被仰出^テ處

公儀非常大赦之御沙汰筋^モ有之旁々^ニ付不被^掲捕前例

後格厚

思召之旨^ヲ以テ權助跡先和拾五石被下置改而御手廻^テ御

取立被仰付^テ處事

丑、五月

先大谷權助

親族中

右今般

(益田家臣、中士、御手廻組)
大谷 樸 助 跡 へ 御 沙 汰 書

大谷 午 太 郎
う ま た ろ う

右 父 樸 助 罪 科 ヲ 以 テ 家 名 断 絶 被 仰 付 候 處 今 般
もつ おおせつけられ

御 家 督 御 首 尾 能 被 仰 出 候 段
こかとか しゅびよくおおせいでられ

公 儀 非 常 大 赦 之 御 沙 汰 筋 毛 有 之 旁 々 二 付 不 被 掲 前 例
あつき かわられず これありかたがた ぜんれいこうかくに 掲げ 拘

後 格 厚
おほしめしの もつ

思 召 之 旨 ヲ 以 テ 樸 助 跡 先 知 拾 五 石 被 下 置 改 而 御 手 廻 へ 御
とりたて おおせつけられ (大谷) せんち くだしおかれ あらためて

取 立 被 仰 付 候 事
(慶応元年)

丑 ノ 五 月

先 大 谷 樸 助

親 族 中

右 今 般

公儀 〓 本藩のこと。

先知 〓 先代の知行。

慶 応 元 年 (一 八 六 五) 五 月

御家督御首尾能被仰付且從

公義非常大赦之御汰沙^サ助^モ有之旁々^ニ付不被拘前例御格厚

思召之旨^ヲ以^テ權助實子^ノ太郎義權助先和十五^ニ被下置改而御手廻^ハ御取立被仰付^ナ彦太郎未^タ知年之事^ニ疾得者往々御用^ニ御^ニ様申合無緩令教導^ナ被仰付

疾事

丑ノ五月

右書面^ニ付^テ御手廻^{ヨリ}モ是政堂^ニ迫^リ周布殿^ニ報知^{セシ}因^リ周布殿^{ヨリ}公輔^出山^ノ目^之詰問^シ尚須佐行^ノ上其事情^ヲ糾^{サレ}前罪状^不正^ニ隱蔽^{セシ}欲^シ三郎左衛門^ノ專斷^ニ出^シ所置^ニレテ仙相院君^ノ關係無^ニ之由^{ナリ}

慶応元年（一八六五）五月

御家督御首尾能^{しゅびよく}被^お仰^{おせ}付^{つけ}られ

且^{かつ}從^{より}

公義^{こうぎ}非常大赦^{ひじょうだいしやく}之御沙汰筋^{のごさたすぢ}毛有^も之旁々^{のかたがた}二付^に

不被^{ぜんれい}拘^{こう}前例^{ぜんれい}

御格^{ごかく}厚^{あつ}

思召^{おもしめ}之旨^{のしめ}ヲ以^{もつ}テ

樸助實子^{（大谷）うまたろう}午太郎義^{うまたろうぎ}

樸助先^{せん}知^ち拾五石被^く下^{くだ}シ

置^お改^{あらため}而^て御手廻^{ごてまわ}

へ御取立^{ごとりたて}被^お仰^{おせ}付^{つけ}られ

午太郎未^{うまたろういま}夕^{ゆふ}幼年^{のせいねん}之事^{のじ}二候^{にこう}

得^え者^ば

往々^{ゆくゆく}御用^{ごよう}二相立^{あいたち}候様^{こうさま}申^{もうし}合^あせ

無^{ゆるみ}緩^{なく}令^{きょう}教導^{こうたう}候様^{こうさま}被^お仰^{おせ}付^{つけ}られ

候事^{こうじ}

丑^{（慶応元年）}ノ五月

右書面二付テ八御手廻ヨリモ邑政堂二迫リ周布殿二報知セシニ因リ周布

殿ヨリ八翁輔^{栗山}出^{（山口）}山ノ日之ヲ詰問^{きつもん}シ尚須^{なお}佐行^{さかう}ノ上^{その}其事情^{じじきやう}ヲ糺^{ただ}サル、二前

罪状^{元宣公室}ノ不正^{いんぺい}ヲ隠蔽^{いんぺい}セント欲^{ほつ}シテ三郎左衛門^{益田}ノ専断^{せんだん}ニ出シ所置ニシテ仙^{（益田）}

相院君ノ関係無^{これなき}之由ナリ

同八日早朝栗山徹三中村藤馬先奔歸須大橋三木三中村泰一尋
大道村三好久平方至、須作込水ヲ報道シ、聲援運動ヲ爲シ
同九日津田公輔、二名生雲村ニ歸リ、隊員同古熊永福寺出發
生雲村着、津田公輔尋南團隊本陣至、派出周旋ノ事ヲ
依頼、惣督佐々木男也其依頼ニ應ジテ派出員ヲ援定セシメ依リ
梅津熊之進内山正一郎ヲ隨也ニ爲メ旅館ニ滞在セシム

同十日全軍一同古熊永福寺出發、生雲村ニ着泊マ

同十一日南團隊員ニ隨行、爲メ梅津熊之進内山正一郎尋ラ生
雲村滞在セシメ惣員下田村降参、歸着同夜津田公輔中
村泰一、二名出頭セリ

同十二日早晨周布殿族属大谷丈平足ニ至、ハ周布殿不快ニ
卧蓐由、ハ公輔一名病室ニ入リ同、ハ山出藏前ニ約セラル、ハ事ヲ

(五月) 同八日早朝 栗山徹三 (益田家臣、回大軍監) (益田家臣、四組、回大軍會計) 中村藤馬 先発歸須 (須佐) (益田家臣、回大軍小隊司令) (益田家臣、四組、御殿御算用方、回大軍斥候) 大橋三樹三 中村泰一等
(現防府市大道) (大道村切畑在住益田家臣) 大道村三好 久平方二至リ 須佐ノ近状ヲ報道シテ聲援ノ運動ヲ為シム (な)

(五月) 同九日 津田公輔外二名 生雲村二歸リ 隊員一同古熊永福寺出發 (山口市) (益田家侍御、回大軍參謀兼書記、奇兵隊) (現阿東町)

生雲村二着シ 津田公輔等 南園隊本陣二至リ 派出周旋ノ事ヲ (はしゅう) (しゅうせん)

依頼ス 惣督 佐々木男也 其依頼ニ應シテ派出員ヲ撰定セシニ依リ (お) (よ) (益田家臣、四組、奇兵隊) (田) (益田家臣、四組、回大軍) 梅津熊之進 内山正一郎 ヲ隨行セシムル為メ 旅館ニ滞在セシム

(五月) 同十日 全軍一同 古熊永福寺出發 (山口市) 生雲村二着泊ス (現阿東町)

(五月) 同十一日 南園隊員二隨行ノ為メ 梅津熊之進 内山正一郎等ヲ生 (益田家臣、四組、奇兵隊) (田) (益田家臣、四組、回大軍) (現田万川町) (益田家侍御、回大軍參謀兼書記、奇兵隊) (益田家臣)

雲村二滞在セシメ 惣員 下田万村陣營ニ歸着 同夜 津田公輔 中 (益田家臣、四組、奇兵隊) (現田万川町) (益田家侍御、回大軍參謀兼書記、奇兵隊) (益田家臣)

村 泰 一外二名出頭セリ (四組、御殿御算用方、回大軍斥候) (須)

(五月) 同十二日早晨 周布殿旅寓(大谷丈平宅)ニ至レハ 周布殿不快ニテ (りよく) (津田) 臥蓐ノ由ナレハ 公輔一名病室ニ入リ 同氏ノ山口出發前ニ約セラレタル事ヲ

古熊永福寺 186頁脚注参照。

佐々木男也 (ささきおなり) 萩藩士。性学を好み武事に長じ才幹あり、文久二年藩の右筆役となり、ついで京に祇役して学習院に出仕す。既にして帰国して政務座見習より南園隊総督となり四境役に功あり。明治維新の際、国政方に勤め、ついで施政司試補に任ず。同十一年百十銀行支配人とあなる。正五位。明治二十六年十一月二十五日没。五十八才。
(がじよく) 臥蓐 〓しとねの中に伏すこと。病気で床にふすこと。

慶応元年 (一八六五) 五月

食言セラレ南園隊派出員、来着ニ迄キアルベケル狀時、祇ヲ娛ラス萬同

隊員ト相謀リテ、公平、處斷ヲ事ラシ望スル旨ヲ述ヘ且曰、天全軍須

佐出張、事ヲ謀リ辭シ本營ニ歸リ、軍ヲ興テ須佐淨蓮寺ニ出張ス御手

廻四組等各集開所ヲ設テ謀議周旋スル處アリ

茲ニ而後見^{周布沼部}益田石見^部ハ須佐未着、後一方ニ仙相院君ノ不興ヲ蒙リ

^{周布殿ニ時密}即テ停ヲシテ、一方ニ仙吏等、諒解ニ欺カレテ正義派、所説ヲ容シ

傾向スルヲ以テ、田天軍切齒憤懣頗ル奔走ニ勞シタリ

同十三日、尚上四郎、来須ヲ要スル午有之中村泰一、内田正一郎等早

奔急行、夜四時、山着敷嶋四郎ニ面会スルヲ得テ、熱固スル處アリ

事竟リテ、殺程生雲村ニ泊十五日、淨蓮寺營所歸ル同日、南

園隊參謀中村セカノ介書記内山勘五郎外三名、来須松原丁

大賀久吉ニ方ニ投宿ス

慶応元年（一八六五） 五月

食言セラレス 南園隊派出員ノ来着モ近キ 二脱 アルベケレハ このじき 此時機ヲ 誤 娛ラス よろず 萬同
隊員ト相謀リテ あいはか 公平ノ處断アラン事ヲ企望スル旨ヲ述ヘ かつ 且囀天全軍須
佐出張ノ事ヲ謀リ はか 辞シテ本営ニ歸リ 軍ヲ舉テ須佐浄蓮寺 じやうれんじ 二出張ス 御手
廻四組等 おのおの 各集開所ヲ設テ謀議周旋スル處アリ
茲二兩後見ハ こゝ 益田石見須佐来着ノ後 （注） 一方二八仙相院君ノ不興ヲ蒙リ （益田元宣室）
周布殿八一時出 邸ヲ傳メラレタリ 一方二八俗吏等ノ （詭） 認辨二欺カレテ正義派ノ所説ヲ容レサルノ
傾向アルヲ以テ もつ 囀天軍八切齒憤懣頗ル奔走ニ勞シタリ

（五月） 同 十三日 （益田家臣、鴻城軍） 河上四郎ノ来須ヲ要スル件有之 （須佐） 中村泰一 （益田家臣、四組、御殿御算用方、回天軍斥候） 内田正一郎等早
発急行 夜四ツ時山口着 （午後十時） 敷島次郎二面会スルヲ得テ熟圖スル處アリ （須子善次郎、遊撃軍）
事竟リテ發程 生雲村ニテ一泊 （現阿東町） 十五日浄蓮寺營所ニ歸ル （五月十五日） 同日南
園隊参謀 中村芳ノ介 書記 内山勘五郎 （須佐） 外三名来須 （松原丁）
大賀久吉方ニ投宿ス （おおか）

食言 186 頁脚注参照

浄蓮寺 143 頁脚注参照。

須佐来着ノ後 草稿本の文章はこの後が次の様に簡単になっている。『愈俗吏等ノ虚飾ニ欺カレ其妄辨ヲ信シテ 正義派の所説ヲ容レサルノ…と続く。』

同十六日敷島次郎至急ニ密議スル有之津田公輔中村義等
黄昏卒程昼夜兼行翌十七日四時着山敷島ヲ中村松屋ニ訪
同氏湯田行不在ニ依リ其歸属ヲ促シ謀議數刻夜ニ入リ旅行ニ

歸ル

同十七日周柳致副佐出立後山ニ歸ス大橋三樹三内山茂樹等隨行

此前後増野又十郎大田丹盛等兩後見人ニ通知セシメテ歸ス山ヤリ盛ニ周柳殿
セリ復命ニ依テ代役被敷島迄毛利家前水先ニ討ハル事アリシナラン

田天軍急ニ津邊寺ヲ拂拂ヒテ下田島村本營ニ歸ルニ事併セテ其

他状況ヲ承報ス

同十八日南園隊派出員ハ山相院相殿拜謁ノ為リ笠松即ニ出シ

歸途並強團ニ至リ更ニ益田丹下迄ニ至リテ盛宴ヲ繰リ深更

歡ヲ尽シテ去リ是即チ南園隊信用ヲ盡セシ所以ナリ

同日正午九ツ時隊員ハ津田公輔等旅属ニ至リテ須佐他状況報達セ

(五月) 同十六日 敷嶋次郎二至急密議スベキ件有之津田公輔中村泰一等
(須子善次郎、遊撃軍)
黄昏発程 昼夜兼行 翌十七日四ツ時着山 敷嶋ヲ中市松屋ニ訪フ
たそがれ ちゆうやけんこう (午前十時) おと
同氏湯田行不在ニ依リ 其歸寓ヲ(注) 促シテ謀議数刻 夜二入り旅行ニ
(山口市) その
帰ル

(五月) 同十七日 周布殿須佐出發 山口ニ歸ラル 大橋三樹三 内山茂樹等 隨行
(益田家臣、回天軍小隊司令) (益田家臣、回天軍)
セリ
此前夜 増野又十郎 大田丹宮等 両後見人ニ通知セスシテ竊ニ出山セリ 蓋シ周布殿ノ復命ニ先テ 代役桂主殿ノ兄 毛利筑前太夫ニ計ルベキ事アリシナラン

回天軍八急二淨蓮寺ヲ引払ヒテ下田萬村本営ニ歸屯ノ事 併セテ其
ひきはら (現田万川町) あわ その
他ノ狀況ヲ飛報ス

(五月) 同十八日 南園隊派出員八仙相院殿拝謁ノ為 笠松邸ニ出シカ
(益田元宣室) はいえつ (益田家臣、老臣、家老) で しんこう
歸途北強團ニ至リ 更ニ益田丹下宅ニ至リテ盛宴ヲ張り 深更
これ おと ゆえん
歡ヲ尽シテ去レリ 是即チ南園隊ノ信用ヲ墮セシ所以ナリ
(五月) (益田家侍御、回天軍參謀兼書記、奇兵隊)
同日正午九ツ時 隊員一名 津田公輔等ノ旅寓ニ至リテ須佐地ノ狀況ヲ報道セリ
(現須佐町)

(午前十時) 四ツ時「温故」では「八ツ時」(午後二時)。夕方須佐を出発して四つ(午前十時)着は約十六時間。八ツ時(午後二時)なら二十時間。

中市＝現山口市中市町。山口市内の県道204号線を津和野方向に進むと山口中央郵便局から3つ目の信号右側が中市町。

(注)の個所から次頁の(注)までの文章が松永本では欠落している。

深更＝よなか。よふけ。

茲益田三郎左衛門當役栗山翁輔尋病鳴ハナ其職ヲ辭シ
增野又十郎松本良左衛門尋其後仕ト為增野與次ハ加判リ
同十九日事田公輔中村泰一尋山出テ設同夜下田ノ村ニ歸ル

是月ス

同廿日益田右見殿ハ命依リ弗取ル望ル視察ニ為ル本田萬村ニ着テ
白ク爾等ハ日回天軍ノゲベリ射的擊ヲ願フ所望ニ依リ見ル安ス

周布治部殿須佐處分半返ニテ月番役延期ニ願フ為歸ル由テ
ナル山口着直政布復命ニ政布員ハ候議ニ求益田仁見殿ニモ一應ニ出ス

山アリテ孰議スル處アリテ後着テ然ルベシト決シ周布殿ヨリ内山茂樹ニ

命シテ益田仁見殿須佐引取テ恥報ヲ為サシム仁見殿ハ其報ニ接シテ

生雲通リ山口ニ歸リ兩後見ハ山口ニ於テ屢ニ相會シテ且政布ニ議スル處

アリシカ周布殿其來地洪水ニ急用アリテ歸在アリテ事竟リ又出スセリ

茲（ここに） 職役（益田家臣、老臣、家老、清水益田家） 益田三郎左衛門 當役 栗山翁助等八病ヲ唱となヘテ其職ヲ辞シ
増野又十郎 松本良左衛門等 其後任ト為リ 増野與次八加判タリ

（五月） 同十九日 津田公輔中村泰一等 山口出發 同夜 下田萬村（現田万川町） 營所ニ歸着ス

（五月） 同廿日 益田石見殿 公命ニ依リ 仏坂関門視察ノ為メ下田萬村（現田万川町）ニ着泊アリ 翌廿一日 田天軍ゲベール射的 擊劍等所望ニ依リ一覽ニ供ス
周布治部殿八須佐處分ノ半途ナルヲ以テ 月番役延期出願ノ為歸山ノ由ナルカ 山口着直ただちニ政府ニ復命シ 政府員ニ協議ノ末 益田石見殿ニモ一應出山アリテ熟議じやくぎ（注）スル處アリテ後 着手然ルベスト一決シ 周布殿ヨリ 内山茂樹（益田家臣、回天軍）ニ命シテ益田石見殿ニ須佐引取りノ飛報ヲ為サシム 石見殿ハ其報ニ接シテ 生雲通り山口ニ歸レリ 両後見ハ山口ニ於テ屢々相會シテ 且政府ト議スル處アリシカ 周布殿其采地そのさいち 渋木ニ急用アリテ歸在アリテ 事竟リ又出山セリ

ここに職役 茲 文書館本は の部分を「職役」と記述している。職役「邑宰。邑政の最高執政者。

当役「藩主の在国参勤を問わず常にそれに従つて補佐する職。職役に次ぐ邑政の最高執政者の一人。

加判「藩政に参与し、藩主署判の公文書に加判する職掌。

月番役「藩の職制は番方（武役）と役方（一般職）の二種類あり、「番」とは交代して行われる勤務。「月番」は一ヶ月毎に交代で努める役職。

仏坂関門「P51「四境の関門」参照。

ゲベール射的「182頁脚注参照。

（注）「前頁の（注）を参照。松永本はここまでが欠落している。

其采地渋木「美祢郡渋木村。美祢郡は天津郡の誤り。186頁、240頁脚注参照。

周布殿須佐出奔後益留仁見殿亦出山アリテ御手廻四組共且集會
所ヲ開テ各分散シテ兩後見ヲ来須ヲ帰シ更ニ用場スル約ヲ修セリ初周布
殿須佐出奔後益留仁見殿亦出山アリテ御手廻四組共且集會
勿論御手廻四組等ノ有志者ノ屈指鶴望シタリシ其月尾ニ至ル未
須ナキヨリ田天軍ヨリ隊員ニ右出山シ御手廻内ヨリ又出山シテ兩後見ニ迫
兩後見ニ延延今日に至ル止ムハカサハ事情ヲ陳ヒ雖其言曖昧信スベカラ
サレタリテ大ニ兩後見ノ果敢ニ乏シキヲ責ムルハ周布殿ノ性急ナル勿心ヲ滿
面朱ヲ賦クカ知リ非常ニ激怒シ一場將ニ破裂ノ勢トナレリ然ルニ敷嶋河上
ノ二氏周旋シテ之ヲ調シ結極正義派ノ内ヨリ指名移致シテ山口ニ召喚シ
處斷見込ラ立ツ後須佐行事決セリ
戊戌月三日大橋ニ於テ歸須ヤシメ田天軍三名御手廻市山薄藏外
一名至急出山スベキト日ヲ達セリ

周布殿 須佐出發後 益田石見殿亦出山アリシヲ以テ 御手廻 四組共一旦集會
所ヲ閉チ 各分散シテ兩後見ノ来須ヲ期シ更ニ開場スルノ約ヲ為セリ 初メ周布
殿ノ須佐出發ニ臨ミ廿三日ヲ期シテ必ス来村スベキノ旨ヲ約セラレシヲ以テ 四天軍ハ
勿論 御手廻 四組等ノ有志者ノ屈指鶴望シタリシニ 其月尾ニ至ルモ来
須ナキニヨリ 四天軍ヨリ隊員二名出山シ御手廻ノ内ヨリモ出山シテ 兩後見ニ迫レハ
兩後見ハ迂延今日ニ至ルノ止ムヘカラサル事情ヲ陳ルト雖トモ 其言曖昧信スベカラ
サルヲ以テ 大二兩後見ノ果斷ニ乏シキヲ責ムレハ 周布殿ノ性急ナル 忽チ満
面朱ヲ濺クカ如ク非常ニ激怒シ 一場將ニ破裂ノ勢トナレリ 然ルニ敷嶋 河上
ノ二氏周旋シテ之ヲ調シ 結極正義派ノ内ヨリ指名撰拔シテ山口ニ召喚シ
處斷ノ見込ヲ立ツルノ後 須佐行ノ事ニ決セリ

閏五月三日 大橋三樹三ヲシテ帰須セシメ 四天軍三名 御手廻 市山淳蔵外
一名 至急出山スベキ旨ヲ達セラル

(かくぼう) 望=鶴首。首をのばして待ち望むこと。
せんえん 迂延=「迂」は「遷」の異体字。ながびくこと。のびのびになること。ぐずぐずすること。

初小國融藏大谷權助等ト外相應セトスノ約アリテ或時俗吏
斑列シ或時脱シ山口潛伏シ竊運動ス所アル事竟成ラサル
以テ暫ク南嶺老貫野隱遁ス決意シテ其準備ヲ為シタリシカ不幸
病ニ罹リテ今日遂ニ起タス可惜

同四日大橋三樹三須佐著シ兩後見ノ命ヲ傳フ

同五日田天軍中村藤馬下田萬村出奔御手廻市山淳藏栗栖
鬼助須佐出奔就シ山口至ル当地山下少輔松原仁藏等山口
滞在セシ以テ市山淳藏等ト共ニ召集ノ旨ニ加ハル

同六日大橋三樹三中村泰一奔出奔至ル

同七日田天軍大橋三樹三中村泰一中村藤馬御手廻市山淳藏栗
標鬼助山下少輔松原仁藏等一同周布殿後鋒館ニ至リ命ニ應ジテ出
山由陳周布殿須佐紛擾鎮定時行ハ不肖治部等責任ニ

慶応元年（一八六五） 閏五月

初メ小國融藏八大谷樸助等ト内外相應セントスルノ約アリテ 或時八俗吏ノ
斑ニ列シ 或時八脱シテ山口ニ潜伏シ窃ニ運動スル所アレトモ 事竟ニ成ラサルヲ
以テ 暫ク南領耆貫 野二隱遁スルニ決意シテ其準備ヲ為シタリシ力不幸
病ニ罹リテ今日遂ニ起タス 可惜

（閏五月） 同 四日 大橋三樹三 須佐二着シ 両後見ノ命ヲ傳フ

（閏五月） 同 五日 田天軍 中村藤馬 下田萬村出發 御手廻 市山淳蔵 栗 栖
鬼助 須佐出發 執レトモ山口ニ至ル 当地 山下少輔 松原仁蔵等 山口ニ
滞在セシヲ以テ 市山淳蔵等ト共ニ召集ノ員ニ加ハル

（閏五月） 同 六日 大橋三樹三 中村 泰 一発営 山口ニ至ル

（閏五月） 同 七日 田天軍 大橋三樹三 中村 泰 一 中村藤馬 御手廻 市山淳蔵 栗
栖 鬼助 山下少輔 松原仁蔵等 一同周布殿ノ旅館ニ至リ 命ニ應シテ出
山ノ由ヲ陳ス 周布殿八須佐紛擾鎮定ノ時件八不肖治部等ノ責任ニ

不肖〃 自分の謙称。 親に似ないで愚かなこと。

堪^ニ能^ガハ^ル所^ナハ^シ既^ニ辭^ヲ退^ス書^ヲ認^メ政^事堂^役員^ノ内^ニモ^モ内^見
入^レ萬^益田^石不^見讓^リタ^ル依^リ同^氏就^キ詳^細聽^取ト^シト^ト断^然閑^閑
セ^リ決^心ナ^ル其^召集^シ應^シタ^ル者^ハ彼^又例^ノ一^瞬ヲ^出セ^リト^ト互^ニ微^笑シ^テ
去^リ轉^シ益^田内^見殿^ノ旅^館登^ル小^路中^村新^助ニ^至リ^テ面^会セ^リ益^田殿^曰ク^当
度^諸子^出山^ヲ煩^ハセ^リ予^等須^佐ニ^在リ^テ他^ノ嫌^疑ヲ^憚ハ^ル處^斯カ^ラス
シ^テ自^然處^断上^ニ躊^躇ス^ル場^合ナ^キア^ラス仍^テ当^地ニ^於テ^事實^取
糾^ノ上^須佐^ニ至^ルハ^キ決^セリ^付テ^從未^邑政^堂ヨ^リ回^天軍^對ス^ル不^當
處^置及^止強^團ノ^創之^後運^動ノ^巨細^ヲ洩^サス尚^處罰^異見^ヲモ
筆^記シ^テ周^布殿^ノ旅^館近^差出^サル^ハ參^考材^料タル^ハシ^ト然^ルニ^而後^見
仙^相院^君威^權ヲ^憚リ^優柔^不断^益佐^論堂^ノ氣^焰ヲ^熾モ^シタル^ハ
姿^{アル}僧^ヲ軍^天軍^情滿^スル^處ニ^三樹^三等^曰ク^正邪^兩岐^ノ基^上
因^來歷^係テ^彼等^ヲ奸^曲ノ^要領^屬上^陳ヤ^リ加^リミ^テ君^等ニ^於テ

堪^たユル能^{あた}ハサル所ナレハ 既^{すで}ニ辞退書ヲ認^{したた}メ政事堂役員ノ内ニモ内見^{ないけん}ニ
入^いレ 萬^{よろず}益田石見ヘ譲^{ゆず}リタルニ依^よリ 同氏ニ就^つキ詳細聴^{ききとる}取ヘシト 断然^{かんよ}関與
セサルノ決心ナレハ 其召集^{その}ニ應^{おう}シタル者ハ彼又例ノ一^一僻^僻ヲ出セリト互ニ微笑シテ
去^てリ 轉^{てん}シテ益田石見殿ノ旅館^{野新助} 二至^二リテ面会セリ 益田殿曰ク 当^い
度諸子^{土カ}ノ出^(山口)山ヲ煩^{わづら}ハセシハ 予等須佐ニ在^あリテハ他ノ嫌疑^{けんぎ}ヲ憚^{はば}ル處^{ところ}渺^{さく}カラス
シテ 自然處断^{しやたん}上ニ躊躇^{ちゆうちよ}スル場合ナキニアラス 仍^いテ当地ニ於^あテ事實取^{とり}
糾^{ただし}ノ上須佐ニ至^しルヘキニ決セリ 付^つテハ 従来邑政堂ヨリ回^い天軍ニ對スル不當^{ふとう}ノ
處置^{しよちおひ}及^あ北強團ノ創立後 運動^{うんどう}ノ巨細^{こさい}ヲ洩^もサス 尚^な處罰^{しよばつ}ノ異見^{いけん}ヲモ
筆記シテ 周布殿ノ旅館^{さした}迄差^さ出^{しだ}サレハ参考ノ材料タルヘシト 然^{しか}ルニ兩後見
ノ仙相^(益田元宣室)院君ノ威權^{いはか}ヲ憚^{はば}リ 優柔^{ゆうじゆう}不斷^{ふだん} 益俗論黨ノ氣焰^{きえん}ヲ熾^{さかん}ニセシムルノ
姿アルハ曾^{かつ}テ回^い天軍ノ憤^{ふんまん} 満^{まん}スル處^{ところ}ナレハ 三樹三等^い曰ク 正邪兩岐^{せうじやうりゅうぎ}ノ基
因^あ來歴併^あテ彼等力^{かんきよく}奸曲ノ要領^{しやうりやう}ハ屢々上陳^{じやうちん}セシカ如クニシテ 君等^{きみ}ニ於^あテ

漸次御捜査事ナリ今更陳辯スル必要ナキ勿論ナリ然レト雖モ守
命違背スル不敬ニ涉ル嫌アルヲ以テ明日旅寓ニ於テ相調へ差出スベシ但現
今迄政堂吏員当地ニ滞在シテ時々本政所ニ出頭シ又ハ後見御族
雖モモ筆叩スル申シハ劣度ノ上陳書ニ始ラク筆底ニ藏メテ忘レ渠等カ
披閱ヲ許サル事勿レ何トナレハ其筆記ノ事實ニ於テ毫釐ノ誤無
キモ其首惡ヲ指名シ其罪科ヲ定ムル元來兩後見ノ御権利ニシテ敢テ
三樹三尋ノ參與スベキ事ナリサレバ既ニ辨明セシ如クナルヲ御參考ノ材料
ニモト強テ御請求アルニ依リ其命ニ應ジルナリ且今日ヨリ其罪咎ノ段
陞ヲ豫知セシムル時ニ御處斷ノ余表ニ先ケテ不服ノ口實ヲ研究シ虛
構架設如何様ノ手續ヲ惹起サシメ難計ニ依リ正邪雙方ヨリ上陳書ヲ
御歸度ニナリタル上之ヲ参照討究アリテ一刀兩斷ノ御裁決アラシ事ヲ
企望スルノ旨ヲ述ヘタルニ周布殿肯諾シテ必ス他人ニ披閱セシメサル事ヲ

慶応元年（一八六五）閏五月

漸次御捜査ノ事ナレハ 今更陳辨スルノ必要ナキハ勿論ナリ 然リト雖トモ尊
 命二違背スルハ不敬ニ渉ルノ嫌アルヲ以テ 明日旅寓ニ於テ相調へ差出スベシ 但現
 今 邑政堂吏員当地ニ滞在シテ 時々本政府ニ出頭シ 又ハ 後見ノ御旅
 館ヘモ参叩スル由ナレハ 当度ノ上陳書ハ姑ラク筐底ニ蔵メテ忘ニ渠等力
 披閲ヲ許サル、事勿レ 何トナレハ其筆記ノ事實ニ於テ毫釐ノ誤無
 キモ 其首惡ヲ指名シ 其罪科ヲ定ムルハ元来兩後見ノ御權利ニシテ 敢テ
 三樹三等ノ參與スベキ事ニアラザレバ 既ニ辨明セシ如クナルヲ 御参考ノ材料
 ニモト強テ御請求アルニ依リ 其命ニ應シタルナリ 且今日ヨリ其罪咎ノ段
 陛ヲ豫知セシムル時ハ 御處断ノ発表ニ先チテ不服ノ口實ヲ研究シ 虚
 構架設 如何様ノ手煩ヲ惹起サンモ難計ニ依リ 正邪雙方ヨリ上陳書ヲ
 御領受ニナリタル上 之ヲ参照討究アリテ一刀兩断ノ御裁決アラン事ヲ
 企望スルノ旨ヲ述ヘタルニ 周布殿肯諾シテ 必ス他人ニ披閲セシメサル事ヲ

参堂＝後輩が先輩に、下の者が上の者に会うこと。また人の家への訪問の敬称。

筐 底＝箱の底

毫 釐＝ごく少し。ほんの僅か。

手煩＝こたこた。面倒。「手」はあつかい、処理。

約セリ

同九月大橋三樹三中村泰一中村藤馬等相議シテ是政堂俗吏ノ施政上
及並強團運動上ニ関シ拾七条罪失ヲ摘記シ正邪ヲ辨論ヲ縷陳シテ公平
處四討方案ヲ副ヘタリシニ薄暮至リ至急上陳書差出ス下キ日智從
ア三樹三樹帶シテ周布殿旅廳ニ至リ覽覽ヲ請ヒタリシニ益田石見殿
來訪ニ会シ兩後見共ニ讀ミ了リテヨク當地滞在須佐重役ノ者ニ
必書ヲ披見セシメタリト三樹三樹前約ニ背クヲ憤リ書ヲ懷ミテ退出セリ是
於テ兩後見大ニ之ヲ悔ミ從者ヲ其旅寓ニ遣シテ過刻ノ過誤ヲ謝シ敢
テ他人ニ聞セシメズ請フ更ニ其書ヲ出サレタリト云ヒム仍テ其請ニ隨ヒ用ヒ
差出セリ

拾七条罪失記寫

一先君於德山御身上御切迫、節諾居、者、度々及報知を得

約セリ

(閏五月) 同日 九日 大橋三樹三(益田家臣、回天軍小隊司令) 中村泰(益田家臣、四組、御殿御算用方、北強団、回天軍斥候) 中村藤馬等(益田家臣、四組、回天軍會計) 相議シテ 邑政堂俗吏ノ施政上

及 北強團運動上ニ関シ 拾七条ノ罪失ヲ摘記シ 正邪ノ辨論ヲ縷陳シテ公平ノ

處罰方案ヲ副ヘタリシニ 薄暮ニ至リ至急上陳書差出スベキ旨督促

アリ 三樹三(大橋) 携帯シテ周布 殿旅館ニ至リ 閱覽ヲ請ヒタリシニ 益田石見殿

来訪ニ会シ 両後見共ニ 讀シ了リテ曰ク 當地滞在須佐重役ノ者ニハ

此書ヲ披見セシメタシト 三樹三(大橋) 前約ニ背クヲ憤リ書ヲ懷ニシテ退出セリ 是ニ

於テ兩後見ハ大ニ之ヲ悔ヒ 従者ヲ其旅寓ニ遣シテ 過刻ノ過誤ヲ謝シ 敢

テ他人ニ閱セシメス 請フ更ニ其書ヲ出サレタシト云ハシム 仍テ其請ニ随ヒ再ヒ

差出セリ

拾七条罪失記寫

一 先君(益田親施)とくやまにおいて於德山御身上御切迫ノ節 詰居ノ者ヨリ度々及報知候得

縷(おと)陳(る)縷述。縷説。細かに述べること。

共虛說申爲一向不申驚然御最期節重役者一人不
罷出臣子情實不相立候事

先君御逝後無間正義之士小國融藏大谷橫肋之山四七

事

諸隊追討に依論相起り、疾節諸隊より三太夫内輪へ報書福原より被差送る處
仙相院殿へも不申上向一家中へも移し

不甲邑政堂隱置糞事

諸隊進討，節義表_上卿夫差出進事。

北強團之内騎馬等_ニ而在々_ニ馳廻_リ、兵_ヲ募_リ武器_ヲ用意_シ

固天軍之所取卷義全固天軍討討討事

聞天軍之內組士拾武人之義揮翰報顧仕在內遂一切迫相成

更一周，願書差出矣。節異議ナリ乍受，直樣大谷權助河。

慶応元年（一八六五） 閏五月

共どもきよせつ虚説ト申募もうしつリ 一向いっこう不申驚おどろきもうさず 終二御最期之節 重役ノ者一人モ不まかり

罷出い 臣子ノ情実不相立候事

先君御逝去後無間 正義之士 小國融蔵（育英館學頭、軍監） 大谷樸助ヲ幽囚セ（益田家臣、中士、御手廻組）

シ事

諸隊追討ノ俗論相起リ候節 諸隊ヨリ三太夫内輪ヘノ報書福（益田親施、福原越後、国司信濃）

原ヨリ被差送候處 仙相院殿ヘモ不申上 尚一家中エモ移シ（益田元宣室）

不申 邑政堂二隠シ置候事

諸隊追討ノ節 萩表工卿夫差出候事（益田親施、福原越後、国司信濃）

北強團之内 騎馬等二而在々ヲ驅廻リ 兵ヲ募リ武器ヲ用意シ（益田家臣、中士、御手廻組）

回天軍之屯所ヲ取巻候義ハ 全回天軍討伐ノ計略ナリシ事

回天軍之内 組士拾貳人ノ義 種々歎願仕候内 遂二切迫二相成（益田家臣、中士、御手廻組）

更二一周ノ願書差出候節 異議ナク乍受込 直様 大谷樸助 河

移（うつし）伝える。

卿夫差出候 諸隊追討のため、須佐から萩へ人数を差し出したこと。「卿」は他人の敬称。

一 上範三津田公轉_ラ幽囚_シ剗_ハ總人數_ヲ親族預_ケ相成_テ疾事
一 撲助範三公輔三人之者此強團_ニ而_ル余之罪科有_ニ之疾様申立
大組御手廻之内四組中_{ヨリ}身柄願_ハ下申出_テ疾處早速被_レ差
免_テ疾事

一 前條願_ハ下_ケ之義小國融藏_ニ腰方_ヲ知_シ邑政堂_ニ於_テ而役人
中_ハ對_シ及議論_ヲ疾處役人中_ニ屈服仕_テ疾得_ル其北強團_ニ沸騰_ラ鎮
_ル事者不能_ハ後_ニ義_ヲ付融藏_ニ並強團_ニ至_リ邑政堂_ニ命傳_ハ
及議論_ヲ疾得_ル其然折_リ合_ハ下申_テ疾事

一 撲助範三因此中親族_ヲ以_テ趣意書_ヲ差出_テ疾處無_ニ異議_ニ不_レ皮
过何_ノ之詮議_ヲ無_ニ之國復_テ御沙汰有_ニ之疾_ニ付親賴_ニ其_ノ外氣付
之者_{ヨリ}兩三日延_テ事相願_ハ疾得_ル其一日延_テ其_ノ無_ニ之_ニ敬科_ニ被
處_テ疾事

(益田家臣、側役)
上範三 (大谷) **津田公輔** (河上) **幽囚シ** あまつさ **剝へ総人数ヲ親族預ケ二相成候事**
(大谷) **樸助** **範三** (津田) **公輔三人之者** **北強團二而五ヶ条之罪科有之候様申立**
大組中 **御手廻之内四組中ヨリ身柄願下申出候處** **早速被差**
免候事
前條願下ケ之義 (育英館学頭、軍監) **小國融藏八脇方ヨリ聞知シ** **邑政堂二於而役人**
中へ對シ及議論候處 **役人中八屈服仕** **候得共** **北強團八沸騰ヲ鎮**
ムル事者不能為トノ義二付 **融藏八北強團二至リ邑政堂ノ命ヲ傳へ**
及議論候得共 **終折合不申候事**
樸助 **範三** **幽囚中** **親族ヲ以テ趣意書差出候處** **無異議乍受**
込 **何之詮議モ無之** **割復ノ御沙汰有之候二付** **親類其外氣付**
之者ヨリ兩三日延ノ事相願候得共 **一日之延引モ無之** **蔵科二被**
處候事

五ヶ条之罪科〓 130頁参照。

大組中御手廻之内四組中ヨリ身柄願下申出候處〓 137頁「御沙汰書」参照。「津田常名翁の伝記」83頁以下に収められている津田公輔の記録「三決死」によれば「余おもへらく反対黨の要求は、回天軍三首魁は我等の団体（大組中御手廻り中四組中）に任せられ、各々一刀を下し鼻耳寸断俎上の肉たらしめられたしとの意味なりしも…」と記されている。この措置に反対する小國融藏は邑政堂と掛け合い何とか説き伏せたが、邑政堂は北強団を抑えることは出来ないと回答したため、小國自身が北強団に出向いて差し止めようとしたのである。

慶応元年（一八六五） 閏五月

一 撲助劉復被仰出差前益田三郎左衛門より大谷家親類
之内より事より撲助義甚恐入り改心自殺取致致事
式ノ處取致可致より有之美事

一 權助範三劉復場所より強團中檢討より罷出在處

一 此強團之内より兩人より城隊より罷出天軍に殺逐、意有之

讒言致事

一 公輔入府之御沙汰相成居處平靜より城隊より御任せ相
成疾事

一 公英館尚田天軍、地方農兵其外者入之義、付沙汰違、
趣有之治下様より御尋問之節、附屬之者、過誤、依り疾事
一 田天軍より器械御渡之義申出在處尤、義に疾得其強團より
折合不申より義より願之通より不被差免疾事

慶応元年（一八六五） 閏五月

（大谷）
腹 おおせいであられ
樸助割復被仰出候前二 益田三郎左衛門ヨリ大谷家親類

工内々トノ事ニテ 樸助義甚恐入り改心自殺ノ取扱致候ハバ 跡

式ノ處取扱可致トノ移有之候事

（大谷）
（河上）
腹
樸助 範三 割復ノ場所工 北強團中検証トシテ罷出候事

北強團ノ内ヨリ兩人干城隊へ罷出 田天軍八叛逆ノ意有之ト

讒言致候事

（津田）
なり
公輔入牢之御沙汰相成居候 處 平躰ニシテ干城隊工御任セ二相

成候事

（な）
（北）
（強）
（團）
育英館尚田天軍へ地方農兵其他ノ者入込ノ義ニ付 沙汰違ノ

趣有之 治部様ヨリ御尋問之節 付属之者ノ過誤ト偽リ候事

田天軍ヨリ器械御渡之義申出候 處 尤ノ義ニ候得共 北強團ヨリ

折合不申トノ義ニテ願之通 不被差免候事

樸助義甚恐入り改心自殺ノ取扱致候ハバ 134 135 頁参照。

移（うつし）伝える。

（さんげん）
讒 言＝悪口を言う。いつわり告げ口をすること。また、その言葉。

平躰ニシテ「平」はまつすく、正しい、無事ノ普通、つね、なみ、ふだん。侍の姿でない事を意味する。??

付属之者ノ過誤ト偽リ候 179 180 頁参照。

器械＝鉄砲。

要再調査。

一 權助跡式一糸沙汰邊事

一 前断御沙汰書之義

仙相院殿御後見等エマノ不入御覽

忍ミ取行ヒ候事

以上

同夜三樹三子ノ族屬ヲ訪問シテ直田四郎ナル名刺ヲ出スモナリ同氏三田尻控

浪士シテ品行不良終ニ同盟ニ放逐セラレハタハ無賴漢ナリ須佐俗論黨ノ台定泊タル整小路山川某ノ紹

介ニ因リテ交際親密トナリシヨリ俗論黨賄賂ヲ受ケ左祖シテ為ノニ弁

走スルモノナハ由ニ曾テ痛ク處ナリ然レニ其未ルヤ田天軍ノ言論ヲ叩キ其運動

針路ヲ偵知シテ對抗ノ策ヲ畫セトスル精神ニ火ヲ睹ルヨリ天明ニニ應接中

最注意シテ渠カ機辨ニ欺カレサルヲ以テ渠ノ内情ヲ伺フノ手段ニ盡キ快々

シテ暇ヲ告

同十日大橋三樹ニ中村泰一中村藤馬等晨益田石見殿ノ旅館ニ至リ

一 樸助跡式一条二付 あとしき
一 前断御沙汰書之義 の儀
仙相院殿 (益田元宣室) 御後見等工モ ごらんにいれず
不入御覧 ごらんにいれず
怒二取行ヒ候事 はしいまま とりおこな
以上

同 夜 三樹三等の旅寓ヲ訪問シテ真田四郎ナル名刺ヲ出スモノアリ (閏五月九日) (大橋) (りよくう) (同氏八三田尻招賢閣在留ノ土州)

浪士ニシテ品行不良終ニ同盟一放逐セラレハ(ハ)衍字)タル無頼漢ナリ 須佐俗論黨ノ山口定泊タル豎小路山川某ノ紹 (宿力) (たてこうじ) (わいろ) (祖) (ため) (ほん)

介ニ因リテ交際親密トナリシヨリ 俗論黨ノ賄賂ヲ受ケ左祖シテ 為二奔 (そう) (よし) (かつ) (しか) (その) (わいろ) (祖) (ため) (ほん)

走スルモノナル由ハ曾テ聞ク處ナリ 然レハ其来ルヤ回天軍ノ言論ヲ叩キ 其運動ノ (よし) (かつ) (ところ) (しか) (その) (わいろ) (祖) (ため) (ほん)

針路ヲ偵知シテ對抗ノ策ヲ畫セントスルノ精神ナルハ火ヲ睹ルヨリモ明ナレバ 應接中 (ていち) (きへん) (あさむ) (もつ) (あきらか) (その)

最注意シテ渠力機辨ニ欺カレサルヲ以テ 渠ハ内情ヲ伺ウノ手段ニ盡キ快々ト (いとも) (きへん) (あさむ) (もつ) (あきらか) (その)

シテ暇ヲ告ク

同 十日 大橋三樹三 中 村 泰 一 中 村 藤 馬等晨起 益田石見殿ノ旅館ニ至リ (閏五月) (益田家臣、回天軍小隊司令) (益田家臣、四組、御殿御算用方、北強団、回天軍斥候) (益田家臣、四組、回天軍會計)

樸助跡式一条二付沙汰違 176頁、189頁、192頁参照。

仙相院殿 御後見等工モ 不入御覧怒二取行ヒ候 193頁、194頁参照。

(さたん) 左袒 121頁脚注参照。

快々「快々」の誤記である。「快々」＝「うらむさま、満足しないさま、楽しまないさま。文書館本は「快々トシテ」と記している。
晨起「朝早く起きること。」

慶応元年（一八六五） 閏五月

真

面會請前夜益田四郎談話中益田石見殿所之卿等上陳書
披見セシ一言アリテ話リテ曰ク果シ然ラハ君等他人ニ見セシカノ約破
リ陰ニ俗論黨ヲ替クル痕跡ヲ示タリ曾テ我輩ノ君等ヲ疑フモノ亦其
理ナキニ非ラズナリト益田殿振然一語ナシ遂ニ三樹ニ尋請求ニ應ヒテ上陳
書ヲ返却セリ

未而日ヲ期シ而後見毛利筑前殿代理トシテ老臣小坂一學及敷島二
郎尚上四郎外ニ干城隊員ニ名公命ヲ以テ須佐、差遣ベシト達アリ九時
中村泰一山口宗泰取報、為ノ歸隊

同而日天軍須佐淨蓮寺ハ出張御手廻四組等在所ニ集談會ヲ
開ク月夕阿川四郎須佐来着

同十五日益田周布及敷島次郎来須アリ今度益田殿御旅館大
組大谷岩尾宅周布殿旅館大組栗山半左衛門宅ニ定ムリシ人等

慶応元年（一八六五） 閏五月

面會ヲ請ヒ 前夜真田四郎ノ談話中益田石見殿ノ所ニテ卿等力上陳書ヲ
披見セシノ一言アリシヲ以テ詰リテ曰ク 果シテ然ラバ君等他人ニ一見セシメサルノ約ヲ破
リ 陰ニ俗論黨ヲ賛クルノ痕跡ヲ示シタリ 曾テ我輩ノ君等ヲ疑フモノ亦其
理ナキニ非ラサルナリト 益田殿赧然一語ナシ 遂ニ三樹三等ノ請求ニ應シテ上陳
書ヲ返却セリ

きたる 閏五月
来十四日ヲ期シ 両後見毛利筑前殿代理トシテ老臣 小坂一學 及 敷島二
郎 河上四郎 外二千城隊員二名 公命ヲ以テ須佐へ差遣ルベシトノ達アリ 九ツ時
中 村 泰 一 山口出発 飛報ノ為歸隊

（閏五月）
同 十四日 田天軍須佐浄蓮寺へ出張 御手廻 四組等各所ニ集談會ヲ
聞ク 日夕 阿川四郎須佐来着

（閏五月）
同 十五日 益田 周布 及 敷島次郎来須アリ 今度益田殿御旅館八大
組大 谷 岩 尾宅 周布殿旅館八大組 栗山半左衛門宅ト定メタリシハ全ク

赧然ニ恥じて赤面すること。

小坂一學

日夕（につせき）ニ夕方。（朝と夕。昼と夜）

阿川四郎「この頁終わりから3行目の「阿川四郎」は7行目の「河上四郎」の誤記であろう。因みに文書館本も「阿川四郎」となっている。

田天軍御手廻手即チ正義派ト交通ヲ遠ケテ兩後見ヲ龍絡セントスルノ邑政
産奸計ナル事ヲ奔覺シ兩後見共ニ應着篤上更ニ堀嘉十郎方ニ移リテ
同宿セム小収大谷丈平氏ニ投宿セリ

同十六日邑政堂ヨリ津田公輔ヲ召喚アリテ村富村ヨリ田天軍入隊ノ農兵
ハ孰レ氏差支リアル者ナレハ至急除隊スヘシトノ命アリト雖公輔ハ隊規モ
アリテ之ヲ除隊スベカラザル旨ヲ答エテ退出セリ

同十七日千城隊員ニ名須佐本町須山平助氏ニ止宿ス

真田四郎ハ宗田道太郎ハ藩隊者ニシテ野三別襲ト共ニ北強團ヲ招請ニ應
ジテ来須セリ

田天軍兩興後御手廻組共正義ヲ唱ル者續々輩出シテ勳ヲスルハ田天軍ノ
應援ヲ為スノ舉動アルヲ以テ佐吏ハ大ニ之ヲ忌ミ胡英館於テ大隊組立
旨ヲ令シ屢々入孰ヲ促シテ北強團ニ加盟セシメントスルハ御手廻四組等ハ

同 天軍御手廻等 即ち正義派トノ交通ヲ遠ケテ 両後見ヲ籠絡セントスルノ邑政
堂ノ奸計ナル事ヲ発覺シ 両後見共一應着駕ノ上 更ニ堀嘉十郎方ニ移リテ
同宿セラル 小坂八大谷丈平宅ニ投宿セリ

(閏五月) 同 十六日 邑政堂ヨリ津田公輔ヲ召喚アリテ弥富村ヨリ同天軍入隊ノ農兵
ハ 孰レトモ差支リアル者ナレハ 至急除隊スヘシトノ命アリト 雖 公輔ハ隊規モ
アリテ之ヲ除隊スベカラサル旨ヲ答エテ退出セリ

(閏五月) 同 十七日 干城隊員二名 須佐本町 須山平助宅ニ止宿ス
真田四郎八宗田道太郎セラレ居リシ無頼漢ナリシ由 ト共ニ北強團ノ招請ニ應

シテ来須セリ

同 天軍再興後 御手廻組士共 正義ヲ唱フル者續々輩出シテ 動モスレハ同天軍ノ
應援ヲ為スノ舉動アルヲ以テ 俗吏八大ニ之ヲ忌ミ 育英館ニ於テ大隊組立ノ
旨ヲ令シ 屢々入塾ヲ促シテ北強團ニ加盟セシメントストモ 御手廻四組等ハ

(籠絡) 籠 絡=まとめて包んだり、からげたりすること。転じて、他人をつまく自分の術中にまゐめ込む事。

大谷丈平宅=195頁、6頁参照。

須山平助宅=155頁、161頁参照。

大概正邪裁断ノ上ナラシム館中ニ入ルベカラスト請シテ應セヌ邑政堂ノ督促
益嚴タル因リ辭スル迄ナリ却テ廻天軍入隊決スル者アリ至リ宇名
組ノ如キハ回天軍入隊ノ申込ヲ為セリ

茲ニ敷嶋河上ノ二氏及子城隊派出員等前後見ラ慈ノテ先ツ俗
論黨ノ豫討ニ着手セシソントヤシヤ真田四郎等俗論黨ヲ教唆
シテ其勢力ヲ賛ムニ依リ佐吏等大ニ反抗シテ却テ正義派ヲ陷レントスハ
傾向アリテ頗ル困難ノ事態ニ立至リ一應出山シテ毛利筑前殿
協議ノ事ニ決セリ

同廿三日雨後見小段子城隊派出員及敷嶋河上等一同出隊セリ大
橋三木三外志々事情視察爲メ後見ニ隨行セリ圓天軍事情備下
田萬村本宮ニ歸ル

同廿六日南園隊總督佐々木男也ヨリ侯賀昌左衛門ノ托送セム圓天

大概たいがい正邪せいじゃ裁断さいだんノ上ナラテ八館中ニ入ルベカラスト辞じシテ應おうセス 邑政堂ノ督促とくそく
益ます敵ナルニ因よリ 辞じスルニ途みちナク 却かえテ回天軍入隊ニ決スル者アルニ至リ 宇谷
組ノ如キ八回天軍入隊ノ申込ヲ為セリ
茲ここニ敷嶋 河上ノ二氏 及 干城隊派出員等ハ 両後見ヲ懲すメテ先ツ俗
論黨ノ處しよ罰ばつニ着手セシメントセシカ 真田四郎等俗論堂黨ヲ教唆
シテ 其その勢せい力りきヲ賛たすクルニ依リ 俗吏等大ニ反抗かうシテ却かえテ正義派ヲ陷おとしレントスル
ノ傾向アリテ頗すこぶル困難ノ事態ニ立至リ 一應出山山口シテ毛利筑前殿二
協議ノ事ニ決セリ

同（閏五月）廿三日 両後見 小阪干城隊派出員 及 敷嶋 河上等一同出發セリ 大
橋（益田家臣、回天軍小隊司令）三樹 三外ほか名事情 視察ノ為メ 後見ニ随ずい行セリ 回天軍八下
田萬村本營ニ歸ル

同（閏五月）廿六日 南園隊総督 佐々木男也ヨリ 俣賀昌左衛門（益田家臣、上士、大組）ヘ託送セル回天

事情 切迫 視察ノ為メ 切迫
は文書館本の記述に基づき補足した。
佐々木男也 196頁脚注参照。

軍死、書簡宛紙に証アルハテ之ヲ頒受セテ直ニ是政堂へ送戻シ隊員
安岡五郎ヲシテ南園隊ニ至リ前頭ヲ報知シ且其事ノ何タルヲ問ハシ
同隊ヨリ政事堂ヨリ須佐紛擾事ニ係リ田天軍役員ノ中ニ名
未要ナルベシト回報ヲナセリ然レニ當時止強團員共名出雲村滞
在シ佐々木氏興動疑ミキ處アレハ田天軍役員ノ出雲行ヲ爲ス
得策ニアラストシテ大谷源三ニ命ジテ南園隊ニ至ラシム

初メ俗論堂招請ニ應ジテ未須セシ二名ノ内宗田道太郎歸山
セシカ真田四郎ハ尚帶須シテ益田丹下僧野又十郎始メ競ヒテ招
受食スルニ據リ酒池肉林ノ樂ヲ恣ニシ政事堂御用掛藤山初一
右衛門系土州藩良士細木本太郎同伴ニテ未着田天軍付
テ真田ノ近状ヲ探偵ス細木氏曰ク同藩人ノ右衛門傷クルノ無
賴漢歸山ノ上所置スベシト既ニシテ道田四郎ヲ召喚ス道田四郎

軍宛ノ書簡開緘ノ証アルヲ以テ之ヲ領受セス直二邑政堂へ返戻シ隊員
安岡五郎ヲシテ南園隊二至リ前頭ヲ報知シ且其事ノ何タルヲ問ハシムルニ
同隊ヨリハ政事堂ヨリ須佐紛擾事件二係リ田天軍役員ノ中式名
来雲(生雲)アルベシトノ回報ヲ為セリ然ルニ當時北強團員式名出雲村二滞
在シ佐々木氏ノ舉動疑ハシキ處アレハ田天軍役員ノ出雲行ヲ為スハ
得策ニアラストシテ大谷源三二命シテ南園隊二至ラシム

初メ俗論堂ノ招請ニ應シテ来須セシ二名ノ内宗田道太郎八帰山(八幡隊員)
セシカ眞田四郎八尚滞須シテ益田丹下増野又十郎始メ競ヒテ招
響スルニ據リ酒池肉林ノ樂ヲ恣ニセルニ政事堂御用掛藤山弥一
右衛門并土州藩浪士細木本太郎同伴ニテ来着田天軍二付
テ眞田四郎ノ近状ヲ探偵ス細木氏曰ク同藩人ノ名譽ヲ傷クルノ無
頼漢帰山ノ上所置スベシト既ニシテ眞田四郎ヲ召喚ス眞田四郎八

開(かいかん) 緘＝開封。

酒池肉林＝酒は池のように、肉は林のようにたくさんある。豪遊をきわめることのたとえ。

藤山弥一右衛門＝要再調査。

細木本太郎＝要再調査。

眞田四郎＝この頁終わりから2行目の「眞田」の後に文書館本は「四郎」と記述している。

氷屋ニアリテ平伏ス細木明日ヨリ同道歸山ニシテ其準備ヲ為スベト言

ニテ歸ラシヲタリ翌廿七日藤山細木駕籠ニテ出奔四郎徒歩歸山セリ

細木等歸山四郎小郡謹慎セシメシカ同藩人其罪ヲ責テ屠復セ

シム宗田光太郎モ亦八幡隊ヲ放逐セラルニ至ル

同晦日大石源三出雲村ヨリ歸營セシニ南園隊誰呼タル定見モ無ク

政事ヲ内命モテハ須佐邑ノ正佐今岐ノ處斷ニ盡カスベシ就テ田天

軍ヲ赤壁其他逐筆記シテ當隊ノ差出サレタシトノ傳詞アリ

同晦日在山ノ両後見ヨリ魯田丹下僧野與次ヲ召喚セラルシカ丹下御手

廻市山諺藏山下少藏横山左兵衛等召キ拙者等明日ヨリ出山スベシ

然ルニ郷等カ正邪ノ界別ハ頗ル難事ニシテ若シ之ヲ判然セシムニ至ラハ

御家ノ大事御不意ニモ相成リ將來邑中ノ和ヲ日遠無之郷等

自ラ正義ト唱フニカ一邪曲ト決スル事アラシニ臍ヲ嚙ムノ悔アリ

慶応元年（一八六五） 閏五月

次室ニアリテ平伏ス 細木八明日ヨリ同道帰山スベシ 其準備ヲ為スベシト一言
 シテ歸ラシメタリ 翌廿七日 藤山 細木八駕籠ニテ出発 四郎八徒歩帰山セリ
 細木等八帰山 四郎ヲ小郡ニ謹慎セシメシカ 同藩人其罪ヲ責テ屠腹復セ
 シム 宗田道太郎モ亦八幡隊ヲ放逐セラル、二至ル

同晦日 大谷源三出雲村ヨリ帰營セシニ 南園隊八確呼タル定見モ無ク
 政事堂ヨリノ内命モアレバ須佐邑ノ正俗分岐ノ處断ニ盡力スベシ 就テ八回天
 軍ノ来歴其他逐一筆記シテ當隊ヘ差出サレタシトノ傳詞アリ

同晦日 在山口両後見ヨリ 益田丹下 増野與次ヲ召喚セラレシカ 丹下八御手
 廻市山淳蔵山下少輔 横山左兵衛等ヲ招キ 拙者等明日ヨリ出山スベシ
 然ルニ郷等力 正邪ノ弁別ハ頗ル難事ニシテ若シ之ヲ判然セシムルニ至ラハ
 御家ノ大事 御不意トモ相成リ 将来邑中一和ノ目途無之 郷等
 自ラ正義ト唱フレトモ 万一邪曲ト決スル事アランニハ 臍ヲ噬ムノ悔アラン

郷等力 申立ツル

正邪ノ弁別ニ文書館本の記述に基づき

の4文字を補足した。

御家ノ大事御不意トモ相成リニ「御不意」は「御不為」の誤り。（文書館本の記述に基づき訂正）

郷等愚意ニ隨ヒ正邪別ラ札サシテ調和スルノ意無キヤト南
々スルニ人其姑息ヲ憤リ其罪ヲ咎メテ去リタリ
與次ニ老侍ニ故出山ヲ辭シ
彦平良大御内其代理ト

シテ四下ニ
同伴セリ

六月初日津田公輔兩後見出山後ノ事情探訪爲須佐ヨリ奔程ス
隊員内田正一郎ヲ南園隊ニ遣シ去月廿八日同隊ヨリ大谷源藏ノ

傳詞ノ事アリ萬兩後見ノ擔保ナリテ正佐二派ニ就テ同シク取調ムアリ

事トス益田周布等ヨリ聴取相成リテ御尽力ヲ頼ムト回答ヲ爲サシメタリ

同日松原泰三ヨリ山相院君成ニ御出山由ヲ報知セルニ據リ俗吏等

亦山相院君ノ命ヲ矯リ山ニ於テ評議セムニ慮斷ラセ拒セントスルノ計畫ナリ

事當ヲ指スガ如クハ一日モ猶預スヘカラスト決議シテ原井直助大谷源藏

等出須源三更ニ山口ニ向テ奔程セリ

同五日栗山徹三水谷代木等生雲南園隊ニ至リ七日歸營セリ

郷等愚意見カ二随したがヒ正邪せいじゃノ別わかヲ糾ただサスシテ調和スルノ意い無キヤト喃なん
タスルニ 三人ハ其姑息そのこそくヲ憤いきどおリ其罪そのヲ咎とがメテ去リタリ 與次ハ老体ナル故出山ヲ辞シ
シテ丹下ニ 同伴セリ 松本良左衛門其代理ト

六月朔日さくじつ 津田公輔（益田家臣、侍御） 両後見出山（山口）後ノ事情探訪たんぼうノ為メ 須佐ヨリ発程ス
隊員（益田家臣、四組、回天軍） 内田正一郎（石見）ヲ南園隊ニ遣シ（間五月） 去月廿八日同隊ヨリ 大谷源蔵（益田家臣、下士）ヘ
傳詞でんしノ事アレトモ萬よろず両後見ノ擔任たんにんトナリテ正俗二派二就テ（親力）同シク取調ヘノアリシ
事ナレハ 益田（石見） 周布等（治部）ヨリ聴取相成リテ 御尽力ヲ頼ムト同答かいとうヲ為サシメタリ

同二日（六月） 松原泰三（益田家臣）ヨリ仙相院君俄二御出山（山口）ノ由ヲ報知セルニ據リ 俗吏等
亦仙相院君ノ命また（益田元宣公室）ヲ矯いつわリ 山口ニ於テ評議セラル、處断しよたんヲ左右セントスルノ計畫ナル
事掌たなこころヲ指ス力さ如クナレハ 一日モ猶預ゆうよスベカラストノ決議ニテ原井直助（益田家臣） 大谷源蔵（益田家臣、下士）
等出須（須佐）シ 源三八更二山口ニ向テ発程セリ

同五日（六月） 栗山徹三（益田家臣、回天軍重監） 大谷千代松等（益田家臣） 生雲南園隊ニ至リ（現阿東町） 七日帰營セリ

喃々々くどくどしく言うこと。べちやくちや喋ること。

正俗二派二就テ同シク取調ヘ文書館本によれば「同シク」は「親シク」の誤記。

同八日大橋三樹三山口事情至急報道ヲ要スヨリ歸營セリ

同十日奇兵隊山下範三郎元田天軍ニ未着セリ是ヨリ先キ村岡房

十郎外五名山口ニ於テ奇兵隊入隊際須佐正邪兩立ノ事實實ヲ鮮^詳

細陳述シテ將來聲援ヲ請フ旨ヲ依頼セシニ依リ南來同隊ニ於テ田天

軍運動ニ專ラ注目セシカ當テ參^謀諸要書記時山直八番銃隊長

堀込太郎五番銃隊長河川四郎等相計、兵隊ヲ率テ須佐ニ至リ俗

論堂ヲ廢置スベキ議論アリシモ軍監村半七氏之ヲ制スル爲メ姑

止リタルヲ終ニ山下範三郎ヲシテ近況探偵爲歸休セシメタリ

當度山下範三郎奇兵隊ヨリ歸休ノ件及ヒ山口ニ於テ處分上ニ關

リ是政堂ニ請求スヨリ件アリテ中村藤馬山ヨリ出奔ス

同十一日中村藤馬須佐着大谷源藏山口ヨリ急報ノ事アリテ歸營セリ

同十二日津田公輔敷島河上等相謀、中村藤馬歸嶺運動、經果

慶応元年（一八六五） 六月

（六月） 同 八 日 大橋三樹三 （益田家臣、回天軍小隊司令） 山口ノ事情至急報道ヲ要スルニヨリ歸營セリ

（六月） 同 十 日 奇兵隊 （益田家臣、回天軍、奇兵隊） 山下範三郎 （益田家臣、回天軍、奇兵隊） 回天軍ニ来着セリ 是ヨリ先キ村岡彦 （益田家臣、回天軍）

十郎外五名山口ニ （益田家臣、回天軍、奇兵隊） 於テ奇兵隊入隊ノ際 須佐正邪両立ノ事實ヲ詳 （益田家臣、回天軍） 細陳述シテ 将来聲援ヲ請フ旨ヲ依頼セシニ依リ 爾来同隊ニ於テ八回天

軍ノ運動ニ専ラ注目セシカ （益田家臣、回天軍、奇兵隊） 嘗テ参謀兼書記 （秋藩士、無給通） 時山直八 （秋藩士、無給通） 四番銃隊長 堀仙太郎 （益田家臣、回天軍、奇兵隊） 五番銃隊長 阿川四郎等 （益田家臣、回天軍、奇兵隊） 相計リ 兵隊ヲ率テ須佐ニ至リ 俗

論黨ヲ處置スベキノ議論アリシモ 軍監 林半七氏ノ之ヲ制スル為メ 姑ク

止リタルナリ （益田家臣、回天軍、奇兵隊） 終ニ山下範三郎ヲシテ近況探偵 （益田家臣、回天軍、奇兵隊） 為歸休セシメタリ

當度 山下範三郎 （益田家臣、回天軍、奇兵隊） 奇兵隊ヨリ歸休ノ件 及ヒ 山口ニ於テ處分上ニ関 （益田家臣、回天軍、奇兵隊）

リ邑政堂ニ請求スヘキ件等アリテ 中村 藤馬 （益田家臣、回天軍、奇兵隊） 山口ヲ出發ス

（六月） 同 十 一 日 中村 藤馬 （益田家臣、回天軍會計） 須佐着 大谷源蔵 （益田家臣、下士） 山口ヨリ急報ノ事アリテ歸營セリ （益田家臣、回天軍會計）

（六月） 同 十 二 日 津田公輔 （益田家臣、侍御） 八敷嶋 河上等 （益田家臣、侍御） 卜相謀リ 中村 藤馬 （益田家臣、回天軍會計） 歸須 （須佐） 運動ノ結果 （二脱）

堀仙太郎＝堀潜太郎。名は春峰、萩藩準士。奇兵隊書記兼小隊司令。明治元年六月北陸征討軍に従い至るところ戦功あり。出雲崎より三条口に進むの時、賊の突撃に遭い官軍利を失うに方り、今町の敵壘に逼り重傷を負い、七月二日柏崎の病院に死す。年二七才。贈正五位。

林半七＝林友幸。通称初め周次郎、のち半七、秋畝と号す。萩藩士、土原の生まれ。資性勇邁大志あり。幼より鎗術を好み宝蔵流の流儀を極める。また萩野流砲術を修め夙に尊攘の大義を持す。高杉晋作の奇兵隊を編するやその参謀となる。戊辰の役各地に出戦して功あり。後徴士となり会計官民部省判事盛岡県大参事、九戸県権知事を経て民部大丞大蔵大丞内務小輔高等法院陪席判官宮中顧問官を歴任。枢密顧問官。伯爵。

依リテ天軍ヲ擧テ台至ルベキ事ヲ決シ俄ニ出發翌十三日下田萬
本營歸ル

田天軍ヲ原井直助大石源藏ヲ出頭セシメ兼テ請求ノ要件ヲ續行ス
ニ事ヲ邑政堂通ヒト雖氏俗史等事ヲ曖昧ニ掩ヒテ決答セズ

同廿日中村藤馬外一名出頭昨日原井直助等應接件付軍事
總督増野與次面會シ稍敷論及ビシカ明日決答ヲ期シテ志セリ

同十五日中村藤馬等増野宅ニ至リ前日決答ヲ聞カント迫レルニ百方
逃辭ヲ設テ請求ノ教条大半聞届サルヲ以テ到底事ノ成サルヲ圖
リテ歸宮セリ

同十六日御手廻ノ内ヨリ山下少輔松原仁藏等招ニ應ヒテ米倉相
議ス處アリ

同十七日夜須佐ヨリ宇野魁助来營シ款ヲ十二奸處分ニ際シ其

依リテハ 回天軍ヲ舉^{あげ}テ山口 至^{いた}ルベキノ事ヲ決シ 俄^{にわか}ニ出發 翌^六十三日 下田萬^{（現田万川町）}

本営二歸ル 回天軍ヨリ原井直助^{（益田家臣、回天軍）} 大谷源蔵ヲ出頭^{（須力）}セシメ 兼テ請求ノ要件^{（益田家臣、下士）} ヲ断行アラ

同十四日 中村^{（益田家臣、四組、回天軍會計）} 藤馬外一名出頭^{（須力）} 昨日原井直助等應接ノ件二付^{（益田家臣、回天軍）} 軍事
總督 増野與次二面會シ 稍々激論ニ及ビシカ 明日ノ決答ヲ期シテ去レリ

同十五日 中村^{（益田家臣、四組、回天軍會計）} 藤馬等^{（與次）} 増野宅ニ至リ 前日ノ決答ヲ聞カント迫レルニ 百方^{（益田家臣、中士、御手廻組）}
逃辞ヲ設^{（益田家臣、軍事總督、加判）}テ請求ノ数条八大半聞届サル ヲ以テ 到底事ノ成サルヲ圖^{（益田家臣、中士、御手廻組）}

同十六日 御手廻^{（益田家臣、中士、御手廻組）}ノ内ヨリ 山下少輔^{（益田家臣、中士、御手廻組）} 松原仁蔵等^{（益田家臣、中士、御手廻組）} 招二應シテ来営^{（益田家臣、中士、御手廻組）} 相^{（益田家臣、中士、御手廻組）}

同十七日夜 須佐ヨリ宇野魁^{（益田家臣、中士、御手廻組）} 助来営シ 萩二於テ十二奸^{（益田家臣、中士、御手廻組）} 處分二際シ^{（益田家臣、中士、御手廻組）} 其^{（益田家臣、中士、御手廻組）}

兼テ請求ノ要件 〃 文書館本は、〃の個所を「数条」と記述。本頁終わりにから行目の表現に合わせて「数条」と修正した。
出頭〃本頁の2個所にある「出頭」は「出須」の誤記。何れも文書館本の記述に基づき修正した。
大半聞届サル 由ナル ヲ以テ〃これも文書館本の記述に基づき加筆修正した。

十二奸吏処分〃閏五月二十八日、棕梨藤太を斬に処し、中川于右衛門に死を賜い、三宅忠蔵を其家に禁錮し進藤吉兵衛、工藤半右衛門、村岡伊右衛門を遠島に処す。小倉源
五右衛門、山県興一兵衛、岡本吉之進の三人は棕梨藤太等と共に監禁所より野山獄に移さるゝの途輿中に自刃す。而して山県は未だ死せず因つて其自刃の故を問うに唯答ふ
るに発狂を以てするのみ乃ち其傷の癒るを待て老舎を命ず（七月十三日）（防長回天史第五編上七172頁より）

また六月十九日明木刺客の罪を断じ中井栄一郎、木村松之丞、小倉半右衛門、児玉久吉郎、南新三郎、小川八十槌、冷泉太郎兵衛をして野山獄に自裁せ
しむ。（防長回天史第五編上七176頁より）これにより本藩政府の俗論党の処分が完了した。

慶応元年（一八六五） 六月

餘黨蜂起ノ狀況アリテ諸隊同地ニ出張セル由ナリト報知ス仍テ中村
兼一内山茂樹等探訪ノ為ニ出救セシカ同地ニ異狀ナキヲ以テ茂樹ニ
歸營シ泰一諸隊ノ動靜ヲ候フ為ニ山口ニ出ラントシテ月木村ニ至ルハ數
嶋次郎ア出救スルニ今ニ數嶋曰ク救地鎗撫ノ為ニ世子君御赴ニ決シ
諸隊ヨリ御身衛兵ヲ出セシカハ軒茶屋迄御出馬アリシニ更ニ諸
隊ヨリ之ヲ留メタリシニ依リ御赴山アリタリ賊黨沸騰ノ說ニ全ク謬謬
出タルモノナリ將テ須佐處分ノ許過日次郎政事堂ニ出頭シテ催促
セシニ徳山正邪兩立ノ處分中ナレハ其處分カラ竟リタル後直チニ着手
スギノ事ナリト泰一數嶋同伴ニテ款ニ至リ破シ分ケニ歸營セリ
同廿日中村藤馬出頭軍務引渡ノ事ヲ邑政黨ニ迫リテ曰ク過日未隊員
交々邑政黨ニ出頭シテ之ヲ促カスト雖モ君等左ニ避ケ右ニ逃シテ田天軍欺
キ以テ今日ニ至ル到底渡サレバ渡サスト斷言セリヨト宿更小銃一切渡マハカラス

慶応元年（一八六五）六月

餘黨蜂起ノ狀況アリテ諸隊八同地ニ出張セル由ナリト報知ス仍テ中（益田家臣、四組、御殿御算用方、村

泰山（益田家臣 回天軍）
一
内山茂樹等探訪ノ為メ出萩セシカ
同地ハ異状ナキヲ以テ
茂樹ハ（内山）

村^方

歸營シきえい
 泰一(中村)ハ諸隊ノ動靜ヲどうせい
 候うかがフ為メ山口ニ出テントシテ明木村ニ至レハ(現阿武郡旭村)
 敷

嶋次郎(遊撃軍)ノ出萩スルニ会ス
 敷嶋曰ク萩地鎮撫ノ為メ
 世子君御越二決シ

諸隊ヨリ八御守衛兵ヲ出セシカ
これとど
しゅえいへい
だ
よ
六軒茶屋迄御出馬アリシニ
(山口)
(一の坂の途中に設けられた休憩所)
そくとうふつとう
まった
更ニ諸
こびゅう
さら

隊ヨリ之ヲ留メタリシニ依リ御歸山アリタリ(山口)
(敷嶋) 賊黨沸騰ノ説ハ全ク誤謬ニ

出タルモノナリ
徳山内江
将タ須佐處分ノ件八過日次郎政事堂二出頭シテ催促
しよぶん
そのしよぶん
おわ
ただ
ちやくしゅ

セシニ 徳山正邪両立ノ處分中ナレハ 其處分ヲ竟リタル後 直チニ着手

スベキノ事ナリト
泰一ハ敷嶋同伴ニテ萩ニ至リ
袂ヲ分チテ帰營セリ

司（六月）廿日
中（益田家臣 四組 回天軍會計）村
藤馬出頭（須）
軍器引渡ノ事ヲ邑政堂ニ迫リテ曰ク
過日來隊員ぐんきひざわたし
せま いわ かじつらい

同廿日、口林、府、魚、出、頭、宣、署、三、派、之、事、三、邑、政、堂、二、進、リ、テ、日、々、進、日、又、附、員、
こもこも しゅつとう これ うな いえ あざむ

交々邑政堂二出頭シテ之ヲ促カスト雖トモ君等八左ニ避ケ右ニ逃レテ囧天軍ヲ欺

キ以テ今日ニ至ルもつ 到底渡サヘレバ渡サスト断言セラレヨいた 俗吏ハ小銃ハ一切渡スヘカラスとつてい
だんげん
そくり
いっさい

明木萩往還と赤間関街道の分岐点。江戸時代は御客屋と呼ばれる休憩所が置かれ宿場町、市の街として繁栄した。明治二十四年に大火があり集落の大部分が焼失したが、街はその後の姿に再建された。萩から7千_リ。

六軒茶屋＝萩往還の途中にある休憩所。萩往還は現在の県道62号線で、山口市天花から急坂を登り山地に分け入る。錦鶏湖付近、一の坂の途中に置かれた休憩所が六軒茶屋で、そこから街道筋随一の難所とされる標高539メートルの板堂峠を超えると周防國から長門國に入る。佐々並には御茶屋（本陣）や御客屋（脇本陣）が置かれ伝馬なども常備されていた。明木を過ぎて萩の入口倅坂から萩間では数キロの距離である。

徳山正邪両立。徳山内項事件。蛤御門の変の後、徳山藩にも正俗二派の対立が生じ、俗派の領袖老臣富山源次郎要路に立ち幕府に阿附して苟も免れんとするの迹あり。河田佳蔵慷慨憤えず、同志十数人と共に富田を襲いしなり。源次郎傷を蒙りて逃れる。藩吏怒りて其与党を逮捕す。河田は捕らえられ十一月二十四日斬に処せられる。井上唯一、本城清、浅見安之丞、信田作大夫は皆獄に投じ、井上は河田とともに斬に処せられ、他は皆慶応元年正月十四日凶手に斃る。江村彦之進、児玉次郎彦は八月十二日凶手に斃る。これを徳山七士と称する。翌慶応元年六月宗藩六戸備前前原彦太郎を徳山に遣り淡路守に説き富田等を斥け正義派の土を登庸せしむ。(「防長回天史」第四編下77頁)

出頭^二「出須」の誤記。前頁脚注と同じ。

政事堂 Ⅱ 要塞調査

大砲危撻ヲ今日ヲ渡スベシ金山嶺吾ヨリ受願スベシト決答セリ藤馬嶺
吾ヨリテ之ヲ受願シ本營向テ送致スルニ途中ニシテ車臺ヲ奪テ者
アリテ其踪跡ヲ知ラス

同廿一日津田公輔大橋三木樹三村藤馬邑政堂ニ至リ車臺橫奪
賊ヲ搜索スルニ紋督ヨリ沙汰無之ニ據リ御武具方役人ノ爲メ所ナリト
ノ事トハ俗吏ヲ責ムル最敷列ニシテ俗吏逃辭爲メキ無キ各色ヲ
失ヒテ默然ナリ

同廿三日津田公輔大谷涼藏大谷千代松以上同山本少輔大塚良江宇

野魁介以上同兼行八百屋丁中本某投宿

同廿四日周布殿ヲ訪ヒテ去廿二日領地美祢郡波木秘更ニ益田石

見殿即ニ到リ出山盡力ノ事ヲ侵セハ予等後見職辭退申出中ニバ

周旋スベキ貴仕ナリ且不日政事堂ヨリ召喚アル由ナレハ夫追出山セサ

大砲（金）挺（中村）ヲ今日引渡スベシ 金山慎吾ヨリ受領スベシト決答セリ 藤馬八慎
吾（山）ニ至リテ之ヲ受領シ 本営 向テ送致スルニ 途中ニシテ車臺ヲ奪フ者
アリテ 其踪跡ヲ知ラス

同廿一日 津田公輔（益田家臣、侍御） 大橋三樹三（益田家臣、回天軍小隊司令） 中村藤馬（益田家臣、四組、回天軍會計） 邑政堂ニ至リ車臺横奪
ノ賊ヲ搜索スルニ總督ヨリ沙汰無之ニ據リ 御武具方役人ノ為ス所ナリト
ノ事ナレハ 俗吏ヲ責ムル 最激烈ニシテ俗吏ハ逃辞ノ為スベキ無キ 各色ヲ
失ヒテ默然タリ

同廿三日 津田公輔（益田家臣、侍御） 大谷源蔵（益田家臣、下士） 大谷千代松山（益田家臣、中士、御手廻組） 下少輔 大塚浪江 宇
野魁助（益田家臣、中士、御手廻組） 萩行 八百屋丁（やあやちよう） 中本某ニ投宿ス

同廿四日 周布殿（治部）ヲ訪ヒテ 去廿二日領地美祢郡澁木（長門市深川町）ニ移ラル 更ニ益田石
見殿邸（山口）ニ到リ 出山 盡力ノ事ヲ促セハ 予等後見職辞退ノ申出中ナレバ
周旋スベキ責任ナク 且不日政事堂ヨリ召喚アル由ナレハ 夫迄ハ出山セサ

八百屋丁

美祢郡澁木 現在の長門市渋木（JR美祢線澁木駅付近）の事と思われるが、若しそうなら美祢郡ではなく大津郡。186頁、202頁参照。
不日＝日ならず。やがて。

に決心ナレ周布氏就テ熟計然ルベシト答報アリ帰寓後益田殿ノ
旨ヲ領シテ周布殿ノ山口行ヲ迫リ其承諾ヲ得テ更ニ益田殿ヲ促スベシト
一決シ昼飯ヲ餐テ公輔ノ代松浪江魁介四名浪木行ノ途ニ上リ同
夜着周布殿ニ迫ルト雖氏益田殿同様ノ辭解ニテ管出ヲ辞セラルニ
依リ強ヒスレテ止ム

同廿五日浪木出發ノ代松魁介ノ歸萩源三等ニ通シテ一同山口行ヲ為サ
シ公輔浪江直ニ山口行大其途次烟櫛屋氏賜地ノ敷嶋ヲ叩クニ
其兄田中忠左衛門應接ス敷嶋ニ既ニ出サレリ

同廿六日公輔等山口着札ノ辻ハ八羽翌廿七日少輔ノ代松及源藏三郎

等之進増野徳一郎ニ右共組王正義派ニシテ後ニ出款ヤシキナリ等萩ヨリ至ル

行台ニ至レ本藩ヨリ故親施公ノ御罪狀御取揚ノ令ヲ發セラレタリ其厚

御神本精治郎

慶応元年（一八六五）六月

ルノ**決心**ナレハ 周布氏二就テ**熟計**然ルベシトノ**答辨**アリ 帰寓ノ後 益田殿ノ
 旨ヲ領シテ周布殿ノ山口行ヲ迫リ 其承諾ヲ得テ更ニ益田殿ヲ促スベシト
 一決シ 昼飯ヲ餐シテ公輔 千代松 浪江 魁助四名**渋** 木行ノ途ニ上リ 同
 夜着 周布殿二迫ルト雖トモ 益田殿同様ノ**辨解**ニテ 只管出山ヲ辞セラル、二
 依リ 強イスシテ止ム

同廿五日 **渋** 木出發 千代松 魁助八帰萩 源蔵等二通シテ一同山口行ヲ為サ
 シテ 公輔 公輔八直ニ山口行 尤其途次 **畑** 粟屋氏領地敷 二テ敷嶋ヲ叩クニ
 其兄田中忠左衛門應接ス 敷嶋八既ニ出山セリ

同廿六日 公輔等山口着 札ノ辻 **山八** 翌廿七日 少輔 魁助 千代松 及 源蔵 三浦
栄之進 増野徳一郎 二名共組士正義派ニシテ後ニ出萩セシモノナリ 等萩ヨリ至ル
 一行山口ニ至レハ 本藩ヨリ故親施公ノ御罪状御取揚ノ令ヲ發セラレタリ 其寫

御神本精治郎

畑 〓 何処が良く分かりません。教えて下さい。 寄組粟屋家には三家あり 四九一五石 〓 熊毛大河内呼坂小周防、先大津日置、小郡大海、大島志佐小

松 六九一石 〓 美祢青景、当島紫福 浮米 五四六石 〓 美祢秋吉、吉田大嶺 浮き米。（大津郡日置町畑ダム周辺のことか）

叩く 〓 訪問する。

札ノ辻 〓 下小鯖村一貫野の地名 ？

三浦栄之進 〓

増野徳一郎 〓

御神本 〓 益田家は親施が罪せられて切腹したため 謹慎の意をもって益田姓を避け 旧姓御神本を称していた。

事

右又右衛門介先達而御咎實犯相當、罪狀以テ沙汰可被仰付之處詮義、者不届、付無條理之義有之御心、被思召、依之最前之罪狀、御取揚被仰付至

同廿七日、青兵隊時、少參謀計畫、藤田篤輔、山下範三郎、歸邑、永シ公輔、代松浪江及組士兩名同伴、出發翌廿八日、少輔出發、源

藏、敷嶺、與、浪水行、魁介、危人、滯、止セリ

同廿九日夜、大塚良江、完、放、大會議、開設、運動、針路ヲ議スルニ急激溫和二派、分、逐、溫和派、多數ヲ制セリ、テ急激説ヲ実行スル能ハズ、至、隨、時、武ノ意見見、テ、盡、餅、屈ス、嗚呼

七月七日、曉、天下田、萬村、營所、揚、金軍、出、山、ヤ、全体、西、後、見、處、断、因、續、姑、息、ミ、テ、徒、ニ、日月、ヲ、經過、シ、為、ノ、俗、論、黨、ノ、氣、煩、高、ノ、也、門

右(益田親施)父右衛門介
先達而御咎 実犯相當ノ罪状ヲ以テ沙
汰可被仰付之處
詮義ノ者不届二付 無條理ノ義有之
御心外二被思召候
依之最前之罪状御取揚被仰付候
事

(六月) 同廿七日 奇兵隊時山參謀ノ計畫アリテ 藤田篤輔(益田家臣) 山下範三郎(益田家臣、回天軍、奇兵隊)ノ歸
(須佐) 邑二決シ 公輔(津田) 千代松(大塚) 浪江 及 組士兩名同伴出發 翌廿八日 少輔(山下)出發
(谷) 藏八敷嶋ト與二決(次郎) 木行 魁介(宇野) 老人八滯山セリ 源(大)

(六月) 同廿九日夜 大塚浪江宅ニ放テ大會議ヲ開設シ 運動ノ針路ヲ議スルニ
急激温和二派二分レ 遂ニ温和派ノ多数ニ制セラレテ急激説ヲ実行スル能サ
ルニ至ル 随テ時山氏ノ意見モ畫餅ニ属ス 嗚呼

七月七日 暁天 下田萬村營所ヲ引揚ケ 全軍出山セリ 全体兩後見ノ處断
因循姑息ニシテ徒二日月ヲ經過シ 為メニ俗論黨ノ氣焰ヲ高メ 北門

実犯相當ノ罪状ヲ以テ「意味不鮮明。」「実際に犯した通りの罪状で裁かなければならないところ」つまり「実際には犯していないのに」と言う意味か。

要衝、防禦ヲ引受ケルカウ邑中人心惴々互ニ相及目スル場合ニ至リ
國家、多慷慨悲憤、堪エカハ本藩政布、迫リテ直接、英斷ヲ行
ク、決意ナリ此報ノ須佐ニ達スルヤ御手廻リ、大會議ヲ開ヒテ一同出山
南御願ニ滞在シテ兩後見ニ神速御處分ノ事ヲ歎願シテ尚採用
ナケル本藩政府、直接ノ事ヲ歎願セント一決シテ發程セリ

同八月、宇谷市丸兩組、大會議ヲ開キテ御手廻更ラミ出山セシ、兩組モ御
手廻ト共ニ出山歎願ノ事ニ決ス

同九日、夜、宇谷市丸兩組及瀬尻組、内西尾社、助外四名以上七十有餘
名、上小川村、武氏山八幡宮社前ニ集合シテ、夜半山口ニ向テ出發セリ

去月上旬、佐吏等仙相院君ヲ奉シテ山口ニ至ルヤ何等ノ運動アリシヲ知ル

ベカラスト雖、其結果柱主殿殿ヲ以テ幼主代役タウシタルノ命アリ、柱主殿々
存續殊ニ毛利家前尤大ノ第ナク佐吏等仙相院君ノ意ヲ何テモラ代役タウシナ
事ヲミゼントスル、私ヲ挾テ内願セシモノ、ミテ益田町下等亦奔走大ニ謹ナタリト云フ

慶応元年（一八六五） 七月

要衝ノ防禦ヲ引受ケナカラ 邑中人心恟々互ニ相返 目スルノ場合ニ至レルハ
国家ノ為慷慨悲憤ニ堪エザレハ 本藩政府ニ迫リテ直接ノ英断ヲ仰
クノ決意ナリ 此報ノ須佐ニ達スルヤ御手廻リハ大會議ヲ開ヒテ一同出山
南御領ニ滞在シテ兩後見ニ神速御處分ノ事ヲ歎願シテ尚採用
ナケレハ本藩政府へ直接ノ事ヲ歎願セント一決シテ發程セリ

同八日 宇谷 市丸兩組大會議ヲ開キテ御手廻既ラニ出山セシハ 兩組モ御
手廻ト共ニ出山歎願ノ事ニ決ス

同九日夜 宇谷 市丸兩組及瀬尻組ノ内 西尾壯助外四名以上七十有余
名 上小川村武氏八幡宮社前ニ集会シテ夜半山口ニ向テ出發セリ（注）
去月上旬 俗吏等仙相院君ヲ奉シテ山口ニ至ルヤ 何等ノ運動アリシヲ知ル
ベカラスト雖トモ 其結果 桂主殿殿ヲ以テ幼主ノ代役タラシムルノ命アリ
女婿殊ニ毛利筑前大夫ノ弟ナレハ俗吏等仙相院君ノ意ヲ仰（迎）テ之ヲ代役タラシメ益權勢
ヲ專ラニセントスルノ私ヲ挾テ内願セシモノニシテ益田丹下等亦奔走大ニ強（勉）メタリト云フ

恟々〓おそれて騒ぎ立つさま。 慨〓いきどおり嘆くこと。 慷慨悲憤〓激しく憤り嘆くこと。 南御領〓91頁脚注参照。 神速〓きわめて速いこと。

武氏八幡宮〓大同年中（八〇六〓九）松尾式部勝宗が豊前国宇佐八幡宮より御分霊を受け鈴野川桑瀬谷の地に祀ったのが始まりで桑瀬谷ヒガシの宮と称した。天慶年中（九三八〓九四六）桑瀬谷より上小川西分千足宮ノ尾に遷宮。康永年中（一三四二〓四四）千足の宮を上野原善生に遷宮し銅元山善生八幡宮と称した。その頃神職松尾山城守は宇佐宮より神功皇后と三女神の御分霊を勧請して八幡三所の大神として祀った。文安年中（一四四四〓四八）探題大内氏の祈願所となり社領仰付らる。明応元年（一四九二）社殿焼失し間もなく再建。爾来、武氏八幡宮と称す。現在の拝殿は慶安二年（一六四九）のものと思われる。益田氏の祈願所だったと言われ、益田越中守就恒公寄進の「八幡宮」の扁額がある。文政十年（一八二七）神殿再建。祭神は応神天皇、神宮皇后、三女神（田心姫命、湍津姫命、市杵嶋姫命）。

（注）草稿本ではこの後に次の文章が挿入されている。茲ニ回天軍ハ一貫野村里正岡某ニ滞陣シ御手廻ハ千坊村三組ハ志貫野村ニ逗留ス 惣人員百七十人ナリ この文章は尊攘堂本では251頁冒頭にある。

桂主殿〓吉敷毛利蔵主房謙の九男。初親澄、竹之進、主殿、弾正介、字右衛門。天保十三年壬寅四月二十八日生。初め桂家の養子となるが命により益田家を嗣ぐ。文久元年九月十八日益田元宣公の末娘、房子（親施公の妹。輝子、貞子、忠子とも）と結婚。親施公の嗣子精治郎幼少のため代役となり、明治六年同人に家系を譲り更に嫡子となる。明治十九年十月二十九日卒。四十五才。毛利筑前（元亮）は主殿の実兄（吉敷毛利蔵主房謙の二男）。

愚。

桂殿益田家ノ供張ニテ意氣揚々本日山口ヲ出發シテ款に至リ
近日須佐行アルベキ者ナリ津田公輔中村藤馬政事堂・山頭議員
ニ面會ラレフ波田野金吾氏出會セリ公輔等曰ク當度桂主殿殿ヲシテ
代役タラシメラル。益田家ノ前途深ク憂フル所ナリ何トナレハ同氏カ款市街
往來スルノ指ニテ桂馬鹿且那祿ス焉ノ名門貴族ノ幼主ヲ輔ケ代役
ノ責任ヲ負フベキ器量アラシヤ公輔等不敏ト雖氏飽迫幼主ヲ輔導シ
盡力ニ成ル後父祖ノ名譽ヲ襲キ國恩ノ萬一ニ報ジシムハ誓ヒテ期スル處
ナリ仰キ冀ク公輔ノ言ヲ容テ代役ヲ解カシメラト波田野氏大ニ激昂シテ
曰ク桂主殿ヲシテ益田精次郎ノ代役タラシムハ藩主公ノ御命令ニミテ
即御差付ナリ汝等ノ隊ヲ容ルベキ事ニ非ス其賢萬得失ニ益田
家ノ家政ヲ執ラシメテ成蹟ノ如何ヲ見サハ豫メ判談スベカラスト言竟
リテ入ル公輔等益田家ヲ賄スルノ厭制ヲ不快ニ感スルト雖モ當時

桂殿(主殿)ハ益田家ノ供張ともばりニテ意気揚々いきようよう本日山口ヲ出發シテ萩ニ至リいた
 近日須佐行アルベキ筈ナリ(津田公輔)津田公輔中村藤馬(益田家臣、侍御)政事堂ニ出頭議員
 二面會ヲ乞フ(広沢真臣、藏元役助)波田野金吾氏出會セリ公輔等曰ク當度桂主殿殿ヲシテ
 代役タラシメラルハ益田家ノ前途深ク憂フル所ナリ何トナレハ同氏力萩市街
 ヲ往来スル人之ヲ指シテ桂馬鹿旦那ト稱ス焉いすくんソ名門貴族ノ幼主ヲ輔ケ代役
 ノ責任ヲ負フベキ器量アラシヤ公輔等不敏ト雖トモ飽迄幼主ノ輔導ニ
 盡力シ成育せいいくノ後父祖ノ名譽ヲ襲キ國恩ノ萬一二報ヒシムルハ誓テ期スル處ところ
 ナリ仰キ冀こいねがわクハ公輔ノ言ヲ容レテ代役ヲ解力レンコトヲト波田野氏大ニ激昂シテ
 曰ク桂主殿(このも)ヲ以テ益田精次郎ノ代役タラシムルハ藩主公ノ御命令ニシテ
 即御差付ナリ汝等ノ喙くちばしヲ容ルベキ事ニ非ス其賢愚得失ハ益田
 家ノ家政ヲ執ラシメテ成蹟ノ如何ヲ見サレハ豫メ判断スベカラスト言竟
 リテ入ル公輔等益田家ヲ賭スルノ厭制えんせいヲ不快ニ感スルト雖モ當時

(いすくん) ソ＝P75 参照。 どうして…か。(疑問・反語の助詞) どこに…か。(場所を問う疑問詞)

器量＝才能と度量。

公輔ノ言ヲ容レテ 代役ヲ解力レンコトヲ＝文書館本の記述に基づき

(桂主殿殿ノ)の部分を入れた。

御差付＝「付」は「やづけ」。

厭制＝押しつけ。「厭」はおさえる／おしつぶす／せまる。(或いは「壓政」か)。文書館本は「壓制」と書いている。

慶応元年(一八六五) 七月

本藩城嚴犯スベカラサルヲ退出セリ御手廻三組等各兩後見ニ歎願
書ヲ出セシニ兩後見當度柱主殿ヲ以テ精次郎殿ノ代役トセウヘタルハ須
佐處分付予等其責ニ任セスト答ヘ見ニ依リ更ニ政事堂ニ歎願セシニ
益田家當度君公源キ思召アリテ柱主殿ヲ以テ代役タラシメラレタリ
仍テ不月須佐行アルハ精次郎殿如少ノ時益田家家政ニ九テ
代役處置ニ任セタルハ能止代役ニ建言シテ其裁判ヲ促スベシ萬一代役
處置ニ能サル事アルハ代役ヲ本藩ニ員申シテ御指揮ヲ仰ルベシト拒絶
セリル後兩天軍本藩政府ニ向テ直接裁断ラセバキト日ヲ建言シテ
止マテ御手廻惣代ヨリモ亦歎願書ヲ出シテ處断ヲ仰ク事頻ナリ
茲ニ兩天軍一貫野村里正岡某ニ帶陣シ其公輔大橋三樹三守村
藤馬奇兵隊員山下範三郎黒谷豫四郎同伴山口ニ出ル御手廻ニ
應止金古曾ニ着泊シ後惣代ヲ残シ置キ惣人數十坊村ニ轉シ

慶応元年（一八六五）七月

本藩ノ威厳犯スベカラサルヲ以テ退出セリ 御手廻三組等各両後見二歎願
 書ヲ出セシニ 両後見八當度桂主殿 ヲ以テ精次郎殿ノ代役トセラレタレハ 須
 佐處分ノ件ハ予等其責ニ任セスト答ヘタルニ依リ 更ニ政事堂ニ歎願セシニ
 益田家ハ當度君公ノ深キ思召アリテ桂主殿氏ヲシテ代役タラシメラレタリ
 仍テ不日須佐行アルベシ 精次郎殿幼少ノ時 益田家ノ家政ハ凡テ
 代役ノ處置ニ任セタレハ 飽迄代役二建言シテ 其裁判ヲ促スベシ 萬一代役ノ
 處置シ能ハサル事アレハ代役ヨリ本藩二具申シテ御指揮ヲ仰ルベシト拒絶
 セリ 爾後 回天軍ハ本藩政府ニ向テ直接裁断ヲ乞フベキ旨ヲ建言シテ
 止マス 御手廻惣代ヨリモ亦歎願書ヲ出シテ處断ヲ仰ク事頻ナリ
 茲ニ回天軍ハ一貫野村里正岡某二滞陣シ 津田公輔 大橋三樹三 中村
 藤馬 奇兵隊員山下範三郎 黒谷豫四 郎同伴山口ニ出ル 御手廻ハ一
 應山口金古曾ニ着泊シ 後惣代ヲ残シ置キ惣人数八千坊村ニ轉シ

一貫野＝南御領（91頁脚注）参照。

千坊村＝御堀村問田千坊。現山口市大内御堀。仁保川と問田川に挟まれた地域。

金古曾

金古曾＝山口市の八幡馬場と古熊三丁目との間が金古曾町。

三組二貫野村ニ逗留ス惣人員百七拾人ナリ

代役桂主殿ニ本藩政府ヨリ益田三郎元門栗山翁輔両名ニ押

隠シ命シ他人相對ヲ禁シ殊ニ翁輔ニ親撲タリテ面接セシムベカラズトノ内命

ヲ受クルト雖元來俗吏黨ノ爲ノ推薦セラレテ益田家代役タル主殿

殿ナド情實ニ纏綿セラレテ果斷決行スル事不能在昔時日ヲ經過セ

シ終ニ三郎元衛門ニ依頼退隱シ餐子邦衛ニ家督相續セシメ同家

ヲリト言フ翁輔ニ普通ノ隱者ヲ命シ男内藏太ニ家督相續セシメタリ

故ニ黨派ノ首領タルニ依然タリ

田天軍ヲ山口諸隊會議所ニ出セシ願書ノ寫

去冬以來幣邑不穩其起ル所益田三郎元衛門栗山翁輔波圓

市多祢帽元衛門等カ如キ奸更要路ニ當リ幼主ヲ蔑シ自己ノ

權威ヲ專シ其外並強團ニ魁首仲井半四郎多祢卯一山崎十郎

三組（宇谷、市丸、瀨尻）八貫野村二逗留ス（現山口市）惣人員百七拾人ナリ（綴）

代役桂主殿（益田家臣、老臣、邑宰）八本藩政府ヨリ益田三郎左衛門（益田家臣、上士、大組、当役、北強団總督）栗山翁（益田家臣、上士、大組）輔兩名二押（おし）隠（いんきよ）ヲ命シ他人相對ヲ禁シ殊ニ翁輔八親族タリトモ面接セシムベカラストノ内命（ないめい）ヲ受クルト雖トモ元来俗吏黨ノ為メニ推薦セラレテ益田家ノ代役タル主殿（だいやく）殿ナレバ情實ニ纏綿セラレテ果斷決行スル事不能（あたわず）在苒時日ヲ經過セシニ終ニ三郎左衛門ハ依頼退隠シ養子邦衛（益田）二家督相續セシメ（かたくそうぞく）為祝（たがひ）宴ヲ開キ（うゑ）タリト言フ翁輔ハ普通ノ隠居ヲ命シ男内蔵太二家督相續セシメタリ故ニ黨派ノ首領タルハ依然タリ

田天軍ヨリ山口諸隊會議所ニ出セシ願書ノ寫

去冬以来（弊）須佐ふおん幣邑不穩（そのおこ）其起ル所ハ益田三郎左衛門（益田家臣、老臣、邑宰）栗山翁（益田家臣、上士、大組、当役、北強団總督）輔波田與（益田家臣、御用人）市多祢順左衛門等（益田家臣、上士、大組）力如キ奸吏要路ニ當リ（益田精治郎）幼主ヲ蔑ニシ（ないがしろ）自己ノ（い）権威ヲ專ニシ（けんゐ）其外北強團ニテ魁首（かいしゅ）仲井半四郎（益田家臣、上士、大組）多祢卯一（益田家臣、上士、大組）山崎十郎（益田家臣）

三組＝慶応元年二月十五日、従来の四組のうち須佐地と宇谷が合併して三組となった（104頁参照）

相對＝當事者同士が直接に互いに納得の上で、ここでは面会すること。

押隠居＝隠居刑。「押」はおさへつける／とりしめるの意（押籠め、押収、押送、押領など）。

纏綿＝まといつくこと。からまること。心にまとわりついて離れないこと。

苒（じんぜん）＝63頁脚注参照。

益田邦衛＝

栗山内蔵太＝栗山翁輔長男。觀之助、内蔵太、勝熊、包達（かねみち）。嘉永二年十月十二日生。明治五年熊本鎮台入隊、三等伍長を振り出しに創設期の日本陸軍奉職、教導

団歩兵科卒、西南の役征討軍参戦、戸山学校第一期生・歩兵少尉任官、近衛歩兵第四連隊旗手、近衛参謀課長、軍法會議判士、対馬警備隊区副官、陸軍憲兵大尉などを歴任。

明治三十五年九月十三日没。五二才。妻は兒玉源太郎養女勇（ユウ）。

諸隊會議所＝巻末補注参照。

慶応元年（一八六五）七月

大衛門松野重内尾野太郎内藤堪亮等右四人之者、尤祖致之
種々奸謀、廻レ疾ヨリ終止邪而立、相成疾處、今日ニ至リ疾テハ
賊勢補盛、相成實以不堪痛憤之至疾、私共一統歎願之筋
有之疾得共 御膝元近、罷出疾而恐ヨリ義有之疾ニ付
一先願分、危貫野ハ引越五六人丈、山口表罷出申疾然ハ處
今度益田三郎三九衛門等隱居被仰付疾得共其餘ノ義ハ絶而
御詮義筋、無之疾段一統疑惑ヲ生シ申疾前首謀ノ者、此
可被處、乍恐實大之御所置ニテハ正義回復之目途不相
立、眼前之憂、疾得者一統感服難仕疾、御上改而御
詮義被仰付速ニ適當之罰被仰付在様、御取扱奉伏
願、誠恐誠惶謹言

七月十七日

田天軍

慶応元年（一八六五） 七月

左衛門 益田家臣、上士、大組（益田家臣、上士、大組） 松野重内 宅野太郎 内藤磋亮等右四人之者へ左袒致シ
種々奸謀ヲ廻シ候ヨリ 終二正邪兩立二相成候處 今日二至リ候テハ
賊勢稍盛二相成 實以不堪痛憤之至候 私共一統歎願之筋
有之候得共 御膝元近ク罷出候而八恐多義有之候二付
一先領分壹貫野へ引越 五六人丈ヶ山口表罷出申 候 然ル處
今度 益田三郎三左衛門等 隠居被仰付候得共 其餘ノ義ハ絶而
何タル 御詮義筋毛無之候段 一統疑惑ヲ生シ申 候 前首謀ノ者ハ屹ト
可被處 尙恐寛大之御所置ニテハ正義回復之目途不相
立八眼前之吏二候得者 一統感服難仕候 此上改而御
詮義被仰付 速二適當之罰被仰付候様 御取扱奉 伏
願 候 誠恐誠惶謹言

七月十七日

左（さたん）
袒 121頁脚注参照。

壹貫野 一貫野。南御領（91頁脚注）参照。

御詮義筋毛無之候段 文書館本の記述に基づき

屹ト可被處 文書館本の記述に基づき

の個所に「何タル」を補足加筆した。
の個所に「厳科筆之處」を補足加筆、「屹度厳科二処セラルベキ筈ノ処」となる。

諸隊會議所

各中様

同十五日須佐ヨリ御直便トシテ安富九郎兵衛金山太左衛門等
至一貫野村在陣田天軍及三組千防村滞在御手廻、間ニ往
來シテ歸邑歎願スベキ、命ヲ傳フテ曰ク多數ノ人員當地ニ滞在
スル頗ル不穩、舉動ニシテ兩君公ニモ自然御煩念ヲ掛ケ實以恐
懼、至ナク至當ノ請求、間屆ギキヨリ一應歸邑、上願書差スベシト
事ナリト然ル間天軍、邑中ニ於テ諸願ノ手續キ既ニ盡セリ要路ノ奸
吏ヲ斃カス、正義ヲ貫徹スルニ由ケリ仍テ當地ニ出頭シテ本藩政布
裁決ヲ仰クモノナリ其不穩舉動ナルモ亦已ムラ得サルニ出ツルナリ豈好テ
之ヲ爲スモノナランヤ故ニ歸邑ノ命應ニ難シト決答セリ御手廻三組等ハ
御直便ノ命ナレハ強ク背クカラスト雖モ一同歸邑歎願スル却テ邑中混雜

諸隊會議所

各中様

(七月) 同十五日 須佐ヨリ御直便トシテ安富九郎兵衛 金山太左衛門等
至ル 一貫野村在陣 田天軍 及 三 組 千防 村滞在御手廻ノ間二往
來シテ歸 邑 歎願スベキノ命ヲ傳ヘテ曰ク 多数ノ人員當地ニ滞在
スルハ頗ル不穩ノ舉動ニシテ 両君公ニモ自然御煩念ヲ掛ケ 實以テ恐
懼ノ至ナレハ 至當ノ請求ハ聞届ベキニヨリ 一應歸 邑ノ上願書差 スベシトノ
事ナリト 然ルニ田天軍ハ邑中ニ於テ請願ノ手續キハ既ニ盡セリ 要路ノ奸
吏ヲ斃サスンハ 正義ヲ貫徹スルニ由ナシ 仍テ當地ニ出頭シテ本藩政布ノ
裁決ヲ仰クモノナレハ 其不穩ノ舉動ナルモ亦已ムヲ得サルニ出ツルナリ 豈好テ
之ヲ為スモノナランヤ 故ニ歸 邑ノ命ハ應シ難シト決答セリ 御手廻 三 組等ハ
御直使ノ命ナレハ強チ背クヘカラスト 雖トモ 一同歸 邑 歎願スルハ却テ邑中ノ混雜

一 貫野村 〓 南御領 (91頁脚注) 参照。

千防村 〓 250頁脚注参照。

慶応元年 (一八六五) 七月

ナハ少数綏代ヲ歸邑セシメテ歎願書ヲ出サシメ其成否ヲ試ミント評
決シ御手廻リ市山淳藏下少輔松原安藏松原仁藏大塚浪江
仲井健三ノ六名ヲ推換シテ綏代タラシメ三組一應御手廻リ綏代歸
須歎願ノ上事情ヲ報知スルノ約アル其一報待チテ綏代ヲ換定スハ
事ニ決セリ淳藏等安富九郎共衛等ト共ニ十九日午防ヲ出發シテ
羽立日着須直ニ出即代役桂主殿殿ニ面謁シテ從來ノ始末ヲ洩リテ
願意ヲ具申シタルニ明日書面ヲ以テ開陳スベシト事ニテ退出セリ
御手廻願書

御願申上英事

去冬以來御内輪和石終止強團ト聞天軍ト兩立ニ相成リ追追本
藩政府之御厄害筋ニモ立至リ奉恐入候雖然爲
御國家防外患ヲ義勿論ニ英得共必立見

慶応元年（一八六五）七月

ナレバ 少数ノ総代ヲ歸邑セシメテ歎願書ヲ出サシメ 其成否ヲ試ミント評
決シ 御手廻リハ市山淳蔵 山下少輔 松原泰蔵 松原仁蔵 大塚浪江
仲井健三ノ六名ヲ推撰シテ総代タラシメ 三組ハ一應御手廻ノ総代歸
須歎願ノ上 事情ヲ報知スルノ約アレハ 其一報ヲ待チテ総代ヲ撰定スル
事ニ決セリ 淳蔵等 安富九郎兵衛等ト共ニ 十九日千防ヲ出發シテ
翌廿日着須 直二出邸 代役桂主殿殿ニ面謁シテ従来ノ始末ヲ洩サス
（詳陳シ脱） 願意ヲ具申シタルニ 明日書面ヲ以テ開陳スベシトノ事ニテ退出セリ

御手廻願書

御願申上候事

去冬以来 御内輪一和不仕 終ニ北強團ト囧天軍ト両立ニ相成リ 追追本
藩政府之御厄害筋二モ立至リ 奉恐入候 雖 然 為
御国家防外患候義ハ勿論ニ候得共 必竟

千坊 250 頁脚注参照。

出邸 笠松邸に出頭すること。 65 頁脚注参照。

従来ノ始末ヲ洩サス 願意ヲ具申シタルニ 文書館本に基づき

の個所に「詳陳シ」と補足加筆した。

先君御逝去後執政之者因循打過依姑之沙汰有之矣ヨリ經
陽目ニ甚敷就而者當復已未其中間ニ相立乍微力周旋
仕矣得其詮無之今日ニ至リ矣而者混和之目途不相立弊災
悲泣之至ニ矣以切迫之時勢並出之要害相身在義者

御家之位ニ被為在矣得其只今之趣人心和仕矣而者悲

御家之御為筋者不及申

御兩國一箇之疲弊ニ在得者些細之議論者陶キ強國之魁

首名者壽田天厚ニ相當之罪被加速混和之基ヲ築キ

一團之正義恢復在

御國家之御為ニ盡死力度矣尚其非分病之矣ニ伏罪

矣間條理判然公道之

御英斷偏奉懇願矣誠惶誠恐謹言

(益田親施) 先君御逝去後 執政之者因循二打過 依姑之沙汰有之候ヨリ 經
かくひ はなはだしく 就而者當夏已来 私共中間二相立 乍微力周旋
隔日二甚敷 其詮無之 今日二至リ候而者 混和之目途不相立 號哭
つかまつりそうらえども 實脱 じつもてせつばくのじせい 北邨之要害八相守候義者
仕候得共 以切迫之時勢 人心一和不仕候而者 乍恐
ひきゅうのいたり 御家之任二被為在候得共 只今之趣 御家之御為筋者不及申
(益田家) のにん あらせられそうらえども 些細之議論者閣キ 北強團之魁
(益田家) の ためすじはもつすにおよばず 御家之御為筋者不及申
(長門、周防) 御兩國一箇之疲弊二候得者 速二混和之基ヲ開キ
しめ 首タル者ヲ罰シ 田天軍ヘモ相當之罪被加 速二混和之基ヲ開キ
いちだんの 一團之正義恢復仕 尚私共非分有之候ハ、 伏罪
(長州藩) の おんため しりよくをつくしたく 尚私共非分有之候ハ、 伏罪
御國家之御為二盡死力度候 條理判然公道之 誠惶誠恐謹言
えいだんひとえ 御英断偏二奉懇願候 誠惶誠恐謹言

因循〓 古い習慣により従つて改めないこと。 ぐずぐずしてためらうこと。

依姑〓 依怙。 鼻肩のこと。 たよること。 たよりとするもの。 父母をいう。

經隔〓 わけへだて。 312頁参照。 圭角（言語、行動が円満でないこと）と同じ。

混和〓 まぜあわせること。

北邨〓 邨〓 北の村。 須佐は防長兩國の北邨。 文書館本では「北方ノ要害」と書いている。

非分〓 自分の分限でないこと。 分を超えること。 道理に合わないこと。

慶応元年（一八六五） 七月

七月廿日

御手廻中

右願書_ヲ邑政堂ニ出セリ

茲_ニ高兵隊書記時山直八氏ノ意見_ニテ田天軍_ハ今一應敷願_ノ爲_メ
帰須_ス之_レ高_一逮捕又_ニ此書_セハ直_ニ隊兵_ヲ率_ニテ須佐_ニ向_フベシト_ノ
事_ニテ高兵隊山下範三郎田天軍津田公輔舟岡五郎三浦政衛
等_ノ帰須_ニ決_シ旅懷_ハ已_ニ成_ル氏_ノ探_自者_ノ須佐_ヲ帰陣報_ニテ曰_ク當度
須佐邑_ニ於_テ創立_セ各隊_ハ本藩_ノ命令_ヲ以_テ不_レ解散_セシ_ス又_ニ田内
達_{アリ}テ田天軍止強團新撰隊_ハ田内_ノ體_統等_ノ隊名_ヲ廢_シ並_ニ英餘
ニ_テ文武_ハ統_一昔古_ヲ爲_サレ_ル事_ニ決_セタリ必_ズ邑政堂_ニ俗吏_ノ山口_ニ在_リ
者_ノ須佐_ニ出_立基_ニ因_ニ必_ズ竟_ニ田天軍_ノ立_テ隊_ニアル由_ヲ内陳_シテ本
藩政府_ヲ瞞_着其_ノ勢力_ヲ假_リテ正邪_ヲ混同_シ己_ハ罪惡_ノ形跡_ヲ
湮滅_セント_ス權謀_{ナル}ベシト是_ニ於_テ田天軍_ハ役負_ハ會議_ヲ開_設シ

慶応元年（一八六五）七月

七月廿一日

御手廻中

右願書ヲ邑政堂ニ出セリ（注）

茲ニ奇兵隊書記（奇兵隊兼使役陣場見合）時山直八氏ノ意見ニテ帰須スベシ（須佐）萬一逮捕（益田家臣、回天軍、奇兵隊）又ハ叱責セハ

事ニテ 奇兵隊 山下範三郎 回天軍 津田公輔

等帰須ニ決シ（須佐）旅装已ニ成ルノトキ 探偵者須佐ヨリ帰陣 報シテ曰ク 當度

須佐邑ニ於テ創立セシ各隊ハ 本藩ノ命令ヲ以テ不日解散セシメラル、由内

達アリテ 回天軍 北強團 新撰隊等ノ隊名ヲ廃シ 並ニ育英館

ニ入リテ文武ノ稽古ヲ為サシムル事ニ決シタリ 必ヤ邑政堂俗吏ノ山口ニ在ル

者ノ須佐両立ノ基因ハ 必竟回天軍ノ立隊ニアル由ヲ内陳シテ 本

藩政府ヲ瞞着シ（まんちゃく）其勢力ヲ假リテ正邪ヲ混同シ 己力罪惡ノ形跡ヲ

湮滅セントスルノ權謀ナルベシト 是ニ於テ回天軍ハ役員會議ヲ開設シ

（注）草稿本にはこの後に尊攘堂本の294頁に該当する次の文章がある。『右歎願書邑政堂ニ出セシ突然市山淳蔵ヲ始メ六名ノ総代及栗栖鬼助 宇

野魁助 松井平助等孰モ幽囚セラレタリ』幽閉された日付で何れが正しいか要研究。

須佐両立＝正義派（回天軍）と俗論党（北強団）の二つが対立していること。

瞞着＝たぶらかすこと。こまかすこと。瞞著（まんちゃく）。

歸須歎願ノ如何ヲ論究セシ津田公輔曰ク俗吏等先仙相院君
諒証ニ其容ランニ及テ仙相院君ノ威光ヲ戴キテ而後見ラザル終次
テ南園隊ヲ歎キ遂ニ本藩政府ノ處斷ヲ躊躇セシム至リ其
好惡至ラサル所ナレ今ニシテ正邪曲直ヲ判別シ公平無私ノ斷決ヲ賴ム
独リ奇兵隊アルニ乃チ固天ノ軍ヲ率テ奇兵隊ニ入リ同隊ノ力ニ
籍リテ正氣恢復ノ効ヲ奏スル若ク無シト中村恭一中村藤馬等
必説ニ同感ナリ栗山徹藏大橋三木ニ據有者ノ恥報誤無
キヲ望ムベカラズ如ク御手廻三組等ノ歸須歎願ニ臂ヲ添ヘ其
成ヲ待ナク後進退ヲ決スル晩キト非スト申論ニ駭紛議囁ククシカ
殊ニト全軍公輔等ノ説ヲ賛成セリ

初ノ須佐ヨリ據有者ノ歸陣スルヤ恰モ好シ玉川小文吾天軍金山
義十郎上奇兵隊ヨリ来ニ會セリ其恥報最掛念ナルヲ以テ直ニ

歸須（須佐）歎願（たんがん）ノ如何（いかに）ヲ論究（ろんきゅう）セシニ津田（益田家臣、侍御、回天軍參謀兼書記、奇兵隊斥候）公輔（いこう）曰（いわ）ク俗吏（ぞくり）等先仙相院（益田元宣公室）君二
 讒誣（さんぶ）シ其容（その）ラルハニ及テテ仙相院（益田元宣公室）君ノ威光（いこう）ヲ戴（いた）キテ兩後（周布治部、益田石見）見（み）ヲ籠絡（ろうらく）二次（ついで）
 テ南園隊（あさむ）ヲ欺（あざむ）キ遂（つい）二本藩政府處斷（ほんばん せいしやきよくちゆう）ヲ躊躇（ちゆうちよ）セシムルニ至（いた）レリ其（その）
 奸惡（かんあく）至（いた）ラサル所ナシ今（いま）ニシテ正邪曲直（せいしやきよくちゆう）ヲ判別（はんべつ）シ公平無私（こうへいむし）ノ斷決（だんけつ）ヲ頼（たの）ムハ
 ひとり奇兵隊アルノミ乃（すなわ）チ回天全軍（ひきい）ヲ率（ひきい）テ奇兵隊二入リ同隊ノ力ニ
 籍（か）リテ正氣恢復（しょうきかいふく）ノ郊（効）ヲ奏（そう）スルニ若（し）クハ無シト中（な）村（益田家臣、四組、御殿御算用方、北強臣、回天軍）泰（あやまり）一（益田家臣、四組、回天軍會計）中村藤馬（中村）
 此說（このせつ）ニ同感（どうかん）ナリ栗山（徹三、益田家臣、回天軍軍監）徹（徹三）蔵（徹三）大橋三樹三（大橋）八探偵者（八探偵者）ノ飛報（飛報）誤無（誤無）
 キ（なる）ヲ保（保）セスベカラス姑（しばら）ク御手廻（あてまわり）三（宇谷、市丸、瀧尻）組等（組等）ノ歸須（須佐）歎願（たんがん）二一臂（いっぴ）ヲ添（そ）ヘ其（その）
 成（なる）ヲ待チテ後進退（津田）ヲ決スルモ晩（おそ）キニ非スト甲論乙駁（こうろんおつぱく）紛議（ぶんぎ）囂（ごう）々（ごう）タリシ力
 殊（殊）ント全軍公輔等ノ説（説）ヲ賛成セリ

初メ須佐ヨリ探偵者ノ帰陣スルヤ
回天軍、奇兵隊
 義十郎上
 奇兵隊ヨリ来ルニ會セリ
 恰毛好シ
あたかよ
 其飛報ノ最懸念ナルヲ以テ
そのひほう
 直二
もつともけねん
 玉山小文
益田家臣、中士、御手廻組
 吾元回
回天軍、奇兵隊
 金山
益田家臣

誣^(ざんぷ) 讒^(ざん) 誣^ニ 事実を曲げてそしること。

「保スベカラス」意味不明。「セ」は衍字か。文書館本、草稿本は共に「保スベカラス」。「保ス」＝「やすんず」か。
（いっぴ）
一臂＝一つの肘。片腕。腕をふるい力を盡くすこと。

吉田本營歸隊筑治郎天軍等相計隊長阿川四郎貞

傳神阿川ト其本陣主リテ須佐近況報奉告仍テ本陣ニ

會議ヲ開キ至急田天軍ヲ誘引スル得策タルニ決シ英治郎王

川小父吾金山義十郎ニ命シテ貫野ニ来ラシム不時田天軍已

奇兵隊ニ隊スキ決議ヲ為シタル粟山徹藏天橋三樹三等隆殊

全軍其準備ヲ為セリ御手廻三組等依然危貫野ノ防等

滞留シテ須佐ヨリ確報ヲ至ルヲ待フ

同廿日田天軍危貫野村出立所筑次郎王川小父吾等同伴出ラ

経テ翌廿日吉田驛着シ奇兵隊入ル

五番銃隊 津田公輔事 牧小太郎兼常

壹番銃隊 中村泰一事 村上研吾満忠

三番銃隊 中村藤馬事 坪嶋正三英義

慶応元年（一八六五） 七月

吉田本営二帰隊 英 治郎 等ト相計リ 隊長 阿川四郎二具
陳シ 阿川ト共本陣二至リテ 須佐ノ近況ヲ報告ス 仍テ本陣ハ俄ニ
會議ヲ開キ 至急回天軍ヲ誘引スルノ得策タルニ決シ 英 次郎 玉
川 小文 吾 金山義十郎二命シテ一貫野ニ来ラシム 于時回天軍ハ已ニ
奇兵隊二入隊スベキ決議ヲ為シタレバ 栗山徹蔵 大橋三樹三等ヲ除キ 殊ト
全軍其準備ヲ為セリ 御手廻 三 組等ハ 依然尙貫野 千防等ニ
滞留シテ須佐ヨリ確報ノ至ルヲ待ツ

（七月） 同廿日 回天軍尙貫野村出發 英 治郎 玉川 小文 吾等同伴 山口ヲ
經テ翌廿一日 吉田驛二着シ 奇兵隊二入ル

五番銃隊	津田 公輔事	牧 小太郎兼常
壱番銃隊	中村 泰一事	村上 研吾満忠
三番銃隊	中村 藤馬事	坪嶋 正三英義

本営＝本陣と同じ。

一貫野＝91頁脚注参照。

千坊＝（現山口市）250頁脚注参照。

五番銃隊

七番銃隊

三番銃隊

全上

五番銃隊

三番銃隊

五番銃隊

七番銃隊

原井直助事
大谷源藏事

三番銃隊

三浦政衛事

壹番銃隊

内田正一事

梅津熊之進正義

梅津龍之進

魚重半藏義一

宅野金之丞

岩本藤太

岩本勇馬

内山茂樹

河上小一郎俊光

村田團藏政徳

森義助晴政

和田三郎義一

三浦平之助尚武

五番銃隊	梅津	熊之進正義
壱番銃隊	梅津	瀧之進
三番銃隊	兼重	半蔵義一
全上	宅野	金之丞
五番銃隊	岩本	藤太
三番銃隊	岩本	勇馬
全上	内山	茂樹
五番銃隊	河上	小一郎俊光
壱番銃隊	村田	團蔵政徳
	森	義助晴政
三番銃隊	和田	三郎義一
壱番銃隊	内田	正一 <small>郎脱</small> 事
	三浦	平之助尚武

内田正一＝内田正一郎（益田家臣、四組、回天軍）の誤りではなからうか。

三番銃隊 大谷千代桂事

五番銃隊

小隊

全上

全上

御臺所 宇三郎事

砲隊

全上

全上

全上

全上

全上

全上

竹田十郎

松永藏之助勝正

曾根茂一

山地乙吉

森榮藏

御手洗音郎光重

久我龜吉忠行

三明政吉

淺野新平

林啓藏

有田彦兵衛忠孝

矢田助之進正義

慶応元年（一八六五） 七月

三番銃隊

大谷千代松事

竹田 十郎

五番銃隊

松永 織之助勝正

小隊

曾根 茂一

全上

山地 乙吉

全上

御臺所ノ宇三郎事

森 榮蔵

砲隊

御手洗音五郎光重

全上

久我 亀吉忠行

全上

三明 政吉

全上

浅野 新平

全上

林 啓蔵

全上

有田 彦兵衛忠孝

全上

矢田 助之進正義

尊攘堂本と文書館本とで名前の書き方が異なる者がある。

尊攘堂本

文書館本

御手洗音五郎光重

御手洗乙五郎光重

浅野 新平

浅野 新兵

今上

吉川道助正義

今上

寺山龍藏則正

今上

田村為吉

同廿八日須佐ヨリ御直使トシテ増野勝太夫大谷利兵衛等危貫野村十

坊村等ニ至リ至急歸須スベシ若シ歸須セサル時其旨趣ヲ詳陳スベシ

命ヲ傳ヘ且曰勝太等今ヨリ吉田奇兵隊ニ至リ君命ヲ傳フキ事アリ郷

等歸須決セハ予等ニ先クテ歸ル可ナリ召ラサレバ予等歸途止ム一泊

フルヲ期シテ決算答ラ為スベシ御手廻三組等々各會議上山口向テ面答

セント約セリ勝太等轉シテ吉田奇兵隊本陣ニ至ルト雖モ應接其要領ヲ

盡ササルヨリテ謝絶セラレ山口ニ歸ル

茲ニ危貫聖介坊二村ニ滞在御手廻三組等々廻天軍吉田行後大

廈柱仁ヲ失ヒタル如ク殆ト支フハラサル次ニ大協議上弥富村金柳寺

全上
全上
全上

吉川 道助正義
寺山 瀧蔵則正
田村 為吉

(七月)
同廿八日 須佐ヨリ御直便トシテ 増野勝太夫 大谷利兵衛等 壹貫野村 千
坊村等ニ至リ 至急歸須スベシ 若シ歸須セサル時ハ 其旨趣ヲ詳陳スベキノ
命ヲ傳ヘ 且曰ク 勝太等今ヨリ吉田奇兵隊ニ至リ君命ヲ傳フベキ事アリ 郷
等歸須ニ決セハ 予等ニ先タチテ歸ルモ可ナリ 否ラサレバ予等歸途山口ニ泊
スルヲ期シテ決答ヲ為スベシト 御手廻 三組等ハ各會議ノ上山口ニ向テ回答
セント約セリ 勝太等轉シテ吉田奇兵隊本陣ニ至ルト雖トモ 應接其要領ヲ
盡ササル旨ヲ以テ 謝絶セラレ山口ニ歸ル (宇谷、市丸、瀧尻)
茲ニ壹貫野 千坊二村ニ滞在ノ御手廻 三組等ハ四回天軍吉田行ノ後八大
厦ノ柱石ヲ失ヒタル如ク 殆ト支フヘカラサル 恣ナレハ協議ノ上 弥富村全柳寺

吉川 道助正義「吉川」は「吉田」の誤り。文書館本に基づき修正した。なお「吉田」は正しくは「芳田」にて弥富の人なり。
大厦 (たいか) 大きな建物。
全柳寺 P 45 参照。

慶応元年 (一八六五) 七月

迄歸リテ歎願スルニ決意スルモ大半増野勝太等ノ山口ニ歸ル待テ
其旅寓ニ至リテ其旨ヲ田谷ニ

勝太ハ台壁小始三文字屋某ヲ雇ヒテ諸隊會議所ニ至リ大司兵隊參
謀時山氏ニ對シテ同隊入隊ノ田天軍ヲ除隊ヲシテ須佐ニ歸ラシメシニ事
ヲ請ビシヲタルニ時山氏ハ邑中奸賊ノ首ヲ刎テ出ケル田天軍ハ即日歸ヤシノニト

谷ヘナリ

八月五日増野勝太等ノ山口發程御手廻三組等モ大半出發ス栗山
轍三御手廻三組大半同伴ニ歸リ大橋三樹三奇兵隊入隊決
シテ御手廻三組ノ内八隊ニ決セシ有志者ト同伴翌六日出發七日吉
田驛ニ着シテ八隊ノ申込ヲ爲シタリ然ルニ三樹ニ事故アリテ八隊ヲ許シ
進藤半九郎ト更ニ山口ニ出テ後集義隊ニ入ル
同十日入隊スルモ、始知

慶応元年（一八六五）八月

迄帰リテ歎願スルニ決意スルモノ大半ナリ

増野勝太等ノ山口ニ帰ルヲ待チ

其旅寓ニ至リテ其旨ヲ回答ス

勝太ハ山口（増野）堅小路三文字屋某ヲ雇ヒテ諸隊會議所ニ至リ奇兵隊参

謀（時山直八）時山氏ニ對シテ同隊入隊ノ回天軍ヲ除隊シテ須佐へ帰ラシメラレン事

ヲ請ハシメタルニ時山氏ハ邑中奸賊ノ首ヲ勿テ出サハ回天軍ハ即日帰須セシメント

答ヘタリ

八月五日増野勝太等山口發程御手廻三組等モ大半出發ス栗山

徹三御手廻三組ノ大半ニ同伴シテ歸リ大橋三樹三八奇兵隊入隊ニ決

シテ御手廻三組ノ内入隊ニ決セシ有志者ト同伴翌六日出發七日吉

田驛ニ着シテ入隊ノ申込ヲ為シタリ然ルニ三樹三八事故アリテ入隊ヲ許レス

進藤半九郎ト更ニ山口ニ出テ後集義隊ニ入ル

同十日入隊スルモノ拾名

豎小路三文字屋〓今も現存する豎小路の文房具屋の老舗。御用商人として政府筋に顔が利いたのである。

同十日入隊スルモノ拾名〓次頁の人数を数えろと十二名。文書館本も十名と記述している。

御手廻三組等モ大半ニ同伴シテ歸リ〓この部分は草稿本では『御手廻三組等モ大半出發ス栗山徹蔵八御手廻三組ノ大半ニ加盟同伴シテ歸ル大

橋三樹三八奇兵隊入隊ニ決シ...』となっている。

貳番銃隊

西尾壯助事

水村敬助正直

全上

若月健三

全上

横田源三郎事

嶋城久吉

全上

村岡三郎

器械方

品川順太

小隊

御馬屋嘉平事

桐嶋五郎

全上

宇喜組小平事

波田仙市

全上

宇喜組

道田政吉

全上

宇喜組太助事

笹倉新之丞

全上

市丸組廣左衛門事

田中作一

全上

市丸組善兵衛事

河原善一

全上

瀬尻組佐七事

波田權十郎

式番銃隊

(益田家臣、四組、觸證人)
西尾 壮助事

木村 敬助正直

全 上

(玄三郎、益田家臣、下七)

若月 健三

全 上

横田 源三郎事

嶋城 久吉

全 上

村岡 三郎

器械方

品川 順太

小 隊

御馬屋嘉平事

桐嶋 五郎

全 上

宇谷組小平事

波田 仙市

全 上

宇谷組

道田 政吉

全 上

宇谷組太助事

笹倉 新之丞

全 上

市丸組歳左衛門事

田中 作一

全 上

市丸組善兵工事

河原 善一

全 上

瀬尻組佐七事

波田 権十郎

若月健三『文書館本では「若月健三」と書かれている。

同市無重五郎四郎（補手）三浦常之進（市丸）高津久間（同上）三浦甚四

郎（同上）高津藤太（同上）伊藤秀助（同上）高津善兵衛（同上）大谷助之進（同上）中

村盛人（同上）兵衛丸（同上）市丸組七郎九門（同上）上源四郎（同上）又五郎（同上）等吉田驛

ニ来着（同上）右廿八（同上）午坊志貫聖二村之氏集人引揚、際猶豫未決（同上）しか

遊（同上）高兵隊入隊決（同上）然（同上）日暮入隊（同上）致小太郎其他元回天軍

員（同上）其旅寓（同上）一會（同上）評議（同上）當度来着（同上）廿八入隊（同上）為（同上）こ

高兵隊本陣、歎願書（同上）出（同上）入隊員（同上）内（同上）相應（同上）其聲援（同上）促（同上）こ

ト決交（同上）セリ

茲（同上）桂主殿殿（同上）俗吏ノ督員盡（同上）據（同上）領内（同上）士卒（同上）召喚（同上）就中御手廻三組

等正義派者（同上）一ニ名義殿内大廣間（同上）出サシ（同上）役員列（同上）廣城儀（同上）座々

ノ中（同上）邑政府（同上）及（同上）連動（同上）旨趣（同上）糾問（同上）自今代役（同上）指揮（同上）從（同上）フヤ

否（同上）ヲ決（同上）答セシ（同上）タル（同上）依（同上）御旨（同上）從（同上）ト答ヘタル（同上）勢カ（同上）是（同上）於（同上）其

慶応元年（一八六五）八月

（八月）
同十四日 兼重五郎四郎 三浦常之進 高津久間^馬 三浦甚四
郎^{上全} 高津藤太^{上全} 伊藤秀助^{上同} 高津善兵衛^{上同} 大谷助之進^{上全} 中
村盛人^{上全} 兵衛門（市丸組） 七郎左工門^{上全} 源四郎^{上全} 又五郎^{上全} 等吉田驛
二来着セリ 右廿名八千坊 吉 貫 野二村之屯集人引揚ノ際 猶豫未決ナリシ力
遂ニ奇兵隊入隊ニ決セルナリ 然ルニ 曩ニ入隊セシ牧小太郎 其他元固天軍
員モ 其旅寓ニ至リ 一會シテ評議セシニ 當度来着ノ廿名八人隊ヲ為スシテ
奇兵隊本陣ニ歎願書ヲ出シ 入隊員ト内外相應シテ其聲援ヲ促スベシ
ト決定セリ

茲ニ桂主殿殿八俗吏ノ賛畫ニ據リ領内ノ士卒ヲ召喚シ 就中 御手廻^{（宇谷、市丸、瀬尻）} 三 組
等正義派ノ者ヲ一二名宛殿内大廣間ニ出サシメ 役員列席威儀堂々
ノ中ニ 邑政府ニ反セル運動ノ旨趣ヲ糾問シ 自今代役ノ指揮ニ從フヤ
否ヤヲ決答セシメタルニ依リ 御旨ニ從フベシト答ヘタルモノ 尠カラス 是ニ於テ其

右廿名＝名前が記されている者は十三名。

從フヤト各エタル者、邑政堂至、佐諭堂、共、血ヲ刺シテ誓約セシナリ

同、八日、松原平太衛門、繼、須佐邑政堂、於、松本良太衛門、ト激論數時、

涉リシカ、同、夜、平太衛門、自、宅、ニ於、テ割腹セリ、其、旨、趣、一、通、遣書ニ詳悉

セシモ、親戚之ヲ秘シテ、公ニセザル、由ナリ、平太衛門、平素、質直、廉耻ヲ重ニスル、

氣、豪アリ、且、祖先、六太衛門、義、迫、益田家、廿一代、元、堯、時、殊、遇セラレ、元、堯、

喪ニテ、リ、テ、再、三、殉死ヲ請フト、雖、氏、許、ス、依、テ、其、二、週、忌、辰、ヲ、以、テ、屠腹セシ、氣

慨ヲ慕ヒ、ヒ、右、衛門、介、君、ノ、逝、去、後、邑、中、正、俗、兩、主、ナリ、邑、政、堂、中、議、政、顯

職ニ在ル者、及、並、強、團、中、魁、首、タル者、大、概、同、級、大、組、ミ、テ、因、循、姑、息、ヲ

主トナシ、到、テ、正、義、ノ、士、ヲ、幽、殺、セシ、ラ、憤、フ、テ、同、級、會、議、ニ、モ、出、席、セ、テ、樹、時、々

痛、居、セ、シ、カ、途、ニ、今、日、ノ、事、ニ、及、ヘ、リ、ト、ス、フ、本藩政務ヨリ、別當當時、山口、藩、在、中、リ、曾、野

正義ノ士、大ニ憤慨セリト、金氏、身、親、威、皆、大、組、ミ、シ、テ、
佐諭堂、ナ、レ、ハ、割腹ノ証、據、ヲ、與、テ、ハ、ニ、申、テ、キ、ラ、止、ム

同、廿、日、無、重、五、郎、四、郎、等、奇、兵、隊、本、陣、ニ、一、封、勅、願、書、ヲ、呈、出、ス

從^{したが}フベシト答^{こた}エタル者^{もの}ハ 邑政堂^{いせいどう}ニ至^{いた}リ俗論堂^{しやくろんどう}ト共^{とも}ニ血^ちヲ刺^さシテ誓約^{せいやく}セシメタリ

(八月) 同十八日 ^(益田家臣、上士、大組)松原平左衛門^(益田家臣、上士、大組、当役)大八須佐邑政堂ニ於テ松本良左衛門ト激論^{げきろん}数時^{すうじ}ニ

涉^{わた}リシカ 同夜^{どうや}平左衛門^(松原)ハ自宅^{いしよ}ニ於^おテ割腹^{かつぶく}セリ 其旨趣^{そのししゆ}一通^{いしよ}ノ遺書^{いしよ}ニ詳悉^{しょうしつ}

セシモ 親戚^{しんせき}之ヲ秘^ひシテ 公ニセサル由ナリ 平左衛門^(松原)ハ平素^{へいそ}質直^{しつちやく}廉耻^{れんち}ヲ重^{おも}ンスルノ

氣^き衆^{しやう}アリ 且^{かつ}祖先^{そせん}六左衛門^(たかちか)亮^{りやう}近^{きん}ノ益田家^(もとたか)廿一代^(もとたか)元^{げん}亮^{りやう}ノ時^{とき}ニ殊遇^{しゆぐう}セラレ元^(もとたか)亮^{りやう}ノ

喪^もニ了^{りやう}リテ再三^{さんさん}殉死^{じゆんし}ヲ請^こフト雖^{いえ}トモ許^{ゆる}レス 依^{よつ}テ其^{その}二週^{にしゅう}忌辰^{きしん}ヲ以^{もつ}テ屠腹^{とふく}セシ氣^き

慨^{がい}ヲ慕^{した}ヒシニ 右衛門^(益田親施)介君^{かいきみ}ノ逝去^{せいきよ}後^ご 邑中正^(須佐)俗兩^{しやくりやう}立^たトナリ 邑政堂^{いせいどう}中議^{ちゆうぎ}政^{せい}ノ顕^{けん}

職^{しやく}ニ在^あル者^{もの} 及^{およ}び 北強團^{きつがうだん}中魁^{ちゆうかい}首^{かひしゆ}タル者^{もの}ハ 大概^{たいがい}同級^{どうきゅう}ノ大組^{おおくみ}ニシテ因循^{いんじゆん}姑息^{こそく}ヲ

主^{しゅ}トナシ 剩^{あまつさ}ヘ正義^{しぎぎ}ノ士^しヲ幽殺^{ゆうさつ}セシヲ憤^{いきどお}ツテ 同級^{かうきゅう}ノ會議^{かいぎ}ニモ出席^{しゅつせき}セス 鬱々^{うつうつ}

閑居^{かんきよ}セシカ 遂^{つい}ニ今日^{けふ}ノ事^{こと}ニ及^{およ}ヘリト云フ 本藩^{ほんはん}政府^{せいふ}ヨリハ當時^{たうじ}山口^{やまぐち}滞^ち在中^{ちゆうちゆう}ナル増野^{さへの} 與次^{いよ}ヘ探聞^{たんぶん}セシニ平病^{へいびやう}頓死^{とんし}ノ旨^{しめ}ヲ以^{もつ}テ答^{こた}ヘタリ

正義^{しぎぎ}ノ士^しハ大ニ憤慨^{ふんがい}セリト雖^{いえ}トモ其親戚^{しんせき}皆^{みな}大組^{おおくみ}ニシテ 俗論堂^{しやくろんどう}(党)ナレハ割腹^{かつぶく}ノ証據^{しやうこ}ヲ擧^あグルニ由ナキヲ 止ム

(八月) 同廿日 兼重^{かねしげ}五郎四郎等 奇兵隊^{きへいたい}本陣^{ほんじん}ニ一^{いち}封^{ふう}ノ歎願書^{たんがんしよ}ヲ呈出^{ていしゅつ}ス

松本良左衛門ハ内藤磋助の妻が良左衛門の娘という關係。

公ニセサル由ナリハ文書館本の記述に従い 個所に「世間ニ」と補足加筆した。

氣象ハ氣質、氣だて、こころだて、氣性。

殊遇ハ特別なもてなし。

忌辰ハ親の命日。また広く死者の命日。忌日(きじつ)と同じ。

割腹ノ証據ヲ擧グルニ由ナキヲ止ムハ「由ナキヲ以テ止ム」

慶応元年(一八六五) 八月

歎願書

去年已未弊邑不穩。疾處其原因。奸吏尋要路。當
如主。後知自己。權勢。專。終。正邪。面。立。至
。在。次第。實。以。痛。憤。悲。泣。之。至。在。在。然。五。月。本
藩。政。部。兩。奸。吏。退。職。之。御。處。分。有。之。得。共。日。至。
却。俗。議。稱。盛。相。成。誦。謔。之。臣。登。庸。正。義。士。擢。任。
人々其堵。安。事。不。能。追。々。脫。走。外。居。士。必。竟。兩
奸。退。職。後。雖。是。左。祖。奸。吏。依。然。相。通。種。々。之。陰。謀。
為。疾。得。者。此。度。御。詮。義。相。成。疾。而。夫。々。適。當。之。御。處。新
被。仰。付。各。感。腹。仕。願。內。和。永。後。難。無。之。有。樣。御。取。計。被
下。度。仍。而。奉。願。上。疾。誠。恐。誠。惶。謹。言。

須佐藩

慶応元年（一八六五）八月

歎願書

去冬已来（須佐）弊邑不穩二候處（益田精治郎）其源因八奸吏等要路二當り
 幼主ヲ蔑如シ自己ノ權勢ヲ專ニシ候ヨリ終ニ正邪両立ニ立至
 リ候次第實以痛憤悲泣之至二罷在候然ルニ去月七月本
 藩政府ヨリ兩奸吏退職之御處分有之候得共今日二至リ
 却テ俗議弥盛ニ相成諂謏ノ臣ヲ登庸シ正義ノ士ヲ擯斥シ
 人々其堵ニ安スル事不能追々脱走シテ外居仕候必竟八両
 奸退職後ト雖トモ左袒ノ奸吏八依然相通シテ種々之陰謀ヲ
 為候得者屹度御詮義相成候而夫々適當痛憤悲泣之御處断
 被仰付各感腹仕領内一和永ク後艱無之候様御取計被
 下度仍而奉願上候誠恐誠惶謹言

須佐藩

諂諛〓（てんゆ）へつらうこと。

擯（ひんせき）
 斥〓しりぞけてのけものにする。

（と）
 堵ニ安スル〓「堵」は垣根。垣根の内に安んずる。安堵。

両奸〓益田三郎左右衛門と栗山翁輔のこと。201〜2頁及び251〜2頁参照。
 左（さたん）袒〓121頁脚注参照。

兼重五郎四郎が何故「須佐藩」の名前で奇兵隊に手紙を書き得たのか。慶応元年五月十八日、職役三郎左右衛門、当役翁輔を罷免、その後任には即日夫々増野又十郎、松本良左衛門が任命されている。そして七月、三郎左右衛門、翁輔に押隠居を命じた。この間に邑政堂に空白期があったとは考えられない。勝手に「須佐藩」の名前を騙ったものか

八月廿日

各中

奇兵隊右願書ヲ受理セシ付五郎四郎等、虎骨野村滞任シ
裁判可相待トノ事ニテ直ク出發セリ

奇兵隊參謀兼書記時山直八氏政府ニ照會ノ爲メ出山次テ
軍監山縣狂助氏參謀兼書記ニ好軍太郎氏等周旋アリテ
先ツ須佐藩有志者入隊ノ許可ヲ得タリ

奇兵隊本陣ヨリ問及キ是ニ答辯

一先君徳山ニ於テ御切迫之節誥居定何某ニ疾哉

松原仁藏有田新五衛門御側役ニ疾

一報知ニ歸リ疾人何某ニ疾哉

松原茂一郎三好久平中村藤馬ニ疾

一重役之者何某ニ疾哉

八月廿日

各中

奇兵隊八右願書ヲ受理セシニ付 五郎四郎等八老貫野村ニ滞在シ
テ裁判可相待トノ事ニテ直チニ出發セリ

奇兵隊參謀兼書記 時山直八氏 政府ニ照會ノ為メ出山 次テ

軍監 山縣狂助氏 參謀兼書記 三好軍太郎氏等周旋アリテ
先ツ須佐藩有志者入隊ノ許可ヲ得タリ

奇兵隊本陣ヨリ問条并ニ答辨

先君徳山ニ於テ御切迫之節 詰居人 何某ニ候哉

松原仁蔵 有田新左衛門 御側役ニ候

報知ニ歸リ候人 何某ニ候哉

松原茂一郎 三好久平 中村藤馬ニテ候

重役之者 何某ニ候哉

軍監ニ諸隊において軍事の監督をする者で、総管に次ぐ要職。総管に大身の名目的な人物が任命されている場合は、実質的には長官の任務を果たす。

士官であるため、足輕以下の身分の出身者でも、総管から願出の手続きの上、入隊中は士列に扱われ、乗馬を許可された（本巻第一部「諸隊関係

編年史料」慶応元年四月九日条）「出典」「山口県史」史料編 幕末維新 6 1085頁」

職役益田三郎左衛門加判增野又十郎當役栗六翁
輔同上大田丹官用人多稱順左工門同上波田興
市同上入江忠左衛門

一先君御逝去後正義之士幽囚何某哉

小國融藏大谷權助

一總人數親類預々田天軍後人數哉

田天軍後人數

一五條之罪狀如何哉

一高正院様御自分被立置矣御手組相破矣事

一仙相院様御趣意相北月事

一值中脱走之事

一御家来中隊中俗論中落矣事

慶応元年（一八六五）八月

職役 益田三郎左衛門 加判増野又十郎 當役栗山翁

輔同上 大田丹宮 用人 多禰順左工門 同上 波田與

市同上 入江忠左衛門二候

先君御逝去後 正義之士幽囚八何某二候哉

小國融蔵 大谷樸助二候

總人数親類預ケト八回天軍総人数二候哉

回天軍総人数二候

五ヶ條之罪状如何哉

一 高正院様 御自分被立置候御手組相破候事

一 仙相院様御趣意 相背候事

一 慎中脱走之事

一 御家来中ヲ隊中へ俗論二申落候事

御手組

一 御法ニ背キ商家ノ大虚ヲカタリ出ス事

一 北強團魁首ノ人何某ニ疾シ哉

多孫卯一仲升半四郎山崎十郎左衛門宅野太郎松

野重内大谷岩尾内藤碓亮等由ニ疾シ

一 益田三郎左衛門如何人物ニ疾シ哉

執事ノ職ニ括リ幼主ヲ蔽シ己ノ權ヲ振テ人ヲ侮リ疾シ

一 大谷權助割腸ノ節北強團ヨリ何某僥證ニ出ス疾シ哉

北強團緩人數ニ疾シ

一 北強團之内兩人何某ニ疾シ哉

宅野太郎内藤碓亮ニ疾シ

一 胡英館尚回天軍地方農兵入望ノ義付沙汰違ヒ如

何之事ニ疾シ哉

一 御法二背キ 商家ノ大金ヲカタリ出候事
北強團魁首ノ人 何某二候哉
多弥卯 仲井半四郎 山崎十郎左衛門 宅野太郎 松
野重内 大谷岩尾 内藤磋商亮等ノ由二候
益田三郎左衛門 如何ノ人物二候哉
執事ノ職ニ居リ 幼主ヲ蔑如シ 己ノ権ヲ振ヒ 人ヲ侮リ候
大谷樸助割腹之節 北強團ヨリ何某候證ニ出候哉
北強團總人数二候
北強團之内 兩人何某二候哉
宅野太郎 内藤磋商亮二候
育英館尚回天軍へ地方農兵入込之義ニ付 沙汰違ヒ如
何之事ニ候哉

地方Ⅱ（じかた）P182 参照。

慶応元年（一八六五）八月

今般胡英館御家未之者入廷誓古被仰付矣付地方
農兵其外_{ニテ}心掛次第入塾御免被仰付矣全定法
入廷不仕而_モ十日程宛滯留_{ニテ}誓古相調矣而_モ宜敷
勿論滯留中御養_ニ被仰付矣余_ハ様承知矣而其沙
沙汰可有之矣

一 此度田萬_ニ田天軍之者隊被相立矣付而_モ右隊入
廷度者之義_ハ願出御免相成矣上_{ナラテ}不相調_ト
義_ニ余_ハ殿_ヲ沙汰可有之矣事

月 日

松井九郎右衛門

庄屋宛

一 附屬之者誤_ト申_テ附屬之者_ト政府之附屬_ニ義
右沙汰致_テ役人_ニ即政府附屬_ニ候

慶応元年（一八六五）八月

一

今般育英館へ御家来之者入込稽古被仰付候二付地方
農兵其外ニテモ心掛次第入塾御免被仰付候全定法
入込不仕而モ十日程宛滞留ニテ稽古相調候而モ宜敷
勿論滞留中御養上被仰付候条右様承知候而其沙
沙汰可有之候

一

此度田萬ニテ回天軍之者隊被相立候付而ハ右隊へ入
込度者之義ハ願出御免相成候上ナラデハ不相調トノ
義ニ候条此段ヲモ沙汰可有之候事

月 日 松井九郎右衛門

庄屋宛

一
附属之者誤リト申候
右沙汰致候役人ニテ即政府ノ附属二候

地方Ⅱ（じかた）P182参照。

一當時政府何某（後武若其人）時後役何某（自然哉）

當時政府職役（延十郎）後見增野與次（加判）益田勘

兵衛（當役）松本良左衛門（同上）大田丹宮（同上）入江忠左

衛門（用人）仲井半四郎（同上）增野勝太（同）松原宗兵衛

三

後役之義益田勘兵衛增野與次松原平左衛門入江

忠左衛門保賀昌九衛門松原齡助增野善左衛

門（被仰付）其外大組御手廻之内ヨリ人撰（以テ）政務

御用掛トシテ出勅被仰付度哉

九月八日隊命依（リ）收小太郎出山（リ）本藩政府於（テ）奇兵隊長官

續々出山（リ）須佐邑正義（恢復ノ處）分（ラ）請求スル（以テ）數度ノ堂議

ヲ經テ組内決（シ）益田家代役挂主殿（發）台喚アリテ奔表ノ手續（近キ）

一 當時 政府八何某二候哉 若其人貶ル時八 後役 何某可然哉 益田勘

當時 政府八職役 増野又十郎 後見 増野與次 加判 益田勘

兵衛 當役 松本良左衛門 同上 大田丹宮 同上 入江忠左

衛門 用人 仲井半四郎 同上 増野勝太 同 松原宗兵衛

二候 後役之儀八 益田勘兵衛 増野興次 松原平左衛門 入江

忠左衛門 俣賀昌左衛門 松原齡助 増野善左衛門 御手廻之内ヨリ人撰ヲ以テ政務

門 二被仰付 其外大組 御用掛トシテ出勤被仰付度候

九月八日 隊命二依リ 牧小太郎出山セリ 本藩政府二於テハ奇兵隊長官

續々出山シテ須佐邑正義恢復ノ處分ヲ請求スルヲ以テ 數度ノ堂議

ヲ経テ粗内決シ 益田家代役 桂主殿殿ヲ召喚アリテ発表ノ手續近キニ

変名について265、271頁参照。維新の志士たちは盛んに変名を用いた。彼等は幕府や新撰組などの追求によって常にその身が危険にさらされていたため自分の身の安全を図るため変名を使った。須佐から奇兵隊入隊のときに変名を使ったのも似たような理由によるものであろうか。

慶応元年（一八六五）九月

在大義五郎四郎等、危貫野村引拂、歸須スベシト命アリ

奇兵隊軍監材半七ヲ以テ須佐處断事ヲ擔任ト定メ山口滞在ニテ
政事堂議事ニ參與セリ尚參謀福田良助參謀兼書記片野

十郎等、諸氏モ時々山大口周旋スル處アリ

同主日御手廻總代市山淳藏始六名サ輔蔭藏ニ
藏良江健三、栗栖鬼助

宇野魁助、松井平輔等突然幽囚セラル、其他御手廻内宛罪ヲ所

罰セラル、者多シ、栗山百合熊、即夜出奔、告諸隊會議所ニ至リ大

橋三樹ニ面接シ、同伴政事堂ニ出頭シテ廣澤氏ニ報知セシニ廣澤

氏曰ク幽囚諸氏暫ク忍ビテ靜穩ナラ、其命ニ関スル程ノ急ナルベカラ

ス、已ニ代役召喚命ヲ發シタル、不日着山ノ期ニ接セリ安神スベシト

答依リ退出シ百合熊歸邑ス

百合熊出山ノ後、中村藤馬隊用ニ歸邑シ事畢リテ出奔セシ

慶応元年（一八六五） 九月

在レバ **兼重五郎四郎等八巻** （貫野 益田領飛地、南御領） 貫 **野村引拂ヒ帰** （須佐） 須スベシトノ命アリ
奇兵隊八軍監 （萩藩士、奇兵隊軍監） 林半七ヲ以テ 須佐處断 事件ノ擔任ト定メ 山口滞在ニテ
政事堂ノ議事ニ參與セリ 尚参謀 **福田良助** （良輔、奇兵隊参謀） 参謀兼書記 時山直八 書記
十郎等 （兼旗奉行） ノ諸氏モ時々出山 （山口） 大二周旋スル處アリ

片野 （奇兵隊参謀、

九月 同十六日 御手廻総代 市山淳蔵 （益田家臣、中士、御手廻組） 始六名 （来栖鬼助、中士、御手廻組） 并二栗栖鬼助
宇野魁助 （益田家臣、中士、御手廻組） **松井平輔等** 突然幽囚セラル 其他御手廻ノ内 冤罪ニテ所
罰セラル、者多シ **栗山百合熊** （栗山） 即夜出發 山口諸隊會議所ニ至リ 大
橋三樹三 （益田家臣、回天軍小隊司令） 二面接シ 同伴政事堂ニ出頭シテ廣澤氏ニ報知セシニ 廣澤
氏曰ク 幽囚ノ諸氏暫ク忍ンテ静穩ナラハ 其命ニ関スル程ノ急ハアルベカラ
ス 已ニ代役召喚ノ命ヲ發シアレバ 不日着山ノ期ニ接セリ 安神スベシトノ
答ニ依リ 退出シ百合熊八歸邑ス （栗山）
百合熊 出山ノ後 中村藤馬 （益田家臣、四組、回天軍會計） 隊用ニテ歸邑シ 事畢リテ出發セシニ

参謀兼書記

片野十郎等ノ諸氏モ時々出山ニ草稿本には

の個所に「時山直八 書記」が挿入されている。こちらが正

しいと思われる。尚、乙丑二月改の「奇兵隊人数附」によれば参謀 福田良輔、参謀兼使役陣場見合 時山直八、参謀兼旗奉行 片野十郎となっている。

（出典：「山口県史」史料編 幕末維新6 992頁参照）

同十六日 御手廻総代 市山淳蔵 始六名 并二栗栖鬼助宇野魁介 松井平輔等 突然幽囚セラルニ262頁脚注参照。何故幽囚されたのか。

少輔ニ山下少輔。益田家臣、中士、御手廻組。

泰蔵ニ松原泰蔵（泰三）、益田家臣。中士、御手廻組。

仁蔵ニ松原仁蔵。益田家臣、中士、御手廻組。

浪江ニ大塚浪江。益田家臣、中士、御手廻組。

健三ニ中井健三。益田家臣。中士、御手廻組、回天軍。P258参照。

上小川村於テ多勝卯ノ農兵ヲ指揮シテ其迹ヲ選ラシムハミ速ニ遂捕
ヘテ多シモ政堂ニテ辨解宜キ得テ免カレタリ

同廿四日御代役須佐弁駕ニテ出山アリ本藩政府ニテハ御政務國貞直
人氏御目附杉篤助氏主仕トナリ奇兵隊材半七氏鴻城學校督學
坂上忠助氏等其事ニ參與シテ后論堂處罰御沙汰書及大谷
樸助河上範三二氏罪狀取削シ御沙汰書ヲ調ヘテ御代役ニ下渡

サレタリ

十月十二日御代役山口弁駕萩ヲ經テ歸須賀十三日着須アリ
同廿四日邑政堂役員ノ更迭其他改革ノ令ヲ發セリ

御願分外隱居 元職役益田三郎左衛門

永々遠嶋 元當役栗山翁輔

御願分外隱居 御用人多弥順左衛門

上小川村ニ於テ（現田万川町）多（多祢卯一、益田家臣、上士、大組、剣豪）弥卯一ノ農兵ヲ指揮シテ其途ヲ遮（さへぎ）ラシムルニ遭（あ）ヒ 遂ニ捕（とら）ヘラレタリシモ 邑政堂ニ至リ（いた）辨解宜キヲ得テ免カレタリ

同廿四日（桂主殿）御代役 須佐（はつが）発駕ニテ出山アリ（山口） 本藩政府ニテハ御政務（秋藩士、干城隊頭取、国政方） 國 貞 直

人氏 御目付（おめつけ） 杉 篤助氏主任トナリ 奇兵隊（秋藩士、奇兵隊重監） 林 半七氏 鴻城学校督學

坂上忠助氏等（その） 其事ニ參與シテ俗論堂處罰ノ御沙汰書（ごさたしよ） 及 大谷

樸助 河上範三 二氏罪狀取（ざいじよう）削（消）シノ御沙汰書ヲ調ヘテ御代役ニ下渡（さげわたし）

サレタリ

十月十二日（桂主殿） 御代役山口發駕（はつが） 萩ヲ経テ帰須（須佐） 翌十三日着須（須佐）アリ

同十四日（十月） 邑政堂役員ノ更迭其他改革ノ令ヲ發セラル

御領分外隠居（ごりようぶんがいんきょ）

元職役（しよくやく）

益田三郎左衛門

永々遠嶋（えいえいえんとう）

元當役（とうやく）

栗山 翁輔

御領分外隠居（ごりようぶんがいんきょ）

御用人（ごようじん）

多（た）弥（弥） 順左衛門

杉 篤助

鴻城学校「巻末「補注4」参照。「回天実記」の編纂が明治三年三月三日で鴻城学舎の創立が明治八年では時期が合わない。すると明治三年は「回天実記」編纂作業の着手の年で完成は明治八年以降かという疑問が生じる。

坂上忠助「初名恒、後に忠介、寓所と号しまた作楽山樵と号す。晩年冲所の号あり。萩藩寄組口羽氏の家人なり、中村牛莊に学び、また江戸に赴きて安積良斎、羽倉用九の門に学ぶ。嘉永安政の際諸藩有志の士と交わり正義を唱う。安政中美祢郡に移りて教授す。四年擢でられて明倫館教授となる。文久二年江戸有備館教授に転ず。馬関の役に命を以て九州諸藩に使いす。慶応二年須佐学校の教授となり、居ること十一年、明治九年前原の乱に連座して京に鑑すること三年、尋いで塾を京に開く。二十二年東京に移り、二十三年十月十四日没。年七十三。詩集一卷あり。

遠島「流刑の一つ。罪人を萩沖合の見島・大島などに島流しにすること。有期と無期があり、有期はおよそ二年以上であるが、処刑の際にはあらかじめ刑期を定めず、配流後の情状によってこれを召還した。無期（永遠島）は武士・庶民ともに罪状によって決するが、非常の大赦でないと召還せず、死罪を一等減じて遠島に処した者は、十年を経過しないと情状酌量の詮議がされなかった。（出典「山口県史」史料編 幕末維新1 1059頁）

慶応元年（一八六五） 十月

全上

全上

波田與市

永々遠嶋

北強團

多根卯一

遠嶋

全上

仲升半四郎

全上

全上

宅野太郎

全上

全上

山崎十郎左衛門

逼塞

全上

松野重内

全上

全上

内藤碓亮

大谷千太郎御沙汰書

右父權助後

大谷千太郎

右父權助義先年未正義志厚く為

國家令盡力周旋族處却而罪科之處置有之御不便

被

慶応元年（一八六五）十月

全上	永々遠嶋	遠嶋	全上	全上	全上	全上	全上
波田與市	多根卯一	仲井半四郎	宅野太郎	山崎十郎左衛門	松野重内	内藤磋亮	

大谷午太郎へ御沙汰書	右父樸助儀	右父樸助義	國家令盡力周旋候處	二被
大谷午太郎	大谷	先年来正義ノ志厚ク為	却而罪科之處置ニ有之	
			御不便	

為國家（こつ）かのため）＝長州藩のため。幕末の日本ではまだ統一國家としての國家意識はなく、國家とは夫々の藩の事であつた。

恩召後依之罪狀御取揚火中、被仰付後条源

御仁惠、程感載被仕正義志ヲ勵ミ往々可被遂忠
勤事

丑十月

右御處分就テ音兵隊牧小太郎英次郎村上所吾玉川小
文吾木村敬助等御代役ニ從ヒテ歸邑スベキノ命アリト由モ都合、
依リ十四日程歸須セリ然ルニ御祭令後數日ヲ經過スニ俗論黨
處罰實行舉ラカル以テ村上小吏者玉川所吾等ニ實況報知
為出シテ林半七ハ須佐行事ニ決シ所吾小文者等吉田本
當歸リ山下範三郎林ニ隨行シテ須佐未着アリ本町須山
平助迄投宿御代役ニ面會シテ御沙汰一通リ神速實行ヲ舉
ゲラト度旨ヲ速メテ督促セリ仍テ貳配所護送シ本町才内願

しめされ
思召候

これによつて
依之罪状御取揚

おんとりあげ
火中二被仰付候条

おおせつけれ
深

ふかき

ゆくゆくちゅうきんとげらる
往々可被遂忠

御仁恵ノ程感載被仕

勤候事

正義ノ志ヲ勵ミ

正

往々可被遂忠

勤候事

(慶応元年)

丑 十月

右御處分二就テハ

(西尾壯助変名)

奇兵隊

(津田公輔 変名)

英次郎

(村岡彦十郎 変名)

玉川小

文吾

(桂主殿)

御代役二從ヒテ歸邑

(須佐)

スベキノ命アリト

雖モ

都合二

依リ

(十月)

十四日發程歸須セリ

然ルニ御發令後數日ヲ經過スルモ

俗論黨

實況報知

都合二

處罰ノ實行

(山口)

林半七氏

(秋藩士、奇兵隊軍監)

須佐行ノ事ニ決シ

研吾

小文吾等

ノ為出山シテ

(益田家臣、回天軍、奇兵隊)

林半七

二隨行シテ須佐來着アリ

本町須山

八吉田本

平助宅ニ投宿

(桂主殿)

御代役二面会シテ御沙汰ノ通り神速實行ヲ擧

ケラレ度旨ヲ述メテ督促セリ

仍テ或ハ配所ニ護送シ

本町須山

八吉田本

ケラレ度旨ヲ述

メテ督促セリ

仍テ或ハ配所ニ護送シ

仍テ或ハ配所ニ護送シ

仍テ或ハ配所ニ護送シ

仍テ或ハ配所ニ護送シ

仍テ或ハ配所ニ護送シ

主なる人物の内、判明している者に対する処罰は次のように実施された。(出典「温故」第十六号 益田三郎左右衛門の「江崎滞留中日裁」)

益田三郎左右衛門「慶応元年十月二五日に須佐の隣村、江崎(現田万川町)の庄屋・造り酒屋大谷六郎左衛門宅へ居候。気分相につき介抱役として夫人、下女一人、中間一人を連れて引越した。翌慶応二年五月一八日許されて家に帰る。この時波田與市を同道した。

栗山翁輔「慶応元年十二月七日渡海。流刑先は大島と思われる(「温故」70頁「今朝六ツ時官治帰須佐之事 大嶋より之書状官治持参之事」とあり前後の文脈から大嶋から届いた翁輔の書状のことと考えられる)。荻野隼太(佐々木毅)の「松遺稿」には「栗山嵩涯墓誌銘」として「乙丑国内之乱 邑亦生党議 事連執職 先生以下用事者 羅織罪累 投鼠不留一人 雖然先生之在配所 縣官某 以有舊故 待遇甚厚 至使先生忘幽厄之苦 以丙寅某月 遇赦歸家」とあり、同じく慶応二年(丙寅)に釈放されている。「某月」とは恐らく四月十八日であろう。

波田與市「慶応元年十一月二十四日に引越。引越先は不明だが、益田三郎左衛門の「江崎滞留中日裁」では與市は屢々三郎左衛門を訪問しており釈放された時は三郎左右衛門と一緒に須佐に戻った。

慶応元年(一八六五) 十月

或ハ門戸閉鎖シ各其罰ヲ畢セリ

是ニ於テ奇兵隊ヨリ歸邑而名セ元田天軍惣代トシテ主家對スル敬礼
爲差控ヲ申出ル決セリ其覺書尤ノ如シ

覺

去冬己未御内輪正俗而立ノ年ニ付而レ不及私共御國家
御爲筋ヲ違ニ相考盡力周旋仕裝義ニ御座候得共自然
不_レ方御厄害ニ立至リ候段幾重ニ奉恐蒙依之先差控居
矣間此段直敷様御沙汰被成下差以上

丑十一月廿三日

津田公輔

英次郎山下範三郎木村敬助等同文故略之

右覺書ヲ出セシ各逼塞沙汰アリ但英次郎ニ裁名候
ナル故ニ其命ナシ

同廿六日牧小太郎等逼塞ヲ免

慶応元年（一八六五）十一月

シ 或^{あるい}八門^{もんこ}戸^こヲ閉鎖^{へいさ}シ 各^{おの}其^{その}罰^{ばつ}ヲ畢^{おわ}レリ

是^こニ於^こテ 奇^{須佐}兵隊^{ひぐさ}ヨリ帰^{かへ}邑^{むら}ノ四^よ名^なモ元^{もと}囧^{くわ}天^{てん}軍^{ぐん}惣^{そう}代^{だい}トシテ 主^{益田家}家^{しや}ヘ對^{たい}スル敬^{けい}礼^{れい}ノ
為^{ため}メ 差^さ扱^あヲ申^{もう}出^しルニ決^{けつ}セリ 其^{その}覺^{おぼ}書^{えがき}左^{ひだり}ノ如^{ごと}シ

覺

去^い冬^{ふゆ}已^い来^{らい} 御^ご内^{ない}輪^{りん}正^{せい}俗^{よく}両^{りやう}立^たノ件^{けん}二^に付^つ而^てハ 乍^あ不^ふ及^{じやく}私^し共^き御^ご國^{こく}家^け
ノ御^{おん}為^{ため}筋^{すじ}ヲ一^{いち}途^ずニ相^あ考^{かう} 盡^{じん}力^{りき}周^{しゅう}旋^{せん}仕^し候^{こう}義^ぎニ御^ご座^ざ候^{こう}得^{とく}共^き 自^じ然^{ぜん}
不^ひ一^{ひと}方^{かた}御^ご厄^{やく}害^{がい}ニ立^た至^{いた}リ候^{こう}段^{だん} 幾^{いく}重^{じゆう}モ奉^{ほう}恐^{おそ}入^い候^{こう} 依^よ之^{これ}之^は先^{さき}差^さ扱^あ居^ゐ候^{こう}間^{かん} 此^{この}段^{だん}宜^{よろ}敷^{しく}様^{よう}御^ご沙汰^{さた}被^な成^な下^{くだ}候^{こう} 以上

丑

十一月廿三日

津田公輔

英^{（村岡彦十郎変名）}次^{（益田家臣、回天軍、奇兵隊）}郎^{（西尾壮助変名）} 山^{（西尾壮助変名）}下^{（西尾壮助変名）}範^{（西尾壮助変名）}三^{（西尾壮助変名）}郎^{（西尾壮助変名）} 木^{（西尾壮助変名）}村^{（西尾壮助変名）}敬^{（西尾壮助変名）}助^{（西尾壮助変名）}等^{（西尾壮助変名）}同^{（西尾壮助変名）}文^{（西尾壮助変名）}故^{（西尾壮助変名）}二^{（西尾壮助変名）}略^{（西尾壮助変名）}之^{（西尾壮助変名）}

右^{みぎ}覺^{かく}書^{しよ}ヲ出^でセシニ 各^{おの}逼^{ひつ}塞^{そく}ノ沙汰^{さた}アリ

同^{どう}廿^{じふ}六^{ろく}日^{にち} 牧^{（津田公輔変名）}小^{（津田公輔変名）}太^{（津田公輔変名）}郎^{（津田公輔変名）}等^{（津田公輔変名）}逼^{ひつ}塞^{そく}ヲ免^{ゆる}サル

逼塞ハ江戸時代、武士に加えた刑。門を閉ざして昼間の出入りを禁じたもの。

同廿七日林半七氏榮程歸陣アリ

十月廿日秋太郎英次郎山下平三郎木村敬助等奇兵隊歸

同廿二日須佐ヨリ御直使増堅善右衛門松原齡助等吉田驛来着

奇兵隊本陣ニ至リ昨午以來弊邑混雜就テ多人教入隊ニ御厄

害ニテリタ由ヲ謝ル今般平初混ニテリタ上軍事手組ニ差支モアレハ

隊除取計元ヲ旨ヲ頼談セシニ奇兵隊ニ隊中規則モアレハ忘ニ隊隊

ヲ為スベカラルカ勿論アレ貴藩ヨリ入隊諸子ノ熟議上回答致スベキ由

答ヘタルニ依リ善右衛門等帰須セリ

慶應ニ所屬正月廿七日須佐ヨリ大田丹宮増堅善右衛門金子新藏

大谷岩尾等ヲ奇兵隊ニ遣ス丹宮等曰ク昨午弊邑入隊者除隊

ノ件相同ミタリシニ尔後回答無之ニ依リ来隊セリト奇兵隊御神本家

當時益用ヲ改メ御神本ト稱ス御同列中ニ於テ鈴尾家當時福屋ヲ改メ如キ多人數

同廿七日 林半七氏発程帰陣アリ

十一月三日 牧小太郎 英次郎 山下半三郎 木村敬助等奇兵隊二帰ル

同廿二日 須佐ヨリ御直使 増野善右衛門 松原齡助等 吉田驛来着
奇兵隊本陣二至リ 昨年来弊邑混雑二就テハ人数入隊シテ御厄
害ニナリタル由ヲ謝シ 今般平和混一ニナリタル上ハ 軍事手組二差支モアレハ
除隊ノ取計ヲ乞フ旨ヲ頼談セシニ 奇兵隊二八隊中規則モアレハ 忘二除隊
ヲ為スベカラサルハ勿論ナレトモ 貴藩ヨリ入隊ノ諸士ヘ熟議ノ上 回答致スベキ由ヲ
荅ヘタルニ依リ 善右衛門等帰須セリ

慶應二丙寅正月廿七日 須佐ヨリ大田丹宮 増野善右衛門 金子新蔵
大谷岩 尾等ヲ奇兵隊二遣ス 丹宮等曰ク 昨年 弊邑入隊者除隊

ノ件相伺ヒタリシニ 尔後 回答無之ニ依リ来隊セリト 奇兵除八御神本家
御同列中二於テ 鈴尾家ノ如キ人数

十一月三日「江崎へ領外追放になった益田三郎左衛門の手記「江崎滞留中日裁」(温故第十六号)」によると、十一月四日の項に、この頃須佐藩はミネ
ー小銃百挺調達を計画し、益田丹下が繋ぎ融資金策のため追放中の三郎左衛門の元へ相談に来ている。四境戦争に備え須佐藩でも急遽武装強化を図りつ
つあった事が判る。
手組＝部隊を編成すること
終わりから三行目。「昨年」は文書館本の記述による。

慶応元年(一八六五) 十一月 慶応二年一月

入隊許^{シタル}例アレハ御神本家名家ニシテ當入隊員ヲ戒^{シタル}バトテ御
軍制上、影響^{モアル}ヲ加之在隊員ニ於^{テモ}邑中既^ニ平和歸^{シタル}ハ並
門要衝^ニ當^ルベキ應分責任^ニ尽^シ難^キ非^ニナルヲ以^テ本隊^ニ入^ル者一益^々
奮^テ報國^ノ志誠^ヲ踴^シ益田家即^チ御神本家ノ光輝^ヲ奔揚^{セントス}
精神^{ナル}由^ニテ除隊^ハ許^サ諾^シ難^シト回答^{セリ}

同^セ日大田丹宮等本陣^ニ立^リ更^ニ應接^ラ門^ヲキタル^ニ猶佐ヨリ在隊員^ニ
ニ名歸休^ヲ命^スベキ依^リ歸^ル靈中道仕^テ御用^ヲ命^セラ^ルベキ^ニ勿論街隨^ニ
意^{ナリ}除隊^ノ事^ニ貴命^ニ應^シ難^シ折然^ニ謝絕^{シテ}局^ヲ結^ヒ丹宮

等歸^リ須^{セリ}

二月十四日隊^ニ依^リ評算正三玉川小文吾等歸休^{セリ}

三月十四日坪嶋正三玉川小文吾等歸陣^{セリ}歸^リ須^ル日直^ニ邑政堂^ニ出頭^{シテ}

去月大田丹宮等來隊際入隊員^ノ内ニ名歸休^ノ約^{アル}ヲ以^テ當度

慶応二年（一八六六）一月～三月

ノ入隊ヲ許シタル例アレハ 御神本家ノ名家ニシテ當入隊員ヲ減シタレバトテ 御
軍制上^{ニ非常}ノ影響モアルマシク加之在隊員ニ於テモ邑中^{須佐}既^ハ二平和ニ歸シタレハ北^ハ
門要衝^ハ二當ルベキ應分ノ責任ハ尽シ難キニ非ラサルヲ以テ 本隊ニ入ル者ハ益々
奮テ報國ノ赤誠ヲ顯シ 益田家即チ御神本家ノ光輝ヲ發揚セントスル
ノ精神ナル由ナレハ 除隊ノ件ハ諾シ難シト回答セリ

同廿八日^{（月）} 大田丹宮等^{（益田家臣、上士、大組）}本陣ニ至リ 更ニ應接ヲ開キタルニ 須佐ヨリ在隊員ノ内
二名歸休ヲ命スベキニ依リ 歸休中適任ノ御用ヲ命セラルベキハ勿論御隨^{（大田）}
意ナリ 除隊ノ事ハ貴命ニ應シ難シト断然謝絶シテ局ヲ結ヒ 丹宮
等歸須^{須佐}セリ

二月十四日 隊命ニ依リ 坪寫正三^{（中村藤馬変名）} 玉川小文吾等^{（黒川豫四郎変名）}歸休セリ

三月十四日 坪嶋正三^{（中村藤馬変名）} 玉川小文吾等^{（黒川豫四郎変名）}歸陣セリ 歸須ノ日直^{（二月）}二邑政堂ニ出頭シテ
去月大田丹宮等^{（益田家臣、上士、大組）}來隊ノ際 入隊員ノ内 二名歸休ノ約アルヲ以テ 當度

「御軍制上^{ニ非常}ノ影響モアルマシク」＝文書館本の記述によって の部分^{（二月）}を補足した。

北門＝北長門。

「歸休中適任ノ御用ヲ命セラルベキハ」＝「適當」は文書館本の記述なり。

「坪寫正三 玉川小文吾等歸休セリ」＝「歸休」は文書館本では「歸須」となっている。

撰ミテ歸休セシ由ヲ届出タリ、雖氏帶領中、公命ラ命セラザリシ復命ス
同廿日政事堂ヨリ御政務國負直人氏須佐行ミテ大谷太右衛門
宅ニ投宿シ邑中ノ實況ヲ視察シ家臣一般大會議ヲ開キテ益親
睦情ヲ厚カラシムル款々ニ依リ、高兵隊入隊者除隊歸邑ノ命アリテ
山口通報仍テ政事堂ヨリ吉田本營ニ伺テ其旨ヲ達セラレ然ルニ在隊
者、裏ニ大田丹后等來營、際陳述セシ精神ナレハ亦陳ヨリ在隊者、
内出山直接ニ政府ニ具申スハシト、内諭アリ

同晦日村上研吾平島正三吉田發程山口ニ出タリ

宵一日山口伊勢小路諸隊會議所詰、高兵隊時山直八面會シテ出山
ノ事情ヲ陳述セシ時山氏、御政務山田宇右衛門計ハシ同氏後河原
ニ在寓セリ候モ同遷スベシトノ事ミテ直山田氏ヲ訪ヒ其情實ヲ細陳ス山田氏
曰ク政府國負直人ヲ須佐ニ遣ミ、奸賊御處罰後狀況ヲ視察シ益一和

撰ハレテ帰休セシ由ヲ届出タリト雖トモ 滞須中一ノ公用ヲモ命セラレザリシト復命ス

(三月) 同廿四日 政事堂ヨリ御政務 國貞直 人須佐行ニテ 大谷丈右衛門

宅ニ投宿シ 邑中ノ實況ヲ視察シ 家臣一般大會議ヲ開キテ益親

睦ノ情ヲ厚カラシメント欲スルニ依リ 奇兵隊入隊者 除隊帰邑ノ命アラシコトヲ

山口ニ通報ス 仍テ政事堂ヨリ吉田本営ニ向テ其旨ヲ達セラル 然ルニ在隊

者八曩二大田丹宮等來営ノ際陳述セシ精神ナレハ 本陳ヨリ在隊者ノ

内 出山直接ニ政府ニ具申スベシトノ内諭アリ

(三月) 同晦日 村上研吾 坪島正三 吉田発程山口ニ出タリ

四月一日 山口伊勢小路 諸隊會議所詰 奇兵隊 時山直八二面會シテ 出山

ノ事情ヲ陳述セシニ 時山氏ハ御政務 山田宇右衛門ニ計ルベシ 同氏ハ後河原

ニ在寓セリ 余モ同行スベシトノ事ニテ直ニ山田氏ヲ訪ヒ 其情実ヲ細陳ス 山田氏

曰ク政府國貞直人 ヲ須佐ニ遣ハシ、ハ 奸賊御處罰後ノ狀況ヲ視察シ 益一和

曩二大田丹宮等來営ノ際陳述セシ精神 303~306頁参照。

伊勢小路 伊勢大路 (益田) 向かう国道9号線が山口市内一の坂川に差し掛かる手前、武徳殿前交差点を斜め右に進む道路) の誤りではないか。

後河原 (うしろかわら) 現山口県立山口図書館北側一帯の町名。

山田宇右衛門 名は頼毅、号を星山または治心氣斎という。安政元年浦賀防衛御惣奉行参謀、同二年七月外艦応接掛として相島に出戌。文久元年英艦赤間関に泊するや山田亦助と命を受けて出張。二年二月抜擢されて参政となる。八月学習院用掛となつて上京し勤王の事に執掌す。帰国してまた参政となる。三年奥阿武郡代官。慶応元年表番頭格に進み兵学教授。二月参政に復し大いに藩政を改革し兵備を拡張し幕兵の来攻を待つ。四境の変動功多し。三年五月参政の首座に班し民政方改正掛となり木戸孝允と力を合わせて藩政の刷新を図り、かねて少壮を誘掖し他日の発展を期す。同年十一月十一日病没。享年五十五才。

慶応二年 (一八六六) 三月 四月

親睦團ヲ形ヲラニカ為ニシテ即チ郷等主家御神本氏將來ヲ慮カラル

君臣忠命ニ出テ郷等従来正義者願ヒテ東西ニ奔走シ粹身粉屑

ヲ盡シテ月事恢復見ルニ至リ然レ郷等自今御神本家ノ柱石ト為リ

愈國家大計ニ注目セシムハルベカラズ幸ニ政府ノ奇兵隊ニ命シテ除隊

セシメントスルアリ此機深シテ其命ニ應セサルハ切ラ簪ハシヲ斷クモノナリト懇懇篤

丁寧ニ諭說セシメテ研考等情於テ否ニハカラサル場合トナレハ暫ク首肯シ

傾カサテ山岡氏曰ク郷等忠愛ノ赤心幸ニ余カ言感スル處アリ一應

歸陣上在隊員ニ熟議シテ可成一同歸邑事決スベシト談リテ退出

ニ時山ニ別ラ告ケテ山ノヲ強レテ山ニ歸リ

同日山縣狂助氏山行決シ村上所吾坪場正ニ先發急行セリ牧小太郎

山縣隨行キ山本ニ泊シ翌三日着山後山縣氏ニ政府ニ出頭シテ須入

隊者除名國貞氏ノ請求ニ出タル事ナレハ須佐ニ至リ國貞氏ニ直接談判

慶応二年（一八六六） 四月

親睦ノ團（體脱力）ヲ形（ツ脱）クランカ為ニシテ即チ郷等ノ主家御神本氏ノ将来ヲ慮カラル、
 君候ノ恩命ニ出タリ（出で）郷等従来正義ノ首領トシテ東西ニ奔走シ粹身粉骨（砕さいしんふんこ）
 セテ結果今日ノ恢復ヲ見ルニ至レリ然レハ郷等自今御神本家ノ柱石ト為リテ
 愈國家ノ大計ニ注目セスハアルベカラス幸ニ政府ノ奇兵隊ニ命シテ除隊（じょたい）
 セシメントスルアリ此機ニ際シテ其命ニ應セサルハ功ヲ一簣ニ闕クモノナリト懇篤（こんとく）
 丁寧ニ諭説セシヲ以テ研（村上一変名）吾等情ニ於テ否ムヘカラサル場合トナレハ暫ク首ヲ
 傾ケタリシガ山田氏曰ク郷等忠愛ノ赤心幸ニ余力言ニ感スル處アラハ一應（いちおう）
 歸陣ノ上在隊員ニ熟議シテ可成一同歸邑ノ事ニ決スベシト談了リテ退出（たいしゅつ）
 シ時山二別ヲ告ケテ山口ヲ發シ吉田ニ歸レリ

（四月）
 同二日山縣狂助氏山口行ニ決シ（中村泰一変名）村上研吾（中村藤馬変名）坪嶋正三八先發急行セリ（津田公輔変名）牧小太郎
 山縣二隨行シテ船木二泊シ翌三日着山ノ後山縣氏ハ政府ニ出頭シテ須佐入
 隊者除名ハ國貞氏ノ請求ニ出タル事ナレハ須佐ニ至リ國貞氏ニ直接談判

御神本 242頁参照。

君侯 毛利敬親。

山縣狂助 山県有朋。幼名辰之助、次いで小助（小輔とも）のち有朋と改む。千束狂介は一時の通称。素狂含雪等と号し、また芽城椿山莊主などの別号あり。天保九年閏四月秋川島に生る。父は三郎有稔といい軽卒。夙に志を立て文武に励み安政五年一九才の七月松下村塾徒五人と命を受けて京都の状況視察に赴く。帰国後村塾に入り松蔭の教えを受く。既にして松蔭再び投獄せられて師事すること久しからず。慶応元年奇兵隊軍監となり繪堂、長登の一戦に藩論統一の偉業を成就す。維新の際、越後口官軍の参謀たり。次いで欧州を視察し帰朝後陸軍中將に任じ爾来我が國軍政の要路に当たり、日清戦争には第一軍司令官、日口戦役には参謀総長たり。或いは枢密院議長となり、或いは台閣に列して首班たり。明治大正を通じて重臣の一人なりしこと遍く世の認めるところ、明治一七年華族に列し、伯爵、二八年侯爵、四十年公爵を授けらる。元帥陸軍大將従一位大勲位功一級たり。大正十一年二月一日薨す。歳八十五。国葬を賜う。

船木 現厚狭郡楠町船木。寛永十二年参勤交代の制を設けると同時に、本陣が置かれ、舟木宰判が設置された。郡政の中心地として人馬の往来頻繁たり。御茶屋、代官所（勘場）、御物送番所？、牢屋、旅人荷付場、御高札場、一里塚などがあつた。

ヲ開キ果シテ歸サレ得サル情實ヲ其指揮ニ從フキ旨ヲ約ス然レモ古子君
高田青兵衛・御巡覽ノ事アル今レ山縣氏ニ急ニ歸營セサル得ス故ニ須佐
行事ニ福田氏ニ囑托セテタリ

同日福田氏須佐ニ向テ出立發射小太郎村上所吾坪嶋正三隨行ス

同月福田氏等國負直人氏旅寓炊和ニ至リ應接セリ福田氏ニ在隊員ニ

於テ素ヨリ正義回復邑中混和ノ目的ヲ以テ今日迄運動セシ者ナレハ仅

令歸邑セサルモ爲メ經那隔ヲ生スル自愛ノ憂モ無之且ニ國老ノ丹鈴尾

家ニ數十名ヲ入隊セシ高田氏國家健之助殿自ラ率先シテ入隊セ

ラレ特御神本家ニシテ諸隊ニ氣脈ヲ絶リ理アリヤ又奇兵隊於テモ一時ニ隊

員數十名ヲ除ク實ニ困難ノ至リト縛々解解アリテ終ニ在隊員ニ御神

本家ヨリ公然入隊ヲ命セラレ尤在隊員ノ内五名ヲ擄致シテ歸邑報セシヤシ

ト決セリ談畢リテ福田氏望松邸ニ至リ柱王殿殿ニ面謁スレテ談話

ヲ開^{ひら}キ果^{はた}シテ帰^{かえ}サ、ルヲ得^えサルノ情^{じょう}實^{じつ}アラハ其^{その}指^し揮^きニ從^{したが}フベキ旨^{むね}ヲ約^{やく}ス然^{しか}ルニ世子^{（毛利元徳）}君^{きみ}
吉^{よし}田^だ奇^き兵^{へい}隊^{たい}ニ御^{じゅん}巡^{らん}覽^{らん}ノ事^{こと}アルニ会^あシ山^{やま}縣^{がた}氏^しハ急^きニ歸^き營^{えい}セサルヲ得^{とく}ス故^{ゆえ}ニ須^す佐^さ
行^いノ事^{こと}ハ福^{ふく}田^だ氏^しニ囑^と托^{たく}セラレタリ

（四月）
同日 福^{（福田義平、奇兵隊）}田^{（須佐）}氏^{（津田公輔変名）}須^{（中村泰一変名）}佐^{（中村藤馬変名）}ニ向^{むか}テ出^{しゅ}發^{ぱつ}牧^{（津田公輔変名）}小^{（中村泰一変名）}太^{（中村藤馬変名）}郎^{（中村泰一変名）}村^{（中村藤馬変名）}上^{（中村泰一変名）}研^{（中村泰一変名）}吾^{（中村泰一変名）}坪^{（中村藤馬変名）}嶋^{（中村藤馬変名）}正^{（中村泰一変名）}三^{（中村泰一変名）}隨^{（中村泰一変名）}行^{（中村泰一変名）}ス

同 五日 福^{（福田義平、奇兵隊）}田^{（須佐）}氏^{（津田公輔変名）}等^{（中村泰一変名）}

福^{（秋澤士、干城隊頭取、国政方）}田^{（須佐）}氏^{（津田公輔変名）}等^{（中村泰一変名）}

國^{（秋澤士、干城隊頭取、国政方）}貞^{（須佐）}直^{（津田公輔変名）}人^{（中村泰一変名）}氏^{（中村藤馬変名）}旅^{（中村泰一変名）}寓^{（中村藤馬変名）}ニ至^{（中村泰一変名）}リ應^{（中村泰一変名）}接^{（中村泰一変名）}セリ

福^{（福田義平、奇兵隊）}田^{（須佐）}氏^{（津田公輔変名）}ハ在^{（中村泰一変名）}隊^{（中村藤馬変名）}員^{（中村泰一変名）}ニ

於^{（秋澤士、干城隊頭取、国政方）}テハ素^{（須佐）}ヨリ正^{（津田公輔変名）}義^{（中村泰一変名）}回^{（中村藤馬変名）}復^{（中村泰一変名）}邑^{（中村泰一変名）}中^{（中村藤馬変名）}混^{（中村泰一変名）}和^{（中村藤馬変名）}ノ目^{（中村泰一変名）}的^{（中村藤馬変名）}ヲ以^{（中村泰一変名）}テ今^{（中村泰一変名）}日^{（中村藤馬変名）}迄^{（中村泰一変名）}運^{（中村藤馬変名）}動^{（中村泰一変名）}セシ者^{（中村泰一変名）}ナレハ

令^{（秋澤士、干城隊頭取、国政方）}歸^{（須佐）}邑^{（津田公輔変名）}セサルモ為^{（中村泰一変名）}メ二^{（中村藤馬変名）}經^{（中村泰一変名）}隔^{（中村藤馬変名）}ヲ生^{（中村泰一変名）}スルノ憂^{（中村藤馬変名）}ハ豪^{（中村泰一変名）}毛^{（中村藤馬変名）}無^{（中村泰一変名）}之^{（中村藤馬変名）}且^{（中村泰一変名）}三^{（中村藤馬変名）}國^{（中村泰一変名）}老^{（中村藤馬変名）}ノ内^{（中村泰一変名）}鈴^{（中村藤馬変名）}尾^{（中村泰一変名）}

家^{（秋澤士、干城隊頭取、国政方）}ハ已^{（須佐）}ニ數^{（津田公輔変名）}十^{（中村泰一変名）}名^{（中村藤馬変名）}ヲ入^{（中村泰一変名）}隊^{（中村藤馬変名）}セシメ高^{（中村泰一変名）}田^{（中村藤馬変名）}家^{（中村泰一変名）}八^{（中村藤馬変名）}健^{（中村泰一変名）}之^{（中村藤馬変名）}助^{（中村泰一変名）}殿^{（中村藤馬変名）}自^{（中村泰一変名）}ラ率^{（中村藤馬変名）}先^{（中村泰一変名）}シテ入^{（中村藤馬変名）}隊^{（中村泰一変名）}セ

ラレ特^{（秋澤士、干城隊頭取、国政方）}ニ御^{（須佐）}神^{（津田公輔変名）}本^{（中村泰一変名）}家^{（中村藤馬変名）}ニシテ諸^{（中村泰一変名）}隊^{（中村藤馬変名）}ニ氣^{（中村泰一変名）}脈^{（中村藤馬変名）}ヲ絶^{（中村泰一変名）}ツノ理^{（中村藤馬変名）}アラシヤ又^{（中村泰一変名）}奇^{（中村藤馬変名）}兵^{（中村泰一変名）}隊^{（中村藤馬変名）}ニ於^{（中村泰一変名）}テモ一^{（中村藤馬変名）}時^{（中村泰一変名）}二^{（中村藤馬変名）}隊^{（中村泰一変名）}

員^{（秋澤士、干城隊頭取、国政方）}數^{（須佐）}十^{（津田公輔変名）}名^{（中村泰一変名）}ヲ除^{（中村藤馬変名）}クハ實^{（中村泰一変名）}ニ困^{（中村藤馬変名）}難^{（中村泰一変名）}ノ至^{（中村藤馬変名）}リナリト縷^{（中村泰一変名）}々^{（中村藤馬変名）}辨^{（中村泰一変名）}解^{（中村藤馬変名）}アリテ終^{（中村泰一変名）}ニ在^{（中村藤馬変名）}隊^{（中村泰一変名）}員^{（中村藤馬変名）}ハ御^{（中村泰一変名）}神^{（中村藤馬変名）}

本^{（秋澤士、干城隊頭取、国政方）}家^{（須佐）}ヨリ公^{（津田公輔変名）}然^{（中村泰一変名）}入^{（中村藤馬変名）}隊^{（中村泰一変名）}ヲ命^{（中村藤馬変名）}セラレ尤^{（中村泰一変名）}在^{（中村藤馬変名）}隊^{（中村泰一変名）}員^{（中村藤馬変名）}ノ内^{（中村泰一変名）}五^{（中村藤馬変名）}名^{（中村泰一変名）}ヲ撰^{（中村藤馬変名）}拔^{（中村泰一変名）}シテ歸^{（中村藤馬変名）}邑^{（中村泰一変名）}報^{（中村藤馬変名）}セシムベシ

ト一^{（秋澤士、干城隊頭取、国政方）}決^{（須佐）}セリ談^{（津田公輔変名）}畢^{（中村泰一変名）}リテ福^{（中村藤馬変名）}田^{（中村泰一変名）}氏^{（中村藤馬変名）}ハ笠^{（中村泰一変名）}松^{（中村藤馬変名）}邸^{（中村泰一変名）}ニ至^{（中村藤馬変名）}リ桂^{（中村泰一変名）}主^{（中村藤馬変名）}殿^{（中村泰一変名）}殿^{（中村藤馬変名）}ニ面^{（中村泰一変名）}謁^{（中村藤馬変名）}ヲ乞^{（中村泰一変名）}ヒテ談^{（中村藤馬変名）}話^{（中村泰一変名）}アリ

「（四月）五日 福田一行須佐着中津町山根友吉方二投宿ス 同 六日（福田義平、奇兵隊）福^{（須佐）}田^{（津田公輔変名）}氏^{（中村泰一変名）}等^{（中村藤馬変名）}」 浄書の時の書き落としと思われる。文書館本に抛り、補筆した。

高田健之助 国司純行。実志道安房元襲二男。明治二十六年二月十八日卒。享年四十一才。経隔 〃 わけへだて。圭角。

慶応二年（一八六六） 四月

同七日福田氏須佐出設坪嶋正三隨行シテ歸陣アリ抄太郎村上研吾數

日滯須ノ上歸陣セリ

茲ニ幕布征長議決シ紀伊大納言徳川老中小笠原長行等諸軍ヲ

統テ廣嶋次シ具召ニ應ヒテ至ニ處ノ完備後介ヲ執テ還サズ不當ノ

要求ヲ爲ス依リ諸隊應戰準備多ム

鳥免忽々六月ニ至リ幕兵四境ニ迫リ將兵端南カントスル勢ナルニ依リ干城

隊鴻城軍山口八幡隊小郡御楠三田尻遊撃軍藝州口南寺奇

兵隊上ノ関備隊藝州中街道口南園隊石州口奇兵隊長

府一手萩干城隊併町兵遊軍山口兵足輕大隊九州小倉口引受テ

トナリ其他岩國三支藩御門等手配定リテ各諸ハ出張セリ

同五日奇兵隊吉田營所ヲ引揚ケ長府一宮ハ出張ス

同七日幕艦一艘大嶋郡安下床ニ碇セシヨリ毎日出没シテ前嶋久賀村

慶応二年（一八六六） 四月ゝ六月

（四月）
同七日 福田氏須佐出發 坪嶋正三隨行シテ歸陣アリ 牧小太郎 村上研吾八數
日滞須ノ上歸陣セリ

茲二幕布八征長ノ議ヲ決シ 紀伊大納言 老中 小笠原長行等 諸軍ヲ
統ヘテ廣嶋二次シ 其召ニ應ジテ至ル處ノ完戸備後介ヲ執ヘテ還サス 不當ノ
要求ヲ為スニ依リ 諸隊ハ應戰ノ準備ヲ修ム

烏兔勿々六月二至リ幕兵四境二迫リ 将二兵端ヲ開カントスル勢ナルニ依リ 干城
隊 鴻城軍八山口 八幡隊八小郡 御楯八三田尻 遊撃軍八藝州口南 奇
兵隊八上ノ関 鷹懲隊八藝州中街道口 南園隊八石州口 奇兵隊長
府一手 萩干城隊 併町兵 遊軍 山口屯兵 足輕大隊ハ九州小倉口引受ケ
トナリ 其他岩國 三支藩御一門等手配り定リテ 各諸へ出張セリ

（六月）
同五日 奇兵隊八吉田營所ヲ引揚ケ 長府一ノ宮へ出張ス
同七日 幕艦一艘大嶋郡安下床二發砲セシヨリ 毎日出没シテ前嶋 久賀村

征長ノ議ヲ決シニ第二次長州征伐。

紀伊大納言ニ徳川茂（照）昭 徳川茂承（もちつぐ）の誤り。

烏兔勿々ニ烏飛兔走と同じ。歳月の速やかに過ぎ去ることを言う。

次シニとまる。やどる。止まる。至る。

修ムニそなえる。

四境ニ51頁参照

三支藩ニ清末、長府、徳山の各末家。

御一門ニ三丘穴戸家と石田、厚狭、吉敷、阿川、大野の各毛利家。

安下庄ニ現大島郡（屋代島）橘町。四境戦争は慶応二年六月七日幕艦一艘が上関、安下庄村、油宇村の沿岸に砲撃を加えたことにより始まった。

前嶋、久賀村ニ前嶋は屋代島の北に浮かぶ島。久賀村は現大島郡（屋代島）久賀町。ここに大島宰判の勘場があった。

邊ヲ背カス

同十四時軍艦四艘大津郡久賀村ニ同二艘同郡安下庄ニ襲来就
トモ揚陸シテ兵端ヲ開キシヨリ午後戰氣報道虛目ナシ

同十六日島松晋作氏長府宮主營アリテ奇兵隊各々司令官以上
諸隊將校協議上豐前國小倉地出張幕兵ヲ進發手ノ事決シ
同夜半時整列馬場へ出陣ス長府報國隊モ出張セリ

同十七日曉丙辰艦癸亥艦唐申艦乙丑艦丙寅艦ノ五艘ヲ二手ニ分テ
田ノ津門司関ヲ攻撃シ我陸軍門司関ニ奮進スヤ幕兵忽テ敗
走ハツ時馬場ニ凱旋セリ是即チ小倉口ノ第一戰ナリ

同十七日朝五時仁洲口開戦ヤリ南園隊精銳隊第二天隊一手トナリ
共ニ横田ヨリ清水須佐諸兵ニ高津ヨリ益田氏係小濱田福寅
他諸藩ノ兵ヲ進發ス幕兵敗走我軍益田ニ入ル于時八ツ時ナリ

半時ナリ

あたり
おびや
邊ヲ脅カス

(六月)
同十一日 (午前十時) 軍艦四艘 大嶋郡久賀村二 同一艘同郡安下庄二襲来 孰
レモ揚陸シテ兵端ヲ開キシヨリ尔後戦争ノ報道殆ド虚日ナシ

(六月)
同十六日 (萩藩士、政務屋、奇兵隊總管) 枚杉 長府一ノ宮二来営アリテ 奇兵隊各々司令官以上
諸隊將校會議ノ上 豊前國小倉地出張ノ幕兵ヲ進撃ノ事二決シ
同夜八ツ時 整列馬関へ出陣ス 長府報國隊モ出張セリ

(六月)
同十七日 丙辰艦 癸亥艦 唐申艦 乙丑艦 丙寅艦ノ五艘ヲ一手二分チ
田ノ津門司関ヲ攻撃シ 我陸軍ノ門司関二奮進スルヤ 幕兵忽チ敗
走 八ツ時馬関ニ凱旋セリ 是即チ小倉口ノ等一戦ナリ

(六月)
同十七日 朝五ツ時 (午前八時) 石見、現島根県) 州口開戦セリ 南園隊 精銳隊 第二大隊一手トナリ
共二横 (JR山口線石見横田付近) 田口ヨリ 清末 須佐ノ諸兵八高 津口ヨリ益 田屯集ノ濱田 福山 其
他諸藩ノ兵ヲ進撃ス 幕兵敗走 我軍益田二入ル 于時八ツ時半時ナリ

軍艦四艘 (久賀村を砲撃) 幕艦富士山丸、汽船翔鶴丸、八雲丸、帆船朝日丸。

同 二艘 (安下庄を砲撃) 富士山丸、大江山丸

虚日何もない日。暇な日。

于時二時に。

慶応二年 (一八六六) 六月

右丙寅四境後開戰要路其詳細公編纂戰記アレハ今次

記中整言セス

小倉口十月十日賊軍集宿香春ニ進撃セントスル際彼ヨリ止戦和睦
ヲ乞フ遂ニ全救郡六ノ石ヲ割キ長洲支配ト爲スヲ約シテ其談判ヲ
結了セリ

同三年丁卯正月奇兵隊隊員大半歸休セシメタリ須佐滯隊者ノ歸
休中左ノ恩命アリ

御沙汰書

津田公補殿

右奇兵隊ハ入隊人數之内缺度歸省ノ分ハ未ハ廿六日
御夕飯後

若旦那様御目見被仰付矣尚又去夏己未小倉地出張數

慶応二年（一八六六）十月慶応三年一月

右八丙（へいいん、慶応二年）寅四境ノ役開戦ノ要路ナリ 其詳細八公私編纂ノ戦記アレハ今此
記中二警セス

小倉口八十月十日 賊軍ノ巢窟ノ香春二進撃セントスルノ際 彼ヨリ止戦和睦
ヲ乞フ 遂ニ企救郡六万石ヲ割キ 長州ノ支配ト為スヲ約シテ其談判ヲ
結了セリ

（慶応）
同三年丁卯正月 奇兵隊八隊員大半帰休セシメタリ 須佐滞隊者八帰
休中 左ノ恩命アリ

御沙汰書

津田 公輔 殿

右 奇兵隊へ入隊人数之内 此度帰省ノ士分へ来ル廿六日
御夕飯後 若旦那様御目見被仰付候 尚又 去夏已来小倉地出張 数

四境の役Ⅱ第二次長州征伐を長州では《四境戦争》と呼ぶ。幕軍は芸州口、石州口、周防大島口、小倉口、萩口の五方面から攻める作戦であった。しかし薩長密約で薩摩兵は萩口攻撃に出兵せず、廣島藩は中立を守り、その他の大藩が参戦を拒否したので作戦が大幅に狂った。

六月七日大島口で兵端が開かれ大島の惨状が伝わると長州藩を激憤させた。高杉晋作の奇兵隊の一部が差し向けられ六月十七日には幕兵と松山兵は大島から掃討された。芸州口は六月十四日先鋒の井伊家の軍勢が小瀬川を渡河する時山上から一誠射撃を浴びせられ大敗した。大竹の榊原家の軍勢も同じように敗走した。追撃した長州兵は幕軍の本拠地大野を目指したが小方で幕軍の反撃に遭い激戦となった。そして七月中旬まで膠着状態が続いた。最後の決戦は八月七日、台風の中で行われ幕軍が敗退した。石州口では長州軍は藩境を守るのではなく、積極的に進取した。参謀大村益次郎が率いる

南園隊、精銳田隊、須佐・清末兵などである。六月十七日幕軍の拠点益田を占領し浜田に迫り十八日浜田城を自焼させた。小倉口は幕軍の主戦派老中小笠原孝岐守長行（ながみち）が小倉を前進基地にして兵力を集中していたが六月十七日の緒戦で長州軍は門司、田ノ浦の陣地を焼き払い勝利。奇兵隊などの陸戦隊が砲撃の援護を受けて上陸を繰り返したが、幕軍は陸戦の前線で小倉藩兵が孤立。七月二十七日長州勢が軍監四隻、大小の船舶数百艘で大上陸作戦を敢行し小倉を目指した。その間七月二十日將軍家茂が大坂城で病没すると小笠原孝岐守は七月三十日現地を離れてしまった。八月一日小倉城自焼。九月四日幕軍は全面撤退して四境戦争は終わった。

度之苦戰後

國家不容易盡力之段神妙之義被

思召候依之歸省之銘々未々追同日御酒頂載被仰付矣條
右様被相心得向々可有通達矣事

正月廿四日

三月奇兵隊徳山崎隊小倉地、警固ヲ交代シテ吉田本營ヲ引揚

ケタリ

九月ニ至リ西君候御正義貫徹ノ様ニ際シ薩州候上京御周旋
ルニ依リ奇兵隊南奇兵隊振武隊鏡武隊脅懲隊等各一中隊
ヲ撰抜シテ總員千五人上京ノ命アリテ三田尻迄出張シ數日ヲ經過スルト
辭氏出港ノ命無之ヲ以テ奇兵隊吉田本營ヲ引揚ケ全軍三田尻
ハ出張シ光明寺滞陣シテ山縣狂助氏ヲ始メ諸將校周旋アリテ遂

度之苦戦為
國家不容易盡力之段
神妙之義二被
思召候 依之歸省之銘々末々迄 同日御酒頂載被仰付候條
右様被相心得 向々へ可有通達候事

正月廿四日

慶応三年 奇兵隊八徳山山崎隊ト小倉地ノ警固ヲ交代シテ吉田本営ニ引揚ケタリ

九月二至リ兩 君候ノ御正義貫徹ノ機ニ際シ 薩州候モ上京御周旋ア
ルニ依リ 奇兵隊 南奇兵隊 振武隊 銳武隊 膺懲隊等各一中隊
ヲ撰拔シテ 總員千余人上京ノ命アリテ 三田尻迄出張シ 數日ヲ經過スルト
雖トモ出港ノ命無之ヲ以テ 奇兵隊八吉田本営ヲ引揚ケ 全軍三田尻
へ出張シ 光明寺滞陣ニテ 山縣狂助氏ヲ始メ諸將校周旋アリテ 遂ニ

中隊「二小隊」四半小隊。 四中隊「二半大隊」一大隊。(一小隊 28/36人 慶応元年の軍制) 明治元年(一八六八)十月二十八日、益田家の一小隊が浜田へ出張したときの人数は60人であった。 従つて一中隊は120名。「山口県史」史料編纂末維新6 1097頁参照。

南奇兵隊

光妙(明)寺「三田尻」に所在。 真宗。 恵日山と号す。 文明六年創建、開基は大和国高市郡住人、本願寺第八世蓮如上人に帰依し一字を大和國高市郡に建立す。 爾來諸国を巡遊の折柄、安藝国へ滞在中一字を建立光妙寺と号す。 慶長年中第三世の住僧明賢檀徒と共に当地へ移転して現在に至る。 山県狂助「310頁参照」。

慶応三年(一八六七) 三月〜九月

十二月廿六日上京諸兵乘船撰別西宮揚陸嚴肅大行軍

京師入

十二月十日君候御入洛御免御官位元如復セラレタリ

今度大樹奉歸政權

朝廷一新之折柄彌以天下之人心居金小相附於之追々復古之典モ難相行深被惱

宸襟矣且未春御元腹并立太后追々御大禮被辱行具又

先帝御一同相成矣付猶更人心一和專要被恩召矣間先年未防長之事々彼是混雜有之矣得共寬大之御所置被辱在大膳父子才家等被免入洛官位元被復矣旨被仰出矣事

丁卯十二月十日

積年之精忠勇徹且火入京滿延被恩召々猶御守衛場之

慶応三年（一八六七）十二月

十二月廿六日 上京ノ諸兵乗舩 摂州西宮ニ揚陸 厳肅ナル行軍ニテ
京師ニ入ル

十二月十日 両君候御入洛御免 御官位元ノ如ク復セラレタリ

今度大樹奉歸政権

朝廷一新之折柄 彌以天下之人心居合不相附ニ拵テハ 追々復古之典モ
難相行 深被悩

宸襟候 且来春御元腹 并立太后 追々御大禮 被為行 且又

先帝御一同二相成候二付 猶更人心一和專要ニ被思召候間 先年

来防長之事件 彼是混雜有之候得共 寛大之御所置 被為在

大膳父子 末家等被免入洛 官位如元被復候旨 被仰出候事

丁卯十二月十日

積年之精忠貫徹 且此二入京満足ニ被思召候 猶御守衛場之

宸襟 天子のみこころ。

来春御元腹 立太后 追々御大禮被為行 慶応二年（一八六六）十二月二五日孝明天皇崩御（三五才）。慶応三年一月九日、第二皇子祐宮睦仁（さちのみやむつひと）親王踐祚、

明治天皇睦仁となる。数え年一六才。同年十月十五日大政奉還。慶応四年八月二七日即位の大礼。同年九月八日、明治と改元。同年十月十三日東京遷都、同年十二月二八日一条忠

香の娘美子（はるこ、婚前の名は寿栄姫）と成婚。（東京遷都は正式には明治二年三月二八日とされている）

御大禮 即位、立后などの朝廷の重大な儀式。

「先帝御一同二相成候二付」は「御一同」は「御一周」の誤記である。慶応三年十二月二五日は孝明天皇崩御から一周忌に当たる。巻末補注5参照。

被免入洛 官位如元被復候 文久三年八月一八日の「堺町御門の変」により、長州藩は堺町御門の警衛を解かれ、毛利敬親、元徳父子の入洛を禁じられた。この冤罪を雪がんと
して翌元治元年「蛤御門の変」が勃発。戦いに敗れた長州藩は朝敵となり、第一次、第二次長州征伐の幕軍を差し向けられたが、四境戦争の勝利によって幕軍を防長から掃討し名
誉を回復した。毛利敬親は大膳大夫に復し、藩主父子以下末家の入洛も許され、茲に八・一八事件以来懸案であつた長州藩の正義貫徹が成就した。なお、毛利父子の入洛を許し、
官位復旧の「朝裁」の日付は防長回天史5の下429頁では十二月八日となっている。巻末補注5参照。

儀進而可被仰出後矣

右中山御門御守衛之達アリ

同十八日御門御守衛之達アリ

同廿五日奇兵隊三田尻引揚り吉田驛處所歸

明治元年戊辰正月三日將軍德川慶喜橋會津桑名高松宮津姫

路大垣等各藩大坂ヨリ入京途次伏見京橋ニ於テ應接ヲ開キ未遂ニ

成^取取^取千弋ニ計^取至^取所^取轉^取戰^取賊^取軍^取敗^取走^取同月六日大坂落

城トナリ^取後^取詳細^取亦^取公^取近^取古^取史^取讓^取テ今^取整^取言^取セ

三月奇兵隊全軍上京命アリ十七日朝五時半時本陣急報ヲ期シテ各

隊整立祝砲ニ發全隊行軍シテ立役ニ長府ニ於テ喫飯ハ時半時

馬關阿彌陀寺着南都濱ニテ花陽艦乗組同夜ハ時半時被鎗

廿日朝六時半兵庫擊船四時半被鎗同夜九時半時大坂着港

儀八 追而可被仰出候吏

右八中山郷ヨリ御口達ノ書取ナリ

(十二月) 同 十八日 蛤御門御守衛之達アリ

(十二月) 同 廿五日 奇兵隊八三田尻引揚ケ 吉田驛當所ニ歸ル

明治元年戊辰正月三日 將軍 徳川慶喜一 會津 桑名 高松 宮津 姫
路大垣等ノ各藩 大坂ヨリ入京ノ途次 伏見京橋ニ於テ應接ヲ開クノ末 遂ニ
成敗ヲ干戈ニ訴フルニ至リ 所々轉戦 賊軍敗走シテ 同月六日ヲ以テ大坂落
城トナレリ 此役ノ詳細亦 公私ノ近世史ニ譲リテ今ハ警セス

三月 奇兵隊全軍上京ノ命アリ 十七日朝五ツ半時 本陣ノ急報ヲ期シテ各
隊整立 祝砲三發 全隊行軍ニテ出發シ長府ニ於テ喫飯 八ツ半時
馬関 阿弥陀寺着 南部濱ニテ花陽鑑乗組 同夜八ツ半時拔錨

(三月) 廿日 朝六ツ時兵庫ニ撃船 四ツ時拔錨 同夜九ツ半時大坂着港

「伏見京橋ニ於テ應接ヲ開クノ末 遂ニ成敗ヲ干戈ニ訴フルニ至リ」ニ 戊辰戦争（鳥羽伏見の戦い）のこと。
「同月六日ヲ以テ大坂落城」ニ 一月六日慶喜大阪城脱出、一月九日大阪城炎上。落城の日付は九日が正しい。

慶応三年（一八六七） 十二月ノ明治元年三月

暴風雨怒濤、爲上陸得_レ、廿日朝五時天保山へ上陸全陸隊
行軍_ニ安治川橋通_リ天満東寺町智源寺其他寺院宿陣_{セリ}

同廿三日天皇陛下大坂へ行_カサリ

同廿五日八時赤門陸敷へ轉陣_{セリ}

同廿六日天保山へ行_キ海軍天覧_{タリ}

當度各軍隊着_キ、酒肴_ヲ賜_ハ、仍_テ四時大隊行軍_ニ京橋
通博宮_ニ至_リ櫻花爛漫、好時節杯盤狼籍歡_ハ盡_ニ歸營_{セリ}

四月二日山縣福田救命_ニ依_リ江戸行

同三日長藩_ハ御沙汰

明後五日銃陣

天覧被_レ爲_リ在_リ、付日長藩兵大隊先出_ハ、音御沙汰之

事

明治元年（一八六八）三月（四月）

暴風雨怒濤ノ為メ上陸ヲ得ス 廿一日朝五ツ時 天保山へ上陸 全隊
行軍ニテ安治川橋通り 天満東寺町 智源寺 其他寺院ニ宿陣セリ

同廿三日 天皇陛下大坂へ行幸アリ

同廿五日 八ツ時 赤門屋敷へ轉陣セリ

同廿六日 天保山へ行幸 海軍天覧アリ

當度 各軍隊着坂ニ依リ 酒肴ヲ賜ハル 仍テ四ツ時 大隊行軍ニテ京橋

通 桜宮ニ至レハ 櫻花爛漫ノ好時節 杯盤狼籍 歡ヲ盡シテ帰營セリ

四月二日 山縣 福田 勅命ニ依リ江戸行

同三日 長藩へ御沙汰

明後五日 銃陣

天覧被為在候ニ付 其藩兵一大隊 先出スベク旨御沙汰之

事

安治川橋＝大阪市中之島の堂島川と土佐堀側が合流し安治川となる辺り。（詳細後述336頁参照）

天満＝大阪市で淀川から分かれた大川が大きく西に流れを変える寝屋川との合流点右岸一帯が天満。

行幸＝天皇が外出されること。

赤門屋敷＝???

天覧＝天皇がご覧になること。

京橋＝JR大阪環状線が寝屋川を越える辺り。都島区東野田町。

桜宮＝桜ノ宮社（やしろ）は宝永六（一七〇九）年に野田から現在地に移り、境内や周辺に数百本の桜が植えられ一帯は「桜ノ宮」と呼ばれた。対岸

（西岸）の蔵屋敷の役人たちも風流人ぞろいで対抗するようになつて桜を次々植え、大川の桜宮橋から天満橋の間の両岸は桜の名所となつた。現在も造幣局の

「通り抜けの櫻」は大阪随一の桜の名所として有名。

杯盤狼籍＝酒席の取り乱されていること。

本頁に関連する「防長回天史」第六編上 拾 の記事を巻末「補注6」に引用した。

同五日雨天依り天覽順延

同六日大坂城本丸に於て薩藝越其他二三藩火入訓練天覽あり
青兵隊鏡武隊合隊即ち長藩一大隊と為り薩藝越火テ調
練せり練兵異るに在藩慰勞トテ酒著ヲ賜せらん九時帰營

同九日恩賜酒著配當ノ宴ヲ開く

同十日夕八時弭鞭ヲ以テ殺軍各隊行軍ニ入軒屋ニ至り衆船に
十日朝伏見場陸心田街道ヨリ大隊行軍ニテ九時京都中立賣
文武宴ニ着々

同十五日仁和寺宮殿四條殿一條殿銃陣上覽依り朝五時ヨリ大隊押ミ
篠河原訓練場ニ至り訓練あり異にハ三條繩手通り東福寺招
魂場ニ至り大祭興あり暮七時帰營

仁和寺宮殿下り慰勞ノ為御酒下酒せらん

(四月) 同 五日 雨天二依り天覽順延

(四月) 同 六日 大坂城本丸二於テ薩芸 越其他二三藩ト火入調練天覽アリ

奇兵隊八銳武隊合併 即チ長藩一大隊ト為リ薩藝 越二次テ調練セリ 練兵異レハ 各藩へ慰勞トシテ酒肴ヲ下賜セラル 九ツ時歸營

(四月) 同 九日 恩賜ノ酒肴配當ノ宴ヲ開ク

(四月) 同 十日夕八ツ時 號鞭ヲ以テ發軍 各隊行軍ニテ八軒屋ニ至リ乗船シ
十一日朝夕見揚陸 竹田街道ヨリ大隊行軍ニテ 九ツ時京都中立賣
文武館二着ス

(四月) 同 十五日 仁和寺宮殿 四條殿 一條殿銃陣上覽ニ依リ 朝五ツ時ヨリ大隊押ニテ
二條河原調練場ニ至リ調練アリ 異ハレハ三條繩手通り 東福寺 招
魂場ニ至リ 大祭典アリ 暮七ツ時歸營
仁和寺宮殿下ヨリ慰勞ノ為御酒下賜セラル

火入調練

八軒屋 八軒屋船着場。現大阪府中央区京橋二丁目松阪屋南側。此処には東町奉行所があった。

仁和寺宮殿 仁孝天皇の養子邦家親王の八男。安政五年（一八五八）三月二十七日親王宣下。得度 純仁親王。その後 還俗、嘉彰親王「仁和寺宮改東伏見宮」のち彰仁親王「小松宮」。

四条殿 四条隆調（たかうた）。尊皇攘夷派の公家の中で唯一の武人。後に大阪、仙台などの鎮台司令官。七卿落ち公家の一人。
一條殿 一條忠香（ただか）。一八二丁六三。公家。内大臣、左大臣、日米修好通商条約勅許問題、水戸藩への勅諭降下など内政・外交の朝議に列した。娘美子（はるこ）は明治天皇妃。

三條繩手通 現京津三條駅前の大和大道通。

東福寺

明治元年（一八六八） 四月

御名(滿主公)

后西方、人數差出、在儀、、差得其松平肥後益暴激、身、
官軍、抗、、段相聞、、付其國地、、人數差向、、奧羽官
兵、應援致、、樣御沙汰之、、夏

石、今般別紙之通

朝廷、御沙汰相成、、付出張被仰付、、安余御不都合、、無之
樣、此度、可致勉強、、疾夏

同廿四日、山縣狂介、上陸通、鑑撫總督、參謀、、在、、レ、タリ

同廿五日、奇兵隊參謀、時山直八、書記湯淺祥之助、會計方器械
方小荷駄方三四、、葉小隊薩藩二小隊、、共、、奔陣

同廿六日、奇兵隊參謀三好軍太郎、書記杉山莊一、郎會計方
小荷駄方一二三五六、、五小隊一二三四、、四砲隊薩二小隊、、共、、奔陣

明治元年（一八六八）四月

右 四方へ人数差出候儀二八候得共
（会津藩主、松平肥後守容保）
益暴激二募り
官軍二抗シ候段 相聞候二付 北國地へ人数差向ケ
奥羽ノ官
兵二應援致候様 御沙汰之吏
右 今般別紙之通
朝廷ヨリ御沙汰相成候二付 出張被仰付候条 御不都合無之
様屹度可致勉強候吏

同 廿四日 山縣狂助氏八 北陸道鎮撫總督参謀ヲ任セラレタリ

同 廿五日 奇兵隊参謀 時山直八 書記 湯浅祥之助 會計方 器械
方 小荷駄方三四ノ式小隊 薩藩二小隊ト共ニ発陣

同 廿六日 奇兵隊参謀 三好軍太郎 書記 杉山莊一郎 會計方
小荷駄方一 二 三 五 六ノ五小隊 一 二 三 四ノ四砲隊 薩二小隊ト共ニ
ス

「薩藩二小隊ト共ニ発陣」 文書館本は「薩越二小隊」と記述している。

此巢羽後亦記教言セズ

八月下旬尔澤藩上杉齋憲父子降ハ

九月廿日白九ツ時若松落城松平肥後守容保父子降ハ

同廿九日庄内松平忠篤降服ス

十月上旬ヨリ各地出張官軍引揚ケ命アリ奇兵隊中山道ヨリ

歸京ノ途ニ就ケリ

十一月朔日京都東福寺内栗棘庵ニ着陣セリ

同三十時整列大隊行軍ニ長崎報國隊ト共ニ参

關ス正親町大納言殿長門古子君有馬中務大輔殿其他諸

官御列席ニ御書下ケラ賜ニ

長洲

奇兵隊

此奥羽ノ役 又此記ニ警セズ

明治元年 八月下旬 米沢藩上杉斎憲父子降ル

明治元年 九月廿二日 白九ツ時 若松落城 松平肥後守容保父子降ル

九月 同廿九日 庄内松平忠篤降服ス

十月上旬ヨリ各地出張ノ官軍引揚ケノ命アリ 奇兵隊八中山道ヨリ
歸京ノ途ニ就ケリ

十一月朔日 京都東福寺内栗棘庵ニ着陣セリ

十二月 同三日十時整列 大隊行軍ニテ長腐報國隊ト共ニ参
闕ス 正親町大納言殿 長門世子君 有馬中務大輔殿 其他諸
官御列席ニテ御書下ケヲ賜ハル

長州

奇兵隊

上杉斎憲父子＝米沢藩主 上杉弾正大弼斎憲（なりのり）は隠居、領地十八万石の内四万石を召上られ、嫡子茂憲（しげのり）へ家督、
松平肥後守容保父子＝会津藩主 松平肥後守容保（かたもり）、永禁錮、城、領地没収。嫡子喜徳（のぶのり）へ家督、下北半島、陸奥三万石へ移封。
庄内松平忠篤＝庄内藩主 松平忠篤（ただすみ）は東京で隠居・謹慎、忠篤の弟忠祿（ただみち）が家督相続、新領地会津若松十二万石に移封された。
（のち撤回）

参（さんけつ） 闕＝参内。「闕」は宮門の両側に設けられた二個の台。宮城。

正親町大納言殿＝権大納言正親町実徳（おおぎまちさねあつ）。

明治元年（一八六八）八月～十一月

征討出張遠路跋涉日夜攻擊到處功_ヲ奏_シ凱至之段
其熟勞不少矣此節東京

御駐軍中之義付不取敢被為慰軍勞酒著被下
奏事

但春來兵事付

太宮御所_ニ御内々

御憂襟被為在征討兵士之難苦恤敷被為
思食日夜平定而已御祈念之祈柄今般凱旋之趣

御内聽被為在

御喜悅不_レ臥疾猶又御留守中付歸陣者工厚慰勞矣
様御内諭被為在奏事

十一月

明治元年（一八六八）十一月

征討出張 遠路跋涉 日夜攻撃 到ル處功ヲ奏シ 凱至之段
其勲勞不少候 此節東京
御駐輦中之義二付 不取敢被為慰軍勞 酒肴被下
候事

但 春來兵事二付
大宮御所二モ御内々
御憂襟被為在 征討兵士之難苦ヲ恤敷被為
思食 日夜平定而已御祈念之折柄 今般凱旋之趣
御内聴被為在
御喜悅不斜候 猶又御留守中二付 帰陣ノ者工厚ク慰勞候
様 御内諭被為在候事
十一月

征討出張＝戊辰戦争後半の奥羽越列藩同盟との戦いのこと

跋涉＝方々を歩き回ること。「跋」は山野を行くこと、「渉」は水を渉ること・

凱至＝「凱」はかちどぎ。戦争に勝ち、帰って勝利を宗廟に告げる時の音楽

駐輦＝天子が車を留めること。天子が車を留めて滞在すること。

東京御駐輦中＝明治天皇は明治元年九月二十日江戸に向かい十月十三日江戸城入城、ここを東京城と改名する詔を出した。しかし京都市民の思いに
える為この年は十二月二十二日に京都に戻る。天皇は翌明治二年三月七日東京に向い、二十八日着。三月二十八日、城の中に太政官府を設置した。これ
を一般には東京遷都としている。

大宮御所＝現在の大宮御所は英照皇太后（孝明天皇女御）のために造営され、慶応3年（1867年）に完成したもの。

憂襟＝憂慮。「襟」はむね、こころ。

行政官

夕リテ十二時退

關曉東練兵場主_ニ在子君_{ヨリ}長_ニ出陣_セ若_シ神妙思_フト_ノ意_{アリ}
次_ニ長府毛利左京亮殿_{ヨリ}長_ニ出陣_且報國隊_モ各_ニ語_ニナリ_各若_シ勇
ト_ノ御意_{アリ}青兵報國二隊行軍_ニテ歸_ル喜_{セリ}

同五日朝七時出_テ發_シ伏見_{ヨリ}栗_取ニ_テ大坂江戸姫_ニ着_テ陣_{セリ}

同六日十時安_治川橋_{ヨリ}解_取ニ_テ花陽艦_ニ集_ル四時被_テ鋪_{九日}室津_ニ

上陸夫_{ヨリ}陸行小國通_リ平尾驛_ニ着_テ泊_シ十日降_ル松_ノ經_テ砥_石ニ_テ宿陣_シ

十一日朝六時集_ル八_ツ半時三田尻着_テ港泉相寺_ニ宿陣_ス

同十二日十一時御茶屋_ニ整列御名代毛利筑前殿_{ヨリ}御意_ノ旨_ヲ

傳_{ハレ}更_ニ司令官_ヲ召集_{シテ}數月間苦戰_ノ勇_ヲ慰_ムス_ル爲_ニ隊中_ノ

酒者賜_ハシ_テ達_{アリ}テ_リ了_リテ_リ歸_ル當_ノ同夜恩賜_ノ酒者_ヲ謹載_{シテ}

(あわ) リテ十二時退
 鴨東練兵場二至リ (毛利元徳)
 世子君ヨリ長ノ出陣苦勞神妙ニ思フトノ意アリ (なが)
 次ニ長府毛利左京亮殿ヨリ (なが) 長ノ出陣 (かつ) 且報國隊モ世話ニナリ (あのおの) 各 苦勞
 トノ御意アリ 奇兵 報國 二隊行軍ニテ帰營セリ

(十一月) 同 五日 朝七時出發 (現京都市) 伏見ヨリ乗船ニテ大坂江戸堀ニ着陣セリ (338頁参照)

(十一月) 同 六日 十時 安治川橋ヨリ舢舨ニテ花陽艦ニ乗込ミ (十一月) 四時拔錨 (十一月) 九日室津二
 上陸 夫ヨリ陸行 小 (尾毛郡平生町) 國通リ 平 尾驛ニ着泊シ (十一月) 十日降松ヲ經テ砥石ニ宿陣シ
 (十一月) 十一日 朝六時乗船 八ツ半時三田尻着港 泉相寺ニ宿陣ス

(十一月) 同 十二日 十一時 御茶屋ニ整列 御名代 毛利筑前殿ヨリ御意ノ旨ヲ
 傳ヘラレ 更ニ司官ヲ召集シテ 数日間苦戦ノ勞ヲ慰スル為 隊中ヘ
 酒肴ヲ賜ハルノ達アリテ了リテ帰營シ 同 夜恩賜ノ酒肴ヲ謹載シテ

七時「この頁から十時、十一時など一部が太陽暦の表示となっている。よって七時も「七ツ時」(午前四時)ではなく文字通り七時と思われる。因みに太陽暦採用は旧暦明治五年十二月三日をもって明治六年一月一日と定めて実施された。これは、「回天実記」が明治三年三月三日編纂に着せながら、明治六年時点でまだ完成していなかった事を示している。

安治川橋「江戸時代初期まで淀川河口部にあった九条島が流れを遮り洪水がたびたび起り、また土砂堆積により舟運にも不便をきたした。このため貞享元年(一六八四)幕府の命により、河村瑞賢が水路を開削し安治川と名付けた。その後、周辺に富島や古川の新地開発が進められ、元禄十一年(一六九八)に完成した。安治川橋はこの新地開発に伴い架設された。江戸時代末期、幕府は開国に備え、この地を外国人居留地として準備を進め、明治新政府によって明治元年(一八六八)大阪開港とともに外国人に競売された。居留地には、洋館や舗装道路が造られ大阪の文明開化の拠点となった。明治六年(一八七三)居留地の交通の便を図るため、新しく安治川橋が架けられた。この橋の中央二径間は西欧から輸入された鉄橋で、高いマストの船が航行する時には、橋桁が旋回する可動橋であった。当時の人々はこの旋回する様を見て「磁石橋」と呼び大阪名物の一つとなった。明治一八年(一八八五)大阪を襲った大洪水は多くの大川の橋を流し流木が安治川橋に押し寄せた。橋はこの流木や洪水によく耐えたが、市内に洪水の恐れが生じたため、やむなく工兵隊により爆破撤去された。

明治元年(一八六八)十一月

愉快ヲ極メタリ

同十三日金軍歸省ヲ許サレ但来明治二丁巳二月五日ヲ期ニテ吉田陣
營ニ集合シ同月中旬大招魂祭執行ノ命アリ
須佐在隊員歸省中招魂社創建ノ議ニ實重五郎四郎、主唱ニテ
大ニ賛成ヲ得タルニ據リ同氏願主ト爲リテ願書ヲ邑政堂ニ差出サリ

願書

時運之變轉不得已次第ト作申甲子年京師變動引續キ國
事ニ死疾者不少追々於本藩招魂祭被執行ヲ得共御内轉ノ
義未ク無其儀疾ニ付何卒招魂場開設被仰付疾、甲子以來
戰死忠死之者靈魂ヲ地下ニ慰度志願ニ安処当今御任組中
御普請事總而御察止之砌疾得者ト微力私願主ニ相成尚
同志ノ者ヨリ心掛次第之寄附被遂

明治元年（一八六八）十一月

愉快ヲ極メタリ

同十三日 全軍帰省ヲ許サル 但来明治二丁巳二月五日ヲ期シテ吉田陣

営二集合シ 同月中旬 大招魂祭執行ノ命アリ

須佐在隊員帰省中 招魂社創建ノ議ハ兼重五郎四郎ノ主唱ニテ
大ニ賛成ヲ得タルニ據リ 同氏ハ願主ト為リテ願書ヲ邑政堂ニ差出セリ

願書

時運之變轉不得已次第トハ申 元治元年 京師變動 引續キ國

事二死候者不少 追々於本藩招魂祭被執行侯得共 御内輪ノ

義八未タ無其儀候二付 何卒招魂場開設被仰付候ハ、甲子以来

戦死忠死之者 靈魂ヲ地下ニ慰度志願二候処 当今ノ御仕組中

御普請事總而御廃止之砌二候得者 乍微力私願主ニ相成 尚

同志ノ者ヨリ心掛次第之寄附被遂

丁巳＝明治二年は己巳。

江戸堀川＝江戸堀川は、大坂夏の陣後大坂城主となった松平忠明が、市街地改造計画の一環として開削させたもの。元和三年（一六一七）完成。西横堀川から分れ、土佐堀川に平行して西流し、土佐堀川と百間堀川の合流点に流入していた。この開削費用をまかなうため発行された銀札は、現在までに発見された最古の銀札といわれている。長さ十一町四一間（約二二七〇メートル）、幅は上流で二三間（約二三・五メートル）、下流で一八間（約三二・六メートル）の運河で、東から西へ撞木橋・江戸橋・犬齋橋・阿波殿橋・大目橋・花乃井橋・江戸堀橋・西北橋・崎吉橋の九橋が架かっていたが、昭和30年9月に埋め立てられた。

御免疾、令方以テ創立仕度奉存其右場所柄義、吉祥閣
古跡地相應且其藩人通行節參拜之便宜彼是其地ニ限リ
至様奉愚考其左疾、黄泉之靈魂不及申御家中一統
斯進御手厚被仰付其義、奉感佩奮發之一助共可相成其
間何卒

御心入ラ以テ被遂

御許容被下其様奉歡願其少段御序之節宜敷様御
取成奉願其以上

辰ノ十二月

無重五郎四郎

右出願後何々指令之無之且其地所事ニ異見ヲ生シタルニ依リ更、
奇兵隊在隊歸休者ヨリ進願セリ

願書

御免候ハ、合力ヲ以テ創立仕度奉存候
古跡地相應且他藩人通行ノ節参拝之便宜彼是此地ニ限り
候様奉愚考候左候へハ黄泉之靈魂ハ不及申御家中一統
斯迄御手厚被仰付候義ト奉感佩奮発之一助共可相成候
間何卒
御心入ヲ以テ被遂
御許容被下候様奉歎願候
取成奉願候以上
此段御序之節宜敷様御

辰ノ十二月

兼重五郎四郎

右出願後何タル指令モ無之且ツ地所ノ事ニ異見ヲ生シタルニ依リ更ニ
奇兵隊在隊帰休者ヨリ追願セリ

願書

吉祥閣

感佩〓有難く心に思い忘れないこと。

明治元年（一八六八）十二月

奉歡願事

先年来御内輪戰死忠死人員モ不少疾付而其靈意ニ地下ニ
慰ニ為シ招魂場御創建有之度先達テ重五郎四郎ヨリ申
出置候處御詮議半違ニ趣ニ今日ニ至リ成否不被仰出疾ニ付
重ニ奉歡願モ素ニ必至御難波中ノ事ニ安得者總之御費用
モ相省キ於下精々相勵キ建立仕度覺悟ニ御座疾何卒私共
一統歸休中成就之上祭典相調度奉存候間其御都合ヲ以テ急
遽御遵ニ方奉願モ尤先般出願在之疾吉祥園之義ニ御歸且
陰濕地ニ而相應之靈場トモ難申一統之氣付ニテ御靈社之
南赤先之地形東面之陽地ニテ自然御靈社区域ニ引連リ往
復之旅人參拜便宜旁々勝地ト奉愚考案得者速ニ御英断
ヲ以御許容被仰付疾様編ニ奉懇願疾

明治元年（一八六八）十二月

奉^た歎^ん願^た候^ま事^{こと}

先^{せん}年^{ねん}来^{らい} 御^ご内^{ない}輪^{りん}戦^{せん}死^し忠^{ちゆう}死^しノ人^{じん}員^{いん}モ不^{すく}少^{なから}候^ま二^に付^{いて}而^{して}八^は 其^{その}靈^{れい}意^いヲ地^ち下^か二^に

慰^{なぐさ}ムル為^{ため}メ 招^{しょう}魂^{こん}場^{じやう}御^ご創^{そう}建^{けん}有^{あり}之^{これ}度^{たく} 先^{せん}達^{だつ}テ 兼^{かね}重^{しげ}五^ご郎^{らう}四^し郎^{らう}ヨリ申^{もうし}

出^い置^{おき}候^{こう}處^{ところ} 御^ご詮^{せん}議^ぎ半^{はん}途^とノ趣^{おもむき}ニテ 今日^{けふ}二^に至^{いた}リ 成^{せい}否^ひ不^お被^お仰^{おせ}出^で候^{こう}二^に付^{つき}

重^{かさね}テ奉^た歎^ん願^た候^ま 素^{もと}ヨリ必^{かなん}至^じ御^ご難^{なん}決^{けつ}中^{ちゆう}ノ事^{こと}二^に候^{こう}得^え者^者 纔^{わず}之^{かの}御^ご費^ひ用^{よう}

モ相^{あい}省^{はぶ}キ 於^し下^{しも}精^{せい}々^{ぜい}相^{あい}働^{はたら}キ 健^{けん}立^{たつ}仕^{まつ}度^{たき}覺^{かく}悟^こニ御^ご座^ざ候^{こう} 何^{なに}卒^そ私^{わたくし}共^{ども}

一^い統^{とう} 歸^き休^{きゆう}中^{ちゆう}成^{じやう}就^{じゆう}之上^{のじゆう} 祭^{さい}典^{てん}相^{あい}調^{てう}度^た奉^{ほう}存^{ぞん} 候^{こう}間^{かん} 其^{その}御^ご都^と合^がヲ以^{もつ}テ急^{きゆう}

速^{そく}御^ご運^{はこ}ヒ方^{かた}奉^{ほう}願^{がん}候^{こう} 尤^{もつとも} 先^{せん}般^{ばん}出^で願^{がん}在^{ざい}之^{これ}候^{こう} 吉^{きつ}祥^{しやう}閣^{かく}之^の義^ぎ八^は 佛^{ぶつ}跡^{せき} 且^{かつ}

陰^{いん}湿^{しつ}地^ち二^に而^て 相^{そう}応^{おう}之^の靈^{れい}場^{じやう}トモ難^{なん}申^{もうし} 一^い統^{とう}之^の氣^き付^{つき}ニテ八^は 御^ご靈^{いしや}社^{しゃ}之^の

南^{なん} 赤^{あか}禿^{はげ}之^の地^ち形^{けい} 東^{とう}面^{めん}之^の陽^{やう}地^ちニテ 自^こ然^{れい}御^ご靈^{いしや}社^{しゃ}区^く域^{いき}二^に引^ひ連^{つら}リ 往^{おう}

復^{ふく}之^の旅^{たび}人^{びと}参^{さん}拜^{はい}詣^{けい}ノ便^{べん}宜^ぎ旁^{かた}々^々 勝^{しょう}地^ちト奉^{ほう}愚^ぐ考^{かう}候^{こう}得^え者^者 速^{すみ}二^に御^ご英^{えい}断^{だん}

ヲ以^{もつ} 御^ご許^き容^{よう}被^お仰^{おせ}付^{つけ}候^{こう}様^様 編^{へん}二^に奉^{ほう}懇^{こん}願^{がん}候^{こう}

「佛跡 且陰湿地二而 相応之靈場トモ難申」 明治元年は神仏分離令、廃仏毀釈運動が起こった年であるから佛跡に神社を建てる事が憚られた時代であつたと思われる。

御霊社

「御霊社之南 赤禿之地形」 赤禿は地名ではない。赤土が露出した場所の意味で、現在もこれは変わらない。

辰十二月二日

奇兵隊入隊

人數中

御沙汰書

兼重五郎四郎

右甲子以來國事死矣者不少矣付招魂場健儀付願之
趣神妙之事被
思召矣右者無々

御存念毛被為在安處御軍務其外御事之央無餘義
御延引相成其後彌增御所帶向御差詰付而只今御
手毛難被為屈矣折柄志願毛有之也義付願之通被
差免疾事

辰十二月

(明治元年)
辰ノ十二月二日

奇兵隊入隊
人数中

御沙汰書

右 甲子以来國事二死候者不少候二付
(元治元年) いらいこくじ しにそいうものすくなくらす つき
兼重五郎四郎
招魂場開健ノ儀二付
願 之
出力の

趣 神妙之事二被
おもむき しんみょうの おほ
思召候 右者兼々
しめされ ん みるはかねがね

御存念毛被為在候處 御軍務其外御事之央 無余義
ぞんねん あらせられそうたころ ぐんむそのほか たじ のさなか よぎなく

御延引二相成 其後彌増 御所帯向御差詰二付而八 只今御
えんいん あいなり そのこいやまし こしよたいむき さしつまり ついて ただいま

手毛難被為届候折柄 志願毛有之義二付 願之通 被
ゆゑるされ とどかせられがたく おりから しがん これあり つき ねがいのとおり さし

差免候事

(明治元年)
辰 十二月

明治元年（一八六八）十二月

口達ヲ以テ

所柄之義者思召モ有之日限地藏之所ニ被仰付矣事

前題之趣口達ヲ以テ奇兵隊在隊員ハモ達アリ

三月十九日地所引渡シ付各集會シテ邑政堂ヨリ市山簿藏立會員

トシテ差出サレ同伴ニテ日限地藏地即宇淨土院ニ至リ境域繩張ヲ爲シ

明治二年ニ正月ハ日浦本町大谷大右衛門宛ラ借受ケ招魂場創

健事務所ト是ノ同志者各歛鎌ヲ執リテ剛懇々着手シ同十一日ニ

至

同十二日聖頭村ヨリ助力四拾四人望雨組其外ヨリ助力貳拾九人

總計七拾參人

同十三日須佐地組ヨリ拾參人野頭村ヨリ四拾五人西浦ヨリ四拾六人

外ニ水税二人總計百六人ノ助力アリ

明治元年（一八六八）十二月～明治二年一月

口達ヲ以テ
所柄之義者 思召モ有之 日限地藏之所二被仰付候事

前頭之趣 口達ヲ以テ奇兵隊在隊員へモ達アリ

明治元年 十二月十九日 地所引渡シニ付 各集會シテ邑政堂ヨリ市山淳蔵 立會員
トシテ差出サレ 同伴ニテ日限地藏ノ地 即 字浄土院ニ至リ 境域縄張ヲ為セリ

明治二年己巳正月六日 浦本町 大谷丈右衛門宅ヲ借受ケ 招魂場創
健事務所卜定メ 同志者 各鋤鎌ヲ執リテ開懇ニ着手シ 同十一日二
至ル

（一月） 同十二日 野頭村ヨリ助力四拾四人 奥両組 其外ヨリ助力式拾九人
總計七拾參人

（一月） 同十三日 須佐地組ヨリ拾參人 野頭村ヨリ四拾五人 西浦ヨリ四拾六人
外二木挽二人 總計百六人ノ助力アリ

日限地藏＝須佐町須佐山根丁東。三陸山神社の場所。

奥両組＝四組（須佐地、瀬尻、宇谷、市丸）のうち山側の市丸組、宇谷組のこと。

野頭＝現須佐町野頭。

西浦＝浦西に非ずや？

木挽＝のこぎりで材木を挽く職人。

同十四日三原村ヨリ七拾八人瀬尻組ヨリ七人トニ木挽貳人總計八拾七人
助力アリ

同十五日三原村ヨリ五拾四人トニ木挽二人大来危人總計五拾七人
助力アリ

同十六日市街助力拾人宇谷全四人東浦全拾人御細工人全五人
人海藏庵同十五人三原村全十五人下田萬村全貳拾八人所
組全三十三人トニ婦女拾二人總計百三十五人

同十七日宇谷組拾人中浦拾五人三原三人押谷貳人市街貳拾貳人
内大工危人瀬尻九人トニ木挽野頭木挽三人浦東五拾四人下田萬六十
石工五人

六人トニ婦女三十三人總計貳百拾六人トニ助力アリ

同十八日尾浦ヨリ貳拾七人浦東ヨリ三十九人市丸組十五人トニ木挽
同村士族六

浦ヨリ水挽貳人浦仁工危人御細五人三人三原村ヨリ四人

同十四日 **三原村**ヨリ七拾八人 **瀬尻組**ヨリ七人 外二木挽貳人 總計八拾七人
ノ助力アリ

同十五日 **三原村**ヨリ五拾四人 外二木挽二人 大工壹人總計五拾七人
ノ助力アリ

同十六日 **市街**助力拾四人 **宇谷**全四人 **東浦**全拾人 御細工人全五人
人 **海蔵庵**同十五人 **三原村**全十五人 **下田萬村**全貳拾八人 **町**
組全三十貳人 外二婦女拾二人 總計百三十五人

同十七日 **宇谷組**拾人 **沖浦**拾五人 **三原**三人 **押谷**貳人 **市街**貳拾貳人
瀬尻九人 **野頭**木挽三人 **浦東**五拾四人 **下田萬**六十
六人 外二婦女三十貳人 總計貳百拾六人ノ助力アリ

同十八日 **尾浦**ヨリ貳拾七人 **浦東**ヨリ三十九人 **市丸組**十五人 **沖**
浦ヨリ木挽貳人 **浦石**工壹人 御細工人三人 **三原村**ヨリ四人 同村士族六

人上小寛全四人上田萬全三人市街全九人外、婦女拾五人總計百二拾八人、助力アリ

同十九日墓標堀立及貫木門ヲ建設セリ

同廿一日休暇

同廿二日招魂祭ヲ準備シテ爲シタリ

同廿三日淨土院ノ字ヲ改メテ三陰山招魂場ト稱シ招魂祭式ヲ執行ス市街

ヲ始メ右村ヨリ競ニ酒米餅ヲ獻納ス事如山知阜遠近ノ老少男女

相携テ參拜シ境内ニ立難、地ナキニ至リテ數個ノ酒樽入ヲ配置

シテ參拜者ニ隨意之ヲ飲マシム各勸ラ尽シテ用散ス同夜事務所

於テ祭主祭官其他関係者數十人ヲ招饗食ス頗盛宴ナリ

同廿四日社殿復興ノ計畫ヲ爲シテ事務所ヲ閉ツル後在隊

者續々歸營セリ

人 上小川 全四人 上田萬村全三人 市街全九人 外二婦女拾五人 總計百二拾八人ノ助力アリ

（一月）同十九日 墓標掘立ヲ為ス

同廿日 墓標掘立及貫木門ヲ建設セリ

（一月）同廿一日 休暇

（一月）同廿二日 招魂祭ノ準備ヲ為シタリ

（一月）同廿三日 浄土院ノ字ヲ改メテ三陰山招魂場ト称シ 招魂祭式ヲ執行ス 市街ヲ始メ各村ヨリ競ヒテ酒米餅ヲ献納スル事如山如阜 遠近ノ老少男女相携ヘテ参拝シ 境内立錫ノ地ナキニ至ル 式了リテ数個ノ酒樽ヲ配置シテ参拝者ニ随意之ヲ飲マシム 各勸ヲ尽シテ解散ス 同夜事務所ニ於テ祭主祭官其他関係者数十名ヲ招饗ス 頗盛宴ナリ

（一月）同廿四日 社殿建築ノ計畫ヲ為シ了リテ事務所ヲ閉ツ 尔後在隊者續々帰營セリ

「同十九日

墓標掘立及貫木門ヲ建設セリ」 〓 文書館本の記述に従い補筆した。 浄書の際の書き落としと思われる。

八月三日招魂場社殿落成其旨邑政堂ニ届出タリ

同八日故親族公ニ神靈ヲ社殿中央ニ安置スハ議ヲ決シ無重五郎

四郎ヨリ覺書ヲ以テ出願ヤリ

由見

先度招魂場御社成就付ニ過リ丑春下田萬村ニ氏集被

仰付矣即同志中申合

御靈神様奉勸請其後彼隊分散相成矣即ヨリ恐多クモ

今日迄松定ニ奉崇任矣右ニ付而本社ニ御遷座相成矣様ニ

奉存矣間速ニ御英断ヲ以テ御許容被仰付ニ度伏而奉願上矣

八月八日

無重五郎四郎

右願意御採用難成ニ據贈正一位楠正成公ヲ安置スベシトノ旨指

合ヤリ

明治二年
八月三日
招魂場社殿落成ス
其旨邑政堂二届出タリ

八月
同日
故親旋公ノ神靈ヲ社殿ノ中央ニ安置スルノ議ヲ決シ
兼重五郎
四郎ヨリ覺書ヲ以テ出願セリ

覺

此度招魂場御社成就ニ付テハ
過ル丑ノ春
下田萬村二屯集被

仰付候節
同志中申合

御靈神様奉勸請
其後
彼隊分散ニ相成候節ヨリ
恐多クモ

今日迄私宅ニ奉祭仕候
右二付而八本社ニ御遷座相成候様ニ

奉存候間
速ニ御英断ヲ以テ御許容被仰付度
伏而奉願上候

明治二年
八月八日
兼重五郎四郎

右願意御採用難成ニ據リ
贈正一位楠朝臣正成公ヲ
安置スベシトノ旨指
令アリ

彼隊ニ回天軍

「恐多クモ今日迄私宅ニ奉祭仕候」ニ益田親施公以外の死者の靈を兼重の自宅に祭っていたという意味。

「贈正一位楠朝臣正成公ヲ
安置スベシ」ニ

明治二年（一八六九）八月

同日上棟祭併ニ召魂祭ヲ執行セリ式意リ大谷丈右衛門宅ニ於テ直
會ノ酒者賜ハ宴盛ニシテ勸声場ニ満ツ夜十二時ニ至リ解散セリ
右明治三年庚午三月三日同盟員各手記ヲ携ヘテ相會シ之ヲ參照
編纂シ名ケテ田天寶記トシテ分テ二卷トス

明治二年（一八六九）八月～明治三年三月

（八月）
同日 上棟祭 併ニ招魂祭ヲ執行セリ 式意^{しきい}リ 大谷丈右衛門宅ニ於テ直^{なお}
會^{らい}ノ酒肴^{しゅこう}ヲ賜^{たま}ハル 宴盛^{えんさかん}ニシテ勸^{かん}声場^{こゑば}ニ満^みツ 夜十二時ニ至^{いた}リ開^あ散^{さん}セリ
右明治三年庚午三月三日 同盟員^{どうめいいん} 各手^{おのの}紀^きヲ携^{たず}ヘテ相會^{あいかい}シ 之^{これ}ヲ參照^{さんしょう}
編纂^{へんさん}シ名^なケテ回^{かいてん}天實^{じつ}記^きト云フ 分^{わかち}テ二卷トス

直會^{ちくかい}（なおりい）神事の終了後、供え物を参会者が分かち食べる宴会。

「明治三年庚午三月三日」この日付は「回天実記」の編纂に着手した日であって、完成した日ではない。その判断理由は以下の通り。

295頁に「鴻城学校」の名前が登場する。巻末補注4の説明の如く、鴻城学校が開校したのは明治八年の事であって、明治三年にはまだ存在していない。

232頁の終わりから2行目より、太陽暦と陰暦の時刻表示が混在し始める。太陽暦は明治五年十二月三日を明治六年一月一日として始められた。以上の事から、「回天実記」が完成したのは明治八年以後と判断した。では、何時完成したのかは残念ながら判らない。

（完）